始

産業調査報告書

（羊、豚、鶏）

第四卷 其ノ一

北海道廳

本調査ハ主トシテ左記ノ主査及委員之レヲ擔當調査セリ

羊

主査　農學博士　橋本左五郎

委員　石澤達夫

豚、鷄

主査　農學博士　橋本左五郎

委員　仁木信雄

目次

羊

豚

養鷄

總論

羊

一、本道牧羊ノ沿革

本道ニ綿羊アリシハ、安政四年ニシテ、江戸ヨリ綿羊十頭ヲ箱館ニ輸シ來リ米人ライスニ飼養法ヲ聞キ、之ヲ飼養セシヲ嚆矢トナスヘシ同五年之ヲ箱館奉行ニ下付ノ旨達アルモ其生産明カナラス牧羊ノ生産的ニ飼養セラレシハ、開拓以テ使時代ニシテ黒田開拓使長官ノ歐米視察ノ結果ト、時ノ雇外國人ケプロン、其他ノ建議ニ基キ、牧羊ヲ起シタルヲ以テ其濫觴トスヘシ大久保内務卿牧羊ノ必要ヲ唱導セラレ、下總ニ牧羊場ヲ開設セラレシハ、約三年後ニシテ明治八年ノ事ナリ開拓使ノ牧羊計畫ヲ案スルニ、先ツ東京青山ニ農業試驗場ヲ置キ、米國ヨリ輸入スルニ綿羊ノミナラス、牛馬モ共ニ休養ヲ與ヘ、又風土ニ馴化セシメ、而シテ本道ニ移サントセシモノヽ如シ即チ米國ヨリ輸入セル「サウスダウン」、「メリノー」、「コツウオールド」ノ二種ヲ、明治五年東京農業試驗場ニ輸入セシハ、抑々牧羊開始ノ第一歩ナリ後之ヲ七重試驗場ニ移シ、又札幌官園ニ移シ遂ニ明治九年桔梗野ニ牧羊場ヲ設ケ、同年札幌ニ又牧羊場ヲ設立シ、又同年根室勧業場ニ牧羊ヲ移ス等着々綿羊ノ普及ヲ計リ、盛ニ牧羊ヲ興サントスル計畫ナリシモノヽ如シ

今各牧羊ノ一般ノ記錄ニ徴シテ、沿革トナスヘシ

東京農業試驗場ニ於ケル牧羊

明治五年、東京青山農業試驗所ニ於テ、羊舍ヲ建築シ、「サウスダウン」、「スパニシユ、メリノー」種、各三頭「コツウオルド」種、牝牡三頭ヲ米國ヨリ輸入ス

同六年、米國ヨリ「サウスダウン」牝八十六頭、牡二頭ヲ輸入ス斃死十三頭アリ

同七年、米國ヨリ「サウスダウン」牝牡二頭ヲ購入シ、牝三十五頭、牡十三頭ヲ七重勧業試驗場ニ移ス此内病死セル羊、牝牡二十二頭アリ雇外國教師解剖セシニ「イドロヌミー」、「シープコンサンプション」「アップロプレキ」ハ最劇症ニシテ、三分乃至四分マテ斃レリト云フ

同八年、清國種、牝牡七百六頭ヲ輸入ス此年春「アプロプレキ」症ヲ發シ、洋種、牝牡三十四頭、清國種四十三頭斃ル、因テ更ニ米國ヨリ「コツウオルド」種、牝牡四十五頭ヲ購入シ、又洋種百頭ヲ札幌及七重ニ移ス

同九年、清國種、牝牡六百十七頭ヲ七重ニ移ス「アブロプレキ」症ヲ發シ斃死セルモノ、洋種牝牡三十三頭、清國種牝牡八十五頭ナリ

同十年、米國ヨリ「サウスダウン」牝牡四頭ヲ購ヒ、牡一頭斃ル、抑々五年開場以來、年々斃死羊多キヨリ　當局者ノ元氣沮喪シタルカ如シ是蓋シ風土ニ適セサルニ因ルカ、又ハ牧場狹隘ナルニ因ルカヲ疑フニ至レリ陸軍省軍馬局屠獸醫アンゴニ質セシニ、病因果シテ此二者ニアリ因テ十一年悉ク札幌牧羊場ニ移セリト玆ニ於テ之ヲ見ルニ、東京青山試驗場ハ外國輸入羊ノ休養所ニシテ、生產育成ヲ目的トセシニアラサルカ如シト雖モ、輸入羊ヲ調査スルニ「サウスダウン」種ハ輸入總數九十七頭、生殖ハ百十一頭、病死ハ六十八頭ニシテ、他ニ移畜シタルモノハ、百四十頭トス　「メリノー」種ニアリテハ輸入數ハ十二頭ニシテ生殖六頭、病死六頭、移畜十二頭ナリ「コツウオールド」種ハ　購入四十八頭、生殖十一頭　病死ハ二十六頭移畜三十一頭ナリ又清國種ニ至リテハ輸入七百六頭、生殖三十八頭、病死百二十八頭、移畜六百十六頭ナリ要之、同場ハ七年間ニ外國ヨリ輸入シタル羊數ハ八百六十三頭ニ達シ、移畜供給ヲナシタルモノ七百九十九頭ニシテ、生殖百六十六頭アリシモ、却テ六十四頭ヲ減少シテ移畜シタルヲ見ルハ、同場直接ノ効果ト認ムヘキモノナキニ終リシモノニシテ遺憾トスル所ナリ

七重勸業試驗場ニ於ケル牧羊

明治七年五月始メテ東京試驗場ヨリ、「サウスダウン」種羊、牝牡四十八頭ヲ移セリ內牝一頭ハ斃死シ、牝牡八頭ハ之ヲ札幌牧羊場ニ移シタリ同八年、桔梗村ノ內、七百四十六町餘ヲ相シテ所屬地トナシ、東京ヨリ綿羊牝牡合計六十五頭ヲ移シ內牝牡各十頭ヲ札幌牧羊場ニ送レリ

同九年六月、更ニ三十九町餘ヲ增加シ、家屋ヲ新營シ尋テ東京ヨリ支那羊六百二十三頭、馬羊犬二頭ヲ移シ、之ニ種用トシテ「サウスダウン」種、牡七頭ヲ加ヘテ開牧シ、之ヲ桔梗野牧羊場ト稱ス尋テ牝牡五頭ヲ根室牧場ニ送レリ

同十年、試驗場ヨリ牝三頭ヲ根室牧畜場ニ、牡八頭ヲ桔梗野牧羊場ニ送リ、且同場ニ耕牛及農具ヲ備ヘ荒蕪ノ土地ヲ開キ、穀草ヲ播種セリ

同十一年、本場ハ羊ヲ牧スルニ佳良ナラザルヲ以テ、更ニ七十餘町歩ノ土地ヲ大川村字一本栗ニ得テ、之ヲ放牧場ニ充テタリ而シテ牧羊ハ同族蕃殖ノ憂アルヲ以テ札幌勸業課飼養ノモノ一頭ヲ入牧シテ種羊トナセリ又當場ノ支那羊ハ「ロツト」類似症ニ罹リ斃ルモノ多クシテ、當初ノ目的ヲ達スル甚タ難キヲ慮リ、暫ク閉場シ、當時有見ノ牝八頭、並ニ雜種牝牡十八頭及「サウスダウン」種牡十一頭ヲ試驗場ニ移セリ又曩ニ根室牧畜場ニ送附シタルモノ其ノ頭數寡少ニシテ蕃殖シ難キニ依リ、返戻シ來レリ

同十二年、東京ヨリ「スパニツシユ、メリノー」種二十九頭、「コツウオルド」種六十九頭ヲ、更ニ舊牧場ニ移シ、再ヒ該業ヲ開ク尋テ試驗場ニ飼養セシ所ノ「サウスダウン」種、牝牡九十八頭、支那種及雜種十一頭ヲ悉ク該場ニ送レリ而シテ支那羊ハ蕃殖ノ目的ナキヲ以テ賣却シ、或ハ撲殺シテ其種類ヲ廢絕セリ此年、暑中放牧ニ便ナル民有樹林地十六町歩餘ヲ購入シテ牧場ニ合併シ、周圍ニ土壘ヲ築キテ、綿羊ノ逸失ヲ防キ、又馬鈴薯、蕪菁、甘藍、胡蘿蔔、燕麥、牧草五十七町一反五畝歩ヲ耕作セリ

同十三年、種用トシテ、札幌牧羊場ヨリ「メリノー」種一頭、東京駒場農學校ヨリ「サウスダウン」種二頭ヲ購入セリ而シテ在來ノ種羊牝牡二百頭、生產羊九十六頭ノ內、斃死セシモノ二十五頭ハ去勢セシモノ四十九頭、其他拂下ケタルモノ二十七頭ナリ又綿羊飼料播種ハ、馬鈴薯五反歩、胡蘿蔔一反歩、甘藍三反八畝歩、蕪菁五反歩、此收穫千八百十貫五百目、燕麥四町七反歩、此收穫三十七石五升ナリ

同十四年、種羊牝牡百九十五頭、生產羊八十九頭　合計二百八十四頭ノ內斃死二十一頭、去勢及拂下ケタルモノ十七頭ナリ

同十五年、札幌牧羊場ヨリ「コツウオルド」「メリノー」二種、合計百五十頭ヲ移セリ之ニ生產羊九十二頭ヲ加ヘ、總計四百九十二頭ヲ飼養セシカ、其內斃死セシモノ百八十頭ノ多キニ至レリ

同十六年、綿羊頭數三百七十二頭ノ內、斃死セシモノ九十四頭、去勢又ハ拂下ケシタルモノ二十九頭、撲殺セシモノ一頭アリ而シテ前年ヨリ、一種ノ傳染病ヲ發シ、爲メニ綿羊夥シク斃死セリ、原因明確ナラサリシモ、寄生性肺癆ナリシカ如

シ。飼料耕作反別五十七町四反餘歩ナリ

同十七年、寄生性肺癆未タ根治スルヲ得サルヲ以テ、其或ハ風土ノ適セサルニ歸因スルモノナラントナシ、牧羊ヲ廢シ之ニ換フルニ更ニ適當ノ事業ヲ起サンコトヲ企圖シ、九月牧馬場ニ變更ノ裁定ヲ受ケタリ

同十八年、畜牧羊場ニ畜養セシ「メリノー」、「サウスダウン」、「コツウオルド」百四十餘頭ヲ他ニ貸與シ、唯強壯ナルモノ三十六頭、去勢セシモノ五十餘頭ヲ大川牧場ニ移シ、改良牧場或ハ牧草畑ニ放チ飼養セシニ其育成大ニ良好ナリ

同十九年十一月、桔梗野牧羊場ヲ廢セシヲ以テ、其土地ヲ牧馬場ニ屬セシメタリ

桔梗野牧羊場

明治八年、龜田郡桔梗野村字桔梗野七重試驗場屬地、七百四十六町七反十三畝歩餘ヲ以テ、牧羊場ヲ開設ス是レ桔梗野牧羊場ニシテ、本道牧羊場ノ嚆矢ナリトス

同九年、耕地、羊舍、其他ノ設備整ヒ、六月東京青山試驗場ヨリ、清國羊六百二十三頭ヲ移シ、又七重本場ヨリ「サウスダウン」牡七頭ヲ移シテ種羊トナス清國羊ハ東京着以來、「ロット」類似症ニ罹リ、移送ノ際ヨリ斃死スルモノ多カリシト云フ

十年ニ至リ、益々耕地ヲ擴張シ、施設ヲ進メタリト雖モ、疥癬及肝臓病ニ罹リ斃死セル清國羊百餘頭ニ達セリ同年七重ヨリ「サウスダウン」牡八頭ヲ輸入ス

十一年ニ至リ、放牧地ヲ變更シ、種々方法ヲ盡シタルモ、病毒漸ク蔓延シテ、清國羊ノ成績擧ラス到底蕃殖ノ目的ナキモノトシ、五十五頭ヲ賣却シ、撲殺三十三頭ニ上リ、牝牡二十六頭ヲ七重本場ニ移シ、又「サウスダウン」牡十頭ヲ移畜シ、病毒ヲ絶滅センカ爲メ、一時牧羊ヲ中止スルニ至レリ

十二年、米國ヨリ輸入セル「スパニッシコ、メリノー」種二十九頭、「コツウオルド」六十九頭、東京出張所ヲ經テ到着ス

十二月七重牧場ヨリ清國羊十一頭、「サウスダウン」九十八頭ヲ移セリ、斯クシテ牧羊計畫ヲ立テ、不屈不撓以テ進行セシモ十五年ニ至リ、廢候置縣ノ事アリ、爲メニ新タニ七重勧業試驗場ヲ置キ、同場ニ牧羊ヲ收容スルニ至レリ　此年、札幌牧羊場ヨリ「コツウオルド」「メリノー」二種百五十頭ヲ移シ、同年ノ生產九十二頭ニシテ、總計四百九十二頭ニ達セリ然ルニ同年ノ斃死百八十頭ノ多キニ達セリト云フ十六年ニ至リ、又九十四頭ノ斃死ヲ見ルニ至リシカ、是レ現時ノ原因不明ナルモ傳染病ニシテ、寄生的肺癆ナリト斷定セシ所ナリ翌十七年ニ至リ、同傳染病毒根絶スル能ハス茲ニ於テ是レ或ハ牧羊上、風土ノ適セサルニ歸因スルモノナラントナシ、牧羊ヲ廢止シ、牧馬場ニ變更ノ裁可ヲ得ルニ至レリ

同十八年ニ至リ「メリノー」、「サウスダウン」、「コツウオルド」百四十餘頭ヲ貸與シ、强健ナルモノ三十六頭ヲ殘存セシニ其成績頗ル佳良ナリシト云フ即チ「メリノー」牡一頭、牝四頭　「サウスダウン」牝十六頭　牡一頭、「コツウオルド」牝十三頭、牡一頭ナリトス

同十九年、北海道廳トナリ、桔梗野牧場拂下ノ方針ヲ取リ、牧羊場ヲ廢止セシヲ以テ、札幌牧羊場ヲ移畜スルニ至レリ。其數明カナラス

同場ニアリテハ、清國羊ハ何等成績ヲ擧ケスシテ全滅シタルモノニシテ、入場數ハ六百二十七頭、生殖ハ五十二頭ニシテ、病死最モ多ク、賣却、他轉ニヨリ全滅セリ「サウスダウン」種ハ入場數百十五頭、生殖六十一頭、病死、屠殺、他轉九十七頭ニシテ、現在頭數七十九頭ナリ「コツウオルド」種ハ、入場數六十四頭、生殖九十五頭、病死四十三頭ニシテ、十四年末現在百十六頭「メリノー」種ハ、入場三十頭、生殖二十頭、病死十八頭ニシテ、十四年末現在ハ四十一頭ナリ

要之、同場入場羊總數ハ八百三十六頭、蕃殖二百三十七頭ニシテ、年末現在數ハ二百三十六頭トナリ、著シク減少シ、遂ニ廢場スルニ至レリ蓋シ止ムヲ得サル有樣ナリ

札幌牧羊場

開拓使ニ於テハ、桔梗野牧羊場開設ト共ニ、札幌ニ牧羊場ヲ開設ス其地積ハ現時ノ師範學校及其附近ヲ包括セル八万八千餘坪ナリ

明治九年開場ト共ニ、札幌官園ノ牧羊全部ヲ收容ス、其成績佳良ニシテ、桔梗野ノ如ク病害ナク、剪毛量一頭ヨリ十英斤ヲ得タリト云フ

同十年、第一回內國勸業博覽會ニ、牝羊一頭ヲ出品シ、鳳紋賞牌ヲ得タリ

同十二年、「スパニッシュ、メリノー」三十頭及「コッウオルド」六十七頭、米國ヨリ到着ス

同十三年、剪毛千七百五十三斤ヲ東京千住製絨所ニ送付シテ、製絨原料トナス其製品頗ル精良ナリ

同十四年、第二回內國勸業博覽會ニ、「メリノー」、「サウスダウン」各一頭ヲ出シ、有効二等賞ヲ得タリ

同十五年、廢使置縣ノ事アリ、札幌縣ノ所轄ノ下ニ、牧羊場ヲ繼續セリト雖モ、其後廢場スルニ至ル、二十一年マテノ記事ヲ調査スヘキ史料ナキヲ遺憾トス

今同場八ケ年ノ成績ヲ見ルニ、「サウスダウン」種ニアリテハ、輸入數五十五頭、生殖百八頭、病死四十六頭、賣拂五十三頭ニシテ十四年末現在百十頭ナリ、「コッウオルド」種ニアリテハ、輸入九十八頭、生殖百九十頭、病死六十頭、賣拂二十五頭ニシテ、十四年末ハ百九十三頭ヲ有セリ「メリノー」種ハ、四十二頭入場シ、生殖九十二頭、病死百三十八頭、賣拂十四頭ニシテ、年末現在六十二頭ナリ

之要、同場ニハ百九十五頭ノ入場羊アリテ、此生殖ハ三百九十頭、病死ハ二百四十四頭　賣拂ハ百二頭ニシテ、十四年末總數ハ三百六十四頭ナルヲ以テ、同場ハ七ケ年間ニ、羊數ニ於テ百六十九頭ノ增加ヲ見ルニ至リ、賣拂百二頭ノ產地タルニ過キサルハ、元ヨリ好成績ト言フヲ得サルナリ

根室牧場

開拓使ニ於テハ、牧羊ノ普及上、根室牧場ニモ牧羊ヲナスコトヽセリ

明治九年六月、七重勸業試驗場ヨリ、「サウスダウン」種、牝四頭、牡一頭ヲ移シ飼養ス

同十年六月ノ剪毛、一頭平均百二十匁ニ過キスト云フ是レ恐ラクハ營養不良ニシテ、剪毛ニ先チ脫毛セルモノト認メサルヘカラス同年再ヒ七重勸業試驗場ヨリ、綿羊牝三頭、牡一頭及護羊夫ヲ移畜セリ

同十一年、剪毛五貫六百匁ヲ得タリト云フヲ以テ見レハ、少ナクモ一頭平均八百匁ヲ得タルヲ知ルヘシ「サウスダウン」種ニシテ、一頭平均八百匁ヲ得ルハ好成績ナリ、十二月ニ至リ、綿羊ハ收支相償ハストナシ、七重勸業試驗場ニ、牝七頭牡一頭ヲ返却セリト然ルニ綿羊ハ蕃殖シタルヲ明記セリト雖モ七重ヨリ移セルハ牝七頭、牡二頭ニシテ、返却セシモノ牝七頭牡一頭ナリト云フニ徵スレハ、生殖羊ハ育成セサリシモノヽ如シ

北海道廳種畜場

明治二十一年七月、札幌牧羊場ノ廢止ニ決定スルヤ、從來飼養セシ牧羊ノ陶汰拂下ヲナシ、其殘部ハ之ヲ二分シテ、一部ハ札幌農學校ニ移シ、一部ハ之ヲ種畜場ニ移畜セリ其種類ハ「メリノー」、「サウスダウン」「コッウオルド」ノ三種ニシテ、牝羊百三頭、牡羊二十七頭、合計百三十頭ナリシモ　斃死四頭ヲ出シ、六頭ヲ撲殺スルニ至リシヲ以テ、同年末ニ至リ百二十頭ニ減シ、左ノ種類頭數ヲ飼養スルニ至レリ

明治二十一年末

種類												合計
	メリノー種			コッウオルド種			サウスダウン種			計		
性	牝	牡		牝	牡		牝	牡		牝	牡	
頭數	二〇	四		四七	一六		二六	七		九三	二七	一二〇

當時牧羊ニ關係セルモノヽ談ニ依レハ「コッウオルト」種ハ成績比較的良好ニシテ、牡羊ノ如キハ三十貫以上ニ達セシモノナリト云フ而シテ其數モ亦他種ニ比シテ多カリシヲ知ルヘシ

翌二十二年ニ至リ生產增加セシモノ六十一頭ナリシモ老衰虛弱或ハ體格不良ナル者五十頭ヲ屠殺シ又札幌官園ニ移シ五十頭ニ縮少セリ其種類頭數ハ左ノ如シ

明治二十二年

種類												合計
	メリノー種			コッウオルド種			サウスダウン種			計		
性	牝	牡		牝	牡		牝	牡		牝	牡	
頭數	六	二		二二	二		一六	二		四四	六	五〇

爾來其增加稍遲々タル觀アルモ、年々增加シテ、二十三年ハ六十六頭、二十四年ハ八十一頭、二十五年ニ於テハ百二頭ノ年末現在數ヲ見ルニ至レリ、其蕃殖狀況ヲ調査スルニ、蕃殖歩合ハ平均七割三分强ニシテ、最高七割六歩强ヲ示シ、甚タ

シタ不良ト云フヘカラス各種類ノ強弱適否ハ、之ヲ決定スヘキ資料ニ乏シキモ、何レモ適セサルセノト認定スヘキ理由ナキヲ以テ見レハ、各種共ニ適種ナルヲ證スヘシ

今蕃殖歩合ヲ表示スレハ左ノ如シ

年次	種付牝羊數	生殖羊數	生産歩合（百分率）
明治二十三年	三三	三三	七一、八七五
同　二十四年	三四	二六	六六、四七〇
同　二十五年	四一	三〇	七三、一七〇
平均	三六	二六	七三、八三八

同二十六年ニ至リ、村上要信氏種畜場長トナルヤ、從來ノ牧羊ハ試驗事業ナリシモ試驗法ノ改良ヲ要スルモノトシ左ノ方法ヲ取レリ、

(一)種類ノ撰擇及配合　從來飼養ノ種類中、「メリノー」種ハ最モ虚弱ニシテ、本道ニ適セサルモノトナシ「サウスダウン」、「コツウオルド」種ノ蕃殖ヲ圖リ、「メリノー」種ノ牝羊ニ「サウスダウン」種牡羊、又ハ「コツウオルド」種牡羊ヲ配スルニ至レリ然レトモ如斯キ優等牝ニ、劣種ノ牡ヲ配スルハ、良好ノ蕃殖法ニアラサルヲ以テ、二十六年之ヲ改メ、飼養、管理、撰種配合ノ方法ヲ嚴ニシ、「メリノー」種ノ蕃殖ヲ主トシ、且ツ「メリノー」種ノ血液七分五厘、「サウスダウン」種ノ血液二分五厘マテ組成セシモノヲ蕃殖スル方針ヲ取リ、之ヲ實行セシニ、其結果頗ル良好ナリ、加之、同年以降ノ經驗ニ徴スルニ、「メリノー」種ハ最モ壯健ニシテ、「サウスダウン」種之ニ次キ、「コツウオルド」種ニ至リテハ、冬期ノ飼養ニ充分ノ穀類ヲ要スルノミナラス、病死多シ、最モ虚弱ナル事ヲ認メタリ

(二)飼養ノ改良　從來飼料トシテ、日々乾草、根菜、燕麥或ハ穀ヲ與ヘタリシカ、經濟上損失ヲ免レス、因テ冬期仔羊ニハ、凡ソ一二ケ月間牝羊ニハ分娩前後、牡羊ニハ配合季節ノミ、燕麥ヲ與ヘ、他ハ牧草及根菜ノミヲ給與セシニ、大ニ費用ヲ節シ、且ツ綿羊ハ頗ル壯健トナレリ

(三)淘汰、老衰、虚弱、蕃殖ノ目的ナキモノ二十五頭ヲ、二十六年中ニ拂下ケタリ

斯ル方法ノ下ニ、村上場長熱心牧羊ニ意ヲ注キタル結果、漸次其成績良好トナリ、二十六年以降三十一年ニ至ル六ケ年間ハ、蕃殖歩合モ最高九割三分ヨリ九割一分ノ好況ヲ示シ、五割五歩ヲ最低トナシ約七割四分ノ蕃殖ヲナセリ其成績佳良ナリト云フヲ得サルモ、二十三年前ニ比シ、良好ナリト言ハサルヘカラス

今之ヲ表示スレハ左ノ如シ

年次	種付牝羊數	生殖羊數	蕃殖歩合（百分率）
明治二十六年	四七	二六	五五、三
同　二十七年	四六	四二	九一、三
同　二十八年	四七	三八	八〇、九
同　二十九年	六〇	四五	七〇、五
同　三十年	六二	三七	五九、七
同　三十一年	六〇	五六	九三、三
平均	五四	四二	七五、二

以上ノ方針ト共ニ、二十六年以來羊數ヲ增加シ、三十一年ニ至リ百七十三頭ニ達セリ此間「コツウオルド」及「サウスダウン」種牝羊ニ、「メリノー」種牡羊ヲ配シ、其雜種ヲ得タルニ、產兒強健ナルト、一方牝羊ヨリ毛質善良ナルモノヲ得ルニ至レリ二十八年日清戰役後、清國羊牝一頭、牡四頭アリシモ、蕃殖ヲ見ルニ至ラスシテ、拂下又ハ斃死シ、成績ヲ擧ケサリシヲ遺憾ナリトス

今二十二年ヨリ三十一年ニ至ル五ケ年間ノ剪毛量ヲ見ルニ、「メリノー」種ハ牡羊最多量一貫八百匁、即チ十五英斤、最少量一貫匁、即チ八斤三分ニシテ、牝羊ニアリテ、最多量一貫四百匁、十一英斤強、最少量八百匁、約七英斤ヲ產セシニ徴

スレハ、「メリノー」種ノ成績、頗ル良好ナルモノト言ハサルヘカラス

是レ單ニ剪毛量ノ多キノミナラス、又體軀ノ大ナルヲモ知リ得ヘキヲ以テナリ。「サウスダウン」種ニアリテモ、「メリノー」種ニ及ハサルハ當然ナルモ、剪毛量ハ、牡羊ノ最多量九百六十匁、最少量ハ五百五十匁、牝羊最多量八百匁、最少量四百匁ナルヨリ之ヲ見レハ、「サウスダウン」種トシテ、決シテ收量少ナキモノニアラスシテ、普通以上ノ成績ナリト言ハサルヘカラス、「ゴッツウオルド」種ニ至リテハ、牡羊ノ剪毛量ハ一貫匁ヲ最多量トシ、少ナキモ八百匁ヲ下ラス牝羊ニアリテモ、最多量一貫二百匁ニシテ最少量四百五十匁ナルモ、一般ニ五百匁ヲ下ルコトナシ亦同種トシテ相當ナル收量ナリト言ハサルヘカラス又「メリノー」、「サウスダウン」雜種ニアリテハ、牝牡平均九百三四十匁ノ剪毛ヲ得タルモ、「サウスダウン」種ヨリ之ヲ見レハ、改良ト稱スヘカラス

爾來牧羊ハ同一ノ方針ノ下ニ行ハレ、羊數亦增加シ、三十三年ニ至リ、村上要信氏職ヲ辭シ、池田音次郎氏其後任トシテ、場長事務ヲ取扱フニ至レリ池田氏ノ牧羊ニ關スル方針ハ、之ヲ記錄ニ徵スヘカラサルモ、三十六年海外ヨリ種畜購入ノ事アルヤ、「サウスダウン」種、牡二頭、牝二頭ヲ輸入セリ明治十四年以來、新血ヲ補充スルノ途絶ヘタリシカ、茲ニ新血ヲ注入スルノ擧ニ出ケシハ、全ク牧羊ノ振興ヲ企圖シタルモノト認メサルヘカラス然レトモ牧羊數ハ三十三年以降增加セサルノミナラス、却テ遞減ヲ示セリ

然ルニ三十七年ヨリ稍々增加ヲ示シ、三十九年、再ヒ「サウスダウン」種、牡三頭ヲ輸入ス爾來二百五十餘頭ニ上リ增減ヲ見サルニ至レリ

今三十二年以降、四十二年ニ至ル十一ヶ年間ノ、蕃殖成績及剪毛表ヲ擧クレハ左ノ如シ

蕃殖成績表

年次	種付牝羊數	生殖羊數	蕃殖歩合	年末現在數
明治三十二年	七〇	四七	六一	一七二
同三十三年	一〇七	五八	五六	三九
明治三十四年	八〇	三七	四六	一二
同三十五年	六一	三〇	四九	一二三
同三十六年	六八	四三	六二	一五三
同三十七年	八五	六二	七四	一五五
同三十八年	九二	七九	八六	一五五
同三十九年	一五	一〇四	九〇	二五二
同四十年	一三九	七五	五三	二七二
同四十一年	一三九	一〇〇	七五	二五八
同四十二年	一五五	一〇三	六六	二五四

剪毛成績表（平均一頭剪毛量）

年次	種類	三十七年	三十八年	三十九年	四十年	四十一年	四十二年
サウスダウン種		五、四斤	五、八斤	五、七斤	五、二斤	三、五斤	三、〇斤
輸入サウスダウン種		六、七	六、六	七、〇	一三、〇	—	—
メリノー、サウスダウン種		六、六	六、七	六、二	七、〇	三、八	三、五
平均		六、四	六、五	六、三	六、六	三、八	三、五

以上ノ成績ハ極メテ簡單ナリト雖モ、三十六年以來二回種羊ノ輸入ヲ計リ、以テ多少其効果ヲ認ムヘキモノナランニ、何等ノ徵スヘキモノナキヲ遺憾トス殊ニ肉用種ナル同種ニ就キ　生體量ヲ秤量セサリシハ、同種「サウスウダン」種ノ發育狀態ヲ知リ得サルモノニシテ、最モ遺憾トスル所ナリ、然レトモ以上ノ成績ヲ調査スルトキハ、蕃殖成績ハ、多產種ノ「サウスダウン」種トシテハ、良好ナラサルハ勿論ナルモ、三十八年ハ、八割六分、三十九年ハ九割ノ好成績ヲ示スニ於テハ、

牧羊ノ有望ナルハ多言ヲ要セサルヘシ又剪毛量ニ於テモ四十一年、四十二年ヲ除キ、一頭平均六斤半ヲ下ルコトナキニ於テハ是亦不成績ニアラスシテ、取毛上ヨリ之ヲ見ルモ亦、「サウスダウン」種ニセヨ、同雜種ニセヨ、有望ナルヲ證スルヤ論ナキナリ唯四十一年　四十二年ノ取毛量少ナキハ、是レ種々ナル故障アリシモノニシテ、以テ牧羊ヲ不可能トナスヘカラサルハ、章ヲ改メテ聊カ論セサル可カラス

如斯、北海道廳種畜場ニ於ケル牧羊ハ、一進一退其適否ヲ判定スヘキ資料ニ乏シク、漠然トシテ年月ヲ送リ、四十三年ニ至リ、牧羊場廢止ノ議成リ、北海道會之ヲ承認シテ、本道ニ於ケル開拓使以來ノ牧羊ハ三十六七年ノ歳月ヲ送リシニ、何等ノ結論ナクシテ消滅スルノ止ムナキニ至レリ、而シテ本道ニ拂下ヲナセシモノ極メテ小數ニシテ、函館時任牧場ニ牝四十頭、牡十頭、函館福島平四郎ニ牝羊三頭、幌泉郡幌泉村竹内誠一ニ牝四頭、牡一頭、常呂郡常呂村泰周ニ牝一、牡一頭、上磯郡石別村岡田普理江ニ牝二頭、牡一頭茅部郡森村村岡小五郎ニ牝一頭、牡一頭空知郡沼貝村榎本鐵之助ニ牝十五頭、牡一頭等ニシテ、殘餘ハ神戸肉商人ノ拂下ル所トナリ、開拓使以來飼養蕃殖ヲナセル、綿羊ノ全部ハ種畜場ヨリ拂出ヲ終レリ

以上ハ過去ニ於ケル本道牧羊ノ概要ナルカ、今日之ヲ記錄ニ徵スルトキハ、甲者ト乙者トニ年度ノ誤差少ナカラス爲ニ何レカ是ナルカヲ判明スルニ苦ム有樣ナリトス又一般ニ牧羊上ニハ試驗法案ヲ置カサリシモノ、如ク、其報告簡ニシテ要領ヲ得サルハ、誠ニ遺憾トスル所ナリ。即チ生產羊ノ體尺、體重年齡ノ如キ、又分娩期ノ如キ、或ハ疾病ノ驅除豫防法、肥育試驗成績ノ如キ、審カナラサルヲ以テナリ

現時ノ月寒種畜牧場ノ牧羊

開拓使以來、開設ノ牧羊場ノ情況一般ニ揭ケタリト雖モ、茲ニ尙一牧羊場アリトス月寒種畜場ノ牧羊是レナリ月寒種畜牧場ノ牧羊ハ、明治四十二年一月英國ヨリ輸入セルモノニシテ、爾來其蕃殖、生育共ニ良好ナルノミナラス、今ヤ牧羊衞生ノ途明カナルヨリ、往時ノ如ク疾病ニ罹ルモノナク、益々增加好況ヲ呈シツヽアリ

今各年ノ生產步合並ニ現在表ヲ擧クレハ左ノ如シ

種類	年末現在總羊頭數 明治四十四年	大正元年	蕃殖牝羊頭數 明治四十四年	大正元年	生產步合（百分率） 明治四十四年	大正元年
サウスダウン種	七七	一〇一	一五〇	一四〇	七四	四八
シユロップシヤー種	八五	九一	一二五	一四四	七四	五九
計	一六八	一九二	二六五	二八四	一五一	一〇七

又各年ノ拂下及屠殺羊ハ左ノ如シ

種類	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年
サウスダウン種	一二	四二	四四	四四
シユロップシヤー種	二四	二六	五七	三
計	三五	六八	一〇一	七六

以上ノ如ク、各年蕃殖ハ、從來ノ牧羊場ノ比ニアラスシテ、其種類ノ多產性タル特色ヲ有シ、其成績良好ナルノミナラス、其育成ニアリテモ容易ニシテ、何等困難ヲ感スルモノナシ生產羊ハ生後九ヶ月ニ達スレハ其生體量「サウスダウン」種ニアリテハ、牡ハ十貫ヲ下ルコトナク、牝ハ八貫以上、閹羊ニアリテハ八貫內外ナリ「シユロップシヤー」種ニアリテハ、牡ハ十貫乃至十一貫以上、牝ハ八貫以上、閹羊ハ九貫以上ニ達スル有樣ニシテ、其成育亦同種ノ特長ヲ發揮シツヽアル有樣ナリ

剪毛量ハ「サウスダウン」種ニアリテハ、一頭平均牡八斤乃至十英斤、牝六斤半乃至七英斤、「シユロップシヤー」種ハ牡十斤乃至十八英斤、牝ハ六斤乃至十英斤ニ達セリ又生體ト肉量トノ關係ヲ見ルニ、「サウスダウン」種ハ生後十ケ月ニシテ生體重量ニ對シ、四割三四分乃至、四割九分一厘ノ骨付肉量ヲ產シ、「シユロップシヤー」種ハ生後十ヶ月ニシテ、生體重量ニ對シ、骨付肉量四割乃至四割一分四厘ヲ示セリ茲ニ於テ之ヲ見レハ、「サウスダウン」種ハ一頭平均六英斤、「シユロッ

ブシャー」種ハ、一頭平均八英斤ノ毛量アルモノト見ルトキハ、將來牧羊上、何等故障ナキヲ知ルヘク、又肉量ハ「サウスダウン」種ハ四割五分、「シュロップシャー」種ハ四割ト見テ可ナルヘシ

疾病ニアリテハ、特ニ認ムヘキモノナク、至テ健康ニ生育シ、四十五年中稍々營養不良ノ狀ヲ呈シ、毛量ヲ減シタル外、注目スヘキモノナシ

二、緬羊ノ種類頭數

（大正三年九月調）

支廳別	サウスダウン		シロップシャー		メリノー		雜種		計		合計
	牝	牡	牝	牡	牝	牡	牝	牡	牝	牡	
札幌	三	一	六	二					九	三	一二
空知	一三	二	一	三					一四	五	一九
上川	二		二						四		四
後志	四	二							四	二	六
檜山				一	一七	七	四	一〇	二一	一八	三九
函館	二	三		一	四二	四	七	二	五一	一〇	六一
室蘭	四二	七	五二	七	三	一			九七	一五	一一二
浦河					二				二		二
河西			九	四					九	四	一三
釧路											
根室											
網走				一	二		三		五	一	六
宗谷											
増毛											
札幌區			六	八					六	八	一四
小樽區											
函館區	六								六		六
合計	七二	一五	七六	二七	六六	一二	一四	一二	二二八	六六	二九四

右表ノ如ク大正三年九月調査ニヨレハ本道民有緬羊總數ハ二百九十四頭ナルモ此内「シュロップシャー」種牡一頭牝三十二頭「サウスダウン」種牡一頭、牝三十二頭ハ有珠郡伊達村農家三十二戸ニ對シ月寒種畜牧場ヨリ貸付試驗中ノモノハ包含スルモノニシテ民間ノ所有ニ成ルモノハ二百二十八頭ニ過キス而シテ月寒種畜牧場ヨリ拂下タルモノハ八十三頭ナルモ蕃殖シテ九十一頭トナリ北海道種畜場ヨリ拂下タルモノハ七十六頭ニシテ三十九頭ニ減シ其他九十八頭ハ岩手千葉ノ二縣及支那羊ノ輸入ナリトス

種類トシテハ「シュロプシャー」種最モ多ク百三頭ヲ算シ「サウスダウン」種ノ八十七頭之ニ次キ「メリノー」種ノ七十八頭第三位ニアリト雖モ何レモ未タ多大ノ差ヲ見サル有樣ナリ雜種ニアリテハ主トシテシュロップメリノー種ナリトス

牝羊ト牡羊ノ比ハ比較的多キヲ見ルハ創業當時ニシャ牝一頭ノ所有者モ牡一頭ヲ所有スルニ基因スヘシ

各支廳別民有緬羊大正二年度生産數調

支廳別	牝	牡	計	摘要
札幌	三	一	四	
空知	二	二	四	
上川	一		一	
後志				
檜山	八	六	一四	

支廳別	牝	牡	計	摘要
函館	三	七	一九	
室蘭	三	二	三三	
浦河				
河西	一		一	
釧路				
根室				
網走	二		二	
宗谷				
増毛				
札幌	三		三	
小樽				
函館	二		二	
合計	三六	二七	八三	

生産頭數ノ少數ナルハ二才羊比較的多キニ基因シ「シロップシヤー」種及サウスダウン種ハ大概百%ノ蕃殖ヲナシ「メリノー」種ニアリテモ八十%ノ蕃殖ヲナシ「シユロップメリノー」ハ「メリノー」種ノ蕃殖ニ勝リ双子ヲ産スルモノアリ

各支廳別民有緬羊大正二年度剪毛頭數及剪毛量調

支廳別	剪毛頭數	剪毛量	摘要
札幌	八	八八〇斤	
知内	一五	八九、四	
川上	三	二八、三	
後志	四	二三、〇	
檜山	二九	一九〇、〇	
函館	四三	一三五、〇	
室蘭	一九	二六一、六	
浦河	二	一六、〇	
河西	一三	九二、〇	
釧路			
根室			
網走	六	四四、五	
宗谷			
増毛			
札幌	八	一二、六	
小樽			
函館	四	二五、〇	
合計	一五三	一、一〇四、四	

剪毛量ハ一頭平均七斤二分二厘ニ當リ稍少量ナルハ全ク二才羊中剪毛ヲ惡ルモノアルニヨルモノ、如ク各處ニ於ケル調査ヨリ勘考スレハ平均八斤ヲ下ラサルモノ、如シ但シ「メリノー」種中「チグリチー」種ハ五斤半乃至六斤ノ平均剪毛量ヲ示シ

ヲ、アリ

三、本道牧羊不振ノ原因

開拓使以來、牧羊計畫ヲナシ、本道ニ牧羊普及ヲ講シタルハ、極メテ機宜ヲ得タルモノナリト雖モ、其實行ハ計畫ニ伴ハズシテ、一盛一衰常ニ不振ノ狀態ニ存セシハ、以上列記セル各牧羊場ノ狀況ニ於テ之ヲ見ルヘシ然ラハ斯ル不振ニ陷リシ原因ヲ、探究スルハ、今後牧羊奬勵上極メテ必要ナリト言ハサルヘカラス然レトモ其原因ヲ探究スルニ、之カ主因トナルヘキモノヲ捕索スルハ困難ニシテ、實ニ漠然タルモノナリトス今左ニ不振ヲ來セル諸因ニ就テ述ヘントス

疾病ハ牧羊ノ不振トナレリ

綿羊ハ家畜中最古ノモノナリト稱セラル、如ク、全ク家畜ニ馴化シ、外敵ニ抵抗スル武力ヲ有セス、且性怯懦ニシテ、相倚リ相助クルカ如キ性質ヲ有シ、從テ群居ヲ好ミ、孤獨ニ堪ヘサル家畜ナリ茲ヲ以テ群居生活上恐ルヘキハ傳染病ニシテ之カ驅除豫防ハ、最モ周到ナラサルヘカラス然ルニ開拓使ノ初メ、牧羊ノ斃死セル疾病中傳染病多ク、一頭之ニ冒サル、ヤ忽チ他ニ傳播シ、停止スル處ナカリシナリ而シテ其病源ヲ探知スヘキ顯微鏡タニナカリシヲ以テ、羊ノ病勢進ミ、放牧中群後ニ落ツルモノアレハ、始メテ病羊ナリトシテ羊舍ニ收容シ手當ヲナスモ、其原因不明ナルヲ以テ、充分ナル手當ヲナシ得サリシハ當然ニシテ、次第ニ斃死羊ノ增加セシモノナリ是レ羊ノ群後ニ落ツル以前、既ニ放牧場ニ病毒ヲ分布スル所以ニシテ、他ノ健康羊ハ、次第ニ之ニ感染セルモノナルヤ疑ナキナリ斯ル場合ノ豫防法トシテ、病羊ヲ現場ニ置キ、健康羊ヲ病毒ノ疑ナキ、他ノ放牧地ニ收容スルニ留意セサレハ、群居衛生ヲ完フシ得サルモノナリ

此種ニ屬スル傳染病ハ、先ツ清國羊ニ發生セル疥癬病ノ如キ、其他一般ニ發生スル肺寄生蟲、胃蟲、肝臓寄生蟲、纖蟲等、何レモ傳染病ナリト雖モ、當時此等ノ智識ナカリショリ、驅除豫防法ナカリシモノニシテ、蓋シ止ムヲ得サリシナリ

今北海道種畜場ニ於ケル、明治十九年以降三十一年ニ至ル、十三ヶ年間ノ羊病ノ種類、及斃死頭數ヲ擧クレハ左ノ如シ

病名 ＼ 年次	明治十九年	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年	三十年	三十一年	計
皺腹症														
尿道結石				三	五		二	二	六		一二		一四	四〇
胃腸炎						四								
寄生性肺癆														
小便失禁症														
萎黃病														
肺卒中														
急性氣管支炎														
幽門口狹窄														
子宮內膜炎														
嘔吐病														
便秘														
後身麻痺														
貧血														
ストロンキラス フイラリヤ														
難產														
溺死														
敗血症														
腔黴轉														
尿閉症														

以上ノ諸病中、若シ家畜衛生ヲ重ンシ、又放牧取扱ニ注意セハ、他ハ極メテ少數ノ不治ノ病ニ罹リシノミニシテ、何レノ疾病ハ難治症ニシテ、牧羊不可能ナリト斷定スルコト能ハサルモノナリ唯現時ト異ナリ、往時ハ獸醫ノ途開クサリシヲ以テ、事實十三ケ年間ニ、九十頭ノ斃死羊ヲ出セシハ、誠ニ遺憾トスル所ニシテ、世上斯業ノ智識經驗ナキモノハ、其蕃殖成績ノ不良ナルヨリ、官民共ニ牧羊不可能ヲ唱ヘシ一因トナリシモノナラン

飼養管理周到ナラサリシコト

前項ニ掲ケタル種畜場ニ於ケル羊病表中、萎黃病、貧血病ナルモノアリ或ハ共ニ同一ナラサルヤヲ疑フ處ニシテ、此等ハ病名トナスヨリ、寧ロ營養不良病ナリト云フノ當レルモノナルヘシ是レ獨リ種畜場ノミナラス、又時々民間ニ拂下ヲナシタル牧羊モ、此弊ニ陷リシハ屢々聞ク處ナリ、是レ羊ハ被毛長ク、且ツ密ナルヨリ、他ノ家畜ノ如ク瘠羸ノ度明カナラス殊ニ群居スル羊ニシテ、一度虛羸ニ陷ルヤ、他ノ强健ナルモノニ壓迫セラレテ、飼料ヲ得ルニ至難トナリ、益々虛羸ニ陷ルモノナルヲ以テ、外國牧羊家ノ俚諺ハ、「羊群ハ大小强羸ナキ均一ナルモノヲ要ス」ト、蓋シ至言ナリト謂フヘシ然ルニ牧夫任セノ牧羊場ハ、歐米共ニ此弊ニ陷リ易キモノナルハ、開拓使當時ノ、牧羊當事者ノ同感ヲ開クニヨリ明カナリ是レ一ハ以上ノ如ク、飼料ヲ充分ニ攝取セサルニ原因スルモ、亦一ハ寄生虫ニ基因スルモノ少ナカラス即チ寄生性肺疥、胃蟲條蟲ノ如キ內臟寄生蟲ノ、營養ヲ攝取スルニ基因スルモノナリ此等ハ治療法ヨリモ寧ロ、豫防方法ニ於テ大効ルヘシ此ノ外虱蠅ニヨリ營養不良ニ陷ルモノ、實ニ恐ルヘキモノナリ之ヲ明治四十二年春北海道廳種畜場牧羊ニ目擊セリ虱蠅ハ六月、母羊ノ剪毛ト共ニ仔羊ニ移リ、寄生スルモノニシテ、冬期舍飼ニ至レハ、虱蠅漸ク蕃殖シ、發育旺盛期ニ於ケル、仔羊ノ生育ヲ沮害スルコト實ニ大ナリトス殊ニ冬期飼料不良ナルノ候ニ至リ、益々營養不良ニ陷ルヲ以テ、二才羊ノ生育不完分トナリ、或ハ牧羊不可能論ヲ刺戟スルコト少ナカラサルヘシ、又營養不良ノ結果、萎黃病ノ名稱ヲ附セラレ、斃死スルモノアルヘキモ、羊毛ハ二三月ノ頃、既ニ毛根部斷絕シテ、剝脫スルニ至ル、故ニ牧羊者ハ常ニ留意シテ、營養不良ニ陷ラサラシムヘシ

種畜場ハ明治四十年、同四十一年迄ハ、羊毛ノ收量六斤半內外ナリシニ、餓然三斤半ニ遞下シ、以テ牧羊ノ不可能ナルヲ立論セリト雖モ、是レ當然ナルノミ。一方虱蠅ノ蕃殖旺盛ナルモ、驅除法ヲ講スルトコナク、又不幸濕地ニアリテ、條蟲ノ襲フ所トナリ、數年ニシテ尙退治シ得サル等、玆ニ相合シテ營養不良ヲ來シ、一方放牧場ノ整理充分ナラサリシヨリ、被毛ノ損失アリテ、每年剪毛期ニ先チ、其大半ヲ失フニ至リシヲ以テ、六月剪毛期、一頭平均三斤半トナリシナリ、羊ノ體重秤量ハ、一回モ發表セラレサルハ元ヨリ、其體ノ輕重大小ヲ明カニ證スヘキ資料ナキモ、一ケ年ニシテ毛量半ヲ產スル、矮小ナル體軀ノ羊ト變化シタルニ非ラサルハ、多言ヲ要セサル所ナリ要之、營養不良ニ陷ルハ寄生蟲ノ被害ニヨルハ勿論ナリト雖モ、亦飼料ノ不良ナルニ原因スルヲ思ハサルヘカラス羊ハ家畜中怜悧ナルモノニ非ス又甚味少ナキ實利的ノ動物ナレハ、他ノ家畜ニ比シテ好愛ヲ受クルコト少ナク、飼養簡易ナルカ儘ニ、營養不良ニ陷ルノ恐レアリトス是レ又六七十年前、英國牧羊史ニ見ルヘキ顯象ナリトス又被ノ皺張症ノ如キ、全ク飼養、管理ノ宜シキヲ得サルニ因ルモノニシテ、疾病トシテ見ルヘカラサルモノナリ要スルニ貧血症ニセヨ內臟寄生蟲ニセヨ、又皮膚寄生虫ニセヨ、將又皺張症ニセヨ、驅除豫防ノ不可能ナルモノニアラザルモ、飼養管理周到ナラサルヨリ、牧羊ノ成績擧カラサルヲ以テ、牧羊不可能論ヲ助長セシモノアリシカ如シ

熱心ナル研究者ナキコト

明治五年、東京靑山ニ綿羊ヲ輸入シテ以來、北海道廳種畜場ノ牧羊廢止ニ至ル迄、前後三十有八年ヲ經過セリト雖モ、此間記錄ニ又當事者ニ、何等的確ナル所論主張ナク、牧羊ハ大概一盛一衰、其論点ノ歸着スル處ナキヲ見ルニ於テハ、其試驗法ノ散漫トシテ成案アルナク、從テ何等ノ結論ヲ見ルニ至ラサリシカ如シ是レ當事者ノ誠實未タ至ラサル所以ニアラスシテ何ソヤ牧羊ノ本道ニ不適ナランニハ、何故ニ不適ナルヤ其蕃殖相當ナルモ、斃死多クシテ增殖ノ遲々タルハ何故ナルヤ三十八ケ年ノ長年月ヲ經過セサレハ、結論シ得ヘカラサル大問題ニアラサルヲ思ハヽ、從來ノ牧羊ノ內容亦知ルヘキニアラスヤ、殊ニ牧羊場廢止ニ至リ、何等ノ結論ヲ發表セサルカ如キハ、本道牧羊ノ不幸、蓋シ甚大ナルモノニシテ、徒ニ官民ノ頭腦ニ浸潤セル、根據少ナキ牧羊不可能論、今尙依然トシテ存セシメツヽアル以上、過去ノ飼養試驗ハ何等ノ効驗ナキノミナラス、却テ無益ナリシヲ思ハサルヘカラス當事者多年ノ苦心、水泡ニ歸スルノミナラス、其不利又大ナリト謂

フヘシ漁分場牧羊ノ剪毛量、一頭平均三斤半ニ減シタリト雖モ、四十二年ノ夏、余ハ坪内技手ト共ニ剪毛後、石灰硫黄温浴ヲ實施セシニ、當年生産羊ノ發育旺盛、嘗テ見サル好成績ナリトハ、十數年來牧羊ニ從事セル牧夫ノ證言スル處ナリ然ラハ虱蠅ノ仔羊ニ與ヘシ被害ノ如何ニ大ナルヤハ、多言ヲ要セサルヘシ斯ル驅除法ヲ年々繼續センニハ、忽チニシテ從來ノ毛量ヲ得ルハ勿論、却テ收量增進ヲ期待シ得ルコト、理ノ然ラシムル所ナルヘシ然ルニ四十三年種畜場ノ牧羊廢止セラレシ等ノ事實ヨリ考フルモ、牧羊ノ改良增殖ニ、誠實研究心ナカリシヲ證スルニアラスヤ桔梗野牧羊ノ末路ヲ聞クモ、富家ノ頽落スルカ如ク、熱誠万難ヲ排シテ、奮鬪努力スルモノナク、人々流散シテ顧ルモノナキ有樣ナリト云フニ至リテハ其末路同一轍ナリト云フヘシ世上牧羊不可能論士多シト雖モ、如何ニセハ成功スヘキヤ研究的ニ問フ者實ニ少ナシ萬事ノ成功ト不成功ハ、常ニ此邊ニ存スヘキナランカ

經營法宜シキヲ得サルコト

開拓使以來、牧羊蕃殖法ヲ調査スルニ、種付ハ毎年十一、十二月ニ於テ行ヒ、翌春五月前後ニ分娩スルヲ通則トセリ余ハ常ニ其不利一二点ニ止ラザルヲ思ヒ、之ヲ歐米ノ牧羊法ニ照シ、又實驗スルニ、五月前後ニ分娩スルモノ極メテ不良ナルヲ確メタリ即チ十一、十二月ノ頃ハ、母羊モ種牝羊モ多少体力ヲ損スルノ時ナリ此時期ニ種付ヲナシ、爾來寒冷募リ、飼料又良好ナラス、母羊ノ体力愈々減セントス此時ニ當リ、仔羊ハ胎内ニ生長ヲ始ム健全ナル營養ヲ受クルハ、不可能ナリト言ハサルヘカラス五月頃ニ至リ、母羊益々体力ヲ損失スル時ニ當リ分娩スルモ、羊兒ノ体重、体長共ニ一二月ノ分娩兒ニ比シ、著シク輕小ナルヲ見ルハ當然ナルト、母羊ハ泌乳量乏シク、仔羊ノ發育不良、往々斃死スルニ至ルヘシ且ツ分娩後、直ニ青草ヲ喰スルモノニアラスシテ、二ケ月ヲ經テ漸ク充分ニ青草ヲ喰フニ至リ、青草萠芽期ニ生産スルモ青草利用ノ途ナク、加フルニ体力充分ナラサルニ、炎暑ノ候ニ入リ、營養不振ニ陷ルカ如キ、最モ不良ナル生産法ナリ若シ之ヲ改メテ、秋期十一、十二月分娩トナスカ、然カラサレハ一、二月ノ分娩トナシ、晩クモ三月ノ分娩トナストキ、母羊ハ種付ハ青草放牧期ニシテ、胎兒ハ運動自由ニ、其体力旺盛ナル時期ニ生長シ、漸ク体力減少スル一、二月ノ頃ニ分娩スルニヨリ、泌乳又相當ニシテ、産兒大ニ生産良好ナルト、五月ニ至リ青草ハ之ヲ直ニ利用シ得ヘク、發育良好ナルモノハ、六月剪毛量三分ヲ得ヘシ若シ蕃殖羊又ハ肉羊トシテ賣却スルモ、十二月ニ至レハ十ケ月内外ニ達シ、發育良好ナレハ優ニ十二貫ニ達シ、然ラサルモ八貫ヲ下ラサルヘシ然ルニ開拓使以來ノ舊慣蕃殖法ヲ、墨守シテ改メサルニ於テハ、延テ牧羊ノ不成績トナリ、世人ハ牧羊ハ本道ニ適セサルモノナリトノ感ヲ有スルニ至ルハ、又止ムヲ得サルモノト云フヘシ

羊毛、羊肉ノ需要販路ニ乏シカリシコト

我カ邦民ハ絹及木綿ノ織物ヲ最モ多ク需要シ、絹及木綿ニ關スル智識ヲ有スルモ、毛織物ノ需要國民トシテハ、我邦民ノ如ク、毛織地ニ關スル智識ニ乏シキモノ、恐ラクハ世界各國其例ナカルヘシ。今日婦人ノ殆ント日常缺クヘカラサル迄ニ、需要セラル、「モスリン」ノ如キモ其原料ノ何タルヲ知ラス、又何處ニ生産セラル、ヤヲ知ラサルヲ普通トナス況ヤ開拓使時代ニアリテハ、未タ毛織物ノ需要極メテ少ナキ時代ナルヲ以テ、羊毛ノ如キハ、社會一般ノ注意ヲ惹クニ至ラサリシハ蓋シ止ムヲ得サリシナランモ、本道ニ一ノ毛織物會社ナク　羊毛ニ關スル智識、趣味ヲ與フル途ナカリシモ、又牧羊不振ノ一原因ナルヘシ我邦羊毛ノ需要昔大ナルニ至リシハ、日清戰役後ノ事ニシテ、日露戰役後ハ、漸ク世界羊毛市場ニ於テ日本國モ亦羊毛需要國ナルヲ認識セラレシ有樣ナレハ、羊毛需要ノ盛況ハ、日露戰役以來ナリト云フヲ得ヘシ而シテ往時ハ國内毛織物ノ生産、未タ數量少ナキノミナラス、一般ニ舶來ヲ良品トシテ需要スルヲ以テ、國内工業ノ發達セサルヨリ羊毛ノ如キモ海外ニ仰キ、國内生産ニ留意セサリシナラン斯ル時世ニ於テ、牧羊ヲ振興セントスル、蓋シ至難ナル業ニシテ、當局ノ計畫トシテハ、先見ノ然ラシムル處、策ノ得タルモノナルヘシト雖モ、時未タ至ラス、牧羊者ノ利益明カナラサルニ、之ヲ振興セントスルハ、恰モ重キヲ高處ニ運フニ似タルモノナルヘシ茲ヲ以テ牧羊ノ成績ヲ擧クルコト難ク、因循姑息ニ流レ、更ニ活氣ヲ呈スルコト能ハサリシナラン、然レトモ今日ニ至ル迄、萎微振ハサリシニセヨ、持續シ得タルハ、全ク千住製絨所ノ、羊毛買上奬勵アリシニ因ルモノト言ハサルヘカラス

又羊肉ニ至リテハ、開拓使當時ハ、海ニ魚介豊富ナルノミナラス、山野ニ鹿及野鳥多ク、何ノ必要アリテカ羊ヲ蕃殖シ、又羊肉生産ノ勞ヲナスヘキ、殆ント當時一般需要外ノ事ニ屬シ、又經濟的生産以外ノ感アリシナルヘシ、唯將來ノ需要ヲ慮リ、之レカ指導奬勵ヲナセシモノナルトキハ、多大ノ補助ヲ拂フニ非ラサレハ、容易ニ振興シ得サリシモ亦當然ナリト

謂フヘシ殊ニ邦人ノ肉類ニ嗜好及習慣ヲ有セス、今日尙羊肉ニ一種ノ臭氣アリト稱シ、未タ食ハサルモノニアリテモ、尙此種ノ流言ト杞憂トヲ懷クモノ少ナシトセス假令臭氣アルモ美肉ナランニハ、如何ニカシテ調理シ、以テ我邦現時ノ肉ノ高價ナルヲ緩和スヘキヤヲ研究スルハ、當然ナリト雖モ、之ヲ一概ニ排斥シテ、以テ得々タルカ如キニ至リテハ、牧羊ノ振興現時ニアリテモ亦困難トナサ、ルヘカラス、況ヤ往時ニ於テヲヤ殊ニ一二牧場ノ生產ニシテ、年一百頭ニ足ラサル羊肉ヲ販賣セントスルモ、一商人トシテモ尙商品トナスニ足ラサルヲ以テ、牧羊ヲシテ有望ナラシムルコト能ハサル、蓋シ止ムヲ得サリシナルヘシ

經濟的飼養法ヲ取ルニ至ラサリシコト

既ニ時世ニ伴ハサリシ牧羊ハ、一牧場內ニ於テ、尙飼食、管理其要領ヲ得ス、疾病ノ驅除豫防容易ナラスシテ、一進一退ヲナシ、牧羊普及方法ヲ攻究ノ遑ナカリシモノ、如シ即チ農家ノ副業トシテ、如何ニ之ヲ飼養セシムヘキカ、牧場副產トシテハ、如何ニシテ之ヲ行フヘキカ、未タ其標準ヲ得サリシヨリ之ヲ見ルモ、當時ノ牧羊ハ、如何ナル有樣ナリシカ之ヲ知ルニ難カラサルナリ勿論現時ニ於テモ、本道農業ノ土地利用ノ粗放ナル、殊ニ牧場ノ土地利用法ノ粗放極マルモノ、更ニ甚タシキモノアルヲ思ヘハ、牧羊ノ如キ小收入ヲ豫期シテ、之ヲ實行スルカ如キ至難ナリシハ明カナリト雖モ、斯ル研究ナクシテ、漫然牧羊蕃殖ヲナスモ、終ニ其ノ目的ヲ達スルコト能ハサルヤ論ナキ所ニシテ、是レ又牧羊不振ノ一因トナサ、ルヘカラス

以上牧羊不振ノ諸因ヲ擧クルモ、敢テ盡シタルニアラスト雖モ、要之、我邦ニ於テハ、衣食ニ關スル習慣歐米諸國ト異ナレル嶋國ナルニモ拘ハラス、直ニ歐米ノ慣習ヲ移サントシテ、其需要品ノ生產ヲ奬勵セラレシハ、敢テ不當ナリト云フニ非スト雖モ、靜ニ考フルトキハ、時世早クシテ、機運到來セサリシヲ遺憾トセサルヘカラス 凡テ物成ルノ日ニ成ラスシテ、依リテ來ル處アルヲ常トスルヲ以テ、過去ニ於ケル施設經營ハ、假令直接ノ効果ヲ生セサリシト雖モ、今ヤ漸ク時機到來シ、多大ノ參考トナルヲ以テ、徒ニ過去ノ失敗ノミヲ繰返シテ、將來ノ好運ヲ開拓セサルハ、策ノ得タルモノニアラサルヘシ是ヲ以テ過去ヲ知リテ、再ヒ同轍ヲ踏ヽサランコトヲ期シ、更ニ進ンテ時世ニ後レサル樣、益々研鑽努力ヲナスヘキハ、刻下ノ急務ト言ハサルヘカラス

四　本道ニ於ケル牧羊方法

本道ニ於ケル過去ノ牧羊ハ凡テ失敗ニ終リ、現時ハ月寒種畜牧場ヲ始メ、民間少數ノ牧羊家着々成功ノ緒ニ就キツヽアリト雖モ、是レ果シテ有望ナルモノナルヤ、將來ノ牧羊奬勵上研究ヲ要スヘキ点ナリ、現時列强國トシテ認メラル、國ハ勿論、國體ヲ維持スル國トシテ、我邦ノ如ク牧羊ヲナサヽル國ハ、近年我邦ニ合併セル朝鮮ノ外、他ニ之ヲ見サルナリ、而シテ日淸及日露戰役後、我邦民ノ毛織物ノ需要頓ニ多キヲ加ヘ、今ヤ必要欲クヘカラサル狀態ニ至リシハ既ニ述ヘタルカ、斯ル事情ヲ有スル我邦ニ於テ、今後牧羊ヲ興シ、國內需要羊毛ノ全部ヲ供給シ得スト雖モ、其大半ヲ供給シ得ヘキハ、實ニ我カ北海道ナルヲ自覺セサルヘカラサルナリ是レ未開地ノ存スル故ニ非ラスシテ、農業ノ組織、土地ノ利用上、牧羊ノ有利ナルヲ以テナリ往時濠洲ノ開發ト共ニ、牧羊ノ盛況ヲ極メ、爲メニ歐洲ノ牧羊衰頹シ、又米國ニ於テモ、ロツキー山地方ノ廣原ハ、莫大ナル牧羊及牧羊群ヲ收容スルニ適セシヲ以テ、東部諸州ノ農家ハ、牧羊ヲ中止スルノ悲境ニ陷リシモ斯ル粗放ノ牧羊ハ永ク持續シ得スシテ、大群ハ小群トナリ、專業的牧羊ハ今ヤ副業的牧羊トシテ經營セラルヽニ至如ク著リシハ、世界ノ大勢ナリ是レ羊毛ノ價格ハ騰貴スルモ低落スルコトナク、肉類需要ノ趨勢ハ愈々增進スルヲ以テ、羊ノ殖力ニ富ミ、併モ副業的ニ生產セラルヽモノニ非ラサレハ、肉ノ需要及價格ノ緩和ヲナシ得サルニヨルナリ 然ラハ我邦ニ於テモ、羊毛ヲ海外ニ仰キテ晏如タルカ如キハ、世界經濟ノ大勢ニ後ル、所以ニシテ、憂フヘキ事ナリト言ハサルヘカラス殊ニ本道ノ氣候ハ牧羊ニ好適シ、往年大川農學士ハ、我邦生產羊毛ヲ精細ニ調査シ、本道產羊毛ハ下總ニ於ケル羊毛ヨリモ、品質善良ニシテ收量多キヲ結論セリ蓋シ羊毛ハ寒地ニアリテハ、長サ、短キモ密度强ク、密度强大ナルトキハ其質細美ナルモノナリ本道ハ啻ニ品質善良ナル羊毛ヲ產スルノミナラス、其地勢山地丘陵ニ富ムヲ以テ、大家畜ノミナラス、小家畜ヲ飼養スヘキモノトス

本道ノ地勢ハ牧羊ヲ必要トス

本道ノ土地面積ハ、七百七十万町歩ニシテ殖民地トナスヘキモノ百四十五万町歩、放牧地トナスヘキモノ百十万町歩ナリ其土地利用面積ノ少キハ實ニ遺憾ナリト言ハサルヘカラス、是レ畢竟河川ノ兩岸ニ非ラサレハ平地ニ乏シク、山岳起伏シテ傾斜地多キカ故ナリ、現時殖民地トシテ開拓セラレタル所ヲ見ルニ、土地二百米突以上ノ高所ニ位シ、或ハ三十度以上ノ傾斜地、又少ナカラサルニ徴スルトキハ、此等ハ永ク耕作ヲナシ得サルヤ明カナリ、況ヤ牧場適地ト稱スル土地ニ於テヲヤ、本道牧場選定地ハ、大概牧場ノ要素ヲ具備スルモノニ非ラス、一般ニ山岳丘陵地ニシテ、土地改良ノ見込ナク、又耕地ノ割合過少ニシテ、將來牧場トシテ存在スヘカラサルハ勿論ナリト雖モ、又我邦畜産物ノ需要程度ニ鑑ミルモ、本道ノ畜産ハ專業的經營者ノ供給ニ待ツヨリモ、普通農家ノ生産ニ待ツヲ至當トナスヘク、從來選定牧場地中、農耕ニ適スヘキ土地ハ自作又ハ小作地、即チ農耕地トナリ、傾斜甚タシカラサル土地ハ放牧地トナリ、殘地ハ私有林ニ變化スヘキハ、實ニ時世ノ然ラシムル所ナルコト牧場ノ小作農地ニ變更スルモノ、益々增加スルノ趨勢ニ徴シテ明カナリ、玆ニ於テ農耕地ニ不適當ナル二十度以上ノ傾斜地利用法トシテハ、或ハ牛馬ヲ以テスル不可ナルニ非ラスト雖モ、尙体格輕少ナル緬羊ヲ混畜スルヲ以ヲ最適トナスヘシ、現時ハ人口少ナク、又萬事粗放ニ經營セラルヽモ、元來本道ノ土地ハ甚タシキ瘠薄不毛ノ地ナラスシテ、年々綠草ヲ以テ覆ハルヽニモ拘ラス、空シク枯稠シテ一ノ生産ナキハ、畢竟緬羊ノ如キ小家畜ノ存セサルニ基因スヘク、觀光ノタメ來道セル歐米及濠洲人ニハ、本道ノ山岳原野ヲ見テ幾万ノ牧羊ノ存スルヤヲ質問スルモノ、甚タ多シ、綿羊ハ其體輕小ナルニヨリ、大家畜ノ跋渉シ得サル傾斜面生草ト雖モ、周到ニ之ヲ利用スルコトヲ得ヘク、又大家畜ノ如ク、表土ノ流亡ヲ來シ、不毛ノ土トナスノ憂ナク、又放牧地ノ荒廢ヲ來スコトナク、却テ歐米諸國共ニ、荒廢セル放牧地ノ回復ヲ計ルノ用ヲナスモノニシテ、「羊ノ爪ハ黃金ナリ」トノ俚諺ノ存スルハ、全ク糞尿ノ分布、均一良好ニシテ、牛馬ノ如ク一箇處ニ體カサルト、又體輕ク、蹄尖ニヨリ表土ヲ傷ケ、草根ヲ害スルコトナキニ基因スルモノナリ又牛馬ニ比シ樹木ヲ害スルコト少ナク、山林間ニ放牧シテ、却テ下草ノ刈取ヲ助ケ、又肥料ヲ分布シテ、樹木ノ成育ヲ助クル等、本道ノ地勢上ヨリ考フルトキハ好箇ノ家畜ニシテ、土地ヲ周到ニ利用シ其ノ生産力ヲ增進セント欲セハ、必要欠クヘカラサルモノナリト云フヘシ、將來羊ノ飼養數ハ牛馬ニ比シ著シク多カルヘク、其生産物ハ農産物中、實ニ巨額ヲ占ムヘキハ、世界各國之ヲ證シテ餘リアル所ナリ啻ニ羊毛、羊肉及羊皮ノ産額ノ巨大ナルノミナラス、其地力ヲ維持改良スルノ効果ハ、直接ニ現ハレスト雖モ、實ニ多大ナルヲ豫察スルニ餘リアリ

本道農業上牧羊ハ有利ナリ

歐米諸國ニ於テ農家ノ副業タル牧羊ハ、濠洲、亞爾然丁及　其他ノ人口少ナク、土地廣大ナル牧羊國ノ粗放經營ニ因ル、莫大ナル供給ニ壓倒セラルヽニ至リ、不振ノ狀態ニ陷レリト雖モ、日常必要缺クヘカラサル被服原料ノ重要ナル部分ハ、羊毛ニ依ルヲ以テ、多少ト雖モ羊ヲ飼養セサル處ナク、農家ト緬羊ハ連想的ニ存在スル迄ニ、密接ナル關係ヲ有スルモノナリ然ルニ我邦ニアリテハ、全國ノ牧羊僅ニ三千頭、本道ハ月寒牧場ノ緬羊ヲ合算スルモ、今尙六百頭ニ足ラサル有樣ナリ此等ハ自國被服ノ獨立ヲ得サルノミナラス、農業ノ不利多大ナルモノナリトス

本道現時ノ農業ハ未タ開墾日淺キヲ以テ、土地ノ利用法粗ナルハ、蓋シ止ムヲ得サルヘシト雖モ、然レトモ斯ル粗放農業ノ行ハルヽハ、又家畜ノ飼料ニ乏シキニ基因スヘク、或ハ農家ノ資力乏シキニ依ルト言フモ、又至言ナルヘヽ

試ミニ本道ニ於ケル春蒔麥類、蕎麥、亞麻ニ就テ之ヲ見ルニ、播種ヨリ收穫ニ至ル期間ハ七八十日、長キモ九十日ニ至ラス、而シテ半ヶ年以上ハ積雪ノ爲ニ土地ノ利用ヲ妨ケラル、夫レ此ノ如ク本道ノ農家ハ僅ニ三ヶ月間土地ヲ利用シ、併モ寒冷ナル本道ノ氣候ト戰ヒ以テ農業ヲ經營セントス、其ノ至難ナルハ、當然ナリト云フヘシ八月中旬又ハ下旬ニ於テ夏作跡地ヲ、更ニ十一月上旬迄、約七八十日間利用スルモノトナスヿハ、其地積モ十二萬町歩ヲ下ラザルベシ、假令大小麥及裸麥ニ大豆ノ間作ヲナスモノアリト雖モ、其地積ハ未タ全耕地ノ二割ニ達セサルヘシ、夏作跡地ノ利用法ハ家畜ニヨルヲ以テ最モ便ナリトス、之ヲ彼ノ英國ノ農業ニ見ルトキハ、就中牧羊ノ有利ナルヲ首肯スヘシ、彼ノ國ニアリテハ夏作跡地ニハ必ス「キャツチ、クロップス」又ハ「クレーニング、クロップス」ト稱シ、本道ノ所謂「センダイカブ」、即チ「スウヰデッシユ、ターニップ」、又ハ「エセックス、レープ」ヲ耕作スルヲ常トス斯クシテ羊群ヲ放牧シテ、畑地ノ雜草ハ勿論、根菜ヲ摘食セシメテ、夏作跡地ヲ生産的ニ利用スルノミナラス、翌年ノ除草難ヲ減シ、且ツ羊ノ糞尿ニヨリ、土地ヲ肥沃ナラシム。之レ畢竟緬羊ヲ飼養スルノ結果ニ外ナラス、又根菜ヲ收納シテ、

冬期ノ飼料ニ充ツルハ當然ナルコトナリ、今ヲ去ル七八十年前ニ於ケル英國農業ノ衰頽ヲ換回セシ原因ハ、全ク緬羊ニ在ルコトハ、今茲ニ之ヲ贅セズト雖モ、斯ク牧羊ノ旺盛ヲ呈セシハ、全ク牧羊ノ冬期斃死ヲ救活シ、又夏期良飼料ヲ得タルニ歸セザルベカラズ、即チ前者ハ瑞典蕪菁ノ輸入ニシテ、夏作跡地ノ利用ト共ニ、冬期根菜飼料ノ供給トナリ、後者ハ赤「クロバー」ノ歐洲輸入ニシテ、夏期滋養多キ豐産ノ好飼料ヲ得タルニ因ルモノナリ、殊ニ赤「クロバー」ハ又、農業上輪作ヲ良好ナラシメシモノニシテ、英國農業ノ衰頽ヲ挽回セシノミナラス、農家ノ留意スヘキ好飼料ナリトス、本道ノ氣候ハ英國ニ及ハサルヲ以テ、同一法ニ出ツヘカラスト雖モ、若シ「スウヰデツシユターニツプ」ニ代フルニ札幌紫蕪菁ヲ以テセハ、一反歩六百貫ノ收量ヲ得ルハ難事ニアラサルナリ、假令其半量ヲ收穫スルモノトシ、一貫目一錢トシテ綿羊ノ飼料ニ供センカ、一反歩三圓ノ收入ヲ擧クヘク、六百貫トセハ、六圓ノ副收入ヲ得ヘキナリ、然レトモ運搬不便ニシテ、冬期凍結ノ憂アル本道ニアリテハ牛又ハ緬羊ノ飼料トシテ之ヲ利用スルニアラスンハ、夏作跡地ノ利用ヲ完フシ難シ、此外夏作跡地ノ利用上注意スヘキハ、青刈大豆ナリトス、農事試驗場ノ成績ニ徵スルモ、一反歩百貫乃至百五十貫ノ收穫ハ至難ナラサルナリ、更ニ北米合衆國ニ行ハル、夏作跡地ノ利用方法ヲ擧クレハ、粗放農ヲ事トスル彼國ニアリテモ、羊群ヲ所有スルモノハ、夏作跡地ノ雜草ノ生育狀況ニヨリ、等差ヲ附シテ放牧權ヲ買取リ之ヲ利用シ、一方土地所有者ハ、之ニヨリテ雜草難ヲ減セントス、是レ何レモ牧羊ニ依リ得ヘキ利益ニシテ、粗放農ヲ以テ注目セラル、北米ニ比シテ、本道農ノ粗放ナル、更ニ一段ナルヲ思ハ、、大ニ奮發努力ヲ要スルハ多言ヲ要セサルヘシ、茲ニ農業經營法ヲ言フノ遑ナシト雖モ、尙玉蜀黍ノ人造米トシテ、近來耕作ニ留意セラル、ハ喜フヘキモ、單ニ從來ノ耕作法ニヨラスシテ、玉蜀黍ノ株間ニ更ニ大豆ヲ間作センニハ、少ナクモ四、五斗ノ增收ヲ擧クヘク、而シテ綿羊ノ好飼料トシテ、又相當ノ滋養價値アル、大豆稈三四十貫ヲ得ルトキハ、緬羊一頭百日間ノ飼料トナルヘシ、然ラハ莖稈ハ羊毛、羊肉トシテ收得セラレ、又肥料ハ土地ニ返還セラルヘシ、何ヲ以テ本道牧羊不可能ヲ云々シテ、徒ニ過去ノ失敗ヲ繰返スヘケンヤ

今茲ニ北海道農事試驗場、模範農家五町歩經營ノ成績ヲ假用シテ、五町歩農業上、大家畜三頭ヲ飼養シテ、尙殘餘ノ莖稈ヲ以テ、幾頭ノ牧羊ヲ飼養シ得ヘキカヲ算出スルト共ニ、牧羊經濟ヲ擧クテ、將來牧羊奬勵ノ資料トナスヘシ

五町歩經營模範農場收穫表

	作付反別	總收量 子實	總收量 稿稈	總收額 子實	總收額 稿稈
秋蒔蕎臺	三、八五反	六、〇四六石	三五一、七五〇貫	五八、九九五円	円
大麥	四、一〇	五、九七〇	四〇七、五〇〇	三七、四四七	
小麥	三、一〇	四、〇九四	三一〇、〇〇〇	三七、一八二	
燕麥	八、七〇	一三、六四八	一、〇八七、五〇〇	八二、〇八九	
玉蜀黍	五、二五	二、六九六	一、四七〇、〇〇〇	五九、六七一	
大豆	二、六〇	三、五五七	三三〇、〇〇〇	二九、七七四	
小豆	四、二五	五、七二九	一四八、七五〇	五五、八五四	
菜豆	五、一五	八、七三〇	一二八、四五〇	七三、八〇六	
馬鈴薯	四、七五	一三六、八瓩	—	一〇四、一二四	
牧草	四、〇〇	—	二、九九噸	—	四一、三五五
桑園	、七〇	—	—	—	—
間作（醬麥）	三、六〇	四、五九〇石	二〇一、六〇〇貫	二〇、五八四	
間作（大豆）	一、五〇	〇、六七〇	四五、〇〇〇	四、三二一	
間作（菜豆）	一、二五	〇、四〇九	二二、五〇〇	三、五三八	
計	四六、四五	（牧草外）四八三、〇五〇		（同上）五六七、二八五	（牧草）四一、三五五
主作					
一間作	六、三五				

今右表ノ作物ノ配合ノ如キハ其土地ニヨリ農家ニヨリ異ナルモノナレハ暫ク之ニ準據スヘキモ夏作跡地ニハ青刈大豆及蕪菁ヲ耕作スルヲ必要ナリトス

五町歩ノ經營上耕作及運搬ニ耕馬一頭ヲ要ス輪作法ニ留意シ隔年ニ厩肥ヲ施スモノトスルトキハ年々二町三反歩ニ施ス厩肥ヲ必要トスルヲ以テ大家畜三頭ヲ要ス今茲ニ耕馬一頭及牝牛二頭ヲ飼養スルト假定シ殘餘ノ藁稈ニテ飼養シ得ル綿羊ノ頭數ヲ推定セントス

牧草藁稈利用表

種類	作付反別	總收量	耕馬一頭用量	備考	牝牛二頭用量	備考	殘高
牧草		七七、六〇〇貫	二六八、〇〇〇貫	一日十斤トシテ二百四十日分	四八〇、〇〇〇貫	一日十斤トシテ二百日分	八五四、〇〇〇貫
玉蜀黍稈		一、四七〇、〇〇〇	一九二、〇〇〇	一日十斤トシテ百六十日分	四三四、〇〇〇	一日十斤トシテ百八十日分	
青刈クローバー		二五、〇〇〇斤			二一、〇〇〇斤	一日七十斤百五十日分（夏期分）	四、〇〇〇斤
燕麥稈		一、〇八七、五〇〇貫	一四四、〇〇〇貫	一日五斤トシテ二百四十日分	二四〇、〇〇〇	一日五斤トシテ二百日分	七〇七、〇〇〇貫
蕎麥稈		二〇一、六〇〇	—	—	—	—	二〇一、六〇〇
大豆小豆菜豆莖稈		四八七、〇〇〇	九〇、〇〇〇	一日六百匁百五十日分	—	—	三九七、〇〇〇
蕪菁		二、七〇〇、〇〇〇	—		一、二〇〇、〇〇〇	一日三貫トシテ二百日分	一五〇、〇〇〇
大小麥稈		六二七、五〇〇	三六五、〇〇〇	（數草トシテ）一日一貫平均	三六五、〇〇〇	（數草トシテ）一日五百匁平均	（跡作大豆）八七、〇〇〇
蕎麥稈		三五一、七五〇	—		—		三五一、七五〇
玉蜀黍		—	一、〇〇〇		—		—
燕麥			四、〇〇〇		九、〇〇〇	一日三升平均百五十日分	—
麥					三、〇〇〇	一日一升平均	
數							

以上ハ模範農場ノ試作中、馬鈴薯及桑園ノ作付反別中ヨリ二反歩ヲ減シ、青刈「クローバー」二反歩ヲ增加シ、一反歩一万二千五百斤ノ收穫ヲ豫想シ又燕麥跡地ニ青刈大豆ヲナシ反當百貫收量ヲ豫想シ蕎麥小麥跡地ニハ蕪菁ヲ播種シ反當四百貫ヲ豫期シタルモノナリ

右ニヨレハ青刈「クローバー」四千斤ハ成羊一日一頭八斤ヲ與フルトシテ五百日ノ飼料トナリ、玉蜀黍稈八百五十四貫ハ一日五百匁ヲ與フルトシ千七百日ヲ支ヘ得ヘク燕麥稈ハ其細軟ノ部分ヲ利用スルトシ、其半量ニ止マルトスルモ三百五十貫アリテ一日四百匁ヲ用フルトシ八百日ヲ支ヘ得ヘク大小豆菜豆ニアリテハ一日四百匁ヲ與フルトシ九百日ヲ支フルヲ得ヘシ燕麥跡地ノ青刈大豆ハ八百匁ヲ與フルトシ千八十八日ヲ支フルノ計算ニシテ此ノ外蕪菁ハ一日三百匁與フルトシテ五千日ヲ支フヘシ是レヲ以テ之ヲ通計スルニ莖稈類ハ五千七十八日ヲ支フニ足リ蕪菁ハ五千日ヲ支フルヲ以テ約十四頭ノ綿羊ヲ飼養スルニ難カラサルナリ而シテ蕎麥稈及蕎麥並ニ飼料殘餘ノ燕麥稈三百五十貫等ハ褥草トナスニ足ルヘシ尙農業一層集ヲ約ニ經營シ夏期飼料ハ蔬菜雜草等ヲ利用スル時ハ飼養數ヲ二十二頭ニ達セシムルモ難キニアラサルナリ

以上ノ如ク五町歩ノ農業ヲ集約ニ實行シ一頭ノ耕馬ト二頭ノ牝牛ト更ニ十四頭ノ綿羊ヲ收容シ得ルトセハ本道收容ノ牧羊數實ニ大ナリト言ハサルヘカラス

而シテ今以上ノ莖稈燕菁褥草用莖稈ハ何レモ一貫一錢ト評價シ之ニ十四頭ノ綿羊九十日間一日二合ノ燕麥ヲ與フルトキハ二石五斗二升ヲ要シ一石三圓トシテ七圓五十六錢ヲ要ス此外食鹽一ヶ年二斗五升ニテ金二圓ヲ要スルトセハ四十三圓四十九錢三厘トナリ一頭一ヶ年ノ飼養費三圓十錢五厘ニ過キサルヲ知ルヘシ茲ニ於テ更ニ當歳羊ノ飼料及飼料費ヲ母羊ノ半量半價トナシ、二歳羊ノ飼料ヲ母羊ト同量同價ト見積ルモ、茲ニ八頭ノ母羊及三頭ノ二歳羊及六頭ノ當歳羊ヲ飼養シ得ル有樣ナリ今茲ニ八頭ノ母羊ト八分ノ蕃殖トスルモ六頭ノ綿羊ヲ生產スルモノトシテ一頭晩秋又ハ初冬生體重量八貫乃至十二貫トナリ骨付肉三貫五百匁乃至五貫匁ヲ得ヘキヲ以テ骨付百匁十五錢トシテ五圓二十五錢乃至七圓五十錢平均六圓三十七錢トスルモ金三十八圓二十二錢ヲ收入シ得ヘク此外二歳以上ノ牝羊ハ一頭平均八斤ノ剪毛ヲ得現時一英斤ノ價三十五錢七厘ナルモ七厘ハ運賃諸費トシテ一英斤三十五錢トスレハ八十八斤ノ羊毛價額ハ三十圓八十錢トナリ合計六十九圓二錢ノ收入トナルヘシ更ニ種付料ヲ計上シテ收支ヲ擧クレハ左ノ如シ

收入		支出	
一金六十九圓二錢		一金四十七圓四十九錢三厘	
内譯		内譯	
金三十八圓二十二錢	羊肉代	金四十三圓四十九錢三厘	飼料費
金三十圓八十錢	羊毛代	金四圓	牡羊八頭 種付料
差引金 二十一圓五十二錢七厘	利益		

以上ノ場合ニ於テハ飼料ハ自家生産ナルヲ以テ之カ爲メニ殆ント經費ヲ要スルコトナク僅ニ一ケ年食據二斗五升ヲ要スルニ過キサレハ今一頭十圓ニ購入シタル牝羊八頭ヲ所有スルモノトスレハ固定資本金八十圓ニ對シ約二割七分餘ノ收益ニ當リ且ツ一方自家生産ノ莨稈ハ一貫目一錢ノ價格ヲ收メ更ニ一頭二百貫内外ノ厩肥ヲ産スヘキヲ以テ一貫五厘トシテ十圓ノ厩肥ヲ利得トスルニ至ルヘシ然ラハ本道農業上牧羊ハ有利ニシテ必要缺クヘカラサルヲ知ルヘキナリ

牧場ト牧羊

本道牧場ノ一般ハ地味地勢ノ關係及資本ノ狀態ヨリ考フルモ又社會需用ノ現況ニ徵スルモ成功至難ノ狀態ニ在リ而シテ大部分ハ農場私有林ニ變更ノ時機ニ至リシモ土地ノ狀態良好ニ又資本潤澤ナルモノニ在リテハ牧場トシテ專業的經營ヲナシ得ルモノアリ然レトモ單ニ大家畜ヲ以テ牧場全面積ヲ周到ニ利用シ得ルモノニ非ラサルニヨリ小家畜ヲ收容シテ土地ノ利用ヲ講シ更ニ放牧地ノ涵養ヲ計ルトキハ從來ノ經營法ニ一段ノ收益ヲ加フヘキヲ以テ牧場副産トシテ牧羊ノ有利ナル敢テ多言ヲ要セサルヘシ是レ歐米ノ大家畜牧場ニシテ牧羊ヲ兼ヌサルモノ殆ト無キニ徵シ本道牧場ハ飽迄粗放經營ヲナシ不利大ナルモノタルヲ知ラサルヘカラス過去ハ元ヨリ詮ナシト雖モ現時ハ地價漸ク上リ土地利用上大ニ注目ヲ要スルノ時勢到來シタルヲ以テ、集約的土地利用法ニ出ツルヲ要スヘク、即チ牧場經營ノ變遷期ニ到達シタルヲ覺醒セサルヘカラサルナリ

殊ニ馬匹ノ生産ヲ主トスル牧場ニアリテハ副收入ナキヲ以テ若シ不斑馬又ハ死産流産等ニヨリ生産馬少ナキ片ハ收入ヲ欲クニ至ルヘク又畜牛牧場ニアリテモ若シ生産牛ナキトキハ乳汁ノ副收入ヲ缺キ例令乳汁ノ副收入アルモ乳製品ノ盛況ヲ見ル能ハサル現今ノ如キ場合ニアリテハ牧場經營難ヲ唱フルモ止ヲ得サル次第ナリ然リト雖モ產牛馬牧場ニ牧羊ヲ加味スル片ハ生産仔羊ノ有無ニ拘ラス羊毛ノ副收入ヲ得ヘク羊毛需用ノ盛況ハ後節之ヲ述ブルガ如キヲ以テ緬羊ヲ混畜生産スルノ有利ナル敢テ多言ヲ要セサルヘシ羊毛收入ハ生産兒ノ收入ヲ豫想スルヨリモ猶一層確實ニシテ牧場ノ經濟ヲ補足スルノ効僅少ナラサルヲ思ハヽ牧場經營ヲナス者一日モ早ク此擧ニ出ツサルヘカラス

專業的牧羊場ハ有利ナルヤ

本道ノ牧羊ハ農家ノ副業トシテ又牧場ノ楔飼トシテ極メテ有利ナリト雖モ專業的牧場トシテハ土地ニ特別ノ事情アルニアラサレハ有利ナリト云フヘカラサルナリ蓋シ緬羊ハ改良ノ餘地牛馬ニ比シテ少ナク如何ニ集約法ニヨルモ其收益ヲ增進スルコト不可能ナルモノナリ是レ一方吾人日常ノ被服原料ヲ獲得スルニ極メテ容易ノ家畜ナルヲ證スルモノニシテ同一ノ土地ニ於テ畜牛ト牧羊ト何レカ有利ナリト言ハヽ畜牛ノ有利ナルハ明カナリトス玆ヲ以テ畜牛牧場ヲ更ヘテ牧羊場トナスハ識者ノナスヘキ所ニアラス牧羊ハ濠洲亞爾然丁ノ如キ未開地多ク人口少ナク地價低廉ナル地方ニ於テ始メテ見ルヘキモノニシテ往時本道ノ牧場ハ木柵ヲ繞ラシテ放牧組織ヲ取リ極メテ粗放ナル方法ニヨリタルハ全ク時勢ノ然ラシムル處土地ニ價値ナク公私ノ區分サヘ有名無實ノ時代ニハ斯ル方法行ハレタリシモ今ヤ木柵ノ改築サヘ至難ヲ訝フル有樣ニシテ斯ル經營法ノ存在シ得サル時勢到達シ集約的ナラサレハ生産力ノ增進ト牧場ノ增收ヲ見ルコト能ハサルハ當業者ノ漸ク覺醒シテ經營法ノ變遷期ニ逼リツヽアルヲ異口同音ニ唱フルニヨルモ明カナリトス牧羊專業牧場ノ存在ハ種畜供給ヲ事トスルカ或ハ土地ニ特殊ノ事情アリテ地價低廉ニシテ容易ニ騰貴ノ望ナク又交通不便ナルト附近ノ狀態ハ同業者又ハ農業者ヲ得ルノ至難ニシテ單獨經營ノ外ナキ場合ニ於テ有利ナリト言ハサルヘカラス

五、牧羊ノ將來

將來ニ於ケル緬羊ノ種類

自然要素ヨリ研究

本道ノ地タルヤ平坦ノ土地ハ河川ノ沿岸ニ限ラレ高丘傾斜ノ土地最モ多シ玆ヲ以テ土地ノ利用上並ニ地力維持改良上大家畜ト小家畜ヲ飼養スル必要アリ之ヲ諸外國ノ實例ニ徵スレハ小家畜ハ大家畜ニ比シ遙ニ多數ナリ牧羊ノ振興ハ本道ノ土地及地勢最モ好適セルモノトス

氣候ヨリ之ヲ見レバ一般ニ寒冷ナルヲ以テ稍短毛ニ傾ク嫌ナキニ非サルモ細毛密生ノ利益アリ過去實驗ノ成績ニ徵スルトキハ羊毛ハ品質細美ニシテ收量亦多シ故ニ本道ハ牧羊好適ノ地ナリト言ハサルヘカラス然ルニ本道東海岸地方ハ往々濃霧ノ來襲アルニヨリ牧羊不適論ヲ唱導スルモノアルモ決シテ根據アル議論ニアラサルヲ以テ敢テ顧慮スルニ足ラス若シ一度北海ニ瀕スル歐大陸及英克蘭土ノ實情ヲ知ラハ此種ノ謬說ナルハ多言ヲ要セサルヘク又本道ニ其實證ヲ見ルニ至ルコト遠キニアラサルヘシ却テ同地方ハ冬期積雪ナキヲ以テ牧羊好適地ナルヲ思ハサルヘカラス又往々濕潤ノ地ハ不適當ナリト稱スルモ飲料水及ヒ排水ノ施設ニ注意ヲ怠ラサル片ハ本道到ル處牧羊ノ普及ヲ見ルヲ得ヘク羊蹄ハ黃金ナリトノ古諺空シカラスシテ當業者ヲ利福スルヤ疑ナキナリ

自然要素ヨリ種類ヲ決定スルニ先ツ高丘地及平低地ニ適スル種類ヲ攻究セサルヘカラス高丘地方ニハ体肥大ナラサルモノト放牧ニ適スル種類ヲ要スルヲ以テ「メリノー」種及其雜種ノ如キ又支那羊ノ如キヲ適種トスヘシ又平低地ハ体肥大ナルモノニ適シ又早熟生ノモノニ適スヘキヲ以テ「サウスダウン」「シユロップシヤー」種及「コツウオールト」種及是等ノ種類ノ雜種ノ如キヲ飼養セサルヘカラス

以上種類ノ適否ハ開拓使以來試驗ノ成績及飼養當事者ノ意見亦之ヲ證明ス

飼養方法ヨリ研究

本道牧羊奬勵ノ方針ハ農家ヲシテ飼育セシムルヲ得策トスヘキハ諸外國ノ實例ニ徵シテ明ナリ即チ專業的牧羊場ハ他日本道ノ緬羊數著シク增加シ種羊ノ需用旺盛ナルニ至ツテ甫メテ之ヲ見ルヘケレハ敢テ特別ノ奬勵ヲ要セサルヘシ

今飼育方法ヨリ種類ヲ研究スルニ放牧地ニ富ム地方ハ「メリノー」種支那羊及是等ノ雜種ヲ選ヒ放牧地少ナク舍飼法ニヨル地方ハ「サウスダウン」「シユロップシヤー」種又ハ「コツウオールト」種及是等ノ雜種等ヲ選フヲ可トス

農業經營上ヨリ研究

農業經營上現下ノ本道農業ハ缺陷甚タ多シト雖モ要スルニ肥料供給上ノ缺陷及ヒ土地利用ノ粗放ナルニアリ即チ春蒔麥類蕓薹ニアリテハ土地ノ利用僅ニ三ヶ月ニ止マレリ此外秋蒔小麥蕓薹ニ於テハ八月收穫後連作ヲナス場合ノ外ハ其跡地ヲ利用スルモノ稀ナリ是等夏作跡地ハ宜シク青刈大豆蕪菁類ヲ播種シテ土地ノ利用ヲ講シ雜草ヲ驅除シ肥料ヲ供給シ以テ農家ノ收入ヲ向上セシメサルヘカラス近年此種ノ注意ヲナスモノ稍增加シ或ハ之ヲ綠肥トシテ利用スヘシト論スルモノアレ共若シ之ヲ家畜飼料ニ利用セハ更ニ有利ナルコト多言ヲ要セサルヲ以テ牧羊ニヨリ以上ノ土地ヲ利用シテ一方肥料ノ供給ヲ計ルハ極メテ必要ナルコトナリ此外緬羊ハ大家畜ヲ以テ利用シ得サル飼料ヲモ能ク食スルコトヲ考フル片ハ牧羊ハ實ニ農家ニ必要ナルモノト云フヘシ宜ナリ近年歐米諸國ノ農家ノ牧羊ヲナスモノ漸ク盛ナラントス之レ羊毛羊肉ノ需用益々急ニシテ從來ノ如ク暴落ヲ來スノ憂ナキヲ以テナリ今種類ノ選定ヲナスニ農耕ニ富ム平低地ハ肥大ニシテ且早熟種ヲ選フヘク「サウスダウン」「シユロップシヤー」「コツウオールド」ヲ可トスヘシ高丘ニシテ土地廣ク放牧ノ便アル地方ハ放牧ノ適種「メリノー」種支那羊等ヲ可トスヘシ

地方及ヒ國家經濟上ヨリ研究

地方的經濟ヨリ考フレハ日清日露戰役後本道毛織物ノ需用極メテ巨額ニ上リツヽアルハ例令數字ヲ以テ計上スヘキ法ナキモ何人モ首肯スル處ナルヘシ其需用物ヨリ考フル片ハ長毛種中毛種多ク種類トシテハ「コツウオールド」「シユロップシヤー」「サウスダウン」種ヲ可トスヘシト雖モ製絨上ニハ細毛種「メリノー」種ヲ要スルコト勿論ナリ國家經濟上ヨリ之レヲ見レハ大正二年度ノ輸入羊毛及ヒ毛糸ノミニテモ二千六百万圓ニ上リ此内濠州羊毛最モ多ク英國羊毛之レニ次キ獨佛匈牙利羊毛等ノ順位ニアリ細毛種羊毛ノ輸入最モ多ク中毛種ノ羊毛之レニ次キ長毛種ノ羊毛最モ少キヲ見ル即チ「モスリン」ノ如キ羊毛ハ細毛種ヲ用ヒ之レヲ輸出品トナスヨリ見レハ「メリノー」種ノ如キハ數ニ於テモ多數ヲ要スヘク一般需要ノ羅紗類ニアリテハ中毛種ヲ要スヘシ若シ輸入羊毛ヲ區別スレハ中毛種最モ多數ニ上ルヘシ又國内ノ肉ノ自給上數量ニ於テ價格ニ於テ之レカ緩和ヲ計ラントセハ牧羊ヲ急トスヘキハ歐米其實例ニ乏シカラサル處ニシテ就中中毛種中毛肉兼用種ヲ選ハサ

ルヘカラス

軍事上ヨリ之レヲ見ルニ日露戰爭當時ハ約二ケ年ノ戰役ナリシカ英國ノ同情アリテ羊毛ノ輸入杜絶シタルニアラサレ𪜈然レトモ留守師團兵ハ小倉服ヲ着用セシカ如ク被服ノ自給上極メテ不安ノ位置ニアリ而シテ其需要スル毛質ヨリ考ヘ又肉ノ需要供給上中毛種ノ多キヲ至當トスヘキモ亦「メリノ」種「コツウオールド」種支那羊等ヲ要スヘシ

六　將來ニ於ケル羊ノ頭數

放牧地面積ヨリ推定スルモノ

現在ノ飼養程度ヨリ推定スルモノ

現在緬羊ハ主トシテ農家之ヲ舍飼ニシ尙外ニ一二ノ牧場ニ於テ牛馬ノ間ニ混畜スルモノアリト雖モ特ニ放牧地トシテ利用スル面積ヲ算出計上スヘキ資料ナキヲ遺憾トス今本道將來ノ放牧地面積ヲ百十万町歩トスレハ大家畜ノ放牧ニ八十四万町歩ヲ要シ緬羊ノ放牧ニ二十六万町歩ヲ餘スヲ以テ今大家畜一頭ニ對シ小家畜即チ緬羊ヲ十頭放牧スルモノトスルトキハ二百六十万頭ノ緬羊ヲ四ヶ月間放牧シ得ルヲ以テ今放牧地ノミニテ飼養スルモノトセハ三分ノ一即チ八十六万六千六百頭ヲ收容シ得ヘシト雖モ豚ノ放牧用地トシテ緬羊十七万三千五百頭分ノ放牧地ヲ要スルヲ以テ之ヲ差引キ六十九万三千頭ヲ收容シ得ヘシ（牛馬調査參照）

農耕地面積ヨリ推定スルモノ

現在飼養程度ヨリスルモノ

大正二年末農耕地面積ハ六十二万餘町歩ニシテ本道農家及ヒ牧場ノ飼養緬羊數ハ僅ニ二百九十五頭ニ過キス即チ二千百町歩ニ對シテ僅ニ一頭ニシテ以テ將來ノ緬羊數ヲ推定スルノ資料トナスヘカラス茲ヲ以テ將來ノ頭數ハ別ニ推定ノ基礎ヲ要スヘシ

農耕地五町歩經營上所要頭數

今農耕地五町歩經營上所要頭數ヨリ將來所要緬羊數ヲ計算スルトキハ二百三十五万四千頭ヲ收容スルコト容易ナリトス今計算ノ基礎ヲ明ニスレハ左ノ如シ

農耕地五町歩內ニ飼養シ得ル小家畜數ハ牛馬ノ計算ト同法ニヨリ本道五町歩耕種式ニ準シテ農業經營法ヲ定メ而シテ緬羊收容程度ヲ確ムルノ外ナキナリ此方法ニヨルトキハ第一區ヨリ第三區ニ至ル區域ハ耕地五町歩ニ付キ牛馬三頭ヲ收容シ尙外ニ放牧地百十萬町歩ノ餘地アルヲ以テ結局尙大家畜二十五万五千七十八頭ヲ收容シ得ルモノトス之レヲ小家畜即チ羊ニ換算スルトキハ二百五十五万頭トナレトモ豚一頭ハ緬羊ノ二頭ニ當ルヲ以テ五町歩農家每戸ニ一頭宛ノ割合ヲ以テ飼養スル豚頭數二十五万五千頭換算緬羊頭數五十一万頭ヲ差引クトキハ結局緬羊ノ飼養頭數ハ二百四万頭トナルヘシ更ニ耕種式第四區ニ於テハ十町歩ニツキ大家畜五頭飼養シ尙緬羊二十頭ヲ飼養シ得レトモ豚一頭相當數二ヲ除キ十八頭ヲ收容シ得ルモノトスルトキハ第四區ノ十七万四千六百町歩ニ付緬羊數三十一万四千頭ヲ收容シ得ヘシ即チ農耕地百四十五万町歩ニ對シ二百三十五万四千頭放牧地二十六万町歩ニ對シテ四ヶ月間ノ放牧頭數二百八十万頭ナルモ若シ一ケ年放牧地ノミニテ飼養セントスルトキハ其三分ノ一即チ六十九万三千頭ヲ收容シ得ルノ理ナルヲ以テ結局本道將來ノ緬羊飼養頭數ハ三百四万頭ニ達スヘシ

生產物ノ需給關係ヨリ推定スルモノ

本道ニ於ケル需給

本道民ノ毛織物ノ需要程度ハ之レヲ知ルヘキ統計ヲ缺クヲ以テ數字ヲ以テ示スコト不可能ナルモ近年其需要頗著ルシク增加セシコトハ一般ノ認ムル處ニシテ府縣ニ見ルヘカラサル現象ナリ之レ本道氣候ノ然ラシムルトコロニシテ將來ニ於テモ需要ノ增進スヘキヤ明ナリトス然ルニ是等毛織物ノ原料ハ之レヲ海外ニ仰キツヽアルモノニシテ本道衣食ノ自給ニ留意スルモノ必ズヤ大ニ研究ヲ要スルトコロナルヘシ單ニ毛織物ノミナラス又食肉ニアリテモ年々需要增進ニ伴ヒ供給スヘキモノナク魚貝ニアリテモ一般ニ價格騰貴ノ趨勢ヲ有シ牛馬豚肉ニアリテモ現下ハ本道生產ヲ以テ供給シ得サル狀態ニシテ市價ヲ緩和シ益々增加スヘキ需要ニ應セントスルトキハ蕃殖旺盛ナル家畜ニ俟タサルヘカラス即チ豚ノ如キハ極メテ良好ナルカ如シト雖モ本道ノ實情ニ鑑ミルトキハ豚ノ增殖ハ飼料ニ乏シク將來工場ノ副產物及ヒ酪農副產物ノ潤澤ナルニ至ラサレハ

寧ロ生産増殖ハ豚ニ及ハスト雖モ飼養上容易ナル緬羊ヲ勝レリトスヘシ特ニ羊ハ体輕小ニシテ農家ニアリテモ自家用トシテ利用スレハ豚ニ比シ多大ノ便アルヲ以テ本道肉市場ノ供給量ヲ潤澤ナラシメ又一方ニハ市價ヲ緩和スルモノ多大ナルヘシ茲ニ於テ之ヲ見レハ本道毛肉ノ供給ヲナシ得ルハ勿論又府縣ノ需要ニモ應スルヲ得ヘシ

府縣ニ於ケル需給

府縣ノ羊毛羊肉ノ需給モ之レヲ詳論スルノ資料ニ乏シキヲ遺憾トスルモ先ツ我國輸入羊毛ノ程度ヨリ判定センニ日露戰爭以來毛織業ノ勃興顯著ナルヨリ濠州ハ勿論歐米諸國ニ於テモ我邦羊毛ノ需要増加ニ着目シツヽアリ明治四十二年以降大正二年ニ至ル羊毛及毛糸數量ヲ貿易年表ニ徵シ毛糸類ハ脂毛ノ半量ト計算シ脂毛數量ニ換算シテ表示スレハ左ノ如シ

	明治四十二年	同 四十三年	同 四十四年	大正元年	同 二年
數量	二〇、五二一、三六三 斤	二五、五六〇、五九九 斤	三、七一、四九八 斤	三三、四四、三八二 斤	三三、八四九、八〇八 斤
價額	一四、一三三、一二八 円	一九、四七一、四四九 円	一六、〇四四、五三七 円	二四、五九、〇一九 円	二六、〇八四、五四八 円

以上ノ如ク輸入羊毛數量増加ノ趨勢ヲ有スルノミナラス大正二年ニ於テハ其價額二千六百万圓ニ上レリ此外毛織物類ヲ計算スレハ千二百四十四万九千余圓ニ上リ合計三千八百五十三万四千余圓ニ達ス是レ畢竟我邦牧羊ノ過少ニ基因スルモノニシテ我邦被服ノ獨立如何ニ至難ナルハ左ニ掲クル我邦緬羊頭數及剪毛數量ニヨリ明カナルヘシ

七　全國緬羊頭數表

大正元年末現在

	年末現在數			年内生産數		
	牝	牡	合計	牝	牡	合計
北海道	一五五	三二	一八八	二九	二五	五四
東京	—	—	—	—	—	—
京都	一	一	二	—	—	—
大阪	三	二	五	—	—	—
神奈川	二〇	—	二〇	—	—	—
兵庫	四六	三	七	—	—	—
長崎	七五	九一	一六六	一七	二六	三五
新潟	一	一	二	—	—	—
埼玉	四	三	七	—	—	—
群馬	二	四	一五	五	二	七
千葉	五〇	一六	六六	九	五	一四
茨城	九二	三三	一二三	二九	二	四〇
栃木	四七二	五〇	五二	一八	二六	六四
三重	—	—	—	—	—	—
奈良	—	—	—	—	—	—
愛知	—	—	—	—	—	—
静岡	四	一	五	—	—	—
山梨	三	二	五	—	—	—
滋賀	—	—	—	—	—	—
岐阜	一	—	一	—	—	—
長野	八	六	一四	二	二	四
宮城	二九	四	三三	二	二	四
福嶋	四	二	六	二	一	三
岩手	一九二	八四	二七六	五四	一六	二一六

	年末現在數			年內生產數		
	牝	牡	合計	牝	牡	合計
青森	一四	一四	一八	五	二	七
山形	—	—	—	—	—	—
秋田	—	—	—	—	—	—
福井	—	—	—	—	—	—
石川	—	—	—	—	—	—
富山	—	—	—	—	—	—
鳥取	—	—	—	—	—	—
島根	—	—	—	—	—	—
岡山	—	—	—	—	—	—
廣島	—	—	—	—	—	—
山口	—	—	—	—	—	—
和歌山	—	—	—	—	—	—
德島	—	—	—	—	—	—
香川	—	—	—	—	—	—
愛媛	—	—	—	—	—	—
高知	—	—	—	—	—	—
福岡	—	—	—	—	—	—
大分	—	—	—	—	—	—
佐賀	—	—	—	—	—	—
熊本	一	二	三	二	二	二
宮崎	一	一	二	—	—	—
鹿兒島	二一〇	一八〇	四〇〇	二九	二五	五四
沖繩	三	三	六	—	—	—
官有	一〇五八	二七九	一三三七	二四八	二三五	四六三
計	二四六六	八四二	三三〇八	四七九	三八一	八六〇

右表ニ徵スルニ大正元年末我邦現在緬羊數ハ僅ニ三千三百八頭ニシテ內民有ニ屬スルモノ一千九百七十一頭即チ全頭數ノ五九、五六%ヲ占メ官有ニ屬スルモノ一千三百三十七頭ニシテ四〇、四四%ナリ之レヲ縣別ニ調査スレハ一道三府四十三縣中牧羊ヲナスモノ一道二府二十一縣ニ止マリ未タ一府二十二縣ニ於テハ全々緬羊ヲ見サル有樣ナリ以テ牧羊ノ不振ナルヲ知ルヘク又我邦需要ノ毛肉供給ノ不可能ナルヲ知ルヘキナリ今大正二年中千住製絨所ニ於テ買上ヲナシタル羊毛數量ヲ表記スレハ左ノ如シ

全國羊毛生產調查（大正二年度千住製絨所ヘ買上方ヲ請求シタルモノ）

羊毛種類別 / 地方別	口數	メリノー	サウスダウン	シロップシヤー	雜種	混交毛	計
		封度	封度	封度	封度	封度	封度
北海道	二五	二一〇、五	五六、五	二〇七、〇	—	一、四七二、八	一、九四六、八
栃木	八	七七四、五	—	八、〇	六、〇	一、三〇二、五	二、〇九一、〇
千葉	三	六、九三六、五	一九五、〇	三三二、〇	一三六、〇	二七七、〇	七、八六七、五
茨城	八	六八八、〇	—	二六、〇	—	—	七一四、〇
福嶋	一	二五、〇	—	—	—	—	二五、〇

羊毛種類別／地方別	口數	メリノー	サウスダウン	シュロップシャー	雑類	混交毛	計
埼玉	二	五三、〇	—	—	—	—	五三、〇
鹿兒嶋	一	一、二七五、〇	—	—	—	—	一、二七五、〇
神奈川	二	一、〇	—	—	—	—	二五、〇
東京	四	二五、〇	—	—	—	二四、〇	二五、〇
山口	一	—	二六、〇	—	—	—	二六、〇
青森	三	五、〇	一五、〇	三六、五	—	—	五六、五
愛知	一	—	—	—	—	四七、〇	四七、〇
群馬	一	二、〇	—	—	—	—	二、〇
岩手	一	—	—	一、〇六九、〇	—	—	一、〇六九、〇
宮城	三	三三、〇	—	一三、〇	—	—	四六、〇
臺灣	二	三六七、〇	—	—	—	—	三六七、〇
大阪	二	六、〇	—	五、〇	—	—	一、〇
廣島	二	三一、〇	—	二、〇	—	—	五三、〇
新潟	二	二、〇	—	—	—	—	二、〇
靜岡	一	一六、〇	—	—	—	—	一六、〇
山形	一	—	—	—	七、〇	—	七、〇
長崎	三	三四、四	—	—	—	—	三四、四
計	九六	一〇、九三、九	二九二、五	一、八二八、五	一三、〇	三、一三〇、三	一六、二九七、二
羊毛數量種類別歩合		(六七、〇二%)	(一、七九%)	(二、七三%)	(〇、八一%)	(一八、六五%)	

右表ニヨルトキハ大正二年中全國生產羊毛ノ大部分ヲ占ムル千住製絨所ノ買上數量ハ一万六千二百九十七斤ニシテ大正二年海外輸入羊毛數量ノ二千七十七分ノ一ニ過キス又以テ羊毛生產ノ過少ナルヲ知ルヘキナリ其買上總價額ハ六千九百五十五圓十五錢ニシテ一封度ノ平均價額四十二錢六毛ニ當レリ之レ畢竟「メリノー」種羊毛數量最モ多ク全毛量ノ六七、〇二%ヲ占メ中毛種及雜種羊毛ハ三二、九八%ニ過キサル結果ニシテ「メリノー」種羊毛ハ三十七錢「シユロップシヤー」種羊毛ハ三十五錢六厘ナリ斯ク「メリノー」種ノ飼養頭數多キニシテ「サウスダウン」種羊毛ハ三十七錢「シユロップシヤー」及「サウスダウン」ハ往年大久保內務卿ノ奬勵ニヨル牧羊中各地ニ殘存スルモノ多キニ因ルハ勿論ナルモ亦羊肉ノ需要少ナキ現時ニアリテハ羊毛ノ品質善良ニシテ收量多ク又千住製絨所ノ買上價額高價ナルモ其一因タルヘク「シユロップシヤー」及「サウスダウン」種ハ小岩井農場及月寒種畜牧場ノ輸入羊ニシテ明治三十三年以降ノモノナルカ故ニ其頭數未タ少ナキモノナリ然レトモ府縣ノ實況ニ徵スルニ牧羊ニ好適ナル面積少ナク又農業組織モ牧羊ヲ加味スル餘裕ニ乏シキヲ以テ本道牧羊ノ振興益々必要ヲ來スヘシ若シ將來本道ノ牧羊三百四万頭ヲ有スルニ至リ一頭平均六英斤ヲ產スルトスルモ漸ク一千八百二十四万斤ヲ產スルニ過キサルヲ以テ大正二年ノ輸入羊毛額ノ五十四%ヲ產スニ過キサルナリ然ラハ我邦羊毛ノ需要ノ多大ナルヲ知ルヘク殊ニ今ヤ海外輸出ノ毛織物ノ數量ヲ增加スルヲ以テ之レヲ見レハ益多望ナリト言ハサルヘカラス羊肉ノ需要ニアリテハ現下極メテ少數ニシテ京濱地方在留印度人ノ需給ニ過キサルカ如シ而シテ牛豚肉ノ市價ハ府縣各地一般生活程度ニ比シ高價ナル今日ヲ思ヒ將來需要ノ增進ヲ思フニ於テハ羊ノ如ク蕃殖ニシテ低廉ナル美肉ヲ供給スルモノヲ要スルハ多言ヲ俟タサルナリ海國ト稱スル我邦ノ魚貝漸ク收獲ヲ減シ交通機關ノ設備ト共ニ一般ニ獸肉ハ廣ク分布セラレテ其需要增進シツヽアルハ多言ヲ要セサルモ最近我邦畜牛ノ生產ハ益々向上セントスルモ消費ハ生產ニ超過スルノ現象ヲ呈セリ即チ四十三年中我カ邦內ノ生產牛數ハ二十万五千五百六十五頭ナルニ其屠殺牛ハ二十六万一千百二十六頭ニシテ此內輸入朝鮮牛ノ一千三百八頭ヲ除クモ消費ハ生產ニ超過スルコト實ニ五万四千二百五十三頭ナリ而シテ牛肉ノ不廉ナルヲ知ラハ畜牛增進ノ餘地多大ナルヲ知ルヘク先年農商務省畜牛調査會ハ全國ノ畜牛數ヲ現時ハ百三十万頭ナルモ之ヲ二百万頭ニ增進センコトヲ以テシ七十万頭ハ北海道ノ飼養ニ俟ツヘシト唱ヘタリト云フ蓋シ至言ナリト云フヘク本道亦自覺シテ本道ノ價値ヲ向

上セシメサルヘカラス今全國ノ牛肉相場ヲ見ルニ百斤平均價格牡十九圓牝三十二圓ナリト雖モ例年ハ三十圓以上ナリ次ニ馬肉ニ就テ之ヲ見ルニ全國生產馬匹ハ十一万七千九百五十頭ニシテ其屠馬數ハ五万六千二百七十四頭即チ生產ノ四割七分七厘ハ屠馬トシテ食用ニ供セラル、ノ實況ニシテ其百斤平均價格ハ十四五圓ナルモ馬肉ニアリテモ彼ノ鹿兒島縣ノ如キハ消費多キノミナラス百斤二十七八圓ノ高價ヲ示セリ豚ニアリテモ四十三年ノ生產十三万四千百九十五頭ニ對シ屠豚十七万七千十頭其消費ノ生產ニ超過スルコト四万二千九百五頭ナリ而シテ其百斤平均價格ハ十五圓ナルモ最高二十六七圓ヲ唱フル地方ナキニアラス

此等ノ需要ト其市價ニ徵スルトキハ肉需要ノ增進ニ伴ヒ供給ノ貧弱ナルヲ知ルヘク現時ノ數量不足ヲ補充シ又其價格ノ不廉ナルヲ緩和セントスル欲セハ先ツ緬羊ノ如キ蕃殖力ニ富ミ豚ノ如ク飼養管理ニ困難ナル副收入ナキモノニ比シ羊毛ノ副收入アル而モ農場又ハ牧場ノ副產的生產ニヨルモノニ求メサルヘカラサルナリ本道ノ如キモ現時ニアリテハ肉牛ノ輸入少ナクモ四五百頭ヲ下ルコトナク馬匹ノ輸入亦百頭ニ達セントス斯ル肉市場ノ實況ヲ見ルモノ羊肉ノ販路難ヲ唱フルノ異意ヲ知ルニ苦シムトコロナリ唯其レ本道ノ肉羊ハ現時豚肉ノ市場ニ供給セラル、程度ニ達シ店頭羊肉ノ看板ヲ揭ケテ絕エス供給ヲナシ得ルマテニハ創立ノ牝羊者トシテ數年ノ犧牲ヲ拂ヒ以テ販路ノ發展ヲ期セサルヘカラス若シ夫レ現時實行中ノ陸軍々隊需要ノ牛肉罐詰モ羊肉ノ豐富ナルニヨリ代用スルニ至ラハ其需要實ニ莫大ナルモノアルヘキナリ

今本道緬羊頭數三百六万七千頭ニ達スルトキハ種用ニ供セサル牡羊及八才以上ノ老牝羊ニシテ羊肉ニ供シ得ヘキモノ幾何アルヤヲ見ルニ八十三万三千頭(種畜場ニ緬羊部再興スルコト參照)アリ而シテ一頭平均正肉三貫五百匁トスレハ二百九十一万五千貫ニシテ大正二十年ノ本道想定人口三百万人ニ對比スレハ一人一ヶ年平均九百七十匁ニ當リ又大正二十年我邦想定人口六千一百万ニ對比セハ一人一ヶ年四十八匁ニ當ルヲ以テ之レヲ見レハ八十三万三千頭ノ肉羊敢テ過多ナルモノナラサルハ多言ヲ要セサルヘシ

八　世界ニ於ケル羊毛ノ需要

近年世界各國ノ生產業ハ益々多事多忙ニシテ事業ノ進步發展ノ顯著ナル實ニ驚嘆ニ堪ヘサル有樣ナリ殊ニ毛織物業ニ至リテハ其需要ノ激增ヲ見ルノミナラス人口ノ增加ニ伴フ原料ノ供給難ヲ叫ハントスル盛況ニシテ古毛織物ヲ崩壞シテ改造ヲナシ又綿毛交織及染色術ヲ研究シテ一般ノ需要ニ供セントスルノ實況ヲ考察スルトキハ實ニ牧羊皆無ノ我カ邦人ノ如キ奮發努力以テ世界ノ大勢ニ後レサルヲ期セサル可カラス

今大英國生產業ノ實況ヲ見ルニ羊毛ニ關スル事業ハ其價額實ニ大ナルモノニシテ諸生產業中第五位ヲ下ルコトナク七千万磅即チ我カ七億万圓ニ相當セリ又羊毛輸入價額ニ於テモ輸入生產原料中第二位ノ巨額ヲ占メ三千七百万「スターリング」ニ達セリ而シテ獨乙、佛蘭西及白耳義ノ諸國モ亦織物業ニ於テハ英國ト大競爭ヲナスノ盛況ヲ極メ北米合衆國又斯業ノ盛大ナルヲ見ルモ今尙同國需要原料ノ五六割ニ相當スル羊毛ヲ生產スルニ過キサルナリ此外濠洲、露西亞及伊太利等毛織物業著シキ進度ヲ加ヘ益々世界斯業ノ競爭場裏ヲ賑ハスヲ見ルヘシ是レ畢竟人口ノ增加ト生活程度ノ增進ニ伴フ必然ノ結果ニシテ其勢殆ント停止スル處ヲ知ルヘカラサル有樣ナリ

我カ日本ノ如キ殆ント羊毛ノ生產額ナキニ等シキモ近年毛織物ノ進步顯著ナル英米ノ斯業家又大ニ注目ヲナシツ、アルハ彼ノ紙上ニ散見スル所ナリ斯ク盛況ヲ極ムルヲ以テ羊毛ノ生產ハ世界ノ商業貿易上重要ナル位置ヲ占ムルモノニシテ世界各國共ニ往時ノ如ク羊毛ハ羊ノ副產的ニ考フルコトナク牧羊ノ改良ト其增殖ニ向テ多大ノ注意ヲ喚起シツ、アル有樣ナリ我邦ニ在リテモ奮勵事ニ當ラハ北海道ノ如キハ三百四万頭ノ羊ヲ收容スルニ至リ一頭六斤ノ脂毛ヲ產スルモ一千八百二十四万斤ヲ算シ一斤三十五錢トシテ六百三十八万圓ヲ生產スルノ日ヲ見ル至難ニアラサルヘシ

抑々牧羊ハ熱帶地方ヲ除キ溫帶寒帶地方ニ好適スルハ世界各國ノ證スル處ナリ而シテ往時濠洲又ハ南亞ニ廣漠タル原野ノ橫ハレル時代ハ粗放ナル經營ヲ爲セシモ今ヤ地力ノ減耗ヲ來シ牧羊上合理的經營法ノ必要ヲ生ジツ、アリ即チ濠洲ノ新南維威ニ於ケル放牧羊群ノ次第ニ少群トナリツ、アルカ如キ又北米合衆國ノ如キロツキー山脈地方即チ中部諸洲ノ放牧羊ノ有利ナリシ時代ハ年々過去ノ夢トナリ今ヤ東部諸州ノ殖民地ニ在リテハ再ヒ農家ノ牧羊ヲ見ルニ至レリ而シテ世界各國共原料ノ供給難ヲ感スルヲ以テ羊毛ノ價格騰貴スルモ暴落スルコトナキハ次第ヲ追テ記スヘキモ合理的牧羊ニヨルヤ却テ從來粗放經營ニヨル放牧地ノ地力減耗ヲ回復スヘク地味瘠薄ノ地モ亦地力ヲ增進シテ穀菽又ハ酪農地ニ化セントスル有樣ニ

シテ農業上牧羊ノ有利ナル羊ノ爪ハ黄金ナリトノ古諺空シカラサルヲ證シツヽアル有樣ナリ

現時世界第一ノ羊毛供給地ハ濠洲ナリト知ラル一九〇一年ヨリ一九一〇年ニ至ル濠洲羊毛ノ生産量ハ二百四十三万俵即チ八億一千六百五十万斤ニ達シ世界織物業ノ大勢ヲ掌握シツヽアル有樣ナリ

今羊毛生産上著名ノ國々ノ現況ヲ畧述スレハ左ノ如シ

濠洲　往時ハ旱魃ノ爲メニ牧羊ノ斃死スルモノアリテ一ケ年二十萬頭ニ達セルコトアリ又一方殖民地ノ開發ニヨリ牧羊ノ前途ハ危殆ヲ以テ目セラレシモ杞憂ニ過キスシテ鑿井ノ成功ト灌漑ノ効果ニヨリテ旱魃ノ被害ヲ減シ又一方不毛地ト目セシ土地モ牧羊上有利ノ土地ト化シ益々牧羊ノ増進ヲ見ルニ至レリ殊ニ「クウヰンスランド」「西澳太剌利亞、南澳太剌利亞等牧羊上最モ有利ノ地トシテ知ラルヽニ至レリ「クウヰンスランド」ニ於テハ一九一〇年ノ輸出羊毛ハ三十二万八千俵ニシテ一九〇三乃至一九〇四年ノ輸出數量ニ比シ二倍ニ達セリ

西澳太剌利亞ニ在リテハ過去十年間ニ二倍ニ増進セリ

南亞米利加　濠洲ニ次キ盛大ニシテ一九一〇年ノ羊毛輸出數量ハ四十六万一千俵ニ達セシモ過去十年間ノ實況ニ徴スレハ其平均數ヲ下レリ然レトモ同國ノ一俵ハ濠洲ノ一俵ニ比シ其大サ及重量共ニ倍量ナリ故ニ之ヲ斤量ニ換算スルトキハ實ニ三億七千万斤ナリ而シテ同國ノ羊毛ハ一種ノ特徴ヲ有シ其比重輕ク特ニ靴下及毛糸細工用ニ適スト云フ

南米半島地方ハ一般品質不揃ノ評ヲ蒙リツヽアルモ近年著シク進歩シパラグエー國パンタアレナ地方ノ如キ數年來注目ヲ受クルニ至レリ要スルニ南米諸島ニ在リテモ一九一〇年中六万俵ヲ生産シ六ケ年間ニ倍量ニ達セリ

南亞弗利加　ボア戰爭後羊毛ノ品質ヲ改良セシコト著シク今ヤ羊毛界ニ於テ大ニ矚望セラルヽノ位置ニ達シシヽアリ此等ノ改良ニ就テハ濠洲羊ノ輸入ニヨルモノニシテ最近ノ羊毛生産額三十七万俵即チ一億三千万斤ニ達セリ

北米合衆國　其生産羊毛三億万斤ニ達スト雖モ同國需要額ノ五六割ニ過キスシテ英國、濠洲又ハ南米ヨリ輸入スル羊毛頗ル多キ有樣ナリ

露西亞　歐大陸ニ在リテ羊毛生産上最高位ヲ占ムト雖モ未タ自國ノ需要ヲ滿タスニ過キスシテ輸出羊毛量ハ更ニ無キ有樣ナリ

英國　歐羅巴ハ元是レ羊毛ノ原産地ナリト雖モ殖民地ノ發展ニ伴ヒ粗放經營ニヨリ羊毛ノ生産巨額ニ達シ歐大陸ノ羊毛市場ヲ壓倒セシヲ以テ羊毛供給力著ク衰ヘタリト雖大英國ハ極力牧羊ニ力ヲ傾注セシヲ以テ今日彼ノ小國ニシテ尚一億四千万斤ノ羊毛ヲ産シ北米合衆國ニ供給スルノ盛況ヲ有セリ

世界ノ綿羊數ト羊毛需要人口

世界ノ牧羊數

國名	調査年度	牧羊數	國名	調査年度	牧羊數
歐羅巴			ノールウエー	一九〇〇年	九九八、八一九
露西亞	一九〇八年	六一、五四九、〇〇〇	フインランド	一九〇四年	九二七、五六五
大英國	一九〇九年	三一、八四一、〇〇〇	丁抹	一九〇三年	八七六、八三〇
佛蘭西	一九〇六年	一七、四六一、三九七	子ザランド	一九〇四年	六〇六、七八五
西班牙	一九〇七年	一六、一一九、〇五一	モンテネグロ		四九五、〇〇〇
伊太利	一九〇五年	一〇、八七七、〇〇〇	クレート		四〇〇、〇〇〇
墺匈牙利	一九〇〇年	一〇、七四三、七〇七	サイプラス	一九〇八年	三〇一、六六九
ブルガリヤ	一九〇五年	八、〇八一、八一六	ペルヂアム	一八九五年	二三五、七七二
獨乙	一九　七年	六、七〇〇、〇〇〇	スカヰンランド	一九〇六年	二〇九、二四三
ルーマニヤ	一九〇〇年	五、六五五、四四四	ポルトガル		一〇〇、〇〇〇
セルヴイヤ	一九〇五年	三、一六〇、一六六	ボスニヤ		九四、七一七
希臘		二、九〇〇、〇〇〇	合計		一八一、三九六、一〇〇
瑞典	一九〇六年	一、〇五一、一一九			一九八、一九四、二一四

國名	調査年度	牧羊數	國名	調査年度	牧羊數
墺太利利亞		一一五、五五五、五八一	ニューフアウンドランド		七八、〇五一
一千八百九十五年		一一〇、五一六、三三一	合計		六二、四〇五、一六三
南亞米利加			一千八百九十五年		五七、一五八、六〇〇
亞爾然丁	一九〇九年	六二、二二一、七五四	亞弗利加		
ウルグエー	一九〇五年	一三、九一五、七九六	喜望峰	一九〇八年	一七、二〇六、四六一
コロムビア		三、四八〇、〇一六	アルセリヤ	一九〇七年	九、三一四、五一五
智利	一九〇三年	一、三三五、三三二	オレンジリヴアー	一九〇七年	八、〇一〇、二〇八
フオクランド島	一九〇八年	六八八、七〇五	コロニー	一九〇八年	三、七四〇、一一〇
パラグエー	一九〇〇年	二二四、〇八〇	プリチシユイースト	一九〇八年	二、八二一、〇六一
ヴエネズエラ		一七六、六六八	アフリカ	一九〇八年	九四五、四七七
グオートマラ		七七、六〇〇	トランスヴール	一九〇八年	七一九、六一〇
ボリヴイヤ		五〇、〇〇〇	ナタル	一九〇八年	五九九、五九〇
ホンタマラ		一一、八〇六	チユニス	一九〇二年	三六四、〇八三
合計		八二一、一六一、七四七	ユーガンダア		一九〇、〇〇〇
一千八百九十五年		一〇二、八四七、一三四	マダガスカル		四二、九七一、二二五
北亞米利加			サウザアンローシア	一九〇八年	三一、八九〇、〇五一
合衆國	一九〇九年	五六、〇四、〇〇〇	合計		
メキシコ	一九〇二年	三、四二四、四三〇	一千八百九十五年		
加奈陀	一九〇八年	二、八二八、七八〇	亞細亞		
			英領印度	一九〇八年	一八、〇二九、一八一
			セーロン		一〇〇、六〇三

日本		世界牧羊總數
支那	不詳	五〇三、五九三、二七九
合計	一千八百九十五年	五三二、五六四、〇八三
一千八百九十五年	八、一三三、三七四	
	二一、九五七、七五二	

以上ノ統計ハ其調査年度ヲ同一ニナシ得サリシヲ頗ル遺憾トナスト雖モ世界ノ大局ヨリ之ヲ論スレハ明カニ牧羊ノ減少ヲ來シツヽアルヲ知ルヘシ即チ總數ニ於テハ一千八百九十五年ニ比シ實ニ一千九百万頭ノ減少ヲ示セリ而シテ之ヲ細覽スレハ牧羊ノ增加ヲ來シツヽアルハ亞弗利加ノ一千九百八十一万一千百六十三頭即チ約二千万頭ヲ第一トシ北亞米利加ノ五百二十四万六千六百六十二頭ヲ第二トシ濠洲ノ五百万九千二百五十頭ヲ第三トスルモ他ハ何レモ減少ヲ示シ南亞米利加ノ如キハ二千十八万五千三百八十七頭ノ減少ヲ認ムルト共ニ歐大陸モ亦一千六百七十九万八千百十四頭ノ減少ヲ示セリ又亞細亞ニ於テモ三百八十二万四千三百七十八頭ノ減少ヲ來セリ即チ增加ヨリモ減少ノ多キヲ認ムル有樣ナリ

世界人口ノ益々增殖スルニ當リ其必要欠クヘカラサル衣服ノ原料ヲ供給シツヽアル緬羊數ノ反比例ニ減少セサルニセヨ其減退ヲ防止シ得サルニ於テハ如何ニ種類ノ改良ト飼養法ノ改善、山羊、ヴエキユナ、駱駝、アルパカ其他ノ獸毛ノ利用及古毛織物ノ崩壞利用ノ途ヲ講スルモ容易ニ其需要ヲ滿足セシムルコト難ク從テ毛織物ノ價格ヲ騰貴セシムル趨勢ヲ來ス有樣ニシテ彼ノ濠太刺利亞ノ大旱魃ニ當リ一ヶ年二十餘万頭ヲ斃セシ時ノ如キ世界ノ毛織物價格ニ大變動ヲ來スヘキヲ豫想シテ獨占的行爲ヲナセシ羊毛商ノ大破產ヲ來セシ如ク錦毛交織ノ術及染色法ノ研究ト其効果ニヨリ今日多大ノ變動ヲ見スト雖モ今後尙現況ヲ維持スルニ於テハ益々暴騰ヲ來スヘク我邦ノ如キ諸外國ニ其原料ヲ仰クモノニ在リテハ其不利益大ナルヘキハ敢テ識者ノ言ヲ要セサルヘシ世界現下ノ實況ニ徵スルトキハ毛織物業ハ世界各國益々盛況ヲ來シツヽアルモ原料ノ需要供給益々至難ナラントスル有樣ナリ從テ過去二十年間羊毛取引ノ實況ニ就キ調査セルモノニヨルトキハ市場ニ停滯ヲ來スコトナク其集散迅速ニシテ投機的商人ノ貯藏ヲナスモノ僅ニ一割ニモ足ラサル有樣ニシテ最近二ヶ年間ニ於テハ貯藏ヲ許サヽルヲ以テ僅ニ二分即チ二%ノ貯藏ヲ見ルニ過キサルヘシトイフ以テ其ノ需用ノ旺盛ナル多言ヲ要セサルヘシ

牧羊國ニ於テハ地力減耗ヲ來セルヲ以テ例令往時ノ如ク粗放經營ヲナシ得スト雖モ羊毛價格ノ好況ナルト羊毛品質ノ如何ニ論ナク消流旺盛ナルヲ認ムルヲ以テ愈々益々牧羊ニ力ヲ致シ特ニ其剪毛量ノ增進ニ力メツヽアル有樣ナリ

濠洲羊毛ニ在リテハ其改良大ニシテ濠洲羊一頭ニ付一斤ノ增收ヲ來サンカ一億一千五百五十万頭ノ綿羊ヨリ一ヶ年ノ增收額二十万俵ニ達スヘシ此等ハ決シテ不可能ナル架空論ニアラスシテ着々其事實ヲ收メツヽアルハ吾人ノ注目ヲ要スル點ナリ即チ一千八百九十一年ニハ一億二千四百九十九万一千九百二十頭ノ綿羊ヲ有セシカ其羊毛生產額ハ百六十八万三千俵ニ過キサリシモ一千九百十年ニ至リ其數九百四十六万六千三百四十頭ヲ減退シ一億一千五百五十二万五千五百八十一頭ヲ有スル今日其羊毛生產額二百四十三万四千六百四十三俵ニ達セリ即チ九百万頭ノ少數ニテ七十万俵ノ增收ヲ得シヲ知ル可シ尙同國綿羊剪毛平均量ノ統計表ヲ細覽スルトキハ一九〇七—八年ハ一頭平均六斤九「オンス」ナリシカ一九〇八—九年ニハ六斤十四「オンス」トナリ一九〇九年ヨリ一九一〇年ニ至リテ七斤四「オンス」ノ增收ヲ示シツヽアルヲ知ルヘシ

今ダルゲチ—會社ノ調査ニ基キ世界ノ羊毛需要人口統計ヲ擧クレハ左ノ如シ

世界羊毛需要人口統計表

國名	需要 一九一〇年	人口 一八九五年	國名	需要 一九一〇年	人口 一八九五年
歐羅巴					
西亞	一五二、〇〇九、〇〇〇人	二七、〇〇〇、〇〇〇人	白耳義	七、二九、〇〇〇人	六、四九六、〇〇〇人
獨乙	六二、九八二、〇〇〇	五二、七五三、〇〇〇	ルーマニヤ	六、六八四、〇〇〇	五、七一〇、〇〇〇
オーストロハンガリー	四九、二四八、〇〇〇	四三、六九六、〇〇〇	セザーランド	五、八二九、〇〇〇	四、九二九、〇〇〇
大英國	四四、五四七、〇〇〇	三九、五九九、〇〇〇	葡萄牙	五、六八七、六七〇	五、二六〇、〇〇〇
佛蘭西	三九、二六七、〇〇〇	三八、五一八、〇〇〇	瑞典	五、四三〇、〇〇〇	四、九六三、〇〇〇
伊太利	三三、九一一、〇〇〇	三一、五〇六、〇〇〇	ブルガリヤ	四、二二一、〇〇〇	三、四四一、〇〇〇
西班牙	一九、七九四、〇〇〇	一八、二三八、〇〇〇	スウヰツアランド	三、五五、〇〇〇	三、一五一、〇〇〇

セルヴィア	二、六四、〇〇〇人	二、三四六、〇〇〇人	合衆國	八七、一八九、〇〇〇	七〇、二五四、〇〇〇
希臘	二、六八〇、四〇三	二、四二四、〇〇〇	メキシコ	一八、〇〇〇、〇〇〇	一三、六〇七、〇〇〇
丁抹	二、六五九、〇〇〇	二、三〇六、〇〇〇	加奈陀	六、九四五、〇〇〇	四、八三四、〇〇〇
ノールウエー	二、三五三、〇〇〇	二、二六六、〇〇〇	ニューフアウンドランド	二五〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇
ポルツガル	一、七五〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	合計	一二三、三四四、〇〇〇	八八、八九五、〇〇〇
クレート	三五〇、〇〇〇	二九五、〇〇〇	南亞米利加		
サイプラス	二五八、九九七	—	ブラジル	一四、〇〇〇、〇〇〇	一四、三三四、〇〇〇
合計	四五五、二三九、〇一七	三九六、三八七、〇〇〇	アルゼンチン	五、五四六、〇〇〇	四、〇四八、〇〇〇
亞弗利加			チリー	三、八七一、〇〇〇	三、〇〇九、〇〇〇
喜望峰	二、五〇七、五〇〇	五八〇、〇〇〇	ペルー	二、六六一、〇〇〇	二、六六一、〇〇〇
アルゼリヤ	五、三二一、八五〇	五〇〇、〇〇〇	ヴエネツエラ—	二、六〇一、四九一	二、〇七五、〇〇〇
チニユス	二、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	ウルグエー	一、一四一、〇〇〇	八一九、〇〇〇
トランスバール	一、三四七、二一七	三〇〇、二五	コロムビア	一、〇〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇
ナタル	一、一〇六、三八六	六四、〇〇〇	ボリヴイヤ	七五〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
ロ—デシア	六九七、〇〇〇	—	パアラグエー	六二一、三四七	五〇〇、〇〇〇
オレンヂ、リヴアコロニー	四六六、八八〇	一四三、〇〇〇	グオ—トマラ	一〇〇、〇〇〇	八五、〇〇〇
埃及	一一三、〇〇〇	一一三、〇〇〇	合計	三二、三〇一、三八九	二八、八六七、〇〇〇
合計	一三、五六九、八四三	一、七一〇、二五	亞細亞		
北亞米利加			日本	一、〇一〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
			印度	一〇〇、〇〇〇	九七、〇〇〇

國名	需用 一九〇九年	人口 一八九五年	國名	需要 一九〇〇年	人口 一八九五年
支那	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇〇			
合計	一、一四〇、六〇〇	六七、〇〇〇〇			
埃太剌利亞	四、三九六、三三五	三、一八三、〇〇〇			
新耳蘭土	一、〇四二、九九七	六七、〇〇〇			
合計	五、四三九、三三二	三、八一〇、〇〇〇			
其他諸國		五〇、〇〇〇			
總計	六二〇、〇七五、六三二	五一〇、三三六、三三五			

以上統計ニ示スカ如ク各國人口中羊毛需要人口ハ年々增加ヲ來スハ生活程度ノ進歩ニ伴フ結果ナルカ過去十五ヶ年間ニ一億万人ノ增加ヲ見ルニ於テハ假令牧羊ノ增殖ヲ見ルモ容易ニ原料ノ潤澤ナルヲ豫期スルコト至難ナルヘク從來ノ牧羊諸國以外ニ新牧羊國ノ勃興スルニアラサレハ到底需給ヲ緩和スルノ途ナキナリ

九　緬羊ニ對スル將來ノ施設

(一)　北海道廳種畜場ニ緬羊部ヲ再興スルコト

明治四十三年北海道廳種畜場ノ牧羊ハ廢止セラレタリ而シテ後僅ニ數年ヲ經タル今日之レカ再興ヲ論スルハ矛盾極マル觀アリト雖モ之レ牧羊廢止ノ矛盾ナルニ歸セサルヘカラス同場ノ牧羊ハ一見種畜場ノ牧羊ナリト雖モ種畜場ハ北海道ノ種畜場ニシテ牧羊モ亦北海道ノ牧羊ナラサルヘカラス然ルニ種畜場ノ獨立經濟上又各家畜ノ種畜生產上經營多岐ニ亘リ其成績不良ナルノ故ヲ以テ廢止スルトセハ實ニ遺憾トセサルヘカラス若シ我邦ニ於ケル本道ノ位置ト價値ヲ認識シ又本道ノ土地利用ハ勿論地力ノ增進上更ニ農業ノ增收ヲ計ル爲メ周到ナル經營法ヲ講スルニハ全力ヲ盡シテ研究ニ研究ヲ重ヲ凡テ牛馬豚鷄ニ限ラス又牧羊ノ改善普及ヲ計ラサルヘカラス然ルニ牧羊ノミヲ廢止セシハ假令其當時牧羊ノ機未タ熟セサリシトハ云ヘ甚タ其當ヲ得サルモノト謂ツヘシ現ニ數年ヲ經タル今日農商務省カ幸ニ積極的方針ノ下ニ牧羊ノ奬勵ノ計劃ヲ成スニ至リシニ當リ本道ノ種畜場ハ冷然トシテ之ヲ知ラサル如キ觀アルハ實ニ遺憾ナリト言フヘシ然レモ我邦ノ牧羊問題ハ獨リ一地方ノ問題ニ非ラサルヲ以テ地方費計畫ノ牧羊場ヲ開設シテ國庫ノ補助ヲ仰キ以テ蕃殖牧羊ノ普及ヲ計リ月寒種畜牧場ノ供給種牡羊ノ活用ヲ計ル處ナカルヘカラス然ラハ種畜場ノ牧羊ハ幾何ヲ要スヘキカ左ニ之ヲ論スヘシ

今後種畜場ノ牧羊ヲ再興スルニ二法アリ何レモ試驗研究ノ上實行スヘキモノナルカ一ハ濠洲又ハ北米或ハ南米ヨリ種牝羊ヲ輸入スルコト一ハ支那羊ヲ輸入シ三回雜種ヲ生產シ蕃殖羊トシテ拂下ヲナスニアリ以上二法共ニ年々二才牝羊一千頭ヲ輸入スルニ非ラサレハ三十ヶ年ニシテ三百万頭ニ達セシムルコトヲ得ス故ニ玆ニハ當分牝羊一千頭ノ拂下程度ノ牧羊場ヲ開始セント欲スル處ナリ今是等ノ希望ヲ現實スヘキ計畫ヲ上タレハ左ノ如シ

甲、濠洲羊輸入牝羊計畫

濠洲羊ヲ輸入シ年々一千頭ノ一才牝羊ヲ拂下ケントスルトキハ其方法種々アリト雖モ最モ實行シ易ク且ツ年數ヲ要セスシテ同計畫ノ効果ヲ收メント欲セハ毎年五百頭宛輸入スルヲ要ス然ルトキハ第六年目ヨリ一千頭ノ拂下ヲ見ルニ至ルヘシ今左ニ之ヲ表示スヘシ

一才牝羊千頭拂下計畫表

年度	二才輸入牝羊數	三才以上牝羊	一才牝羊	一才牝羊生產價格
初年	五〇〇			
二年	五〇〇	五〇〇	二〇〇	三四、六八
三年	五〇〇	一、〇〇〇	四〇〇	二七、四六
四年	五〇〇	一、五〇〇	六〇〇	二六、五五
五年	五〇〇	二、〇〇〇	八〇〇	二六、〇〇

年度	二才牝羊數	三才以上牝羊	一才牝羊	一才牝羊生産價格
六年	五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	二五、六九
七年	五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	二五、六九

（備考）輸入羊ハ牧場着一頭金六十圓トス

蕃殖率ハ八分牝牡同數トス

輸入當年ハ飼養費ハ半分ヲ計上シ一頭ニ付金二圓五十錢

蕃殖羊ノ飼養費ハ一頭一ケ年金五圓トス

成羊ノ剪毛量ハ一頭ニ付七斤半一斤金三十五錢トス

牡羊ノ拂下價格ハ一頭金六圓トス

當才羊ノ飼養費ハ一ケ年一頭金一圓トス

牝羊ノ淘汰ハ八歳ニ於テシ八歳ニテ一頭六圓ニ拂下蕃殖使用年限ヲ六年トシ償却金ヲ計上ス

以上ノ計算法ニヨルトキハ年々二才ノ牝年五百頭ヲ輸入スルニ金三万圓ヲ要シ六年目ニ至リ蕃殖羊二千五百頭ニ達シ漸ク一才ノ牝羊千頭ヲ拂下クルニ至ルヘシ即チ千頭ノ牝羊拂下ニ要スル輸入牝羊數ハ二万五千頭ニシテ此價額金十五万圓ニ上リ一頭ノ生産價格金二十五圓六十九錢トナリ六年以降各年同一價格ニ拂下ケ得ルニ至ルヘシ

乙、支那羊輸入計畫

支那羊輸入計畫ヲナスハ畢竟濠洲羊ノ輸入價格高價ナルヲ以テ拂下頭數ノ増進上安價ナル支那羊ヲ有利ナリトナスニアリ然レモ支那羊ハ粗毛ニシテ收量少ク之レカ奬勵上困難ナルヲ以テ洋種ヲ交配シテ三回雜種ニ改良ヲナシ而シテ拂下ケヲナスヲ得策トスヘシ茲ヲ以テ該法ハ牧場ニ於テ收容スヘキ頭數頗ル多キニ達スルト一才牝羊一千頭ノ拂下ヲナスニ年數ヲ多ク要スル欠点アリト雖モ輸入價格ノ低廉ナルヨリ結局九ケ年目ニ至リ一千頭ノ三回雜種一才牝羊ヲ拂下ケ得ヘク其生産價

格ヲ計算スルニ無代拂下ヲナシ得ヘシ即チ十年目ニ至レハ生産價格一頭一圓九十五錢十一年目ハ一圓八十六錢十二年目ハ六十錢十二年以降ハ四十八錢トナリ爾後同一價格トナルヘシ由是觀之該計畫ニヨルトキハ十三年以降ハ三回雜種ノ一才牝羊一頭ノ拂下價格ハ僅ニ四十八錢ナルヲ以テ牧羊ノ増殖上有効ナル方法ト言フヲ得ヘシ今右計算法ヲ上クレハ左ノ如シ

年次	輸入羊 二才成羊	輸入羊 成羊	一回雜種 當歲	一回雜種 二歲成羊	一回雜種 當才	一回雜種 二才成羊	三回雜種 當才	同上價格	年末淘汰牝羊頭數
初年	一、〇〇〇								
二年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	四〇〇						
三年	一、〇〇〇	二、〇〇〇	八〇〇	四〇〇					
四年	一、〇〇〇	三、〇〇〇	一、二〇〇	八〇〇	一六〇				
五年	一、〇〇〇	四、〇〇〇	一、六〇〇	一、二〇〇	四八〇	一六〇			
六年	一、〇〇〇	五、〇〇〇	二、〇〇〇	一、六〇〇	九六〇	四八〇	六四〇	一九、四五七	
七年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、〇〇〇	一、六〇〇	九六〇	二五六	一五、六四一	
八年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	一、六〇〇	六四〇	八、一六一	
九年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	一、〇〇〇	—	
十年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	一、〇〇〇	一、九五一	
十一年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	一、八六一	
十二年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	一、六〇一	
十三年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇	一、四八一	

（備考）輸入牝羊ハ二才ニシテ牧場着一頭金十五圓トス

蕃殖率ハ八分牝牡同數トス

輸入當年ハ飼養費ハ半分ヲ計上シ一頭ニ付金二圓五十錢

蕃殖羊ノ飼養費ハ一頭一ケ年五圓トス

當才羊ノ飼養費ハ一ケ年一頭金一圓トス

輸入成羊ノ剪毛量ハ一頭ニ付二斤一斤二十五錢

一回雜種成羊ハ一頭ニ付四斤二才ハ二斤半一斤ニ付三十錢

二回雜種成羊ハ一頭ニ付六斤二才ハ三斤半一斤ニ付三十二錢

牝羊ノ淘汰ハ八才ニ於テシ八才ニテ一頭六圓ニ拂下ケ蕃殖使用年限ハ六年トシ各年ノ償却金ヲ計上ス

以上二法共ニ種牡羊ノ計算ヲ省略セルハ月寒種畜牧場ヨリ供給ヲ受クル便アルモノトセシ故ナリ

今以上ノ計畫ニ基キ年々二歳牝羊一千頭宛拂下ヲナシ其蕃殖歩合ヲ八分トシテ牝牡相半スルモノトシ牡羊ハ六歳ニ於テ種付ノ上賣却シ牝羊ハ八歳ノ分娩後賣却スルモノトシ種牡羊一頭ハ二歳乃至七歳ノ牝羊四十頭ニ種付スルモノトシテ計算スル時ハ左ノ如ク大正二十年ニ至リ漸ク二十四万七千頭ニ達スルニ過キス若シ本道ニ三百四万頭ヲ充實セシメントセハ實ニ大正三十二年ニ至ラサルヘカラサルヲ知ルヲ以テ大正二十年度ニ於テ三百四万頭ニ達セシメントスルトキハ各年ノ輸入二歳牝羊九千五百頭ニ達セシメサルヘカラス然ルニ各年千頭ノ輸入容易ナラサル今日九千五百頭ノ輸入ハ全ク不可能ナルモノト言ハサルヘカラス故ヲ以テ本道ニ於テ三百四万頭ヲ有スルニハ大正三十二年度ヲ待タサルヘカラス今大正三年度ニ三歳牝羊一千頭ヲ有スルモノトシ大正四年度ヨリ各年二歳牝羊一千頭宛輸入スルモノトシ增殖數ヲ表示スレハ左ノ如シ

緬羊增殖計算表

年次	牝羊 當歳	牝羊 二歳	牝羊 成羊	牡羊 當歳	牡羊 二歳	牡羊 成羊	年末現在數	年末賣却數
大正三年	四〇〇		一、〇〇〇		二五	二五	一、〇五〇	
同四年	四〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	四五	三五	五〇	二、五三〇	三五
同五年	八〇〇	一、四〇〇	二、〇〇〇	八四	四五	八五	四、四一四	七一六
同六年	一、三六〇	一、八〇〇	三、四〇〇	七七	八四	一三〇	六、八五一	一、三〇八
同七年	二、〇八〇	二、三六〇	五、一〇〇	一三六	七七	一八九	一〇、〇四二	一、九六九
同八年	三、〇二四	三、〇八〇	七、五六〇	一四一	一三六	二四一	一四、一八二	三、九一八
同九年	三、八五六	四、〇二四	九、六四〇	二一一	一四一	三四二	一八、二二四	三、六九〇
同十年	五、四六六	四、八五六	一三、六六四	二三三	二一一	四三八	二四、八六七	六、三一七
同十一年	七、〇〇八	六、四六六	一七、五三〇	三二八	二三三	五六五	三二、一二九	八、一五七
同十二年	九、〇三五	八、〇〇八	二三、五八六	三七七	三二八	七二〇	四一、〇五四	一〇、五九四
同十三年	一一、五一八	一〇、〇三五	二八、七九四	五〇〇	三七七	九二一	五二、一三六	一三、五一九
同十四年	一四、五八八	一二、五一八	三六、四六九	五九五	五〇〇	一、一四八	六五、八一八	一七、二八四
同十五年	一八、三六八	一五、五八八	四五、九〇七	七二六	五九五	一、四三七	八二、六六一	二一、八五八
同十六年	二二、九八九	一九、三六八	五七、四七一	九二三	七二六	一、八〇〇	一〇三、三一六	二七、二五一
同十七年	二八、七九二	二三、九八九	七一、九七八	一、二六九	九二三	二、〇三八	二九、〇八八	三四、四六六
同十八年	三五、八〇一	二九、七九二	八九、五〇一	一、四一〇	一、二六九	二、七八三	一六〇、四六六	四二、八八九
同十九年	四四、五一四	三五、八〇一	一一一、二八五	一、七八一	一、四一〇	三、四五二	一九八、二五三	五三、三六三
同二十年	五五、三二一	四五、五一四	一三八、〇五一	二、一七四	一、七八一	四、二七七	二四七、〇一八	六六、三三一
同二十一年	六八、四一九	五六、三二一	一七一、〇四七	二、七二一	二、一七四	五、二九二	三〇五、八六四	八二、五九九
同二十二年	八四、六七二	六八、四一九	二一一、六八〇	三、三一七	二、七二一	六、五四四	三七七、三四三	一〇一、八九二
同二十三年	一〇四、六九五	八五、六七二	二六一、七三六	四、二一〇	三、三一七	八、〇八六	四六七、六六六	二二五、九八四
同二十四年	一二九、三六四	一〇五、六九五	三三、四〇九	五、〇五五	四、二一〇	九、九八三	五七七、六二六	二五五、八八二

年次	牝羊 当才	牝羊 二才	牝羊 成羊	牡羊 当才	牡羊 二才	牡羊 成羊	年末現在數	年末賣却數
大正二十五年	一五九、七二五	二三〇、三六四	三九九、三二	六、二三四	五、〇五五	二二、三三三	七二二、九一二	一八七、二二八
同　二十六年	一九三、一五〇	一六〇、七二五	四九二、八七五	七、六八七	六、二三四	一五、二〇三	八七五、七七四	二三三、六八八
同　二十七年	二四三、二三五	一九四、一五〇	六〇八、〇八六	九、四五四	七、六八七	一八、六二六	一、〇八一、一三八	二九三、三一九
同　二十八年	二九八、〇〇六	二四四、二三五	七四五、〇一五	一一、六三六	九、四五四	二一、九九六	一、三二一、三四二	三五八、九〇九
同　二十九年	三六七、九三三	二九九、〇〇六	九一九、八三一	一四、二三一	一一、六三六	二八、三三〇	一、六四〇、九六七	四四四、四一九
同　三十年	四五三、二六六	三六八、九三三	一、二三二、一六五	一七、六五八	一四、一三二	三四、九一一	二、〇二二、一六四	五四七、四三七
同　三十一年	五五八、五六二	四五四、二六六	一、三九六、四〇三	二一、八五二	一七、六五八	四三、〇〇八	二、四九一、七四九	六七四、七六一
同　三十二年	六八八、一三三	五五九、五六二	一、七一〇、三〇五	二四、五四一	二一、八五二	五二、九七九	三、〇六七、三六一	八三三、七六〇

(二) 屠畜稅及檢査手數料ヲ輕減スルコト

牧羊ノ增進上幾多ノ施設ヲ要スヘシト雖モ牧羊增進發展上ノ故障ハ力メテ排除スル所ナカルベカラス本道現時ノ屠畜稅ノ如キハ之レカ輕減ヲ計ルハ極メテ必要ナル所ナリ殊ニ犢羊豚ハ同一ノ取扱ヲ受ケツヽアルカ如キハ其權衡ヲ失スルコト甚タシキモノナリ即チ緬羊ノ如キハ體重豚ノ半量ニ足ラサルモノ多シト雖モ同一ノ課稅ヲ受ケ又屠殺ノ際豚ニ比シ手數ヲ要スルコト少ナク又熱湯其他ノ費用ヲ要セサルニ豚ト同一屠殺料屠場使用料ヲ支拂フハ徒ニ羊肉ノ價格ヲ高メ生產費低廉ナル羊肉モ爲ニ販路ノ發展ヲ沮害スルニ至ルヘシ玆ヲ以テ屠羊ハ屠豚ニ比シ其稅金及手數料ヲ凡テ半減スルヲ至當トナスヘク更ニ大家畜ニ比セハ現時ノ四分一ニ減スルヲ至當トナスヘキナリ

(三) 羊毛買上價格ノ引上ヲ要ス

我邦現時牧羊ノ持續セラル、ハ全ク千住製絨所ノ奬勵的買上ニ基因スル處ナリ然レトモ其買上價格ハ尙引上ノ餘地アルハ明ナリ我邦生產羊毛ハ何等選別ヲ施スコトナキヲ以テ其品質ニ於テハ一概ニ輸入羊毛ニ比スヘカラスト雖モ輸入羊毛中又種々ナル品質ノ羊毛アリテ我邦生產毛ニ劣ルモノナキニ非ラサルヲ以テ我邦羊毛自給奬勵上買上價格ヲ高ムルハ不可能ノ事ニ非ラサルヘシ彼ノ「サウスダウン」羊毛一英斤三十七錢ニシテ「シユロプシヤ」羊毛一英斤三十五錢六厘支那羊毛二十五錢ノ價額等級ハ改正ノ餘地存スルカ故ナリ

(四) 緬羊生產ノ保護奬勵ヲナスコト

緬羊ノ生產保護奬勵ヲナスハ極メテ必要ナリト雖モ保護過度ニ失スレハ却テ弊害ヲ生スルヲ以テ研究ヲ重ネテ決定スル處ナカルヘカラス牧羊ノ如ク創業ニ屬スルモノハ肉羊ニセヨ又羊毛ニセヨ商品トシテ相當ノ數量ニ達スル迄ハ保護ヲ加フルニ非ラサレハ其ノ發達ハ得テ望ムヘカラサル所ナリ

今左ニ保護ヲ與フヘキ事項中有効ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

(1) 緬羊飼育組合ヲ保護奬勵スルコト

緬羊ノ如ク副產的普及的ニ飼養ヲ奬勵スヘキ家畜ニアリテハ生產ト販賣ニ別ナク組合ヲ設立シテ共同一致ノ方法ヲ取ルハ極メテ必要ナルコトナリ玆ヲ以テ緬羊飼養者ヲ保護セント欲セハ寧ロ組合ヲ保護スルノ方針ヲ取ルハ極メテ得策ナリト言フヘシ其保護法多々アルヘシト雖モ左ノ三項ヲ以テ其主ナルモノトナスヘシ

國費生產ノ種牡羊貸付ノ特權ヲ與フルコト

地方費蓄殖牝羊ノ拂下ニ特權ヲ附與スルコト

販賣機關ノ補助及販路調査ヲ補助スルコト

(2) 毛織物會社ヲ補助シ其設立ヲ促スコト

緬羊ノ奬勵上本道產羊毛ヲ以テ毛織物業ヲ經營スルモノニ對シ補助金ヲ交付スルコト

(3) 冷藏裝置ノ補助ヲナスコト

羊肉ノ貯藏又ハ輸送上冷藏裝置ヲナスモノニハ其規模及成績ヲ調査シ有効ナルモノニ對シ補助金ヲ交付スルコト

(4) 運賃ノ補助ヲ與フルコト

緬羊ノ如キ小家畜モ犢及豚ト同一賃金ヲ徴收セラレツヽアリ從テ經濟的輸送距離ヲ短縮スルヲ以テ犢ト緬羊ノ割合ヲ改ムルト共ニ運賃ノ輕減ヲ要望スル所ナリ此外道外輸出羊ニ對シテハ運賃ノ補助金ヲ交付シ經濟的輸送距離ヲ延長スルヲ可トスヘシ

豚

豚

緬羊ノ如キ小家畜モ犢及豚ト同一賃金ヲ徴收セラレツヽアリ從テ經濟的輸送距離ヲ短縮スルヲ以テ犢ト緬羊ノ割合ヲ改ムルト共ニ運賃ノ輕減ヲ要望スル所ナリ此外道外輸出羊ニ對シテハ運賃ノ補助金ヲ交付シ經濟的輸送距離ヲ延長スルヲ可トスヘシ

豚

一、本道養豚沿革ノ概略

本道ニハ古來豚族ノ存在ヲ認メサリシカ如ク函館奉行羽太政養ノ著セシ休明記錄ニヨレハ寛政十一年初メテ江戸ヨリ豚ヲ東蝦夷地ニ送リシ事實ヲ見ル其後今日迄百十餘年間度々東京或ハ海外ヨリ輸入シ以テ飼養蕃殖シ其數一万餘頭ニ達シタルモノナリ

明治初年以前ヨリ函館港ハ外人ノ往來多カリシカ爲メニ彼等ノ在留中ハ養豚ヲ爲スモノアリテ明治四年頃迄ニハ其數稍多キニ達シタルモノヽ如シ今本道ニ於ケル養豚ノ沿革概略ヲ述フレハ次ノ如シ

明治四年四月開拓使ハ函館在留佛國人ガルトヲル者フ所ノ豚牝牡四頭ヲ購入シ札幌村ニ移セシニ開拓草創際ノ牧方備ハラサルヲ以テ蕃殖多カラス

同年五月開拓使根室支廳ニ於テハ豚二頭ヲ別海ニ移シテ蕃殖セシム

明治六年七重勧業試驗場ニ於テハガルトヲルヨリ領收スル所ノ牡一頭牝九頭ヲ飼養シ四月東京青山試驗場ヨリ米國產「サツクオーク」種牡一、牝二頭「バークシヤー」種牝牡各一頭ヲ移シテ飼養蕃殖ヲ圖ル

明治七年東京青山試驗場ヨリ「サツフオーク」種牝一、牡二頭「バークシヤー」種牝二、牡一頭ヲ七重勧業試驗場ニ移シ雜種及其雜種ヲ轉移又ハ屠殺シテ「ハム」トナシ「サツフオーク」種「バークシヤー」種及其雜種ノミヲ畜フ

同年九月札幌官園中ニ假ニ牧場ヲ開キ東京青山試驗場ヨリ米國產「サツフオーク」牡一頭七重ヨリ「バークシヤー」種牡三頭サツフオーク、種牝一頭ヲ此處ニ移シテ札幌村ニ飼養ス

明治八年東京青山試驗場ヨリ米國種豚牝牡三十頭七重ヨリ同牝牡四頭ヲ札幌村ニ移シ飼養蕃殖ヲ驗シタルモ畜舍狹隘ニシテ生育充分ナラス

明治九年九月札幌育種場內ニ札幌養豚場ヲ設ケ面積三千二百〇七坪ヲ之レニ充テタルニ場中老樹鬱蒼トシテ盛夏蔭ヲ成シ清泉湧出澡浴ニ便ニシテ一人ノ牧丁ヨク五十頭ヲ牧スルヲ得タリ而シテ曩ニ札幌村ニ養フ所ノモノヲ悉ク此所ニ移シ專

タ一室ヲ築キテ火腿(ハム)ヲ製ス

明治十年開拓使ニ於テ家豬貸與規則ヲ設ケ札幌養豚所ノ豚ヲ人民ニ貸與シテ蕃殖ヲ圖レリ又此年第一回内國勸業博覽會ニ「ハム」ヲ出品シ花紋賞牌ヲ得タリ而シテ又東京青山ヨリ米國產「バークシヤー」種「サツフオーク」種牝牡十八頭ヲ當場ニ移セリ

十二月七重勸業試驗場ヨリ洋種豚牝二牡三頭ヲ根室牧場ニ移シテ蕃殖ヲ圖レリ

日高新冠ニ於ケル開拓使所管牧馬場ニ於テモ此年ヨリ豚ノ飼養蕃殖ヲ爲シタルカ如シ

明治十一年札幌養豚場ニ於テハ七重ヨリ「バークシヤー」種牝二十二、牡十八、計四十頭、東京青山ヨリ牝七牡三計十頭ヲ移セリ七重試驗場ニ於テハ「バークシヤー」種ハ成績良好ナリシモ「サツフオーク」種ハ性質虛弱且ツ母豚ノ兒豚ヲ乳哺スル輕忽ニシテ動モスレハ之レヲ壓殺スルモノアリテ成績前者ノ如クナラス遂ニ此種ノ飼養蕃殖ヲ中止シタリ

七月七重勸業試驗場ヨリ「バークシヤー」種牝二、牡三計五頭ヲ根室牧場ニ移ス

明治十二年七重試驗場ヨリ「バークシヤー」種牝牡各一頭ヲ札幌養豚場ニ移シ同牝五牡二計五頭ヲ根室牧場ニ移ス

明治十三年「バークシヤー」種牡一頭ヲ札幌養豚場ヨリ七重ニ移シ「サツフオーク」種牝牡各一頭ヲ七重ヨリ移ス此年札幌養豚場生產ノ「ハム」數量ハ一千七百七十三斤此價額二百四十二圓八十六錢四厘アリ

明治十四年札幌農學校ニ於テ「チエスターホワイト」種牝二、牡一頭ヲ米國ヨリ輸入シタルモ成績良好ナラサリシカ如シ

明治十五年札幌養豚場ヲ廢シ育種場ニ屬セシム

同　十九年七月眞駒内牧牛場ヲ種畜場ト改稱シテ種豚ノ蕃殖ヲ圖ル

明治二十年ニ至リ札幌育種場ニ飼養スル「バークシヤー」種「チエスターホワイト」種「サツオフーク」種等ヲ眞駒内種畜場ニ移シテ種豚供給ノ中心トナル

八月米國ヨリ「バークシヤー」種牝八、牡二頭ヲ輸入ス

此年豚ノ疾病流行シテ斃死スルモノ多カリシカ故ニ其補充トシテ支那種牝百四十九頭牡二十七頭計百七十六頭ヲ輸入シ七重試驗場ニモ同種ヲ輸入セシモ成績良好ナラサリシカ如シ

明治二十三年札幌農學校ニ於テ米國ヨリ「エセックス」「ボーランドチヤイナ」「バークシヤー」ノ三種ヲ輸入セシモ前二種ハ其成績又見ルヘキモノナク終ニ其跡ヲ斷チシカ如シ又七重試驗場ニ於テモ種々雜種ノ蕃殖ヲ試ミタリシモ同シク不結果ニ終リシカ如シ

明治二十六年「バークシヤー」種牝牡各二頭ヲ米國ヨリ眞駒内種畜場ニ輸入ス

明治二十七年七重勸業試驗場ヲ廢止シ種豚飼養場ハ眞駒内種畜場ノミトナル

明治三十年眞駒内種畜場ハ「バークシヤー」種ノミ飼養蕃殖スルノ方針ヲ取ル

明治三十九年「バークシヤー」種牝牡各一頭ヲ英國ヨリ輸入ス其後今日迄ニ於テ農商務省月寒種畜牧場滝谷分場ヨリ「バークシヤー」種牝二牡一頭ヲ眞駒内種畜場ニ輸入ス

民間ニ於テ近年ニ至リ東京地方ニ畜フ所ノ「ヨークシヤー」種ヲ購入飼養スルモノアリ

二、本道ニ於ケル養豚數

本道ニ於ケル養豚年末現在數ハ明治四十四年ニ於テハ一〇、三三八頭ニシテ之ヲ明治十九年ノ二八三頭ニ比スレハ一〇、一〇五頭ノ增加ニシテ約三十六倍ニ相當ス之レヲ累年表ニヨリテ見レハ明治二十二年ハ其ノ前年ニ比スレハ一千三百頭以上ノ激增ヲ見ルカ故ニ四十四年ニ於ケルモノヲ之レニ比スレハ僅カニ四倍トナルニ過キス即チ二十三ケ年間ニ於テハ年々其前年ニ比シテ必ラス增加セルニアラスシテ二十七年ノ如キハ前年ニ比シ約一千頭ヲ減シ三十年ヨリ三ケ年間ハ二十九年ニ比シテ其漸減セルヲ表ハシ三十四年ハ約七〇、%ノ增加ヲ來シ其後三ケ年ハ又漸減シ三十八年ヨリ四十二年迄ハ漸次增加シテ一四、二九二頭トナリ十九年以來今日迄ニ於ケル最高數ヲ示シ四十三年ヨリ大正元年迄ハ再ヒ漸次減少セルヲ見ル若シ此增減ヲ線ヲ以テ表示スルトキハ累年頭數ハ一ツノ波狀ヲ呈シテ漸次高進スルノ狀トナルヘシ之レ即チ養豚業ハ時ニ盛衰アルヲ以テナリ

養豚數ヲ國別ニ見ルトキハ三十六年迄ノ間ニ於テ石狩ハ常ニ最高數ヲ有シ膽振、日高、渡嶋等之ニ亞キ千嶋、北見、天鹽等ハ最小數ナリ而シテ十勝、釧路、根室、千嶋、北見ニ於テハ二十二年ヨリ增加シ二十八九年ヨリ大ニ減少シ其ノ狀態一樣ナルモノヽ如シ

明治三十七年後ニ於ケル支廳區別頭數ヲ見レハ札幌、空知、上川、室蘭ノ各支廳ハ他ニ比シテ常ニ優勢ナルノ狀態ニシテ此等ノ支廳內ニ於テ養豚數最モ多キ郡別ヲ見レハ四十四年ハ札幌郡四五五、石狩郡一三二、空知郡一、一三〇、夕張郡二四四、樺戸郡七七五、雨龍郡三一一、上川郡(石狩)八八二、勇拂郡一、一〇〇頭ナルヲ知ルヘシ

種類ニ於テハ雜種最モ多ク內國種之ニ次キ外國種ヲ最少トス內國種ハ年々減少シ四十四年ニハ總數ノ一四、九%ヲ示ス此內國種ト稱スルモノハ明治五年以來輸入シタルモノ子孫及此等ノ雜種ノ各地ニ散在シテ其地方ノ氣候風土、飼料等ノ爲メニ体形性狀等多少ノ變化ヲ來シタルモノナラン雜種ハ此等ノ內國種ト稱スルモノト外國種トノ雜種ナルヘク益々增加ノ傾向ヲ有シ四十四年ニ於テ總數ノ八〇一、%ヲ示ス外國種ハ增減アリテ四十二年ニ於テハ七、四%强ナリシモ四十四年ハ四、八%ニ減少セリ詳細ハ次表ノ如シ

豚ノ國別頭數累年表

年次	國別	石狩	後志	渡嶋	膽振	日高	十勝	釧路	根室	千島	北見	天鹽	計
明治十九年		九〇	五八	六五	二九	三	—	—	二四	六	五	三	二八三
二十年		三四	四〇	一三五	九五	八一	三五	五	七九	一九	一四	七	五四五
二十一年		四二	三三	一七五	一四	一七	九三	三	八〇	四四	一七	六	七五四
二十二年		五五二	一一九	四二一	三五二	二三五	八〇	一六	一九三	三九	四八	九	二、〇六四
二十三年		六四一	一九六	四九七	八〇四	二七六	二〇	二六一	四二	五八	六	三、〇九五
二十四年		七七六	一九七	五一三	九一九	七〇八	二〇六	一三六	一五九	三	七三	一七	三、七三六
明治二十五年		一、三八〇	一四八	三三七	八〇二	六九三	二四九	一九五	六四	一三	四三	二〇	三、九〇三
二十六年		一、八〇八	八四	二八六	一、二二六	五三五	四九	三〇六	一二一	三四	二八	三六	四、四一三
二十七年		一、四九四	八四	二七六	三六三	四二〇	二一三	四七四	三九	一三	五五	一九	三、四六〇
二十八年		一、五一七	六八	五三三	四〇九	三四一	三一二	五七三	五四	—	三七	一七	三、八六一
二十九年		一、六三六	一〇〇	六三八	二六四	二九一	四三〇	五五九	三三	五	二六	二七	四、〇〇九
三十年		二、三〇二	一一〇	二六九	三四八	四五二	二一一	三三	三五	二	二一	二〇	三、七〇四
三十一年		二、〇四三	一三	三七三	三六一	五七五	七七	一	四〇	二	一一	二四	三、五二〇
三十二年		二、〇六八	三一五	一八	二七四	四〇〇	四八	二五	三三	三	一〇	一六	三、一八九
三十三年		二、八〇一	三九	四〇三	七六一	三九九	一七〇	一九二	六〇	五	一〇	二二	四、八六二
三十四年		四、〇三五	一六二	二、〇四四	七七九	六九一	二〇五	一四六	五六	七	六一	五九	八、二四五
三十五年		四、四一四	一〇四	三二五	一、三八五	四七一	三七二	五六	四〇	一七	八八	九六	七、三六八
三十六年		二、九八八	二七〇	二一三	一、三六九	四一九	三五七	七九	四五	七	二六	八〇	六、〇五二
三十七年	內國種	四四九	一四三	八八	六八〇	四九六	一、〇七一	二二〇	一、六八七	二五〇	一、四一五	二四	一、六九九
	雜種	二五五	六八三	三五	九七三	二二五	七七〇	三三	一、〇一八	一五七	八一八	一三	九八八
	種外國種	三五五	三一〇	一三	六七八	二七二	一、四〇六	一、七一〇	二五六	一、四二〇	一八二	一、八九八	一、八九八
	計	一九	六三	三	七二	三八	一六四	一	二四	二〇三	—	七一八	七一九
三十八年	內國種	四八〇	一四三	八八	六八〇	四九六	一、〇七一	二二〇	一、六八七	二五〇	一、四一五	二四	一、六九九
	雜種	二二五	六八三	三五	九七三	二二五	七七〇	三三	一、〇一八	一五七	八一八	一三	九八八
	種外國種	三一〇	三一〇	一三	六七八	二七二	一、四〇六	一、七一〇	二五六	一、四二〇	一八二	一、八九八	一、八九八
	計	一九	六三	三	七二	三八	一六四	一	二四	二〇三	—	七一八	七一九
三十九年	內國種	四四九	一四三	八八	六八〇	四九六	一、〇七一	二二〇	一、六八七	二五〇	一、四一五	二四	一、六九九
	雜種	二五五	六八三	三五	九七三	二二五	七七〇	三三	一、〇一八	一五七	八一八	一三	九八八
	種外國種	三五五	三一〇	一三	六七八	二七二	一、四〇六	一、七一〇	二五六	一、四二〇	一八二	一、八九八	一、八九八
	計	一九	六三	三	七二	三八	一六四	一	二四	二〇三	—	七一八	七一九

豚ノ種類別頭數表

	三十七年 内國種雜種外國種計		三十八年 内國種雜種外國種計		三十九年 内國種雜種外國種計	
函館	二〇	七二	六	九七	二〇	七一
室蘭	一八三	三八〇	七	五七〇	六八	五三八
浦河	三七	三七八	—	四一五	一八二	一〇六
河西	一五七	二〇三	四	三六四	一五三	三五四
釧路	三	三六	三	六一	二三	二八
根室	—	四八	四	五三	—	六〇
網走	二	三二	一六	二三九	三五	三〇一
宗谷	—	—	—	—	—	—
增毛	一〇	五六	三	六九	二三	九八
札幌區	九二	一四八	—	二四〇	一八二	一四八
小樽區	—	九四	—	九四	—	八四
函館區	八一	三一	—	一二	二	六九
計	一、六八八	二、八八五	一九一	四、七六四	一、四三三	五、三八六
檜山	二〇	六八六	一九	八一五	三八	四六九
函館	一六	三四五	四四	四〇五	五	二五〇
室蘭	一四九	八六九	一八	一、〇三六	一、四七九	一、〇五七
浦河	三二	三九二	一四	四三八	三五	五〇三
西	一九七	六一八	二	八一七	一〇六	六五八
釧路	—	二一五	三	二一八	一七	二九九
根室	—	五	二七	三三	—	七
網走	二三九	三一〇	二	五七一	二二一	六四三
宗谷	—	一	四二	四三	—	三八
增毛	四一	八九	三一	一六一	四六	一二三
札幌區	—	五一	—	五一	三八	四二
小樽區	—	二五九	二	二六一	一七四	二
函館區	八八	一四一	一五	二四四	—	一六二
計	一、三七九	九、五一〇	四二五	一、三五四	二、五六六	四八二
檜山	二〇	六八六	一九	八一五	三八	四六九
函館	一六	三四五	四四	四〇五	五	二五〇
室蘭	一四九	八六九	一八	一、〇三六	一、四七九	一、〇五七
浦河	三二	三九二	一四	四三八	三五	五〇三
西	一九七	六一八	二	八一七	一〇六	六五八
釧路	—	二一五	三	二一八	一七	二九九
根室	—	五	二七	三三	—	七
網走	二三九	三一〇	二	五七一	二二一	六四三
宗谷	—	一	四二	四三	—	三八
增毛	四一	八九	三一	一六一	四六	一二三
札幌區	—	五一	—	五一	三八	四二
小樽區	—	二五九	二	二六一	一七四	二
函館區	八八	一四一	一五	二四四	—	一六二
計	一、三七九	九、五一〇	四二五	一、三五四	二、五六六	四八二

	四十年 内國種雜種外國種計		四十一年 内國種雜種外國種計		四十二年 内國種雜種外國種計	
札幌	一八二	一、五六九	二七	一、七七八	一四〇	九五四
空知	—	一、五三	三五	一、五六八	一九二	一、八四四
上川	二九五	一、七三七	一一	二、一四三	一四	四九九
後志	二〇	六八〇	六三	七六三	二〇	五三三
檜山	二〇	六八六	一九	八一五	三八	四六九
函館	一六	三四五	四四	四〇五	五	二五〇
室蘭	一四九	八六九	一八	一、〇三六	一、四七九	一、〇五七
浦河	三二	三九二	一四	四三八	三五	五〇三
西	一九七	六一八	二	八一七	一〇六	六五八
釧路	—	二一五	三	二一八	一七	二九九
根室	—	五	二七	三三	—	七
網走	二三九	三一〇	二	五七一	二二一	六四三
宗谷	—	一	四二	四三	—	三八
增毛	四一	八九	三一	一六一	四六	一二三
札幌區	—	五一	—	五一	三八	四二
小樽區	—	二五九	二	二六一	一七四	二
函館區	八八	一四一	一五	二四四	—	一六二
計	一、三七九	九、五一〇	四二五	一、三五四	二、五六六	四八二
檜山	二〇	六八六	一九	八一五	三八	四六九
函館	一六	三四五	四四	四〇五	五	二五〇
室蘭	一四九	八六九	一八	一、〇三六	一、四七九	一、〇五七
浦河	三二	三九二	一四	四三八	三五	五〇三
西	一九七	六一八	二	八一七	一〇六	六五八
釧路	—	二一五	三	二一八	一七	二九九
根室	—	五	二七	三三	—	七
網走	二三九	三一〇	二	五七一	二二一	六四三
宗谷	—	一	四二	四三	—	三八
増毛	四一	八九	三一	一六一	四六	一二三
札幌區	—	五一	—	五一	三八	四二
小樽區	—	二五九	二	二六一	一七四	二
函館區	八八	一四一	一五	二四四	—	一六二
計	一、三七九	九、五一〇	四二五	一、三五四	二、五六六	四八二

	四十三年			四十四年			大正元年		
	內國種	種外國種	計	內國種	種外國種	計	內國種	種外國種	計
檜山	六五	一七二	八〇	三一七	四三	一一二	三六	一一九〇	三一	一一五	一	一四六
函館	一四	三一六	四二	三七二	五	二九三	二九	三二七	二六二	三八	三〇〇
室蘭	六二〇	九二三	八	一、五五〇	六〇三	七六五	一	一、四二八	二一一	六一九	二〇	八五〇
浦河	四五	六六三	五七	七六五	三五	八二〇	五六	九二	五八	七一四	四一	八一四
河西	一八七	三三六	—	五一三	一四六	二六七	—	四三	—	二四九	—	二四九
釧路	一八	一一四	—	一三二	三	一四五	—	一四八	一	九六	—	九七
根室	—	一六	—	二六	—	二	四〇	四二	—	—	三七	三七
網走	一六六	二七三	一〇	四四九	二二三	三一五	七	五四五	一三四	三一七	—	四五一
宗谷	—	三五	二七	六二	—	三三	二二	五五	—	二八	—	二八
增毛	一〇四	三四五	四八	四九七	—	三六七	—	三六七	八三五	六一	三	一、四五八
札幌區	—	三五	七	四二	一〇	三〇二	九一	四〇二	—	二七二	二	二八三
小樽區	—	一二五	二	二七	—	一〇二	四	一〇六	—	一二五	二	一一七
函館區	—	四三三	四二	四七五	—	三七五	—	三七五	—	三四七	—	三四七
計	二、〇一八	八、七五二	六六六	一一、四三六	一、五五四	八、三一七	五〇七	一〇、三八八	一、四八七	八、四二五	四二	一〇、三三四

農耕地面積ト養豚數

本道ニ於ケル農耕地ハ年々增加シ明治十九年ニ三〇〇二八、町九反歩ナリシモ明治四十四年ニ至リテハ六一七、六一〇、町一反歩ニ達シ二十倍以上ノ增加ヲ見ル然レトモ養豚數ハ農耕地ノ增加ニ平行セスシテ一進一退アルヲ認ム即チ農耕地一〇〇、町ニ對スル養豚數ハ十九年ニ於テハ僅カニ〇、九四頭ニ過キスシテ漸々其割合ヲ增シ明治二十四年ニハ最高ナル七頭一八トナリ爾來又漸減シテ四十四年ニハ一頭七九トナレリ而シテ既往ニ於テ此割合ノ最高ナリシハ二十二年ヨリ二十七年迄ニシテ此間六ヶ年平均ハ六頭一三トナル二十八年以後ニ於テハ常ニ四頭以下ニシテ最低一頭四ノ割合ヲ現ハセリ之レ農耕地ノ增加多クシテ養豚ノ發達ハ之レニ伴ハサルヲ以テナリ累年表ハ次ノ如シ

農耕地面積ト豚ノ頭數累年比較表

年次	豚頭數	農耕地	農耕地一〇〇町歩ニ對スル數
明治十九年	二六〇	三〇〇、〇二八、九	〇、九四
二十年	五四五	三一、三二一、四	一、七三
二十一年	七五四	三四、六八一、一	二、一七
二十二年	一、〇六四	四一、四三三、二	四、九七
二十三年	一、〇九五	四五、一四四、九	四、八六
二十四年	一、七二六	五一、〇四二、一	七、一八
二十五年	一、九〇三	五七、三八一、一	六、八一
二十六年	一、一二六	六五、六七一、六	六、七二
二十七年	一、四〇〇	六八、一一一、一	六、一二
二十八年	一、八六一	七一、三五六、九	九、四五
二十九年	一、〇〇九	七五、八〇六、九	一、三三
三十年	一、七四四	一四三、七〇六、八	一、二一
三十一年	一、五一〇	一五〇、一五三、七	二、〇九
三十二年	一、八九	一二五、五九八、八	一、四七

年次	豚頭數	農耕地	農耕地一〇〇町歩ニ對スル豚數
明治三十三年	四、八三二	一四一、四〇六	三、〇一
三十四年	八、一四五	一六六、七五〇	四、一〇
三十五年	七、三六八	二六八、七三六	二、七四
三十六年	六、〇六二	三二八、四五一	一、八二
三十七年	四、九七四	三四〇、一〇五	一、四〇
三十八年	七、一四四	三五五、〇四五	一、九三
三十九年	八、四六四	三七八、七四七	二、二四
四十年	二、一四五	四一四、九四七	二、九四
四十一年	三、二二二	四四一、三四四	二、六六
四十二年	一四、二六六	四四七、〇四三	三、二六
四十三年	二、一四五	四五八、〇四三	二、一四
四十四年	一〇、三六八	四六〇、一四八	一、九六
大正元年	一〇、三四四	四七四、二一〇	一、六四

人口ト養豚數

本道人口ハ明治十九年ニ於テハ三〇三七四六人ナリシモ年々増加シテ明治四十四年ニハ一、六六七五九三人ニ達シ之ヲ十九年ニ比スレハ五、四九倍ニ相當ス而シテ養豚數ト人口トノ割合ヲ見レハ十九年ニ於テハ極メテ少ナク一〇〇人ニ對シ〇、〇九頭ノ割合ニシテ二十二年ニハ〇、五六頭トナリ其後頭數最モ多キ四十二年ニ於テ〇、九三頭ノ割合トナリ其他ノ年ニ於テハ高低アリテ一樣ナラス詳細ハ次表ニ示ス

豚頭數ト人口數累年比較表

年次	豚頭數	人口	人口一〇〇ニ對スル豚ノ數
明治十九年	二、六三	三〇三、七四六	〇、〇九
二十年	五四五	三一一、一一八	〇、一六
二十一年	七、四四	三一八、一三四	〇、二三
二十二年	二〇、四四	三二〇、三七六	〇、六四
二十三年	三〇、四六	三四〇、四四四	〇、八九
二十四年	三、七六六	三四四、六四三	〇、八四
二十五年	三、四〇三	三四七、三三六	〇、八〇
二十六年	四、四二二	三四七、三三六	〇、九六
二十七年	三、三四〇	三六六、六四〇	〇、九六
二十八年	三、八六一	三七八、三三五	〇、九七
二十九年	四、〇〇四	三七七、一四七	〇、九六
三十年	三、四〇四	三七七、一四七	〇、九〇
三十一年	三、三三〇	三七七、一四七	〇、八一
三十二年	三、一六八	三七七、一四七	〇、七六
三十三年	四、八三一	三七七、一四七	〇、九四
三十四年	八、一四五	三七七、一四七	〇、二一
三十五年	七、三六八	三七七、一四七	〇、一九

國別ト豚頭數ト人口數累年比較表

年次	豚頭數	人口	人口一〇〇ニ對スル豚ノ數
明治三十六年	六〇〇二	一〇六〇、六二〇	〇、五六
三十七年	四、六四一	一、二四二、七八一	〇、四二
三十八年	七、一四四	一、二七九、三四一	〇、七七
三十九年	九、四二七	一、三六〇、〇四四	〇、七〇
四十年	一二、三三二	一、三六〇、〇四四	〇、八一
四十一年	一三、二二二	一、四四六、三二一	〇、八四
四十二年	一四、四二七	一、四七七、三五七	〇、九五
四十三年	一二、四四六	一、五一〇、〇四四	〇、七九
四十四年	一〇、六八八	一、五六七、三五七	〇、六二
大正元年	一〇、三四一	一、五七〇、九四一	〇、六〇

國別＼年次	明治十九年 人口	明治十九年 豚數	明治十九年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十年 人口	二十年 豚數	二十年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十一年 人口	二十一年 豚數	二十一年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十二年 人口	二十二年 豚數	二十二年 人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	四五、六〇九	九〇	〇、二	四五、九九九	九四	〇、二	四六、三五九	一四一	〇、三	四七、三六一	一六〇	〇、三
後志	七一、三四一	五一	〇、一	七四、三四〇	四〇	〇、〇五	七七、三三一	三三	〇、〇四	七九、〇〇一	一四	〇、〇二
渡島	一三一、八九六	六五	〇、〇四	一四〇、八八八	一三五	〇、一	一四七、三三一	一四七	〇、一	一五〇、〇九八	一四	〇、〇一
膽振	一二、三四七	二九	〇、二	一四、〇四三	九五	〇、六	一五、〇一一	一四	〇、〇一	一五、〇一一	一四	〇、〇一
日高	一二、七七七	三	〇、〇三	一二、〇四一	八	〇、〇七	一四、〇四六	一四	〇、〇一	一四、〇四六	一四	〇、〇一

國別＼年次	二十三年 人口	二十三年 豚數	二十三年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十四年 人口	二十四年 豚數	二十四年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十五年 人口	二十五年 豚數	二十五年 人口一〇〇ニ對スル豚數	二十六年 人口	二十六年 豚數	二十六年 人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	四七、四九九	六四三	〇、九	四八、八九九	七四六	〇、九	四九、二九一	九四〇	〇、九	五〇、三四一	一、〇四八	一、〇
後志	七九、二二一	一九六	〇、二	八一、三三六	一九七	〇、二	八二、三三一	一九八	〇、二	八四、三三一	一九九	〇、二
渡島	一四九、三三一	一四七	〇、一	一五六、九九九	一五一	〇、一	一五九、三三一	一五四	〇、一	一六二、三三一	一五七	〇、一
膽振	一四、〇一一	八〇	〇、五	一三、一二〇	九一	〇、七	一三、一一一	九二	〇、七	一三、一一一	九三	〇、七
日高	一四、〇〇〇	一四六	〇、一	一四、〇四一	一四八	〇、一	一四、〇四一	一四九	〇、一	一四、〇四一	一四九	〇、一

國別＼年次	十勝	釧路	根室	千島	北見	天塩	計
人口	二、四三二	五、九一五	二、四四四	一、二〇一	四、三七七	八、〇六六	三〇、三七六
豚數	一	一	一四	六	五	三	二六三
人口一〇〇ニ對スル豚數	一	一	〇、二	〇、四	〇、一	〇、四	〇、九
人口	二、五三九	九、二一八	一〇、三四〇	一、二九六	五、四六四	八、二九八	三二、二八
豚數	一	一	七	一	一	七	四五
人口一〇〇ニ對スル豚數	〇、四	〇、一	〇、七	〇、一	〇、二	〇、一	〇、一
人口	二、六六一	一〇、〇〇一	一〇、八八八	一、三四一	五、四四四	八、〇六六	三六、二二二
豚數	一	一	八	一	一	七	四七
人口一〇〇ニ對スル豚數	〇、四	〇、一	〇、七	〇、一	〇、二	〇、一	〇、一
人口	二、七二一	一一、二二二	一一、二二二	一、三四一	五、四六六	八、〇六六	三七、二二二
豚數	一	一	八	一	一	七	四八
人口一〇〇ニ對スル豚數	〇、四	〇、一	〇、七	〇、一	〇、二	〇、一	〇、一
人口	二、七七七	一一、二二二	一一、二二二	一、三四一	五、四六六	八、〇六六	三七、二二二
豚數	一	一	八	一	一	七	四八
人口一〇〇ニ對スル豚數	〇、四	〇、一	〇、七	〇、一	〇、二	〇、一	〇、一

國別＼年次	石狩	後志	渡島	膽振	日高	十勝	釧路	根室	千島	北見	天塩	計
人口	五〇、九九九	八四、三三一	一五七、三三一	一三、〇四一	一四、〇四六	二、五三九	九、二一八	一〇、三四〇	一、二九六	五、四六四	八、〇六六	三七、二二二
豚數	一四六	一九八	一五七	九二	一四九	一	一	七	一	一	七	四八
人口一〇〇ニ對スル豚數	〇、二	〇、二	〇、一	〇、七	〇、一	〇、四	〇、一	〇、七	〇、一	〇、二	〇、一	〇、一

	二十七年			二十八年			二十九年			三十年		
	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	一四、八〇六	一、九四	一、一	一、五七、三二	一、七	一、〇	一、六二、八〇一	一、六〇	〇、九	二、〇一、五三五	二、〇	一、〇
後志	一四、〇八	八四	〇、五	一、五六、八二	六八	〇、四	一、五三、八二五	一〇四	〇、六	一、七二、八四五	一、一	〇、六
渡嶋	一九、三六	二六	〇、一	二〇〇、七四	五三	〇、三	一九、三三四	六六	〇、三	二、〇九、三二三	二、六	〇、一
膽振	三三、三〇	三五	一、一	三八、三七	四〇	一、一	四一、七六	六四	一、一	四二、七〇	二、六	〇、六
日高	一八、六〇	四〇	二、二	一九、五七	三四一	一、七	一九、一四	二九一	一、五	二四、八二一	二、九	一、二
十勝	四、八四	二三	四、四	五、五〇九	三二	五、七	七、二三	四〇	五、九	二〇、八二二	二、〇	二、〇
釧路	一七、六八	四四	二、七	一九、八六	五五三	二、九	一九、六三九	五九	二、五	二九、一二三	二、九	二、〇
根室	二四、九二五	九五	〇、三	二七、六七	四四	〇、三	二〇、七七	三三	〇、二	二六、〇一一	二、六	〇、二
千嶋	四、九五	二	〇、五	四、〇四四	?	一	四、四二二	二	〇、五	三、九六六	二	〇、五
北見	二七、五三七	五五	〇、二	二六、五五五	三五	〇、二	二七、二四二	二六	〇、二	二七、四五五	二	〇、二
天塩	一〇、七一	一九	〇、一	二三、〇一〇	一七	〇、一	二三、〇一一	一四	〇、一	二四、〇九九	一四	〇、一
計	六六、六六〇	三四六〇	〇、五六	六八、三三五	八六一	〇、五	七二、八〇一	三〇四〇	〇、四	七六、〇二一	三〇四〇	〇、四

	二十一年			二十二年			二十三年			二十四年		
	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	二、六八、一六八	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五五	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五五	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五五	二、〇四四	〇、九
後志	一、六六、五七二	一四	〇、一	一、六六、四〇〇	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一
渡嶋	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一
膽振	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四
日高	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二
十勝	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八
釧路	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八
根室	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一
千嶋	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五
北見	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一
天塩	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一
計	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一

	二十五年			二十六年			二十七年		
	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九
後志	一、六九、二四一	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一
渡嶋	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一
膽振	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四
日高	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二
十勝	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八
釧路	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八
根室	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一
千嶋	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五
北見	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一
天塩	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一
計	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一

	二十五年			二十六年			二十七年		
	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	三二、五五二	三四四	一、四	三二、五五二	三四四	一、四	三二、六四四	三四四	一、四
後志	一七、〇七〇	一〇四	〇、六	一七、〇七〇	一〇四	〇、六	一七、〇七〇	一〇四	〇、六
渡嶋	三三、一七	三五	〇、一	三三、一七	三五	〇、一	三三、一七	三五	〇、一
膽振	七〇、〇二	一一六八	一、九	七〇、〇二	一一六八	一、九	七一、二四	一一六八	一、八
日高	二六、七八	四七一	一、八	二六、七八	四七一	一、八	二六、三三五	四七一	一、八
十勝	三七、五二	五二一	一、二	三七、五二	五二一	一、二	三七、二〇二	五二一	一、二
釧路	二〇、八〇	二六	〇、二	二〇、八〇	二六	〇、二	二〇、六三	二六	〇、二
根室	二四、〇二	四〇	〇、二	二四、〇二	四〇	〇、二	二四、〇二	四〇	〇、二
千嶋	四、五三	一七	〇、四	四、五三	一七	〇、四	四、五三	一七	〇、四
北見	二七、〇六	二九一	一、〇	二七、〇六	二九一	一、〇	二七、〇六	二九一	一、〇
天塩	一〇、〇〇	一四	〇、一	一〇、〇〇	一四	〇、一	一〇、〇〇	一四	〇、一
計	二〇、二五二	二五一〇	一、二	二〇、二五二	二五一〇	一、二	二〇、二五二	二五一〇	一、二

	二十五年			二十六年			二十七年		
	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數	人口	豚數	人口一〇〇ニ對スル豚數
石狩	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九	二、六四、二五二	二、〇四四	〇、九
後志	一、六九、二四一	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一	一、六九、二四一	一四	〇、一
渡嶋	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一	三、九一、二四〇	三五	〇、一
膽振	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四	五六、三一四	二四	〇、四
日高	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二	二、〇六、〇〇八	三五	〇、二
十勝	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八	二、九〇、二四一	二四	〇、八
釧路	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八	二、九六、三四一	二四	〇、八
根室	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一	二、六〇、一一一	二	〇、一
千嶋	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五	三、九六、六一一	二	〇、五
北見	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一	二、七四、四二一	二	〇、一
天塩	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一	二、〇九、九二一	一四	〇、一
計	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一	三〇、四二、三五五	三〇四〇	〇、一

	三十五年 人口	三十五年 豚數	三十五年 人口一〇〇ニ對スル豚數	三十六年 人口	三十六年 豚數	三十六年 人口一〇〇ニ對スル豚數
北見	六〇、六五三	八	〇、一	三五、七六一	三六	一、〇
天塩	四四、九七八	九六	〇、二	四七、九三三	四七	〇、一
計	一〇四、八三一	七、五六八	〇、七	一〇四、八三〇	六、〇四二	〇、六
宗谷	三七、〇四八	一	〇、〇	三七、〇四八	一	〇、〇
札幌區	三七、一二三	一	〇、〇	三七、一二三	一	〇、〇
小樽區	八、三二一	〇	〇、〇	八、三二一	〇	〇、〇
函館區	一、一三四、六三二	一、一三四、六三二	〇、〇	一、一三四、六三二	一、一三四、六三二	〇、〇
計	一、二五二、三五四	一、二五二、三五四	〇、〇	一、二五二、三五四	一、二五二、三五四	〇、〇

	三十八年 人口	三十八年 豚數	三十八年 人口一〇〇ニ對スル豚數	三十九年 人口	三十九年 豚數	三十九年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十年 人口	四十年 豚數	四十年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十一年 人口	四十一年 豚數	四十一年 人口一〇〇ニ對スル豚數
札幌	八七、〇八四	一、七一九	一、九	一二六、九九九	一、八八	一、八	九八、四九八	一、三六八	一、三	一〇一、六六四	一、一〇五	一、一
空知	一二七、一〇九	一、二五七	一、〇	一八六、三六八	九八八	〇、五	一〇〇、九四四	一、二六八	一、二	一〇九、〇四一	一、一〇一	一、〇
上川	九〇、六六二	一、四四〇	一、六	一二六、三〇〇	一、八六八	一、六	一二四、三三二	一、四四〇	一、一	一三四、七七八	一、四四〇	一、〇
後志	一二四、七二三	三四	〇、〇	一二六、九六六	一二六	〇、一	一二六、八六六	三四	〇、〇	一二六、八六六	三四	〇、〇
檜山	五六、四七三	〇四	〇、一	七二、〇五五	一、三	〇、一	七二、〇五五	〇四	〇、一	六六、〇七一	〇四	〇、一
函館	一一四、一〇八	一三五	〇、一	一二四、三四〇	一二五	〇、一	一二四、三四〇	一三五	〇、一	一二四、三四〇	一三五	〇、一
室蘭	六七、六六八	六一	〇、一	七四、三三	一、一	〇、一	七四、三三	六一	〇、一	八六、四四四	一、一	〇、一
浦河	一九、五八一	〇〇	〇、七	二五、七七	一、二	〇、一	二五、七七	〇〇	〇、七	二四、〇〇〇	一、〇	〇、七
河西	四一、二二八	五八	一、四	四七、三六六	一、一	〇、一	四七、三六六	一、四	〇、一	五五、〇八八	一、二	〇、一
釧路	三二、三五五	五	〇、一	三〇、二二〇	〇、四	〇、一	三〇、二二〇	〇、四	〇、一	二六、三六六	〇、八	〇、一
根室	二七、三三一	六	〇、二	二七、三三四	三	〇、一	二七、三三四	六	〇、二	二五、三三一	一、〇	〇、一

	四十二年 人口	四十二年 豚數	四十二年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十三年 人口	四十三年 豚數	四十三年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十四年 人口	四十四年 豚數	四十四年 人口一〇〇ニ對スル豚數	大正元年 人口	大正元年 豚數	大正元年 人口一〇〇ニ對スル豚數
網走	二五、四六	三六	一、四	二五、四六	三四	一、三	二五、四六	三三	一、三	二五、四六	三一	一、二
宗谷	三八、二四四	一	〇、〇	三七、二四四	五	〇、一	三七、二四四	四	〇、一	三七、二四四	四	〇、一
增毛	四六、三六〇	一二六	〇、三	四六、三六〇	九九	〇、二	四六、三六〇	一〇一	〇、二	四六、三六〇	八八	〇、二
札幌區	六二、八四四	一	〇、〇	六二、四七三	八	〇、一	六二、四七三	二四	〇、一	六二、四七三	二四	〇、一
小樽區	八六、四七一	八四	〇、一	九〇、八八五	一四七	〇、三	八〇、四四四	二四四	〇、三	八〇、四四四	二四四	〇、三
函館區	一、二二、三五四	七、一五四	〇、六	一、二五六、一五一	九、四七四	〇、七	一、二五〇、〇四六	一一、二五四	〇、九	一、二四六、三三四	一一、二五四	〇、九
計	一、二二、三五四	七、一五四	〇、六	一、二五六、一五一	九、四七四	〇、七	一、二五〇、〇四六	一一、二五四	〇、九	一、二四六、三三四	一一、二五四	〇、九

	四十二年 人口	四十二年 豚數	四十二年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十三年 人口	四十三年 豚數	四十三年 人口一〇〇ニ對スル豚數	四十四年 人口	四十四年 豚數	四十四年 人口一〇〇ニ對スル豚數	大正元年 人口	大正元年 豚數	大正元年 人口一〇〇ニ對スル豚數
札幌	一〇四、六九	三、三九	〇、三	一〇四、六九	三、四	〇、三	一〇四、六九	三、三	〇、三	一〇四、六九	三、三	〇、三
空知	一二三、八八六	一、二六一	一、〇	一二六、九九一	一、二六一	一、〇	一二七、一二九	一、二六一	一、〇	一二七、一二九	一、二六一	一、〇
上川	一二七、二二九	一、四〇三	一、一	一二七、二二九	一、四〇三	一、一	一二七、二二九	一、四〇三	一、一	一二七、二二九	一、四〇三	一、一
後志	一二六、八六六	三四	〇、〇	一二六、八六六	三四	〇、〇	一二六、八六六	三四	〇、〇	一二六、八六六	三四	〇、〇
檜山	六六、〇七一	〇四	〇、一	六六、〇七一	〇四	〇、一	六六、〇七一	〇四	〇、一	六六、〇七一	〇四	〇、一
函館	一二四、三四〇	一三五	〇、一	一二四、三四〇	一三五	〇、一	一二四、三四〇	一三五	〇、一	一二四、三四〇	一三五	〇、一
室蘭	八六、四四四	一、一	〇、一	八六、四四四	一、一	〇、一	八六、四四四	一、一	〇、一	八六、四四四	一、一	〇、一
浦河	二四、〇〇〇	一、〇	〇、七	二四、〇〇〇	一、〇	〇、七	二四、〇〇〇	一、〇	〇、七	二四、〇〇〇	一、〇	〇、七
河西	五五、〇八八	一、二	〇、一	五五、〇八八	一、二	〇、一	五五、〇八八	一、二	〇、一	五五、〇八八	一、二	〇、一
釧路	二六、三六六	〇、八	〇、一	二六、三六六	〇、八	〇、一	二六、三六六	〇、八	〇、一	二六、三六六	〇、八	〇、一
根室	二五、三三一	一、〇	〇、一	二五、三三一	一、〇	〇、一	二五、三三一	一、〇	〇、一	二五、三三一	一、〇	〇、一

	四十二年 人口	四十二年 豚數	四十二年 人口一〇〇ニ對スル豚ノ數	四十三年 人口	四十三年 豚數	四十三年 人口一〇〇ニ對スル豚ノ數	四十四年 人口	四十四年 豚數	四十四年 人口一〇〇ニ對スル豚ノ數	大正元年 人口	大正元年 豚數	大正元年 人口一〇〇ニ對スル豚ノ數
根室	二九、二四	八	〇、〇三	二九、七三二	二六	〇、一	二八、三六四	四二	〇、一	二八、八六三	四七	〇、一
網走	四四、一五二	四九八	一、一	五〇、二四八	四四九	〇、九	五五、八九三	五四五	〇、九	六六、八五五	四二	〇、七
宗谷	四〇、九七七	八五	〇、二	四一、一五二	六三	〇、二	五五、九五三	五五	〇、一	六二、八六六	一六	〇、〇五
增毛	二六、一三〇	二六一	〇、一	四一、一五七	四九七	〇、七	五三、七八〇	五六七	〇、五	七三、二一九	一、四五八	〇、二
札幌區	七三、〇二一	二六	〇、〇四	七三、二四一	四二	〇、〇四	九三、二二八	四〇二	〇、四	九二、四二九	二六三	〇、二
小樽區	九一、五四四	一六二	〇、二	九二、九六二	一二七	〇、一	九二、四八五	一〇六	〇、一	九二、九六〇	一一七	〇、一
函館區	八七、五六八	二四四	〇、四	八八、八八八	四二五	〇、五	八九、五四八	五三五	〇、四	九四、四六四	二四七	〇、三
計	一、五六八、七六八	一四九二二	〇、九四	一、六一〇、五四五	二、一六二、四二六	〇、七一	一、六七七、五九三	一〇五八八	〇、六二	一、七九七、〇九九	二、三四五、三四三	〇、九九

農家戸數ト豚ノ頭數

本道ニ於ケル農家戸數ハ明治十九年ニ於テハ一四、五五九戸ニシテ三十一年ニハ七五四一五戸ニ達シ爾來明治三十八年ニ於テ其前年ヨリモ四五二、戸減少シタルヲ見ルノミニテ其他ノ年ニ於テハ年々增加シ明治四十四年ニハ三十一年ノ二倍ニ達セルヲ見ル而シテ農家一〇〇戸ニ對スル豚ノ頭數ハ三十四年ニ於ケル十頭二ヲ最高トシ其後四十二年ニ於ケル九頭七之レニ次ヅ最低ハ三十二年ノ三頭四ニシテ四十二年後ハ又漸減スレトモ概シテ此割合ハ多少ノ增加セルモノト見テ可ナラン

次表ノ如シ

農家戸數ト豚ノ頭數累年表

年次	養豚數	農家戸數	農家一〇〇戸ニ對スル豚頭數
三十一年	三、五二〇	七五、四一五	四、七
三十二年	三、一八九	九四、二八一	三、四

		農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數
		三十一年		三十二年		三十三年		三十四年		三十五年		三十六年	
石狩	三六、六五五	五七	一、二	四二、五四四	四、九	四一、四六六	六、六	四〇、一五九	一、〇	四一、三五二	一〇、七	二、七八三	七、〇
後志	八、三六一	〇、二	一二、三九	二、六	一三、九七七	〇、三	一四、四〇	一、一	一四、五四三	〇、七	一五、八三二	一、七	
尙ホ之レヲ各國別及支廳別ニ示セハ次ノ如シ													
明治三十一年以前ハ統計ニ欠クル所アリ之レヲ省ク													

豚頭數ト農家數累年比較表

三十三年	四、八六二	九八、七六九
三十四年	八、一四五	八〇、七七七
三十五年	七、三六八	一〇四、七三二
三十六年	六、〇六二	一〇八、九五六
三十七年	四、七四二	一二五、九六五
三十八年	七、一四	一二五、三二三
三十九年	一一、三五四	一三〇、六八八
四十年	九、四六七	一二三、四八一
四十一年	三、一九二	一二九、〇一九
四十二年	一四、四〇	一四七、四〇
四十三年	一一、四三六	一三一、三二七
四十四年	一〇、三八八	一三六、一四四
大正元年	一〇、三四四	一六〇、一四四

	三十一年 農家數	三十一年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十二年 農家數	三十二年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十三年 農家數	三十三年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十四年 農家數	三十四年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十五年 農家數	三十五年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十六年 農家數	三十六年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數
渡嶋	七、八七七	四、七	一三、九四一	〇、一	一五、三四三	二、六	一三、一五六	一、〇	一四、九三一	二、〇	一五、九四一	一、〇
膽振	九、一八〇	三、九	一〇、三二七	二、七	九、九九五	七、六	一二、〇二五	七、一	一二、一四七	八、一	一三、六〇八	二、一
日高	三、二八〇	一、六	三、三五九	二、四	四、八九三	三、五	三、七四	一、〇	三、〇三〇	一、五	五、八〇三	六、四
十勝	四、〇七七	一、九	四、一四四	一、一	四、八九九	一、一	三、七四	一、七	三、七六六	一、七	五、八〇八	六、四
釧路	一、三三一	〇、一	一、七六六	〇、八	一、八六八	一、一	一、九六四	一、六	一、七六六	一、一	五、八〇八	六、二
根室	八、九九	四、六	九、四四	二、三	八、七	七、三	七、四一	七、六	七、四一	五、四	七、九	五、七
千島	一四	一四、三	三、三	〇、九	三、三	一、六	一、八〇	三、九	一、七四	五、〇	一、七四	四、〇
北見	二、三五九	〇、四	一、九五〇	〇、五	二、二六七	〇、五	三、五四一	一、七	四、二八五	五、〇二一	四、八七	四、四
天盤	二、四〇一	一、〇	二、八五五	〇、七	三、九二二	〇、七	三、九四四	一、五	四、八〇九	二、〇	四、八〇九	一、六
計	七五、四一五	四、七	九四、六八二	三、四	九八、七六九	四、九	八〇、七五五	一〇、二	一〇四、七五三	七、〇	一〇八、九五六	五、六

	三十七年 農家數	三十七年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十八年 農家數	三十八年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十九年 農家數	三十九年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	四十年 農家數	四十年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	四十一年 農家數	四十一年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	四十二年 農家數	四十二年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數
札幌	一三、〇〇三	五、二	一三、三三一	一、五	一三、九四四	一、三	一三、一四二	一、三	一二、〇八四	九、一	一二、三三一	二、八
空知	一二、九八四	四、四	一二、四六〇	四、八	一二、七一九	四、〇	一二、五九六	六、二	一二、九九八	六、六	一二、九八四	二、四
上川	一二、四四一	五、四	一〇、五八一	一、六	一二、三三二	一、五	一二、五七六	一、三	一、九八五	一、〇	一〇、五八一	一、〇
後志	一三、九三二	〇、六	四、六五九	三、三	一四、二四八	一、四	一五、〇七〇	一、四	一五、八二六	三、二	一四、六五九	三、三
檜山	七、七六四	〇、六	七、四三一	二、七	七、七三四	九、四	八、三五〇	九、九	八、四二三	七、四	七、四三一	二、七
函館	一四、六〇九	〇、七	一四、一〇八	一、〇	一四、八六三	一、九	一四、一二六	二、六	一四、五五四	一、三	一四、八六三	一、六
室蘭	八、一九〇	七、〇	八、九一〇	六、九	九、一九八	八、一	九、四五七	一、〇	一〇、〇二一	一、〇	一〇、一四九	一、〇
浦河	三、九九〇	一、〇	四、一八一	四、八	四、二七三	八、六	四、四四二	九、九	四、六〇六	一、二	一、九五四	一、〇
河西	六、八九八	五、三	六、八三九	八、六	七、五二一	一、三	八、三八七	九、七	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一
釧路	一、八八六	三、二	一、六四二	三、六	一、八七五	六、七	二、二三四	九、八	二、四四六	二、七	二、四四六	三、六
根室	一、二三一	四、二	一、〇二一	五、二	一、〇〇〇	〇、〇	一、三二七	二、三	一、二八四	二、八	一、二八四	二、八
網走	三、三七五	七、一	三、四八三	九、六	三、三九一	一、〇	三、四八五	一、二	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六
宗谷	二、二五三	—	二、八七四	—	二、二三九	一、〇	二、二五〇	一、〇	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四
增毛	三、一九一	二、二	三、三二三	三、八	三、三七三	二、七	四、〇六一	四、七	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六
札幌區	二四九	九六、四	一二九	—	一三四	九六、四	一五六	三二、七	二八二	一四九	二八二	一四九
小樽區	七〇四	一三、四	七三四	一、四	九一一	二四、七	九五三	一二、七	九五四	一八、四	九五四	一八、四
函館區	二六五	四二、三	二六四	五八、〇	三一七	七七、九	三三八	七二、二	三一九	五〇、八	三一九	八、八
計	一一五、九六五	四、一	一一五、五一三	六二、二	一一二、四六一	七、八	一一〇、六八八	八、七	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	九、七

	三十一年 農家數	三十一年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十二年 農家數	三十二年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十三年 農家數	三十三年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十四年 農家數	三十四年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十五年 農家數	三十五年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	三十六年 農家數	三十六年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數
札幌	一三、三七九	二五、〇八八	三、〇七六	九、五	二五、七二一	一〇、六	二四、七三一	八、四	二六、三三九	一一、六	二六、八三七	七、八
空知	二五、〇八八	五、八	二、六四四	二五、七二一	一二、六四四	一、六	二、六四四	一、〇	二、六四四	一、〇	二、六四四	一、〇
上川	三、〇七六	九、五	三、〇七六	一〇、六	三、〇七六	一〇、六	三、〇七六	一〇、六	三、〇七六	一〇、六	三、〇七六	一〇、六
後志	一九、六七九	一〇、六	一九、六七九	一〇、六	一九、六七九	一〇、六	一九、六七九	一〇、六	一九、六七九	一〇、六	一九、六七九	一〇、六
檜山	一二、二四四	二、四	一二、二四四	二、四	一二、二四四	二、四	一二、二四四	二、四	一二、二四四	二、四	一二、二四四	二、四
函館	一四、一〇八	一、〇	一四、一〇八	一、〇	一四、一〇八	一、〇	一四、一〇八	一、〇	一四、一〇八	一、〇	一四、一〇八	一、〇
室蘭	一〇、〇二一	一、〇	一〇、〇二一	一、〇	一〇、〇二一	一、〇	一〇、〇二一	一、〇	一〇、〇二一	一、〇	一〇、〇二一	一、〇
浦河	四、六〇六	一、二	四、六〇六	一、二	四、六〇六	一、二	四、六〇六	一、二	四、六〇六	一、二	四、六〇六	一、二
河西	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一	九、四五八	八、一
釧路	二、四四六	二、七	二、四四六	二、七	二、四四六	二、七	二、四四六	二、七	二、四四六	二、七	二、四四六	二、七
根室	一、二八四	一、〇	一、二八四	一、〇	一、二八四	一、〇	一、二八四	一、〇	一、二八四	一、〇	一、二八四	一、〇
網走	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六	五、三〇九	一、六
宗谷	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四	二、九二九	二、四
增毛	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六	四、八一八	四、六
札幌區	二八二	一四九	二八二	一四九	二八二	一四九	二八二	一四九	二八二	一四九	二八二	一四九
小樽區	九五四	一八、四	九五四	一八、四	九五四	一八、四	九五四	一八、四	九五四	一八、四	九五四	一八、四
函館區	三一九	五〇、八	三一九	五〇、八	三一九	五〇、八	三一九	五〇、八	三一九	五〇、八	三一九	五〇、八
計	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	一四七、四二〇	一一〇、一一九	一四七、四二〇

	四十三年 農家數	四十三年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	四十四年 農家數	四十四年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數	大正元年 農家數	大正元年 農家一〇〇戸ニ對スル豚數
札幌	二三、三七九	五、八	二二、六四四	五、三	二二、八三七	四、三
空知	二五、〇八八	一〇、六	二五、七二一	八、四	二六、三三九	八、〇
上川	三三、〇七六	九、五	三三、〇四七	六、二	二五、一九五	七、八
後志	一九、六七九	一〇、二	二〇、三三四	二、四	二〇、九二五	二、五

	四十三年		四十四年		大正元年	
	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數	農家數	農家一〇〇戸ニ對スル豚數
檜山	八七二	三、六	八、七〇四	二、一	八、四七二	一、七
函館	一五、六九六	二、四	一五、二七三	二、一	一五、一八七	二、〇
室蘭	七、五三二	二〇、六	七、九三九	一八、〇	七、九九一	一〇、七
浦河	四、七四九	一六、一	四、六〇九	一九、七	四、五八二	一七、七
西河	一〇、一六二	五、一	一〇、七〇一	三、八	一〇、七九八	二、三
釧路	二、六三二	五、〇	二、九二一	五、一	二、九九〇	三、三
根室	一、三四二	一、九	一、四一二	二、九	一、四七九	二、五
網走	七、七三八	五、八	七、八一八	七、〇	九、一七七	五、〇
宗谷	四、七九四	一、三	五、三〇五	一、一	五、五〇〇	〇、五
増毛	七、一七八	六、九	八、一九六	四、四	七、二八八	二〇、〇
札幌	三、二四	一三、〇	三四五	一六、五	三五三	八、一〇
小樽	九七一	一三、一	九八五	一〇、七	九六二	一二、二
函館	三、二六	一五〇、三	一、三五、四	二、九九	二、七九	二四、四
計	一五一、三七七	七、六	一五六、二四四	六、六	一六〇、三四四	六、四

豚ノ牝牡別頭數

明治十九年以來全道ノ養豚數ヲ牝牡別ニナストキハ牝頭數ハ常ニ牡頭數ニ比シテ稍多シ然レトモ其差ハ牛馬ノ如ク大ナラス明治三十七年以來牝ニ比シテ牡ノ稍多キハ三十七年三十八年ニ於テ後志、小樽區、三十九年四十年ニ於テ函館區四十二年ニ於テ小樽區四十三年ニ於テ根室及小樽區四十四年ニ於テ根室小樽區及函館區ノミナリ斯ク牝牡頭數ノ差少クシテ殆ント同數ニ近キハ豚ト牛馬等ト異リ蕃殖期間短ク一回ノ分娩ニ多子ヲ產スルノミナラス一ケ年二回分娩セシメ得ルカ故ニ蕃殖ヲ圖ルモノ少クシテ之レヲ育成スルモノ多キニヨルヘシ

各支廳及區ノ牝牡別頭數ハ次表ノ如シ但シ三十七年以前ニ於テハ各國別ナルカ故ニ之ヲ省ク

豚ノ牝牡別頭數累年比較表

年次	牝頭數	牡頭數	牡一頭ニ對スル牝ノ割合	牝一頭ニ對スル牡ノ割合
明治十九年	一七二	一〇四	一、六五	〇、六
二十年	三三二	二三	一、四四	〇、七
二十一年	四四九	三〇五	一、四七	〇、七
二十二年	一、二〇五	八五九	一、四〇	〇、七
二十三年	一、八二八	一、二六七	一、四四	〇、七
二十四年	二、三〇一	一、四五七	一、五八	〇、六
二十五年	二、四〇六	一、五〇五	一、五九	〇、六
二十六年	二、八〇二	一、六一一	一、七四	〇、六
二十七年	二、一二五	一、三〇一	一、六三	〇、六
二十八年	二、三三四	一、五二七	一、五二	〇、七
二十九年	二、三九八	一、六一一	一、四九	〇、七
三十年	二、二七五	一、四二九	一、五九	〇、七
三十一年	二、〇八六	一、四三四	一、四五	〇、七
三十二年	二、〇一九	一、一七〇	一、七三	〇、六

支廳別豚ノ頭數表

年次	牝頭數	牡頭數	牡一頭ニ對スル牝ノ割合	牝一頭ニ對スル牡ノ割合
明治三十三年	三、二七	一、七二五	〇、六	〇、六
三十四年	五、〇〇三	三、二四二	〇、六	〇、五
三十五年	四、三二四	三、〇四三	〇、七	〇、七
三十六年	三、八七七	二、一八五	〇、六	〇、七
三十七年	三、一一九	一、六六三	〇、五	〇、八
三十八年	四、六六四	二、五三〇	〇、七	〇、五
三十九年	五、九七六	三、四九一	〇、六	〇、七
四十年	七、五九〇	三、七六四	〇、五	〇、七
四十一年	七、七八二	四、五一〇	〇、六	〇、六
四十二年	八、三九四	五、八九八	〇、七	〇、六
四十三年	七、〇八一	四、三五五	〇、六	〇、六
四十四年	六、二五九	四、二一九	〇、六	〇、六
大正元年	五、九六六	四、三五八	〇、七	〇、七

年次	支廳區	性	三十七年 牝	三十七年 牡	三十七年 牝ニ對スル牡ノ割合	三十八年 牝	三十八年 牡	三十八年 牝ニ對スル牡ノ割合	三十九年 牝	三十九年 牡	三十九年 牝ニ對スル牡ノ割合	四十年 牝	四十年 牡	四十年 牝ニ對スル牡ノ割合	四十一年 牝	四十一年 牡	四十一年 牝ニ對スル牡ノ割合
上川	札幌		四六五	二二五	〇、五	一、三二	四六六	〇、四	一一九六	五〇三	〇、四	三四五	四三	〇、三	七〇七	三九八	〇、六
	空知		六五四	三一九	〇、五	七五四	三三三	〇、四	六六二	三二六	〇、五	一〇八	四八〇	〇、四	一一〇〇	六六六	〇、六
	計		四九一	一八七	〇、四	九六〇	七五〇	〇、八	一〇九五	八三九	〇、八	三四六	七九七	〇、六	二七一	八三九	〇、七
後志	檜山		四九	四二	〇、八	七七	七八	一、〇	三九一	二二六	〇、六	四四七	三一六	〇、七	三二二	二一一	〇、七
	函館		三〇	一八	〇、六	一三六	六七	〇、五	四九四	二三五	〇、五	五四四	二七一	〇、五	四一一	二〇九	〇、五
	室蘭		六〇	三七	〇、六	九四	四一	〇、四	一七二	九三	〇、五	二七二	一三三	〇、五	二四三	九三	〇、四
	浦河		三五一	二一九	〇、六	三七四	二三七	〇、六	四四四	二九九	〇、七	六八五	三五一	〇、五	一六三六	九八〇	〇、六
	釧路		三三五	九〇	〇、三	二七七	六三	〇、五	二三五	一三二	〇、六	二九二	一四六	〇、五	一四四九	二〇七	〇、六
	河西		三七	二四	〇、六	四〇	一九	〇、五	九二	三四	〇、四	一四五	七三	〇、五	一八五	一五〇	〇、八
	根室		一四三	二二一	一、五	三六五	三六三	〇、六	五五〇	二七八	〇、六	五五〇	二六七	〇、五	四八〇	二八八	〇、六
	網走		三三	一九	〇、六	三六	二四	〇、七	二	一	〇、五	一八	一四	〇、八	二四	二	〇、五
	宗谷		一八四	五五	〇、三	二五〇	八六	〇、三	九二	三四	〇、四	一四五	七三	〇、五	一八五	一五〇	〇、八
	增毛		四〇	二九	〇、七	七四	五二	〇、七	五四	四五	〇、八	一一四	四七	〇、四	一四一	八〇	〇、六
	札幌區		一三〇	一一〇	〇、八	一	四三	一、〇	五三	三六	〇、七	三四	一七	〇、五	一四	一四	〇、五
	小樽區		四六	四八	一、〇	四三	四一	一、〇	一二八	九七	〇、八	一五三	一〇八	〇、七	九二	八四	〇、九
	函館區		八一	三一	〇、四	一〇五	四八	〇、五	九八	一四九	一、五	八四	一六〇	一、九	八四	七八	〇、九
	計		三、一九	一、六三二	〇、五	四、六六四	二、五二〇	〇、七	五、九七六	三、四九一	〇、六	七、五九〇	三、七六四	〇、五	七、七八二	四、五一〇	〇、六
空知	札幌		一九八三	一五二三	〇、八	四五七	二六五	〇、六	四三	二五六	〇、六	二五六	一六〇	〇、六	三四一	二一二	〇、六
	計		一四三八	九三三	〇、六	一、六八二	九七〇	〇、六	一、五〇七	九五三	〇、六	九五三	一、五	〇、六	一四三三	七七〇	〇、五

年次	支廳區	性	四十二年 牝	四十二年 牡	四十二年 牝ニ對スル牡ノ割合	四十三年 牝	四十三年 牡	四十三年 牝ニ對スル牡ノ割合	四十四年 牝	四十四年 牡	四十四年 牝ニ對スル牡ノ割合	大正元年 牝	大正元年 牡	大正元年 牝ニ對スル牡ノ割合
上川	札幌		一九八三	一五二三	〇、八	四五七	二六五	〇、六	四三	二五六	〇、六	三四一	二二二	〇、六
	空知		一四三八	九三三	〇、六	一、六八二	九七〇	〇、六	一、五〇七	九五三	〇、六	一四三三	七七〇	〇、五
	計		三、一九	一、六三二	〇、五	四、六六四	二、五二〇	〇、七	五、九七六	三、四九一	〇、六	七、五九〇	三、七六四	〇、五
後志	檜山		四九	四二	〇、八	七七	七八	一、〇	三九一	二二六	〇、六	四四七	三一六	〇、七
	函館		三〇	一八	〇、六	一三六	六七	〇、五	四九四	二三五	〇、五	五四四	二七一	〇、五
	室蘭		六〇	三七	〇、六	九四	四一	〇、四	一七二	九三	〇、五	二七二	一三三	〇、五
	浦河		三五一	二一九	〇、六	三七四	二三七	〇、六	四四四	二九九	〇、七	六八五	三五一	〇、五
	釧路		三三五	九〇	〇、三	二七七	六三	〇、五	二三五	一三二	〇、六	二九二	一四六	〇、五
	河西		三七	二四	〇、六	四〇	一九	〇、五	九二	三四	〇、四	一四五	七三	〇、五
	根室		一四三	二二一	一、五	三六五	三六三	〇、六	五五〇	二七八	〇、六	五五〇	二六七	〇、五
	網走		三三	一九	〇、六	三六	二四	〇、七	二	一	〇、五	一八	一四	〇、八
	宗谷		一八四	五五	〇、三	二五〇	八六	〇、三	九二	三四	〇、四	一四五	七三	〇、五
	增毛		四〇	二九	〇、七	七四	五二	〇、七	五四	四五	〇、八	一一四	四七	〇、四
	札幌區		一三〇	一一〇	〇、八	一	四三	一、〇	五三	三六	〇、七	三四	一七	〇、五
	小樽區		四六	四八	一、〇	四三	四一	一、〇	一二八	九七	〇、八	一五三	一〇八	〇、七
	函館區		八一	三一	〇、四	一〇五	四八	〇、五	九八	一四九	一、五	八四	一六〇	一、九
	計		三、一九	一、六三二	〇、五	四、六六四	二、五二〇	〇、七	五、九七六	三、四九一	〇、六	七、五九〇	三、七六四	〇、五

	四十一年			四十三年			四十四年			大正元年		
	牝	牡	牝ニ對スル牡ノ割合	牝	牡	牝ニ對スル牡ノ割合	牝	牡	牝ニ對スル牡ノ割合	牝	牡	牝ニ對スル牡ノ割合
上川	一二九	八五三	〇、七	一、一九五	八九八	〇、八	九四六	四八四	〇、五	一、二八	七三二	〇、六
後志	二四八	一七一	〇、七	三八七	二四六	〇、六	二八〇	二三〇	〇、八	二九二	二三九	〇、八
檜山	三一九	一四七	〇、五	二一四	一〇三	〇、五	一二七	六三	〇、五	八五	六一	〇、七
函館	二五五	一四三	〇、六	二三七	一三五	〇、六	二二五	一一二	〇、五	一八三	一一七	〇、六
室蘭	一二六六	九二三	〇、七	一、〇四四	五〇六	〇、五	七六三	六六五	〇、八	五〇五	三四五	〇、七
浦河	三六七	二三〇	〇、六	四九五	二七〇	〇、五	五九五	三一六	〇、四	五三一	二八三	〇、四
河西	四一	二九六	〇、七	三〇四	二一九	〇、七	二三八	一七五	〇、七	一四七	一〇二	〇、七
釧路	一三二	九二	〇、七	八二	五〇	〇、六	八六	六二	〇、七	六〇	三七	〇、六
根室	二	六	三、〇	一二	一四	一、二	一六	一六	一、六	一七	一〇	一、二
網走	三一七	一八一	〇、六	二九九	一五〇	〇、五	三三七	二〇八	〇、六	二三三	二一八	〇、九
宗谷	五二	二三	〇、六	三八	二四	〇、六	三三	二三	〇、六	二〇	八	〇、四
増毛	一五九	一一二	〇、八	二九五	二〇二	〇、七	二一二	一五五	〇、七	二五八	八〇〇	一、二
札幌區	一八	八	〇、四	二八	一四	〇、五	二七二	一三〇	〇、四	一五四	一三九	〇、八
小樽區	六四	九八	一、五	五四	七三	一、三	四四	六二	一、四	五三	六四	一、二
函館區	二〇四	一四〇	〇、七	二五九	二〇六	〇、八	二六五	二一〇	一、二	二六	二二	一、八
計	八二九四	五八九八	〇、七	七、〇八一	四、三五五	〇、六	六、二五九	四、二九	〇、六	五、九六六	四三五八	〇、七

本道ニ於ケル豚ノ價格

各家畜ノ價格ハ其種用ニ供スルモノハ何レモ高價ヲ表ハシ老畜或ハ廢用タルモノハ之ニ比シテ低價ナルハ普通ニシテ殊ニ牛馬ハ其能力用途種類血統ニヨリテ其ノ價格ニ高低アルハ免レサル所ナリ然レトモ豚ニアリテハ牛馬ノ如ク用途ヲ異ニスルモノニアラスシテ等シク肥益セシメテ屠殺ニ供スルモノナルカ故ニ其ノ價格ハ牛馬ノ如ク各個体ニ就テ著シキ差異ヲ見ス牛馬ノ如キハ蕃殖用ニ供スル年限モ長ク從テ其能力血統等良好ナルモノハ其好影響ヲ及ホスコト多キヲ以テ一頭數百圓數千圓或ハ數万圓ノ價格ヲ表ハスモノアリ或ハ蕃殖用ト爲スノ望ナキモノハ僅カニ數十圓ニ過キサルモノアリト雖モ豚ニアリテハ優秀ナル種畜ト雖モ其蕃殖用ニ供スル年限短ク用途モ牛馬ノ如ク種々アルニアラサルヲ以テナリ今本道ニ於テ屠殺用トシテ賣買シタル豚ニ付キ各支廳別統計ニヨリテ明治四十四年迄既往三ヶ年間ノ平均價格ヲ示セハ次表ノ如クニシテ全道平均四十二年四十三年ハ牝ハ牡ニ比シテ稍高價ヲ表ハセルヲ見ルモ四十四年ハ牡ノ方却テ稍高價ニ三ヶ年平均ニ於テハ牝稍高價ナリ斯ク牝ノ高價ナルハ豚ハ生体量ニヨリテ價格ニ高下ヲ生シ牝ハ成畜牡ハ其レニ比シテ幼畜多キニヨルモノナラン各支廳區別ニ之ヲ見レハ三ヶ年平均牝牡共ニ最高價格ヲ示セルハ根室支廳ニシテ一頭二十八圓二十五錢七厘最低ハ河西支廳ニ於テ九圓九十二錢五厘ナリ

豚ノ價格表

（最近三ヶ年平均）

	明治四十二年			四十三年			四十四年			三ヶ年平均		
	牝	牡	平均	牝	牡	平均	牝	牡	平均	牝	牡	平均
空知	一、二〇〇円	九、八六四円	一〇、九六四円	一、一七〇円	一〇、八八一円	一一、七五九円	一、二七三円	一〇、九二九円	一一、八三四円	一、一九八円	一〇、九二二円	一一、一五四円
上川	一、六六二三	一、五七八二	一、六二三三	一、五七八二	一、二四三五	一、二七七三	一、二五八二	一、二五八二	一、二五八二	一、二七七三	一、二五〇三	一、二五七七
後志	一、七〇〇	一、五六〇〇	一、六二〇三	一、九一〇四	一、八九六〇	一、九〇七六	一、九〇〇〇	一、八〇三六	一、九〇三六	一、九〇七六	一、八〇七〇	一、九〇〇〇
檜山	一、八一七	一、二三五〇	一、二〇八一	二、〇一八八	二、七二四〇	二、四八九六	一、八九〇〇	一、六三〇〇	一、八九二〇	一、八九二〇	一、六三〇〇	一、八四六六
室蘭	一、三九四〇	一、二九九〇	一、三四五五	一、一七一〇	一、三五一四	一、二五八〇	一、二九六一	一、二〇七〇	一、二五六〇	一、二〇七〇	一、二〇七〇	一、二五六〇
浦河	一、一七〇〇	一、二二三六	一、二〇七〇	一、二五一四	一、二五八〇	一、二五六一	一、二九六一	一、一〇七四	一、二〇六一	一、二五六一	一、一〇七四	一、二〇六一
河西	七、二二二	六、二〇〇	六、八五七	一、二二二一	一、〇二七	一、一八三二	一、一八三五	一、〇九二九	一、一五三三	一、一八三二	一、〇九二九	一、一五三三
計	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四	一、一二四

	明治四十二年 牝	明治四十二年 牡	明治四十二年 平均	四十三年 牝	四十三年 牡	四十三年 平均	四十四年 牝	四十四年 牡	四十四年 平均	三ヶ年平均 牝	三ヶ年平均 牡	三ヶ年平均 平均
釧路	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、八〇〇	一、〇〇〇	一、九〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、七六〇	一、〇〇〇	一、八二〇
根室	三〇、〇〇〇	二七、三二〇	三八、一三九	三四、七三七	二七、三二〇	三四、〇二七	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	三二、六八七	二四、九二九	二七、一〇〇
網走	七、八七五	九、一六七	八、四二八	二九、六六七	一八、〇〇〇	二九、六六七	一五、一〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一四、三一二	一三、九〇七	一四、〇七七
宗谷	一八、一六七	一八、三三三	一八、二三三	一八、〇〇〇	一五、〇七七	一八、〇七七	一四、〇七七	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇	一三、〇九七	一四、〇〇〇	一三、九七七
増毛	一四、三二〇	一五、〇五八	一四、六二〇	二八、一三九	二七、四三三	二七、七四三	一四、四一四	一四、〇〇〇	一四、四四四	一六、五八八	一四、〇〇〇	一六、七八八
札幌區	一三、一〇〇	一二、八〇〇	一三、〇〇一	一四、〇〇一	一三、二〇〇	一四、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇
小樽區	一四、一五〇	一五、一〇〇	一四、六四九	一三、六四一	一三、三三五	一三、四九一	一二、六三九	一二、八三一	一二、六三九	一三、四九一	一二、八三一	一三、〇九七
函館區	一九、五三一	一五、七七〇	一八、一七三	一五、五〇四	一四、〇七四	一四、九七三	一八、八二二	一八、五二二	一八、一一七	一四、〇五四	一七、八九八	一四、九七三
平均	一五、二三〇	一三、七三六	一四、五五〇	一四、三一九	一三、七二一	一四、〇一一	一三、七七六	一三、九七六	一三、七四九	一三、二四七	一三、二四七	一三、九三九

三、本道ニ於ケル豚ノ生産頭數

本道ニ於ケル豚ノ生産頭數ハ明治三十九年以前ハ統計ノヨルヘキモノ無キヲ以テ三十九年以後ノ累年別ヲ擧クレハ左ノ如シ

	年末現在牝總頭數 牝	年末現在牝總頭數 牡	年末現在牝總頭數 計	年末牝頭數ニ對スル生産率 %	年末總頭數ニ對スル生産牝ノ割合 %
明治三十九年	五、九七六	三、五四三	八〇〇八	一三四、〇〇	八四、三九
四十年	五、五八一	四、七三二	一〇、三一三	一三六、一〇	九八、五三
四十一年	七、五九〇	五、六三四	一二、二二四	一二七、八六	八〇、九四

	明治四十二年	四十三年	四十四年	大正元年
年末牝頭數ニ對スル生産率 %	一三、七九	一三四、〇〇	一三六、一〇	一二七、八六
年末總頭數ニ對スル生産牝ノ割合 %	九〇、三一	九八、五三	九一、〇〇	八〇、九四

四、本道ニ於ケル豚ノ斃死及屠殺

本道ニ於ケル豚ノ斃死頭數

明治三十九年以後ノ豚ノ斃死頭數累年表ヲ示セハ左ノ如シ

	年末總數 牝	年末總數 牡	年末總數 計	斃死頭數 牝	斃死頭數 牡	斃死頭數 計	年末總數ニ對スル斃死率 %	斃死牝ニ對スル牡ノ割合 %
明治三十九年	九、四六七	四八六	一〇、九五三	一、三九〇	六〇三	一、九九三	一一、五	〇、八〇
四十年	一一、三五四	一〇、八八	二一、二四二	二、一六五	一、〇七七	三、二四二	一七、一	一、〇一
四十一年	一二、四九二	一〇、六三	二三、一五五	一、八九六	一、〇三三	二、九二九	一五、四	一、〇九
四十二年	一一、四三六	一〇、六四四	二二、〇八〇	一、七二七	一、一六四	二、八九一	一九、九	一、〇九
四十三年	一〇、三八八	八、三五	一九、七二三	一、五二九	九四二	二、四七一	一四、七	〇、八三
大正元年	一〇、三二四	八、六七	一八、九九一	一、四〇九	八六七	二、二七六	一七、五	〇、九二

本邦全國ニ於ケル生産斃死頭數ノ明治三十九年以降五ヶ年間ノ統計ハ次ノ如シ

	現在數	同上ニ對スル生産率 %	同上斃死率 %
明治三十九年	二八四、七〇八頭	四七	四

	現在數	同上ニ對スル生産率	同上斃死率
明治四十年	三一七、六四〇頭	四二%	七%
四十一年	二八四、七二九	四三	五
四十二年	二八七、一〇七	四四	五
四十三年	二七九、一〇一	四八	五

此ノ生産及斃死率ヲ本道ノ其レニ比スレハ本道ニ於テハ生産率ニ於テ三倍以上ニ達シ斃死率ニ於テハ約三倍ニ達スルヲ見ル蓋シ生産多ク斃死モ亦從テ多シト雖モ生産ト斃死トノ割合ヲ全國ノモノニ比スレハ本道ハ生産ニ於テ稍優ルヲ見ル

本道ニ於ケル豚ノ屠殺數肉量及價額

明治二十七年以後ノ累年表ハ次ノ如シ

	年末現在	屠殺頭數			同上屠肉量	同上價額	年末現在數ニ對スル%	一頭平均肉量
		牝	牡	計				
	頭				斤	圓		斤
明治二十七年	三、四六〇	四〇一	四、二九	八三〇	七〇、二一一	五、九〇四	二三、四	八四、五九二
二十八年	三、八六一	三、二六	三、七七	五〇三	四七、二七五	三、九六〇	一〇、九	八三、九七六
二十九年	四、〇〇九	三、四九	六、三三	九七三	一〇六、二六四	一、三〇六、九	一三、三	一〇九、三一五
三十年	三、一〇四	三、六五	二、七六	六四一	六三、三七七	七三、一八	二〇、七	九八、八六一
三十一年	三、五二〇	四八六	六四一	一、一二七	一〇五、一一八	一、一三、一八	三二、〇	九二、三二〇
三十二年	三、一八九	八六八	八、一二	一、六八〇	一〇〇、八八二	一、七〇〇、三	五一、四	六〇、〇四六
三十三年	四、八六二	七四一	一、一二六	一、八六七	一四六、六一九	二、二、五四一	三八、四	七八、五三三
三十四年	八、二四五	一、三七一	一、二五五	二、六二六	二五八、〇五五	三四、三七八	三一、九	九八、四二八

明治三十五年　頭　七、三六八　一、五四三　一、三〇六　二、八四九　二一八、六八一　二、一七〇　三八、七　七六、七五七

三十六年　六、〇六二　三、三〇三　二、七七八　六、〇八一　四四、一二四八　六二、六〇三　一〇〇、三　七二、五六二

三十七年　四、七六七　二、三八三　二、二三四　四、六一七　四八、九、六七一　一六、三二三　九、六、九　一〇、六〇五六

三十八年　九、一九四　二、一一一　二、〇二八　四、一三九　三四五、二〇二　一、九、二四二　四五〇　八四、一、一四二

三十九年　九、四六七　二、二四三　二、六四一　四、八四四　四二六、五三三　一、二、二七一　一、五一、六　一二、五六、六八〇

四十年　一、三五四　二、八九九　三、八五七　五四五、五九九　一、五、一七九　五九、五　一三、五六、〇四三

四十一年　一、二二三　三、六三一　三、〇七七　五、六、七〇八　五四五、八二七　一三、六、一四　五四、六　八一、三七〇

四十二年　一、四二九二　三、四七八　三、〇二三　六、九一二四〇　一四、五五〇　一四、一〇一　三八、五〇　一二、五六八〇

四十三年　一、四三六　四、〇七八　二、三三〇　六、四〇八　八四九、〇三〇　一、四、〇一　五六、〇　一二、二七六

四十四年　一、〇八八　四、一二三　二、四〇三　六、四二五　七九二、二一七　一、三、二四七　六、一九　一二、四三〇三

大正元年　一、〇三二四　四、〇八七　二、〇六六　六、一五三　七〇七、八六二　一、三、七六三　五九、六　一三、三〇三二

之レニヨリテ見レハ三十二年ハ一頭平均屠肉量最少ニシテ四十三年ハ最高ヲ示ス概シテ言フトキハ漸々屠肉量ヲ增スヲ認ムヘシ

本道ニ於ケル豚ノ生産ト屠殺斃死トノ割合

豚ノ生産三十九年ヨリ四十四年迄ノ六ケ年間ニ於テ四十一年ヲ除ケハ各年末總頭數ニ對スル牝頭數ニ對スル割合モ共ニ增加スルヲ見ルヘシ即チ年末牝ニ對シテハ三十九年ニハ一三四%四十年ハ一三六、一三%四十四年ニ於テハ實ニ一七二、七四%ヲ示ス年末牝頭數ハ全部蕃殖牝ト認ムルコトヲ得スト雖モ亦以テ其生産狀態ヲ窺フニ足ラン

生産スル子豚ハ牝牡相半バスルヲ普通トスルモ前表ニ於テ之ヲ見レハ牝ハ常ニ牡ニ比シテ多キヲ知ル

斃死頭數モ其各年々末總頭數ニ比スル割合ハ時ニ增減アリト雖モ概シテ多少ノ增加ヲ見ルヘク性別ニスレハ牝ニ對スル牡

ノ割合ハ生産ノ其レニ比シテ稍多キヲ知ル

屠殺頭數ハ明治二十七年以來ノ統計ニヨリテ見レハ明治二十六年ニ於テ著シク增加シテ爾來漸々其ノ度ヲ高ムルニ至リタルハ蓋シ人口ノ增殖ニ伴ヒ其ノ需要ヲ增加スルノ結果トシテ當然ナリ

今明治四十四年迄既往五ヶ年間ノ生産斃死屠殺ノ割合ヲ比較スレハ左表ノ如シ

	年末頭數	前年ニ比シテノ增減	生産數	斃死數	屠殺數	生産數ヨリ屠殺斃死數ヲ差引ケル殘
明治三十九年	九、四六七		八、〇〇八	一、〇八九	四、八八四	二、〇三五
四十年	一一、三五四	增一、八八七	一〇、三三三	二、一六五	六、七五六	一、四一二
四十一年	一二、二九二	增 九三八	九、九五〇	一、八九六	六、七〇八	一、三四六
四十二年	一四、二九二	增二、〇〇〇	一二、九〇九	二、二二七	五、五〇〇	五、一八二
四十三年	一一、四三六	減二、八五六	一一、二七八	二、二七八	六、四〇八	二、五九二
四十四年	一〇、三八八	減一、〇四八	一〇、八一七	一、五二九	六、四二五	二、八六三

之レニヨリテ見レハ各年末現在數ハ前年末總數ト其年ノ生産數ヨリ屠殺及斃死頭數ヲ差引タル殘トノ和ニ等シカラサルヘカラス換言スレハ四十年末現在ハ前年末現在數ニ比シテ一、四一二頭ノ增加ヲ來タスヘキモ統計ニヨリテハ一、八八七頭ヲ增シ四十一年ハ一、三四六頭ヲ增スヘキノ理ナルニ僅カニ九三八頭ニ過キス四十二年ニ於テモ同理ニシテ五、一八二頭增加スヘキモ二、〇〇〇頭ニ過キス四十三年ハ二、五九二頭ヲ增加スヘキモ却テ二、八五六頭ヲ減少シテ其差ハ實ニ五、四四八頭ニ達ス四十四年モ同理ニテ三、九一一頭ノ差ヲ見ルヘシ

斯クノ如ク統計上ニ於テ著シキ差ヲ生スルニ至リシハ養豚家ハ年末現在數及生産斃死數及屠殺シタルモノヲ正確ニ屆出テサルニ起因スルモノナランモ亦統計ノ不正確ナルヲ證スルモノナリ

五、豚ノ屠肉本土ヨリ移入

本道各地ニ於テ養豚家ノ本土ヨリ種豚ヲ購入スルモノハ多少アルヘシト雖モ此等ハ調査ノ依ルヘキ材料ニ乏シク其數量價額ヲ知ル能ハス然レトモ屠肉ニ至リテハ需要多キ冬期間ハ之レヲ本土ヨリ移入スルヲ見ル即チ十一月ヨリ翌年四月迄ノ間ニ於テハ屠肉ノ輸送ニ便ナルヲ以テナリ而シテ本土ヨリ購入スルモノハ函館小樽室蘭ノ三港ニシテ今各港警察署ニ於ケル大正三年中ノ移入量調査ヲ示セハ次ノ如シ

	數量	價額	送出地
函館	一、二二三斤	一三八円四五〇	宮城縣石ノ卷
小樽	二〇五〇、	三〇七、五〇〇	右　同
室蘭	八、三一五、	一、二四七、二五〇	青森縣
計	一一、五八八、	一、六九三、二〇〇	

斯クノ如クニシテ室蘭ニ於テ移入スルモノハ其數量他ノ二港ノ四倍以上ニ達スルヲ見ル而シテ此等ノ屠肉ハ各港ニ於ケル肉商カ送出地ノ肉商ト直接取引ヲ爲スモノニシテ輸送ハ石ノ卷青森等ヨリ船便ニヨル

六、本道ニ於ケル養豚ニ關スル施設及其成績

養豚事業ノ普及ヲ圖ランカ爲メニ開拓使ニ於テハ七重勧業試驗場札幌養豚場及真駒内種畜場等ニ種豚貸與拂下ノ施設ヲ爲セリ即チ明治十年家豬貸與規則ヲ設ケ札幌養豚所ノ豚ヲ民間ニ貸與シ其ノ蕃殖ヲ圖リ明治十一年四月七重勧業試驗場ニテハ良種牛馬豚貸與規則ヲ設ケテ同シク民間ニ貸與シ根室牧場ニ於テモ其蕃殖セルモノヲ民間ニ貸與セリ明治十五年札幌養豚場ヲ廢シ育種場ニ屬セシメ十九年七月真駒内牧牛場ノ種畜場ト改稱セラルヽニ至リ同年八月種豚貸與規則ヲ布達ス明治二十年十月育種場ヲ廢シ其飼養ノ豚全部ヲ真駒内種畜場ニ移シ種豚貸與規則ヲ廢止シ種豚貸與手續ヲ告示ス此制度ニヨリテ明治二十八年迄九ヶ年間之レヲ續ケテ年々民間ニ種豚ノ貸與ヲ爲セリ

七重勧業試驗場ハ明治二十七年ニ廢止セラルヽト共ニ從來實施セシ良種牛馬豚貸與規則ヲ廢止ス以上ノ施設ニヨリテ本道

各地ニ養豚ノ增加ヲ來シタルハ明カニシテ今眞駒內種畜場ニ於テ明治二十年以降貸與シタル豚ノ頭數ヲ示セハ次ノ如シ

明治二十年	三八頭（牝　二六　牡　一二）		
二十一年	一五六頭（同　一一一、同　四一、）		
二十二年	九一頭（同　五九、同　三二、）		
二十三年	七五頭（同　四八、同　二八、）		
二十四年	一九頭（同　一四、同　一九、）		
二十五年	五一頭（同　三四、同　一四、）		
二十六年	二六頭（同　一七、同　九、）		
二十七年	五七頭（同　三〇、同　二七、）		
二十八年	一九頭（同　一一、同　八、）		

斯クシテ種豚貸與制度ハ明治二十九年二月之レヲ廢止セリ然レトモ三十年ニ至リテ又貸與シタルモノ四六頭アリ三十一年ニハ種畜場ヨリ雨龍郡深川屯田ニ「バークシヤー」種豚牝八頭牡一頭雜種牝三頭牡一頭計十三頭ヲ移シテ屯田隊ノ牧畜奬勵ニ供シ又雜種牡一頭牝三頭ヲ札幌監獄ニ移シタリ

其後種畜場ニ於テハ種豚ノ拂下出願ニ應シテ民間ノ養豚ニ大ニ貢獻スル所アリ現今同場ニ於ケル種豚ノ拂下手續ヲ示セハ次ノ如シ

當場ニ飼養スル豚ハ「バークシヤー」種ニシテ全身黑色四肢鼻周圍並尾端ニ白毛ヲ有シ成豚ニテ牝ハ四十貫牡ハ六十貫位ニ達シ体格極メテ强健ナリ

拂下價格　牝牡二頭一番金十五圓（牝一頭ナラバ金八圓牡一頭ナラバ金七圓）

種豚ハ春秋二季ニ生產ノモノ何レモ生後六十日以上ヲ經過シタルモノヲ拂下クルモノニシテ以上兩季（普通春ハ五月中秋ハ十月中）ニ拂下ク（キ種豚撰定濟ノ上ハ其頭數並願書提出期限等ヲ示シ北海タイムス新聞紙（場合ニヨリ其他ノ新聞ニモ）ニ拂下公告ヲ掲載スルヲ以テ其際希望ノ頭數ヲ記シタル願書（別ニ書式ナシ）ニ拂下代金爲替ニテ添付ノ上當場ヘ提出スレハ相當調査ヲ了シ許可スヘキモノハ期日ヲ指定シテ受領ノ爲メ出頭スヘキ旨通知スルカ故ニ其期日內ニ印形携帶ニテ來場シ動物ヲ受領セラルヘシ尤モ遠方ヨリノ出願者ニシテ本人受領ノ爲メ來場シ難キ事情アラハ最初ヨリ願書ノ裏面ニ運送方法着驛又ハ取扱運送店名ヲ指定シテ動物ノ托送ヲ請求セラルレハ當場ハ相當信用アル運送店ニ命シ完全ニ荷造セシメ荷造費運賃共先拂ニテ發送ノ手續ヲ爲スヘシ此場合ニアリテハ願書ニ動物ノ領收證ヲ添付セラルヘシ但シ此方法ハ當場ニテ交付スヘキモノヲ便宜願人ニ代リ取扱フヘキモノニ付運送途中ニ於ケル事故ノ爲メ動物ニ損害ヲ受クルモ當場其責ニ任セサルモノナリ荷造ハ普通牝牡一番ニ對シ其費用約二十五錢ヲ要ス運送方法ハ從來ノ經驗ニヨレハ鐵道小荷物便ヲ以テ最モ安全迅速ナリト認ム、以上ノ手續ニヨリテ現今拂下ヲ爲シツヽアリ

種畜場ニ於ケル養豚ニ關スル具体的奬勵ハ以上ノ種豚拂下ニシテ「ハムノ」如キハ年々試驗的ニ少量ノ製造ヲ爲スニ過キスシテ最近大正二年中ニ製造シタルモノハ僅カニ八十九斤ナリ、本縣ニ於ケル養豚奬勵ハ畜產講習會講話會等ニ際シテ農家ニ指導ス其養豚方法ハ普通農家ニ於テハ生產物或ハ厨房ノ廢物殘滓ヲ主食物トシテ飼養シ得ル程度ニ止メシム即チ一頭或ハ二頭トシ其以上ハ警戒セシム而シテ可及的自家ニ於テ越年セシメサルノ方法ヲ取ラシム即チ春期子豚ヲ購入シテ七八ケ月飼養シテ十二月頃ニ之ヲ屠殺シ其肉ハ自家用トシテ鹽藏或ハ簡易ノ方法ヲ以テ「ハム」ヲ製シテ貯藏シテ翌年一ケ年中自家用ト爲サシムルノ方法ヲ普及スルコトニ努ム、而シテ比較的大農或ハ製造ノ廢物等ノ多キモノヲシテ蓄殖ヲ圖ラシメ以テ普通農家ニ春季子豚ノ供給ヲ爲サシム

斯クノ如クナレトモ未タ農家各戶ニ一頭宛ヲ飼養スルノ程度ニ至ラサルハ農家ノミナラス一般ニ肉食ヲ爲スコトニ未タ充分ノ注意ヲ拂ハサルト且ツ肉食ヲ爲スヨリモ寧ロ之レヲ賣却シテ現金收入ヲ希望スルカ故ナリ

七、現今ノ養豚狀況

豐平町本莊養豚場

現今ノ養豚狀況ヲ知ルノ一端トシテ豐平町ニ於ケル本莊氏ノ養豚狀況調査ノ概要ハ左ノ如シ

比較的廉價ナル寧ロ廢棄ニ屬スル飼料ヲ利用シテ優味ノ肉質ニ厚生シテ無形ノ遺利ヲ有價値ニ生產スルハ養豚ノ本義ナル

ヲ知リ明治三十九年十一月末東京淺谷矢賀部種豚場ノ經營ヲ辞シテ幼豚三頭ヲ携ヘ氏ノ郷里タル空知郡江部乙村ニ來リ農業ノ餘暇專ラ飼豚ヲ開始シ飼料ノ豊富ナルヲ利用シテ更ニ眞駒内種畜場ヨリ其ノ拂下ヲ爲シ新血ノ普及ヲ圖リ劣悪種ノ根滅ヲ期シテ四年所期ノ種豚ヲ基礎トシテ明治四十三年十二月二十八日札幌ニ移住シテ爾來生産豚ヲ各地ニ分讓移殖スルニ努メタリ而シテ目下豊平町ニ於テ種豚育成肉豚蕃殖ニ從事ス

飼養

夏期ニ於ケル飼料ハ煮沸シタルモノヲ微温シテ給與シ酷暑ノ數旬間ハ全ク冷却シタルモノヲ給ス給與時間ハ朝早ク夕遲クスルヲ良シトス晝間ハ雜菜根菜等單ニ間食ニ過キサル飼料ヲ給ス冬期ニ於ケル飼料モ微温ト冷却ト兩樣ニ給スルコトアリシモ多ク微温液潤飼料ヲ給シタリ而シテ微温飼料ハ最モ有効ナリ給與ノ度數ハ概シテ二食トシ冬期ハ夏期ニ反シテ朝遲ク夕早クセリ

飼料トシテハ江部乙ニ於テハ澱粉粕醬油粕麥糠野菜屑等ニシテ札幌ニ於テハ魚菜殘物殘飯殘乳、醬油粕麥糠穀、飴粕、酢粕、麥芽、大麥、粃、獸皮、鳥臓骨等ナリ

今各飼料ニ就テ實驗セル所ヲ記セハ次ノ如シ

醬油粕、　現今ニ於テハ之レヲ主良トシテ給與ス若シ之レノミヲ與フルトキハ成豚一頭ハ一日約一貫五百匁ヲ要シ子豚ハ十二ケ月ヲ通シテ平均一日一貫匁ニテ可ナリ此値段ハ十貫匁代二十錢乃至三十五錢ヲ普通トス之レヲ專用シテ一ケ年ニ三十貫ノ生体量アル優良豚ヲ生産シタル實例アリ一日ニ之レノミヲ給與スレハ三錢乃至五錢三厘ヲ要スルノ理ナリ

麥糠、　之レハ骨格構成上良果アルハ實驗ニヨリテ明ニシテ補充飼料トシテ一日一升以内ヲ給與スルヲ可トス之レヲ與ヘタル豚肉ハ一種ノ風味ヲ有シ肉質佳良ナリ　價格ハ札幌ニ於テハ十貫代六十錢、他ノ地方ニ於テハ十錢乃至二十五錢ニシテ江部乙ニテハ約五錢内外ニテ之レヲ購買給與シタリ醬油粕ニ必ス混與スルヲ要ス

澱粉粕、　煑沸シテ泥液狀トナシタルモノヲ用フ他ノ飼料ヲ混與スルトキハ單ニ加味ノ程度ニ止メテ可ナリ之レヲ用フルトキハ一頭一日分ハ運賃燃料共加算シテ數年前ハ四厘餘ナリシモ今日ニ於テハ八厘五毛位トナリ且ツ旭川酒精會社ニテハ飼料トシテ不經濟ナルヲ以テ用フル能ハス

其釀造原料トシテ購入スルニ至レルカ故ニ此價格ニテハ飼料トシテ不經濟ナルヲ以テ用フル能ハス

穀、　良飼料ニシテ一日六升ヲ給與スルトセハ少クモ其增肉量二百匁ヲ示スト雖モ價格ハ八貫代一圓六十錢ニシテ一升四錢ニ當リ一日二十四錢ヲ要シ倒底使用ニ堪ヘス故ニ子豚發育時代及分娩前後ニ用フルニ過キス

飴粕、　子豚育成上良飼料ナレトモ百匁五厘ノ高價ニテハ飼料トスルニ適セス

米糠、　有効飼料ノ一ナレトモ添加飼料タリ即チ醬油粕ニ加味シ或ハ飼料ヲ喰ヒ殘シタル際一握ヲ食器ニ撒クトキハ再ヒ喰ヒ盡スモノナリ一升一錢六厘乃至一錢八厘ニ當ル

大麥粃、　麥酒會社製麥所ノ產出ニシテ煑沸シテ給與スルトキハ効果著シキモ高價ニシテ使用ニ堪ヘス

麥芽根ハ價値ナキカ如シ

脫脂乳、バターミルク、　補助飼料トシテ醬油粕等ニ加給スルトキハ食慾旺盛トナリ効果著シク即チ肉質佳良脂肪質硬度ヲ增シテ最優良豚トナル併シ一升ノ價九厘以上ニテハ收支相償フモノニアラス

魚菜殘滓、　之レハ買入價格トシテハ唯蒐集費ニ過キサルモ多量ニ給與スルトキハ胎兒ノ發育ヲ害シ又ハ乳量不足乳質不良等ニ陷ルノ恐アリ併シ肉豚成長ニ際シテハ急速ニ肉量ノ增加ヲ來スノ利アリ故ニ給與量ヲ加減ス

獸皮及鳥臓骨、　獸皮トハ重ニ豚皮ニシテ鳥臓骨ト共ニ屠場肉店ノ廢棄物ニシテ有効ナル飼料ナリ價モ亦僅少ナレハ補食飼料トシテ給與ス

殘飯殘菜、　蕃殖用牝豚主食トシテハ不可ナルモ離乳後ノ子豚、分娩後母豚二週間以後ノ飼料トシテ有効且ツ瘦セ豚ヲ肥臓セシムル爲メ及肉用豚ノ飼料トシテ有効ナルカ故ニ之レヲ用フ價格モ亦自ラ蒐集スルノ費用ニ過キス

酢粕、　之レハ釀造原料ノ黍又ハ米ニヨリテ一定セサルモ多クノ場合米又ハ碎ケ米ナルカ飼料的價値ハ減却セルモノヽ如シ肥臓率モ醬油粕ニ比シテ劣ル一日ノ用量約一貫匁乃至一貫三百匁ニシテ單用ハ効果少シ價格ハ十貫匁二十五錢乃至三十錢ナルカ故ニ一日一頭分二錢五厘乃至三錢五厘ニ當ル

南瓜、　肥臓飼料トシテ効果大ナラス混和飼料トシテ幼豚ニ特ニ有効ナルカ故ニ煑沸シテ用フ一貫匁約二錢位ナリ之レ

ヲ單用スレハ肉ノ厚サ少ク脂肪黄色トナルノ傾キアリ

野草、ミヅバセウ、セリ、ヨモギ等ハ好ンテ之レヲ食フ殊ニミヅバセウハ肉量増加スルハ慥ナリ

休量十二貫以上ノ豚一頭ニ付單用飼料概算表

一頭一日單用食量	醤油粕	麥糠	澱粉粕	麩	飴粕	米糠	大麥粃	バター	脱脂乳	魚頭骨	其一	其二	酢粕	南瓜	ミヅバセウ	殘飯菜
	貫	貫	貫	貫	升	升	升	升	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	升
右代金	一、三	一、〇	一、三	六、〇	四、〇	四、〇	四、〇	一、五、	一、〇、	三、	一、八、	一、三、	六、	六、		九、
肥膘量	三、六	六、〇		二四、〇	六、〇	八、〇	不定	同	同	同						
	八五、	七〇、	一〇五、	一二〇、	一〇〇、	六五、	七〇	一〇〇	一〇〇	九五、	九〇	八〇、	一〇〇			一〇〇

管理

豚舍ノ構造ハ空知郡江部乙村ニ於テ飼養シタル時ト札幌區ニ於ケルモノト多少ノ差異アリ而シテ目下建設豫定ノ豚舍ハ幅二間長サ五間ノ長方形ノ單列房ニシテ之レヲ五房ニ區分シ一房ノ大サハ間口一間奥行七尺五寸ニシテ房ノ前面通路ハ幅四尺五寸トス床ハ板張トシ僅カノ傾斜ヲ保チテ尿ノ排泄ヲ良クシ尿槽ハ二ケ所ニ設ク房ノ前面主柱ノ高サハ地上一丈後方ハ地上四尺側柱ヲ五尺六寸トシ可及的草葺屋根トシ片下リトス房ノ間壁及後壁ハ六分以上ノ厚板ヲ以テス房ノ間壁及前戸ノ高サハ四尺トシ前戸ハ全部ヲ開閉設備トス屋根ヲ草葺ト爲ストキハ豚舍内ノ温度ノ調節他ノ材料ニ比シ容易ニシテ又冬期間吹雪ノ侵入モ防クコトヲ得ルナリ

夏期ニ於テハ蚊虻ノ襲來ハ最モ有害ナルカ故ニ種用豚ハ豚舍ヨリ低キ牧柵ヲ廻ラセル運動場ニ通セシメテ終日終夜放牧シテ其襲來ヲ防カシム又運動場放牧ハ食傷其他疾病ニ際シ恢復ノ因トナルコトアルカ故ニ必要ナレトモ速年長ク同一ノ運動場ヲ使用スルハ排泄物利用ヲ爲スヘキ農圃經濟上不利ナルハ勿論豚ノ健康上ニモ惡影響ヲ及ホスコトアレハ之レヲ區劃シテ一年毎ニ變更スルヲ肝要トシ之ヲ實行ス豚ハ水浴シテ皮膚ノ清潔ヲ保ツモノナルカ故ニ運動場ノ一部回所ニ冷水ヲ貯溜シテ適宜ニ浴セシム

冬期ハ本道ニ於テハ日光等ノ外温ノ恩典ナキ故ニ密閉シテ外壁ノ包圍ヲ厳ニシ微雪ノ透侵モ許サヽルコトヽシ且ツ褥草ハ日毎ニ乾燥セルモノヲ與ヘテ濕潤ノ氣ノ生休ヲ浸サヽル程度ヲ持續スルヲ要ス

飼料ノ調製ハ豚舍ニ炊事場ヲ設ケ此所ニテ煮沸スヘキモノハ其釜ヲ用ヒテ煮沸シ後微温トナシ調理シテ給與ス豚ノ食シ終ルヲ待チテ直ニ豚舍ノ掃除ヲナシテ農圃ノ仕事ニ從フ晝間ハ夏期ニ於テハ雜草ヲ刈リテ晝食トシテ給與シ休息時ヲ利シテ糞尿ヲ掃除ス夕刻ニ至レハ夕食給與ヲ終リテ又豚舍ヲ掃除ス而シテ夜一回豚舍ヲ巡視ス、斯クシテ夏期十頭内外ヲ飼育スル時ニ於テモ雨天ノ際馬車ヲ以テ粕類其他ノ飼料蒐集ニ市中ニ出デ朝夕ノ飼育ヲ盡スモ猶農耕一人當馬ト共ニ三町歩ヲ耕耘シ得タリ之レヲ以テ推ストキハ農家一戸豚一頭ヲ飼育スルハ極メテ易々タルコトナリ

最近四年間飼養豚増減法

年次	種類	前年繰越 牝	牡	出産 牝	牡	買入 牝	牡	屠殺 牝	牡	斃死 牝	牡	賣却 牝	牡	年末現在 牝	牡	合計
明治四十四年	雜															
	洋	二	一	一三	一四	一〇	一二									一四
大正元年	雜			八	一	四	七									一一
	洋	一	二	一三	二	二五	三六									二
同二年	雜	三	五	二	七	二	一									一
	洋	五	九	五	二	三	一									一
同三年	雜	七	一〇	一	一	一	一									一
	洋	三	五	二	一	一	一									一

大正三年末現在數ハ少數ナレトモ大正四年ニ於テ豚舍新築ト共ニ頭數ヲ増ス計劃ナリ

種付期節ハ十一月ヲ好適トシ此期ニ種付スルモノハ三月分娩ヲ終リ五月初旬ニ離乳シ更ニ六月中旬迄ニ次回ノ種付ヲ了シ十月中旬迄ニハ分娩ヲ終ルノ方針ヲ採ル然レトモ十一月ノ種付期遲レテ一月或ハ二月ニ至リテ種付ヲ行フコトアリ然ルトキハ次回ノ種付ヲ延期シテ十一月ニ之レヲ行ヒ一ヶ年一回ノ分娩ニ終ルコトアリ或ハ又此種付延期中ニ肥膘ノ結果不姙ニ終ハルコトアリ

蕃殖歩合ハ初產ノモノニテ五頭第二產ノモノ七頭位ヲ分娩スルモノ最モ多ク時ニ或ハ十四頭ヲ分娩スルコトアリ氣候ハ此成績ニ大影響アルモノヽ如シ例ヘハ明治四十年ヨリ四十三年迄一牝豚ニ就テ實驗セルニ飼養期間五十ヶ月ニ於テ分娩回數六回其分娩頭數三十六頭一回平均六頭ニ當ル尤モ此中二十五頭ノ成育ヲ見タルノミ又大正三年春期ニ於テ初產二十一頭ニ就テ驗スルニ受胎率七六、二%(受胎十六不受胎五)ニシテ百〇四頭ヲ分娩セリ即チ一頭平均分娩數ハ六頭五ニ相當ス又明治四十年以降同四十三年ニ至ル平均受胎率ハ八八、八%一頭平均分娩數六頭五五ニシテ四十三年ヨリ大正元年ニ至ル蕃殖用牝ニ就テ見レハ初產及第二產牝豚八頭ノ平均受胎率六〇、%ニシテ一頭平均分娩數九頭ニ當ル

養豚收支計算

年々ノ詳シキ計算ヲ記載スルコト能ハサルモ札幌ニ於ケル一ヶ年ノ收支ヲ示セハ次ノ如シ

支出總額　一六一円一五〇

內譯

五年割創業費年一割重利付償還金	四一円一五〇
四月迄雜費	五〇、〇〇〇
一ヶ年間飼料費	七〇、〇〇〇

收入總額　四〇九円四二五

內譯

成豚三頭五月迄ニ賣却	六〇円〇〇〇
子豚五月迄ニ十二頭賣却	一四〇円〇〇〇
春期產豚十一月迄ニ賣却十五頭代	一二〇、〇〇〇
糞尿二千五百五十五荷代一荷三錢五厘	八九、四二五

差引利益金二百四十八圓二十七錢五厘

賣却方法

旭川方面ニ於テハ一部ハ骨付卸賣ノ市價ニヨリテ賣買スルモノアルモ一般ニハ金融ノ關係其他ノ事情ニヨリテ市場ノ便否ニ制セラレ生豚仲買人ノ手ヲ經ル慣例ナリ此時ニ當リテハ見積賣買ニシテ賣却見積價格ト購入評價額トハ間隔アルヲ常トス札幌附近ニ於テモ肉商ト直接取引ヲ爲シタルコトアリシモ多クハ仲買人ト取引ヲ爲シ豚舍引渡ヲノ爲メ當時ノ生体檢査相場ニ比シテ廉價ニ賣却スルヲ常トセリ而シテ肉用豚賣却ノ場合ハ牝及去勢豚ハ牡ニ比シテ市價一斤ニ就キ一錢五厘ノ高價ヲ保ツモ猶肉商ノ歡迎ヲ受ク

賣買ニハ生体掛ケ見常買及骨付屠肉量取引ノ三種ナレトモ屠肉量取引ハ賣却者ニ於テハ時間ヲ空費スルコト夥シクシテ生產者ノ忌避スル所ナリ他ノ二法ハ豚舍ニ於テ代金引換ノ慣習ナルカ故ニ此方法ヲ執リ其ノ生体受渡シ期限ヲ定ムルヲ普通トス

地方ニ於ケル出張購入ハ往復旅費ハ賣買豚評價額ヨリ控除サルヽヲ常トス

八、本道養豚ノ將來

(一) 本道將來ノ養豚狀況

(1) 養豚ハ有利ナリ

豚ハ農家ニ於テ必要欲クヘカラサルモノニアラサルモ其副業トシテ有利ナルモノナリ購入價格ヲ要スルコト少ナキカ故ニ容易ニ購入スルコトヲ得ルノ便アリ若シ數頭ノ豚ヲ育成スルトキハ牛馬ノ如キ大家畜ヲ購入スルノ資本トモナリ資金乏シ

キ農家ハ爲メニ大家畜ヲ得ルノ一法トモナスヲ得ヘシ而シテ豚ハ從來廢物利用ノ目的ヲ以テ飼養セラレタルモノナルモ近年飼料ノ消化成分及飼養法ノ研究著シク進歩發達シタルヲ以テ「バター」製造ノ副產物タル脫脂乳ノ利用ハ勿論穀實及根菜類ヲ原料トセル工場ノ副產物等ニヨリ生育ヲ促進シ後穀實等ニテ肥膘法ヲ完フスルニ至リ又一方豚ノ早熟肥膘性ノ著シク增進セルタメ經濟上他ノ家畜ノ及ハサル良成績ヲ示スニ至レリ之レ消化吸收力ノ强大ナル結果ニシテ穀實三百七八十斤乃至四百斤ヲ與フレハヨク生体量百斤ヲ增加スルモノト稱セラル、ニ至レリ即チ食物ノ割合ニハ多大ノ脂肪及肉ヲ增加スルヲ以テ巧ニ自家ノ副產物ヲ利用スルトキハ最モ安價ニシテ良肉ヲ產シ以テ家庭ノ食膳ヲ賑ハスコトヲ得ヘク餘リアレハ販賣用ニ供スルコトヲ得ヘシ

又蕃殖速カナル点ハ他ノ家畜ノヨク及フモノナシ即チ懷胎期間ハ百十五日ヲ以テ平均トシ生後十ヶ月頃ヨリ種付ヲナシ一ケ年ニ二回分娩セシムルコトヲ得ルカ故ニ多キハ一ケ年ハ二十頭以上少ナクトモ十頭內外ノ增殖ヲナスヘク生後七八ヶ月ニシテ生体量二百斤前後ニ達シ市場ニ出スコトヲ得ヘシ

(2) 養豚業ハ盛衰アリ

以上ノ如ク蕃殖速カナルモノナレハ養豚ヲナスニ當リテハ自家ノ副產物ナル飼料ノ數量ヲ考ヘテ蕃殖牝豚ノ數ヲ定メサルヘカラス然ラサレハ往々飼料不足ヲ來タシ遂ニ損失ヲ招クヘシ殊ニ小農家ニアリテハ蕃殖ヲナスヨリモ仔豚ヲ購入シテ之ヲ育成スルヲ得策トスヘシ又豚ノ蕃殖ヲナス場合ニアリテハ仔豚トシテ相當價額ニ賣却シテ若シ飼料ノ餘裕アル程度ニ於テ育成ヲナスヘキナリ要スルニ飼料ノ多少ハ購入シ得ヘキモ凡ソ飼料ノ七八分ハ自家生產物ヲ利用シ購入スル飼料ハ二三分ニ止メサレハ危險ナルモノト考ヘサルヘカラス本道養豚家ノ失敗ノ蹟ヲ尋ヌルニ十中ノ七八ハ此点ニ存スルヲ見ル之レ本道農家ハ歐米諸國ノ農家ノ如ク豚ノ飼養ニ好適ナル副產物ニ乏シキモ此等ノ点ニ考フルノ隙ナク養豚ノ有利ナルヲ聞キ之ヲ始ムルモ醬油粕、澱粉粕ノ如キ購入飼料ノミニ依賴スルニ至ルヲ以テ數量多カラサル糟粕ノ價額ハ日々ニ騰貴シ各自損失ヲ知リツ、モ相互ニ飼料價額ヲ糴リ上クル遂ニ再ヒ始ムルコト能ハサルニ至リテ養豚ハ極メテ不利ナリト稱シテ廢止シ從テ豚ノ不足トナリ豚ノ價額暴騰シテ之ヲ廢止セサリシ少數ノ養豚家ハ意外ノ收利ヲ得ルニ至ルヘシ之ヲ目擊セルモノハ再ヒ養豚ヲ始メ又同一ノ結果ニ陷ルモノナリ斯クシテ本道養豚ノ過去ハ一盛一衰交互ニ來ルノ觀アルヘシ故ニ此後ニ於テ養豚ヲナスニ當リテ斯クノ如キ古キ歷史ヲ繰リ返スニ於テハ其盛大ヲ期スルハ蓋シ不可能ニシテ改良スヘキノ点ナリ

(3) 養豚ノ發達遲々タリシ原因

本道養豚ハ以上ノ如ク一盛一衰アリシノミナラス其發達ノ遲々タリシハ販路ニ於テ歐米諸國ノ如ク未タ開ケサルモ亦一因ト謂ハサルヘカラス即チ「ハム」「ベーコン」腸詰及撫豚等ノ製造起ラサルニヨリ自然生肉販賣ニ止マルノ結果肉商ノ購買價額低廉ニシテ利益多カラサルヲ以テナリ又養豚ヲ遲々タラシムルハ屠場法ノ煩累多キモ一因タリシ即チ北海道廳訓令ニヨリテ自家用ニ供セントスル場合ニ於テハ屠場以外ニ於テ屠殺解体スルコトヲ得ルト雖モ獸醫ノ檢診書ヲ添ヘ所轄警察官署ニ屆出血液汚物汚水ノ處置ニツキ指示ヲ受クヘシトノ施行細則ニヨラサルヘカラス此獸醫ノ檢診書ヲ得ンカ爲メニ二里三里或ハ五六里ノ外ニ獸醫ヲ搜セサルヘカラサルカ如キ殖民地ナル本道ニ於テハ其煩雜ナルヨリ遂ニ養豚ヲ中止スルノ止ムナキ点ナキニアラス之レカ爲メニ自家飼養ノ豚ヲ屠リテ客ニ饗スルカ如キモ容易ナラス從テ肉食趣味ヲ失フニ至ル斯クノ如キ狀態ナリシモ大正元年ヨリ此施行細則ハ改正セラレテ獸醫ノ檢診書添付ノ必要ナキニ至リ且ツ土地ノ狀況ニヨリ屠場外ニ於テスルニアラサレハ獸畜ノ屠殺解体ヲ爲スコト能ハサル事情アルトキハ之レヲ所轄警察官署ニ願出許可ヲ受クヘシトノ事實ヲ示サレタルカ故ニ自家用トシテ屠殺スルニ便ニシテ之レニ伴フテ肉食趣味ヲ增加シ養豚ノ發達ヲ來スヘシ、モシ此施行細則ヲシテ自家用ニ供スル目的ヲ以テ豚ヲ屠殺スル場合ハ警察官署ノ許可ヲ受クルヲ要セス單ニ屆出ニ止ムルトキハ一層便ナラン

(4) 豚ノ種類

明治初年ヨリ今日迄本道ニ輸入セル豚ノ種類ハ「サツフオーク」「バークシヤー」「エセックス」「チエスターホワイト」等ノ種類及支那種等ニシテ今日各地ニ飼養スルモノハ多ク此等ノ種類或ハ其雜種等ノ其地方ニ馴化シタルモノニシテ近年ニ至リテハ東京地方ヨリ「バークシヤー」「ヨークシヤー」等ヲ購入シテ飼養スルモノ亦稀ナラス而シテ本道農家ニテ生肉用豚ヲ目的トスル場合ニ於テハ早熟種ニシテ肥膘性ニ富ミ又肉付歩合ノ良好ナルモノヲ撰フヘシ敢テ純粹種雜種トニ意ヲ用

キ農家ハ爲メニ大家畜ヲ得ルノ一法トモナスヲ得ヘシ而シテ豚ハ從來屠物利用ノ目的ヲ以テ飼養セラレタルモノナルモ近年飼料ノ消化成分及飼養法ノ研究著シク進歩發達シタルヲ以テ「バター」製造ノ副產物タル脫脂乳ノ利用ハ勿論穀實及根菜類ヲ原料トセル工場ノ副產物等ニヨリ生育ヲ促進シ後發實等ニテ肥膘法ヲ完フスルニ至リ又一方豚ノ早熟肥膘性ノ著シク增進セルタメ經濟上他ノ家畜ノ及ハサル良成績ヲ示スニ至レリ之レ消化吸收力ノ强大ナル結果ニシテ穀實三百七八十斤乃至四百斤ヲ與フレハヨク生体量百斤ヲ增加スルモノト稱セラルヽニ至レリ即チ食物ノ割合ニハ多大ノ脂肪及肉ヲ增加スルヲ以テ巧ニ自家ノ副產物ヲ利用スルトキハ最モ安價ニシテ良肉ヲ產シ以テ家庭ノ食膳ヲ賑ハスコトヲ得ヘク餘リアレハ販賣用ニ供スルコトヲ得ヘシ

又蕃殖速カナル点ハ他ノ家畜ノヨク及フモノナシ即チ懷胎期間ハ百十五日ヲ以テ平均トシ生後十ヶ月頃ヨリ種付ヲナシ一ケ年ニ二回分娩セシムルコトヲ得ルカ故ニ多キハ一ケ年ハ二十頭以上少ナクトモ十頭內外ノ增殖ヲナスヘク生後七八ヶ月ニシテ生体量二百斤前後ニ達シ市場ニ出スコトヲ得ヘシ

(2) 養豚業ハ盛衰アリ

以上ノ如ク蕃殖速カナルモノナレハ養豚ヲナスニ當リテハ自家ノ副產物ナル飼料ノ數量ヲ考ヘテ蕃殖牝豚ノ數ヲ定メサルヘカラス然ラサレハ往々飼料不足ヲ來タシ遂ニ損失ヲ招クヘシ殊ニ小農家ニアリテハ蕃殖ヲナスヨリモ仔豚ヲ購入シテ之ヲ育成スルヲ得策トスヘシ又豚ノ蕃殖ヲナス場合ニアリテハ仔豚トシテ相當價額ニ賣却シテ若シ飼料ノ餘裕アル程度ニ於テ育成ヲナスヘキナリ要スルニ飼料ノ多少ハ購入シ得ヘキモ凡ソ飼料ノ七八分ハ自家生產物ヲ利用シ購入スル飼料ハ二三分ニ止メサレハ危險ナルモノト考ヘサルヘカラス本道養豚家ノ失敗ノ蹟ヲ尋ヌルニ十中ノ七八ハ此点ニ存スルヲ見ル之レ本道農家ハ歐米諸國ノ農家ノ如ク豚ノ飼養ニ好適ナル副產物ニ乏シキモ此等ノ点ニ考フルノ隙ナク養豚ノ有利ナルヲ聞キ之ヲ始ムルモ醬油粕、澱粉粕ノ如キ購入飼料ノミニ依賴スルニ至ルヲ以テ數量多カラサル糟粕ノ價額ハ日々ニ騰貴シ各自損失ヲ知リツヽモ相互ニ飼料價額ヲ糴リ上ケ遂ニ再ヒ始ムルコト能ハサルニ至リテ養豚ハ極メテ不利ナリト稱シテ廢止シ從テ豚ノ不足トナリ豚ノ價額暴騰シテ之ヲ廢止セサリシ少數ノ養豚家ハ意外ノ收利ヲ得ルニ至ルヘシ之ヲ目擊セルモノハ再ヒ養豚ヲ始メ又同一ノ結果ニ陷ルモノナリ斯クシテ本道養豚ノ過去ハ一盛一衰交互ニ來ルノ觀アルヘシ故ニ此後ニ於テ養豚ヲナスニ當リテ斯クノ如キ古キ歷史ヲ繰リ返スニ於テハ其盛大ヲ期スルハ蓋シ不可能ニシテ改良スヘキノ点ナリ

(3) 養豚ノ發達遲々タリシ原因

本道養豚ハ以上ノ如ク一盛一衰アリシノミナラス其發達ノ遲々タリシハ販路ニ於テ歐米諸國ノ如ク未タ開ケサルモ亦一因ト謂ハサルヘカラス即チ「ハム」「ベーコン」腸詰及壓豚等ノ製造起ラサルニヨリ自然生肉販賣ニ止マルノ結果肉商ノ購買價額低廉ニシテ利益多カラサルヲ以テナリ又養豚ヲ遲々タラシムルハ屠場法ノ煩累多キモ一因タリシ即チ北海道廳訓令ニヨリテ自家用ニ供セントスル場合ニ於テハ屠場以外ニ於テ屠殺解体スルコトヲ得ルト雖モ獸醫ノ檢診書ヲ添ヘ所轄警察官署ニ屆出血液汚物汚水ノ處置ニツキ指示ヲ受クヘシトノ施行細則ニヨラサルヘカラス此獸醫ノ檢診書ヲ得ンカ爲メニ二里三里或ハ五六里ノ外ニ獸醫ヲ搜セサルヘカラサルカ如キ殖民地ナル本道ニ於テハ其煩雜ナルヨリ遂ニ養豚ヲ中止スルノ止ムナキ点ナキニアラス之レカ爲メニ自家飼養ノ豚ヲ屠リテ客ニ饗スルカ如キモ容易ナラス從テ肉食趣味ヲ失フニ至ル斯クノ如キ狀態ナリシモ大正元年ヨリ此施行細則ハ改正セラレテ獸醫ノ檢診書添付ノ必要ナキニ至リ且ツ土地ノ狀況ニヨリ屠場外ニ於テスルニアラサレハ獸畜ノ屠殺解体ヲ爲スコト能ハサル事情アルトキハ之レヲ所轄警察官署ニ願出許可ヲ受クヘシトノ事實ヲ示サレタルカ故ニ自家用トシテ屠殺スルニ便ニシテ之レニ伴フテ肉食趣味ヲ增加シ養豚ノ發達ヲ來スヘシ、モシ此施行細則ヲシテ自家用ニ供スル目的ヲ以テ豚ヲ屠殺スル場合ハ警察官署ノ許可ヲ受クルヲ要セス單ニ屆出ニ止ノシムルトキハ一層便ナラン

(4) 豚ノ種類

明治初年ヨリ今日迄本道ニ輸入セル豚ノ種類ハ「サツフオーク」「バークシヤー」「エセックス」「チエスターホワイト」等ノ種類及支那種等ニシテ今日各地ニ飼養スルモノハ多ク此等ノ種類或ハ其雜種等ノ其地方ニ馴化シタルモノニシテ近年ニ至リテハ東京地方ヨリ「バークシヤー」「ヨークシヤー」等ヲ購入シテ飼養スルモノ亦稀ナラス而シテ本道農家ニテ生肉用豚ヲ目的トスル場合ニ於テハ早熟種ニシテ肥膘性ニ富ミ又肉付歩合ノ良好ナルモノヲ撰フヘシ敢テ純粹種雜種トニ意ヲ用

フルノ要ナシト雖モ強テ種類ヲ言フトキハ「小ヨークシヤー」種ヲ適當トスヘシ又放牧地ノ利用及「ハム」「ベーコン」等ノ製造ニ適スル地方ニアリテハ「バークシヤー」種ノ如キヲ撰フヘキナリ

蕃殖用ニ供セントスルモノニアリテハ其種類ノ特徴ヲ具備シ遺傳力強ク多産ナルヲ要ス此点ニ於テ純粹種ナルコト緊要ナリトス而シテ又近親蕃殖ノ害ニ陷ラサル樣配合ノ注意ヲ要ス

以上ノ如キ点ヨリシテ將來ニ於テハ地方ノ狀態ニ應シテ種類ヲ撰定シテ普通農家ハ春期仔豚ヲ購入シテ飼育シ飼料豊富ナルモノハ蕃殖ヲ圖リテ仔豚ノ供給ヲ爲スノ方針ヲ採ラシムレハ過去ニ於ケルカ如キ盛衰ナカルヘシ

(5) 他ノ家畜飼養ト衝突セス

農家ニ於テハ其生産ヲ益々增進シ收入ヲ多カラシメントスルニハ大家畜ハ勿論ニシテ羊豚鷄モ合セテ飼養セサルヘカラス

現今本道ノ農家ハ農業經營上必要ナル馬匹スラ之ヲ飼養セサルモノアリ然レトモ將來ニ於テ大家畜及小動物ヲ悉ク飼養スルニ至ラハ飼料ニ不足ヲ來タスコトヲ恐ルヽモノアラン豚ノ飼料ハ牛馬羊鷄等ト同一ノモノナキニアラスト雖モ短期間飼養ノ外ハ多クハ異ルモノナルニヨリ牛馬羊ヲ飼養スルモ豚ヲ飼養シ得サルコトナリ酪農業ノ副産物ノ如キ或ハ農産製造ノ副産物タル糟粕等ノ産出ヲ增加スルニ至ラハ養豚業ノ盛大ヲ來スハ明ナリ歐米各國ニ於テ養豚ノ盛ナルハ全ク酪農ノ副産物タル脫脂乳ノ潤澤ナルニ原因スヘク本邦ニ於テモ千葉縣ノ如キハ明治四十三年末統計ニヨリテ本道ノ總數ニ比シテ猶四千餘頭ノ多キヲ見ル即チ「豚ハ牛ノ御供ナリ」ト云フモ過言ニアラス故ニ此等ノ副産物及自家ノ殘滓作物ノ屑物等ヲ利用スルニ止ムル程度ニ於テハ決シテ他ノ家畜ノ飼養ト衝突スルモノニアラス且又本道ノ放牧地ハ牛馬及緬羊ヲ放牧シ尙ホ豚ヲ飼養スルニ十分ノ餘地アルコトハ畜牛ノ部ニ於テ述ヘタルカ如シ

(6) 豚肉ハ貯藏容易ナリ

豚ハ蕃殖速ニシテ肥膘力ニ富ムヲ以テ一ケ年前後ニシテ屠殺スルニ適シ而モ屠殺ノ多クハ秋冬ノ候ニアルヲ以テ生肉ノ供給其需用ニ超過スルニ至ラハ之レヲ擔藏肉「ハム」「ベーコン」鵬詰等ノ肉製品トナストキハ貯藏スルコト容易ナリ之レ即チ將來養豚業ヲシテ盛ナラシムルコトヲ得ルノ点ニシテ農家每戸一頭位ヲ飼養スルモ其生肉ノ處置ニ窮スルカ如キコトナク製品ニシテ自家用ノ餘裕アラハ之レヲ賣却スヘク又此等ノ製造所ノ設立ヲ見ルニ至ラハ其製品ハ之レヲ輸出スヘク船艦ニ供給スヘク或ハ軍隊等ノ需用ヲ充タスヘク海外ヨリノ輸入ヲ防止スルコトヲ得ルニ至ラン、大正二年中ノ「ハム」「ベーコン」ヲ支那ニ向テ輸出シタル額ハ稅關ノ調査ニヨレバ約三万三千四百圓ニ達シ又四十四年ノ歐米ヨリノ輸入ハ二十六万三千六百五十六斤價額七万九百〇五圓ニ達スルヲ見レハ養豚ノ國家經濟上ニ及ホス影響ヲ知ルニ足ラン

又農家自家用トシテハ簡易ニ之レヲ製造シテ以テ獸肉購入ノ費ヲ省クコトヲ得ヘシ例ヘハ室蘭支廳管內ノ模範農家タル有珠郡伊達村高野貞助氏ノ如キハ每年春季子豚ヲ一頭或ハ二頭ヲ購入シ自家ノ廢物ヲ利用シテ飼育シ十二月ニ至リテ之レヲ屠殺シ其肉ハ擔豚及「ハム」トシテ貯藏シ翌年一ケ年間ハ獸肉ヲ他ヨリ購入スルコトナシト云フ其「ハム」ヲ製スルニ當リテハ特ニ燻烟室ヲ設立スルニアラス自家爐上ニ吊シテ朝夕ノ燃火ヲ利用スルカ如キハ一般農家ノ好模範トスルニ足ルモノニシテ斯クノ如キハ將來本道各農家ニ普及スヘキ方法ナリ

(二) 本道將來ニ於ケル養豚數

(1) 農耕地ヨリ推定セル將來ノ頭數

本邦ニ於ケル最近調査ニヨリテ農耕地ト養豚數トノ割合ヲ見ルトキハ耕地一〇〇町ニ對シ四頭八一ニシテ最高ハ沖繩縣ノ一五五頭四一トシ鹿兒嶋縣ノ二一頭八一神奈川縣ノ一七頭二七之レニ次ク而シテ本道ニ近キ奥羽六縣中ニ於テハ宮城縣最高ニテ七頭〇六ニ當リ福島縣ノ二頭一九之レニ次ク

今大正二十年ニ於ケル豚數ヲ推定スレハ同年ノ本道農耕地一、四五〇、〇〇〇町ニ對シ本邦平均率ヲ以テスレハ六九、七四五頭ニ達シ最高ナル沖繩縣ノ割合ヲ以テスレハ三二五、一三四頭ニ達スヘク宮城縣ノ割合ヲ以テスレハ一〇二、三七〇頭福島縣ノ割合ヲ以テスレハ三一、七五五頭ニ達スヘシ而シテ本道農耕地大正元年ノ統計ニヨレハ六一七、六一〇町ニシテ其一〇〇町ニ對スル數ハ僅カニ一頭六九ノ割合ナリ、之レヲ以テ大正二十年ニ於ケル農耕地ニ對スル割合ヲ推定スレハ二四、五〇五頭ナルヘシ然レトモ本道ニ於ケル農耕地ハ明治四十四年ヨリ既往十ケ年間ニ增加セル割合ヲ見ルニ一ケ年平均三一、三四六町ナルモ養豚數ハ決シテ之レニ平行シテ增加セサリシコトハ前述ノ如ク明ナルカ故ニ本道ニ於テ明治二十

五年ヨリ同四十四年ニ至ル既往二十ヶ年間ノ一〇〇町ニ對スル割合ヲ求ムレハ最高六頭八一ニシテ最低一頭四ニ當リテ平均二頭九一ヲ示ス

故ニ此割合ヲ以テ大正二十年ニ於ケル一、四五〇、〇〇〇町ニ對スル養豚數ヲ推定スレハ四二、一八五頭ニ達スヘシ

(2) 農家戸數ヨリ推定セル將來ノ頭數

本邦ニ於ケル養豚數ト農家戸數トヲ比較スルトキハ明治四十三年末統計ニヨレハ農家戸數一〇〇戸ニ對シ五頭〇七ニ相當ス而シテ之レヲ各府縣別ニヨリテ見ルトキハ其農家一〇〇ニ對スル最高ハ沖繩縣ノ一一一頭五九トシ鹿兒島縣ノ二五頭二四之レニ次キ神奈川縣ノ一六頭七八又之レニ次ク奥羽地方ニ於テハ宮城縣一〇頭〇五福嶋縣ハ三、一五ニシテ其ノ他ノ四縣ハ極メテ少數ナルヲ知ル、本道ニ於ケル此割合ハ六頭五六ニシテ全國平均ニ比シテ一頭餘ノ多キヲ見ルハ本道ノ養豚數ノ農家戸數ニ對スル割合ノ多キヲ知ルヘシ

今本道農家戸數ニ對スル割合ヲ以テ大正二十年ノ養豚數ヲ推定スルトキハ農家三〇〇、〇〇〇ニ對シ本邦平均率ヲ以テスレハ一五、二一〇頭ニシテ四十四年末ヨリ約四千八百頭ノ增加ヲ見ルニ過キスト雖モ若シ最高ナル沖繩縣ノ割合ヲ以テスルトキハ三三四、七七〇頭トナリテ四十四年末頭數ノ三十倍餘ニ達スヘク又宮城縣ノ割合ヲ以テスレハ三〇、一五〇ニ達スヘク又本道四十三年ノ割合ヲ以テスレハ一九、六八〇頭トナリ九千頭餘ノ增加ヲ見ルニ過キス然レトモ前述ノ如ク養豚數ハ年ニヨリテ增減アルモノナルハ十九年以來ノ統計ニヨリテ明ナルカ故ニ四十四年迄既往十ヶ年間ノ本道農業戸數一〇〇ニ對スル平均頭數ヲ求メテ之レヲ以テ推定セントス即チ三十五年ヨリ四十四年迄十ヶ年ノ平均割合ハ一〇〇戸ニ對シテ七頭一四ナルカ故ニ大正二十年農業戸數三〇〇、〇〇〇ニ對シテハ二八、四二〇頭トナルヘシ

(3) 人口ヨリ推定セル將來ノ頭數

本道ノ養豚數ノ大正二十年ニ於ケルモノハ既ニ農耕地面積及農業戸數ヨリ推定シタルモノハ前述ノ如シ更ニ進ンテ總人口ニ對スル養豚數ノ割合ヲ求メテ以テ將來ヲ推定セントス即チ一〇〇人ニ對スル本邦平均ハ〇、五五頭各府縣別ニ於テハ沖繩縣一九頭二六鹿兒島縣三頭七八宮城縣ハ一頭〇一福島縣ハ〇、三二頭ニシテ同年ニ於ケル本道ノ割合ハ〇、七一頭ナリ

此等ノ割合ヲ以テ大正二十年本道人口三、〇〇〇、〇〇〇人ニ對スル養豚數ヲ推定スレハ本邦平均率ニ於テハ一六、五〇〇頭ニ過キサルモ沖繩縣ノ割合ヲ以テスレハ五七七、八〇〇頭宮城縣ノ割合ヲ以テスレハ三〇、三〇〇頭福島縣ノ割合ヲ以テスレハ僅カニ九、六〇〇頭ニ過キス然レトモ本道既往二十ヶ年間ノ平均率一〇〇ニ對スル〇、六七八ヲ以テスレハ二〇、三四〇頭トナリテ四十四年末現在數ニ約一〇、〇〇〇頭ヲ增スニ過キサルナリ

參考ノ爲メ道府縣ニ於ケル養豚數ト耕地面積、農家戸數及人口トノ割合ヲ示セハ次ノ如シ

府縣名	耕地面積	耕地百町歩ニ對スル頭數	農家戸數	農家百戸ニ對スル頭數	人口	人口百ニ對スル頭數
東京	六〇、九〇一、五	二二、二	六八、九四一	一〇、七〇	二、八三五、六〇〇	〇、二六
神奈川	七四、九九九、八	一七、一七	七七、一六〇	一六、七八	一、一四一、四〇〇	一、四
長崎	九〇、二二一、三	六、三四	二二、六〇九	五、一三	一、〇八三、四〇〇	〇、五四
埼玉	一六四、五〇五、九	五、七一	一五六、一三三	六、〇一	一、一四四、四〇〇	〇、七五
千葉	一八一、六六七、五	八、五六	一六二、〇四一	九、六〇	一、四三五、四〇〇	一、一七
廣島	二二五、四〇五、〇	〇、八三	二〇三、四三四	〇、四六	一、五六九、一〇〇	〇、四〇
福岡	一三二、八三二、二	一、〇一	一六〇、六三二	〇、九六	一、六八九、四〇〇	〇、九〇
宮崎	九九、七一五、三	二、二九	七一、七四〇	三、三二	五四四、四〇〇	〇、四四
鹿兒島	二三一、九四九、〇	二、八一	一九一、七四九	一、三四	一、一〇〇、二〇〇	三、七八
沖繩	六二、七五八、七	一五五、四一	八七、四〇三	二一、三九	五六、四〇〇	一九、二六
宮城	一二〇、三二九、九	七、〇六	八四、六一三	一〇、〇五	八四、六〇〇	一、〇一
福島	一七、三七七、三	二、九一	一二五、八二一	三、一五	一、〇二四、八〇〇	〇、三二
岩手	一四一、六六二、三	一、二九	九一、一六六	一、九八	七二一、一〇〇	〇、二六

府縣名	耕地面積	耕地百町歩ニ對スル頭數	農家戸數	農家百戸ニ對スル頭數	人口	人口百ニ對スル頭數
青森	二〇、九五八、二	〇、七一	七〇、三三七	一、一一	七〇、〇〇〇	〇、一一
山形	二五、七九、六	〇、六二	八六、三七	〇、六三	九三、〇〇〇	〇、〇九
秋田	二三、八六、〇	〇、七〇	六八、九六	一、一〇	八五、〇〇〇	〇、一一
北海道	五六、〇三、八	二、一五	一三、三七	七、五六	一、四八、〇〇〇	〇、七一
全國計	五、七二、二七、三	四、八一	五四、四一、一六	五、〇一	五〇、五四四、〇〇〇	〇、五五

(4) 屠肉量ノ需用程度ヨリ推定セル將來ノ頭數

本道ニ於ケル明治三十五年以來ノ屠肉量ハ次ノ如シ

	人口	屠肉量	人口一〇〇ニ對シ一年消費肉量	同上五ヶ年平均	同上ノ差
明治三十五年	一、〇四五、八三一	三八、六二一斤	三、七一斤		
三十六年	一、〇四七、八四〇	四四、一四八	四、二九	三、四五斤	
三十七年	一、一四四、六三一	四八、六二一	四、二九		
三十八年	一、一七二、五五四	三四五、一〇五	三、〇五	三、九六	
三十九年	一、二九一、〇四九	四六、五五三	三、五〇		
四十年	一、五〇、〇四九	五四五、五九九	三、六七	四、〇九	九、九五斤
四十一年	一、四四六、三一二	五四七、八二七	三、七七		
四十二年	一、三五七、五七七	六九一、一四〇	四、九六	四、三七	
四十三年	一、六一〇、五四五	八四九、〇三〇	五、二七		
四十四年	一、六六七、五九三	七〇四、八六二	四、二五		

明治四十年　一頭平均屠肉量　八一斤　屠豚數　六、七五六　屠豚頭數ノ總頭數ニ對スル%　五九、五〇

四十一年　八一　六、七〇八　五四、五七

四十二年　一二五　五、五〇〇　三八、四一

四十三年　一三二　六、四〇八　五六、〇三

四十四年　一二四　六、四二五　六一、八五

平均　一〇九　六、一五三　五四、〇七

之レニヨリテ見ルトキハ明治二十五年ヨリ同三十九年マテ五ヶ年間平均人口一〇〇ニ對スル消費屠肉ハ三三斤四九其後四十四年マテノ五ヶ年平均ハ四三斤四二ニシテ其差ノ九斤九三ハ即チ五ヶ年平均ニ於テ增加セルモノナリ

斯クノ如キ割合ヲ以テ進ムトキハ大正二十年ニ於テハ人口一〇〇ニ對スル一ヶ年ノ消屠肉量ハ八二斤一七ニ達スヘク同年ニ於ケル屠肉量全額ハ此三十万倍即チ二、四六五、一〇〇斤ヲ要スヘシ

一豚平均屠肉量ハ明治四十年以來五ヶ年平均ヲ示セハ次ノ如シ

此ノ一頭平均一〇九斤ヲ以テ推ストキハ大正二十年ノ屠肉量二四六五一〇〇斤ヲ得ンカ爲メニハ二二、六一六頭ヲ屠殺セサルヘカラス

屠殺頭數ノ總頭數ニ對スル割合ヲ求ムレハ四十年ヨリ四十四年迄ノ五ヶ年間平均ハ前表ノ如ク五四、〇七%ナルカ故ニ此率ヲ以テ二二、六一六頭ノ屠豚數ヨリ總頭數ヲ推定スレハ大正二十年ノ年末頭數四一、八二七頭ヲ有スルニ至レハ本道ノ屠肉量ヲ供給スヘキノ理ナリ

參考ノ爲メ道府縣ニ於ケル屠豚數及其割合ヲ示セハ次ノ如シ

府縣名	現在頭數	屠豚數	其斤數	一頭平均斤量	現在數百頭ニ對スル屠豚數
東京	七、三七七	四一、七七七	三、四三六、五〇五斤	八二、二六斤	五六、三三頭
神奈川	三、九五一	二、八三九	二、八三、二七九	二八、八二	一六八、六三
長崎	五、七三三	四、九五八	五、七、五六八	一〇八、四二	八六、六三
埼玉	九、三八五	四、二九〇	三八一、八〇〇	八九、〇〇	四五、七一
千葉	一五、五五八	六、四六六	七六八、六五八	一一八、八八	四一、五六
廣島	九三九	四五八	四〇、一〇九	八七、五七	四八、七九
福岡	一、五三六	一、〇三五	六五、一七二	六二、九七	六七、三八
宮崎	二、三八一	九〇三	八五、六〇二	九四、八〇	三七、九二
鹿兒島	四八、四〇四	一五、六五二	一、三五四、六六九	八〇、一六	三二、三四
沖繩	九七、五三二	三九、六四四	二、七一〇、三七二	六八、三七	四〇、六五
福島	八、五七一	五、一六九	三五七、一五二	六九、〇九	六〇、七六
宮城	三、九一〇	二、八六一	一五一、四六四	五二、九四	七三、一七
岩手	一、八〇六	一、一五三	一五一、六四六	一一三、〇九	七四、一〇
青森	七八九	六五三	五七、七三八	八八、四二	八二、七六
山形	八〇七	四〇一	三〇、六七五	七六、五〇	四九、六九
秋田	九四五	三四七	三八、〇八六	一〇九、七一	三六、七二
北海道	二、四三六	六、四〇八	八四九、〇三〇	一三二、五〇	五六、〇三
全國計	二七九、一〇一	二七、〇一〇	一五、八六六、八八三	八九、六四	六三、四二

歐米各國ニ於ケル人口一〇〇〇ニ對スル養豚數ヲ見レハ次ノ如シ

國名	人口一〇〇〇ニ對スル豚數	調査年	國名	人口一〇〇〇ニ對スル豚數	調査年
北米合衆國	五二頭	一九〇九年	瑞西	一五六頭	一九〇七年
丁抹	五四二	一九〇七	佛蘭西	三四九	一九一〇
獨乙	三四九	一九一〇	和蘭	一四七	一九一〇
濠洲	一三八	一九〇九	諾威	一三七	一九〇九
匈牙利	一二六	一九〇九	英吉利	八五	一九一〇
墺太利	一七二	一九一〇	露西亞	一七	一九一〇
瑞典	一六七	一九〇九	伊太利	七四	一九〇九

即チ最モ多キハ丁抹ニシテ人口一〇〇〇ニ對シ五四二頭ナルヲ以テ二人ニ對シテ一頭強ノ割合ナリ最モ少キ伊太利ニ於テスラ七四頭ナリ本邦及本道ヲ之レニ比較スレハ

本邦平均　一〇〇〇人ニ對シ　五、四頭　四十三年

北海道平均　同　六、〇　大正元年

ニシテ本邦ハ歐米各國最モ多キ丁抹ノ約一〇〇分ノ一本道モ九〇分ノ一ニ充タス最モ少キ伊太利ニ比スルモ猶其十四分ノ一ニ充タス

本道ニ於ケル大正二十年ニ於ケル數ヲ推定スルニ當リ

丁抹ノ例ヲ以テスレハ　人口三、〇〇〇、〇〇〇ニ對シテハ　一、六二六、〇〇〇頭

獨乙同　同　一、〇四七、〇〇〇

伊太利　同　二二二、〇〇〇

即チ伊太利ノ一九〇九年ニ於ケル例ヲ以テスレハ二二二、〇〇〇頭ニ達スルコトヲ得ヘクシテ明治四十四年現在ニ比シテ約二〇倍トナルノ理ナリ

(6) 將來ノ豚ノ頭數結論

本道ニ於ケル大正二十年ノ豚ノ頭數推定ニ就キ以上ノ事實ヲ再ヒ列記スレハ

農耕地積ヨリノ推定ハ	四二、一八五頭
農家戸數　同	二八、四二〇
人口　同	二〇、三四〇
肉量　同	四一、八二七

ニシテ農耕地積ヨリノ推定ト屠肉量ヨリノ推定トハ稍近似數ヲ得タリト雖モ何レノ場合ニ於テモ猶五万頭ニ達セス甚タ少數ナリト言ハサルヘカラス本道ハ將來果シテ五万頭以上ノ豚ヲ飼育スルコト能ハサルカト云フニ何人モ猶ホ養豚ニ十分ノ餘地ヲ有シ生産增加ノ途ヲ有シナカラ努力ニ於テ欲クル所アルヲ疑ハサルヘシ宜シク副業的養豚ヲ奬勵スルト同時ニ生産物消流ノ道ヲ開キ大正二十年ニ於ケル豚ノ頭數ハ本道ノ農區第一第二第三區ニ於テハ農耕地五町歩毎ニ一頭第四區ニ於テハ十町歩毎ニ一頭ノ割合ニ飼養セシムヘシ然ルトキハ全道ノ頭數ハ第一第二第三區ニハ二五五、〇七九頭第四區ニハ一七、四六〇頭合計二七二、五三九頭ニ達スヘシ

之レヲ大正二十年農家數三〇〇、〇〇〇戸ニ比スレハ一戸平均〇、九〇八頭ヲ飼養スルノ割合トナリ之レヲ現今本邦ノ最高ナル沖繩縣ノ數ニ比スレハ稍少キモ他ノ府縣ニ比スレハ何レヨリモ其割合高シ又人口ニ對スル割合ヲ見レハ一〇〇人ニ對シ九頭〇八ニシテ沖繩縣ノ現今ニ比シテハ二分ノ一ニ過キスト雖モ伊太利露西亞英吉利等ノ最近調査ニ比スレハ其割合ハ稍多キヲ知ルヘシ

(三) 養豚ニ對スル將來ノ施設

將來ノ養豚業ニ對スル施設トシテハ前述ノ事項ヨリ推シテ左ノ數項ヲ必要ト認ム

(1) 本廳種畜場ニ於テ種豚ノ供給ヲ充分ナラシムルコト

現今種畜場ニ於テハ民間ニ「バークシヤー」種豚、拂下ヲ爲スト雖モ豚ハ他ノ家畜ニ比シテ比較的近親蕃殖ノ害ニ陷リ易キモノナルヲ以テ將來益々種豚ノ供給ヲ充分ナラシムルコト必要ナリ如何トナレハ種豚ヲ原産地ヨリ購入スルカ如キハ假令其價額ハ牛馬ノ如ク莫大ナラサルモ農家ニ於テ之レヲ直接輸入セントスルモ容易ニ其目的ヲ達スルコト能ハサルモノナレハ須ラク種畜場ノ事業トシテ時々原産地ヨリ輸入スルカ若クハ移入シテ純粹蕃殖ヲ圖リ以テ拂下ニ應スルノ途ヲ講スヘキナリ

(2) 豚肉加工、「ラード」製造ノ奬勵

本道ニ於テ養豚業ノ遲々トシテ發達セサルコトハ前述ノ如クニシテ其生肉販路ノ擴張セサリシハ豚肉加工ニ關スル製造所ノ設置ヲ見サリシニ因ルヘシ故ニ適當ナル地區ニ「ハム」「ベーコン」「腸詰及「ラード」等ノ製造所ヲ起シテ養豚者ヲシテ其販路ニ就テ憂フル所ナカラシムレハ養豚ノ發達ハ疑ナカルヘシ

然レトモ斯クノ如キ製造所ノ設立ニ向テハ其初メニ於テ多少ノ保護ノ與フルトキハ其効果著シキモノアラン其保護トシテハ相當ノ規程ノ下ニ補助金ヲ與フルコトアルヘク又製造ニ關スル技術ヲ補助スル等或ハ原料供給ヲ充分ナラシムル等ナリ

(3) 豚肉加工ニ關スル特別ナル講習會ノ開催

豚肉加工場設立或ハ自家用トシテ加工セントスルモ加工ニ對スル智識ニ缺乏スルトキハ其ノ目的ヲ達スルコト能ハス此事業ニ關スル智識ヲ得セシメンカ爲メニハ豚肉加工ニ關スル講習會ヲ開催シテ特ニ技術ニ長シタルモノヲ講師トシテ農家ノ子弟或ハ加工場技術員ヲシテ修得セシムルハ極メテ良法ニシテ開催スル場所ハ種畜場ノ如キ實習ヲ爲シ得ル設備ノアル所ナラサルヘカラス

(4) 豚肉加工業ニ就テ組合ノ活動ヲ促スコト

前述ノ豚肉加工場ノ如キハ組合組織ヲ以テ設立經營セシムル時ハ個人ヲシテ之レヲ爲サシムルヨリモ容易ニシテ又其製品

ノ販路ニ向テモ組合ノ活動ヲ促シテ益々其發達ヲ見ルニ至ルヘシ

(5)　講習講話或ハ實地指導

本邸畜産指導ニ於テハ從來畜産講習會或ハ講話會等ニ當テ常ニ養豚ニ關スル事項ヲ說明シテ其智識增進ニ努メタルモ將來ハ益々此ノ如キ機會ニ於テ養豚及豚肉加工ニ關スル一般智識ヲ發達セシメ又實地指導ニヨリ農家自家用ノ如キハ自ラ之ヲ製セシムルトキハ効果大ナルモノアラン

附　「ハム」「ベーコン」及搗藏肉

本道ニ於ケル「ハム」ノ製造ハ明治七年七重勧業試驗場ニ於テ之レヲ爲シタルヲ嚆矢トシ次テ明治九年ニハ札幌養豚場ニ於テ之レヲ製シ翌十年ニハ札幌製ノ「ハム」ヲ第一回內國勧業博覽會ニ出品シテ花紋賞牌ヲ得明治十三年ノ如キハ一千七百七十三斤ヲ製スルニ至リ札幌養豚場ヲ廢シテ以來眞駒內種畜場ニ於テ之レカ試驗的製造ヲ開始シ明治十六年ニハ二百七十七斤同十七年ニハ二百五十斤同十八年ニハ五百五十六斤ヲ製造シ其後今日迄ハ製造材料ヲ得タル時ニ於テノミ之レカ製造ヲ行ヒタリ

東北帝國大學農科大學ニ於テモ此製造ハ古ク札幌農學校時代ヨリ開始シタリト雖モ之レ又專ラ學生ノ實驗ニ供シタルモノニシテ「ハム」「ベーコン」「ショルダー」腸詰等其生產量ハ每年百斤乃至四百斤ニ過キス此ノ如ク眞駒內種畜場及農科大學ニ於テ試驗的ニ製造ヲ爲シタルカ如ク民間ニ於テモ時ニ之レカ製造ヲ爲スモノアリト雖モ同シク試驗的ニ過キスシテ未タ營利的專業ニ此等ノ製造ヲ爲スモノナシ

「ハム」「ベーコン」等ノ道外ヨリ移入

「ハム」「ベーコン」等ノ道外ヨリ輸入或ハ移入スル數量價額ハ調査上何等ノ依ルヘキ記錄アルニアラサレハ本道中樞要都市ニ於テ之レカ販賣或ハ使用ヲ爲ス當業者ニ就テ之レヲ聞キ其口述ヲ綜合取捨シテ其數量價額ヲ推定スルニ過キス即今大正三年中函館小樽札幌室蘭等ニ於テ消費シタル數量及購入價額ヲ示セハ次ノ如シ

	ハム		ベーコン		合計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
函館	八、〇〇〇斤	二、四四〇圓	八〇〇斤	二〇〇圓	八、八〇〇斤	二、六四〇圓
小樽	一〇、〇〇〇	二、九〇〇	五〇〇	一二五	一〇、五〇〇	三、〇二五
札幌	一三、六〇〇	五、六四〇	八五〇	二九五	一四、四五〇	五、九三五
室蘭	一、八〇〇	五〇四	六〇〇	一五〇	二、四〇〇	六五四
計	三三、四〇〇	一一、四八四	二、七五〇	七四〇	三六、一五〇	一二、二六四

之レニヨリテ見レハ函館小樽札幌室蘭等ニ於テ消費スル「ハム」「ベーコン」合計三万六千百五十斤ニシテ此價額一万二千二百六十四圓ニシテ此等ハ全部所謂鎌倉「ハム」ト稱スルモノニシテ神奈川縣下ノ生產ニ係リ赤色包裝ノモノナリ之レニヨリテ見レハ全道ニ於テ大正三年中消費シタル量ハ約四万斤此價額約一万三千圓ニ上ルヘク全部本土ヨリ移入シタルモノナリ

外國製品ハ價格高キカ故ニ輸入ナシ

此等ノ外ニ罐入「ハム」ノ消費量モ札幌區ニ於テノミ一千斤以上此價額一千圓以上ニ達スルヲ見レハ全道ニ於テハ二千斤以上ヲ消費スルモノト見テ可ナラン

用途　各地共ニ「ハム」「ベーコン」ノ既往ノ需用量ヲ見レハ前年ニ比シテ約一割乃至二割ノ增加ヲ示セルモノヽ如ク今後モ漸次其需用ノ擴大スルハ推知スルニ難カラス、個人ノ家庭用トシテノ需用量ハ未タ少量ニ過キスシテ主ニ洋食料理店及船舶等ニ供給スルモノニシテ料理店ニ於テハ夏期ニ其消費量ヲ增シ又各港ニ於テハ外國艦船ノ寄港多キトキハ其消費量ヲ增スカ如シ

取引方法　各地ノ販賣店及洋食店ノ消費量多キ所ニテハ神奈川縣下生產者又ハ橫濱東京ノ取次店ヨリ取引ヲ爲シ輸送ハ船便ニ依ルモノ多ク一部分ハ鐵道便ニ依ル

鷄

總論

農商務省ノ統計ニヨレハ明治三十五年ヨリ同四十四年ニ至ル十ケ年ノ平均ニ於テ年々一百万圓以上ノ輸入額ヲ海外ヨリ仰ク鷄卵ハ本道ニ於テモ亦年々府縣ヨリ移入スルコト數万圓ヲ下ラス是レ畢竟本邦養鷄業ノ不振ニ基クモノニシテ抑モ之レヲ盛ンナラシムル道ナキカ本道ノ養鷄業ヲシテ多大ノ發展ヲナサシメ實ニ本道ノ需用ヲ充スニ止ラス進ンテ府縣ニ移出シ海外ノ輸入ヲ防クノ前途ヲ有セシメ得サルカ之レヲ海外ノ實例ニ照スモ養鷄業ノ繁榮ハ國富ノ一財源タラシムルヲ得ルカ如シ本道ノ養鷄業ニ關スル調査ハ蓋シ趣味アル問題ト爲サヽルヘカラス

本業ニツキ論セントスルモノ先ツ本道ノ自然的狀態ト本道養鷄業トノ關係ヲ究メサル可カラス而モ自然的狀態ノ内其地形其地味其天然植物ノ如何等ハ直接ノ關係ヲ有セサル事他ノ畜産業ニ於ケル牛馬ノ如キトハ大イニ其趣ヲ異ニスト雖モ氣溫ノ低落程度ト積雪ノ多少及期間ノ長短ハ産卵ノ割合及放飼期日ニ影響アル專其大ナリトセサルヘカラス

然リ而シテ洋ノ東西ヲ問ハス養鷄業ノ盛ンナル國ハ其基礎ヲ農家ノ副業ニ待ツモノトス一ケ年一千四百万圓ノ鷄卵ヲ輸出スルヲ以テ世界ニ著名ナル丁抹國ニ於テモ亦本邦中最モ同業ノ盛大ナリトサルヽ千葉縣ニ於テモ農家ノ副業ニ其基礎ヲ置ク事實ハ一ナリ本道同業ノ繁榮ヲ堅固ナラシメントスルニ於テハ農家ノ副業トシテ每戸數羽ノ鷄ヲ飼養スルニ根本ヲ定メサルヘカラス本道五町歩農家ニシテ僅カニ五六羽ノ鷄ヲ養フモ其飼料ニ何等ノ苦痛ヲモ見サル事本道農事試驗場ノ實驗シ發表セル處ニシテ而モ之レ等農家ハ其住宅内道路ノ上部ニ鷄ノ塒木ヲ設クルヲ普通トスルカ故ニ縱令本道ノ氣候寒冷ニシテ冬期間ノ積雪ハ運動場ニ不便ナリト云フモ撰ムニ鷄ノ種類ヲ以テセハ敢テ顧慮スルノ要ナシ

丁抹一農家ノ一ケ年ニ販賣スル鷄卵ハ一成鷄ニ對シ七八個四分ニ不過如斯ハ本道ノ産卵歩合ニ於テ毫モ困難トスル處ニアラス

未タ諸般ノ整ハサル本道ニ於テ大正元年ノ産卵歩合ハ成鷄一羽ニ對シ七十三個一八ニ達セリ之レヲ本道ノ實際ニ徵スルニ明治四十年ニ於テ十三万六百八十八戸ノ農家ニ對シ成鷄二十五万三千四百九十二羽ヲ飼ヒ一戸平均一羽九四ニ不過シモノ

大正元年ニ於テハ十六万三百四十四戸ノ農家ニ對シ成鶏二十七万七千六百七十六羽ヲ飼ヒ一戸平均二羽三五五ニ及ヘリ又以テ本道養鶏業ノ好望ナルヲ證スルニ足ル

一、本道養鶏業ノ内容

別表ニ示スカ如ク本道ノ鶏數大正元年ニ於テ八十四万三千〇六十五羽ニシテ内成鶏三十七万七千六百七十六羽雛四十六万五千三百八十九羽即チ成鶏一羽ニ對シ雛一羽二三ノ割合ニアリ而シテ鶏ヲ飼フモノ十羽未満最モ多ク最近七ヶ年平均八二四九%ヲ占メ五十羽未満一六、四〇%百羽未満〇、九六%百羽以上〇、一五%ノ割合トス本道ノ中飼育戸數ノ多キハ空知支廳ノ一万〇二百四十三戸トスルモ農家戸數ニ對シ飼育戸數ノ割合多キハ函館區(一ニ對シ一二三)札幌區(一ニ對シ一一七)ノ如キ農家戸數ヨリ飼育スルモノ多キ地方ヲ最トシ之レニ次クヲ釧路(一ニ對シ七四)根室(一、ニ對シ、七二)トシ最モ少ナキヲ宗谷(一ニ對シ一四)小樽區(一ニ對シ一六)増毛(一ニ對シ三三)トス又鶏羽數ノ最モ多キハ空知(一五一、〇二六)上川(一〇〇、四一一)函館(八八、九五三)札幌(七三、四一四)等トシ最モ少ナキハ小樽區(四、〇六三)札幌區(五、四七七)函館區(六、五四三)根室(九、〇二八)ノ順位トス成鶏ノ多キハ空知(五九、八四四)上川(四七、一〇四)函館(三七、九八五)ニシテ飼育戸數一戸ニ對シ鶏數最モ多キハ小樽區(二六羽三八)函館區(一九、一三)函館(一七、六八)釧路(一四、七〇)トシ少ナキヲ根室(八、四三)檜山(九、〇二)上川(九、八〇)トシ成鶏ノ割合最モ多キモノ小樽區(一三、九六)函館區(一一、三九)ニシテ宗谷(八、〇六)函館(七、五五)室蘭(六、八八)浦河(五、六二)等之レニ次キ最モ少ナキハ檜山(四、〇六)後志(四、〇九)トス

又成鶏一羽ノ産卵數ハ大正元年ノ統計ニ於テ函館區(一三六、七)小樽區(一一五、二九)函館(一〇九、二九)等多産ノ部ニシテ札幌(四八、三五)上川(四八、七八)等少數ノ位置ニアリ

本道農家戸數ト成鶏(雛)トノ割合累年比較表

年次	成鶏(雛)	農家戸數	一戸當リ羽數	前年度トノ差
明治四十年	二五三、四九二	一三〇、六八八	一、九四〇	
同 四十一年	二八六、九〇〇	一三九、〇一九	二、〇六四	+〇、一二四
同 四十二年	三一三、九七五	一四七、四一〇	二、一三〇	+〇、〇六六〇
同 四十三年	三四五、四四二	一五一、三七七	二、二八二	+〇、一五二
同 四十四年	三七六、〇六八	一五六、二四四	二、四〇七	+〇、二五
大正元年	三七七、〇六六	一六〇、三四四	二、三五五	(一)〇、〇五二

平均……〇、〇八三　一ヶ年ノ増加率

大正二十年ニハ一戸當リ羽數ハ(0.083×19)+2.355=3.932

區支廳別農家戸數ト飼育戸數トノ割合及其平均成禽羽數比較表

行政區	年次	農家戸數	飼育戸數	前兩者ノ割合	成禽羽數	農家一戸當リ成禽羽數	飼育戸數一戸當リ成禽羽數
札幌	明治四十年	二、四一四	五、八四七	四、九六	二、八、四七二	二、二九	四、八七
札幌	同四十三年	二、三七九	五、六八七	四、七六	三〇、五三五	二、四七	五、三七
札幌	同四十四年	二、六四四	五、九三五	四、七七	三三、六三二	二、六六	五、六三
札幌	大正元年	二、八三七	六、〇四六	四、七七	三三、五六八	二、五四	五、六八
空知	同	二、五六七	九、四三	三、七	四一、二七二	一、六二	三、七二
空知	同	二、〇八八	一〇、三〇	四、九九	六一、四九〇	二、四五	四、九九
空知	同	二、七一二	一二、三〇	四、九九	六〇、二七四	二、二七	四、九九
空知	同	二、五九四	一二、五九	四、七八	五九、八四四	二、一四	四、七八
上川	同	二、九一八	一二、二八	四、六三	五九、二七二	二、一四	四、六三
上川	同	二、七六五	九、一五一	三、三〇	四三、四一一	一、六八	三、三〇
上川	同	二、〇七六	六、三五〇	三、〇	四三、二一一	一、六八	三、〇
上川	同	二、〇四七	九、六八九	四、九九	四二、八三一	二、〇二	四、九九
後志	同	一、九五二	一〇、一四三	四、九九	四二、一〇四	二、〇二	四、九九
後志	同	二、六〇二	一〇、五六八	四、二九	四〇、七六九	一、八七	四、二九
後志	同	一、九七九	六、四〇六	三、三九	三一、二四二	一、三二	三、三九
後志	同	二、〇三四	六、八三三	三、三四	三二、五五一	一、五七	三、三四
後志	同	二〇、九一五	六、九八九	三、三四	二八、一〇六五	一、三九	三、三四
後志	同	八、五〇〇	二、七九一	二、三三	一一、一六五	一、三二	二、三三
後志	同	八、七二一	二、七六一	二、三三	一二、一一六	一、三二	二、三三
後志	同	八、七〇四	三、四六九	二、三九	一三、九四三	一、八〇	二、三九
後志	同	八、四七二	三、九一七	二、四〇	一五、八八七	一、八〇	二、四〇

行政區	年次	農家戸數	飼育戸數	前兩者ノ割合	成禽羽數	農家一戸當リ成禽羽數	飼育戸數一戸當リ成禽羽數
函館	明治四十年	一四、一二六	四、三一九	三、三	三五、五七九	一、八一	五、九一
	同四十三年	一二、六九六	四、九九五	三、三	三四、二八八	二、四二	六、七三
	同四十四年	一二、七三一	五、〇三〇	三、三	三六、九八五	二、〇九	七、四〇
	大正元年	一五、一八七	四、三一五	四、四六	一九、八一二	一、九八	六、五九
	同	九、四五七	四、一六八	六、六九	一八、九八五	一、九六	五、六八
室蘭	同	七、五三二	五、四六六	六、六六	三二、〇三八	三、〇四	四、〇四
	同	七、九三九	五、二三四	六、六九	三三、九九七	三、〇〇	四、〇〇
	同	七、九九一	二、八七六	六、六二	一三、〇八〇	一、九〇	二、〇九
浦河	同	四、四四二	二、八七六	六、六〇	一九、五二一	一、七〇	二、〇二
	同	四、七四九	二、八七六	六、六〇	二六、九五四	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、六〇九	二、七六四	五、九〇	二八、一五三	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、五八二	四、八五〇	五、五八	二四、八二〇	二、〇九	二、〇〇
	同	四、三八七	五、四七八	五、五五	二九、四〇九	二、〇二	二、〇〇
河西	同	一〇、一六二	五、九〇二	五、五四	二四、二二〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	一〇、七〇一	五、四七八	五、五九	三二、六一二	二、〇七	二、〇五
	同	一〇、七九八	六、八五七	五、五五	三三、九〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	二、三三四	一、四三三	一、五八	七、〇一九	一、〇〇	一、〇〇
釧路	同	二、六三二	二、一一九	八、六四	二、一六五	一、〇〇	一、〇〇
	同	二、九九〇	二、一九〇	一〇、七〇一	一二、〇八二	一、〇〇	一、〇〇
	同	一、三七〇	一、三一三	七、七四	七、四九四	一、〇〇	一、〇〇
根室	同	一、四二二	一、一七〇	八、八〇	六、四九三	一、〇〇	一、〇〇
	同	一、四七九	一、〇七一	七、七二	五、五八〇	一、〇〇	一、〇〇
	同	四、八八五	四、二五一	五、五六	一、九八七	二、〇〇	二、〇〇
網走	同	七、七三八	四、二五一	五、五三	二、六五四	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、七八一	四、四六九	五、五〇	二、九五四	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、八一八	四、四六九	五、五〇	三、二六七	二、〇〇	二、〇〇
	同	九、一七七	四、四六六	四、七〇	三、五七〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	二、五七〇	一、一二一	四、六〇	三、八四五	二、〇〇	二、〇〇
宗谷	同	四、七〇〇	七、七六五	五、五四	九、七一二	二、〇〇	二、〇〇
	同	五、三〇五	七、七六五	五、五五	一〇、七九八	二、〇〇	二、〇〇
	同	五、〇〇〇		五、五五	一〇、七〇一	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、〇六一	一、二五八	五、五八	一〇、一六二	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、七八〇	四、四六八	五、五四	八、三八七	二、〇〇	二、〇〇
河西	同	七、七一七	四、四六九	五、五五	四、五八二	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、七三八	四、四六九	五、五八	四、六〇九	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、八八五	二、二五一	四、六二	二、七六四	二、〇〇	二、〇〇
	同	一、四七九	一、〇七一	二、五二	二、八七六	二、〇〇	二、〇〇
	同	一、四二二	一、一七〇	一、四三	二、〇三四	二、〇〇	二、〇〇
	同	一、三七〇	一、一三四	一、四三	五、四六六	五、〇〇	四、〇〇
	同	二、九九〇	二、一九〇	一、九〇	五、四七八	五、〇〇	四、〇〇
	同	二、六三二	二、一一九	八、六四	四、八五〇	四、〇〇	三、〇〇
	同	二、二三四	一、四三三	一、五九	二、七六四	二、〇〇	二、〇〇
	同	一〇、七〇一	六、八五七	五、九〇	二、八七六	二、〇〇	二、〇〇
	同	一〇、七九八	五、四七八	五、四五	二、八七六	二、〇〇	二、〇〇
	同	一〇、一六二	四、八五〇	四、七〇	二、七六四	二、〇〇	二、〇〇
	同	八、三八七	四、一二六	三、三五	一、八七六	一、〇〇	一、〇〇
	同	四、五八二	二、七六四	二、〇〇	三、二九	三、〇〇	二、〇〇
	同	四、六〇九	二、八七六	二、〇〇	三、六八二	三、〇〇	二、〇〇
	同	四、四四二	二、一三二	二、〇〇	四、五〇四	四、〇〇	二、〇〇
	同	七、九九一	五、四六六	二、〇九	二、〇〇九	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、五三二	五、四七八	二、〇〇	二、〇九〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	七、三九九	五、二三四	二、〇〇	二、〇七五	二、〇〇	二、〇〇
室蘭	同	四、五七〇	二、八七六	二、〇〇	二、〇二二	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、四六六	二、一三二	二、〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、四四二	二、一一七	二、〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、四四二	二、一一七	二、〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇	二、〇〇
	同	四、四四二	二、一一七	二、〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇	二、〇〇
函館	同	一、五六	四、三九	三、三	三五、五七九	一、八一	五、九一
	同	二、三四	四、九九五	三、三	三四、二八八	二、四二	六、七三
	同	二、三二	五、〇三〇	三、三	三六、九八五	二、〇九	七、四〇
	同	二、三四	四、三一五	四、四六	一九、八一二	一、九八	六、五九
	同	二、六九	五、四六六	六、六九	一八、九八五	一、九六	五、六八
小樽區	同	三、三四	二、一六五	六、六八	三二、〇三八	三、〇四	四、〇四
	同	三、三四	二、一三二	六、六九	三三、九九七	三、〇〇	四、〇〇
	同	二、三四	一、一七〇	六、六二	一三、〇八〇	一、九〇	二、〇九
	同	二、四四	一、一七〇	六、六〇	一九、五二一	一、七〇	二、〇二
	同	二、六九	二、一一九	八、六四	二六、九五四	二、〇〇	二、〇〇
函館區	同	二、七四	一、一三四	一、五八	七、〇一九	一、〇〇	一、〇〇
	同	二、七四	一、一七〇	一、五九	七、四九四	一、〇〇	一、〇〇
	同	二、七四	一、一七〇	一、五九	七、四九四	一、〇〇	一、〇〇
	同	二、七四	一、一七〇	一、五九	七、四九四	一、〇〇	一、〇〇
合計	同	一五六	一〇四	六七	一七、五二〇	六五八	九八八
	同	三二四	四七〇	一四五	二八、八八九	二、二一	六、〇〇
	同	三四五	四二三	一、二三	二五、七〇〇	八三七	六、八三
	同	三五三	三三〇	一、一七	二、八四五	七、一八九	六、二二
	同	九五三	二五九	一、一三	二、二七〇	二、九九	八、四三
	同	九七一	一五四	一、〇七	二、一七一	二、二五	一、六〇〇
	同	九八五	一、二七一	一、一六	二、一三二	二、〇七	一、二三
	同	九六二	一〇八一	一、〇〇	二、〇九一	二、〇〇	一、〇〇
	同	三三八	三二五	一、〇二	三、一二六	三、〇〇	一、〇〇
	同	三二六	三二四	一、〇〇	三、一二六	三、〇〇	一、〇〇
	同	二九九	二一九	一、〇〇	三、一二六	三、〇〇	一、〇〇
	同	二七九	二一七	一、〇〇	三、一二六	三、〇〇	一、〇〇
	同	一五六、二七七	一三〇、六八八	五、二四	四、九四五	二、五三	四、四四
	同	一五六、二四四	一三〇、六八八	六、八九五	四、九四五	二、四四	四、四四
	同	一六〇	一三四	七、一七八	三、七七六	二、六六	四、四五

大正元年農家戸數及飼育者戸數ト鷄數トノ割合比較表

行政區	農家戸數	飼育戸數	鷄羽數	農家一戸當リ鷄羽數	飼育戸數一戸當リ鷄羽數
札幌	一二、八二七	六、〇四六	七三、四一四	五、七二	一二、一四
空知	二六、三三九	一二、九二八	一五一、〇二六	五、七三	一一、六九
上川	二五、一九五	一〇、二四三	一〇〇、四一一	四、〇〇	九、八〇
後志	二〇、九一五	六、八八九	七〇、六四〇	三、三八	一〇、一一
檜山	八、四七二	三、九一七	三五、三四一	四、一七	九、〇二
函館	一五、一八七	五、〇三〇	八八、九五三	五、八八	一七、六八
室蘭	七、九九一	五、二三四	七二、九九九	九、一四	一三、九五
浦河	四、五八二	二、七六四	三〇、五二四	六、六二	一一、〇四
河西	一〇、七九八	六、三五七	六四、〇九五	五、九四	一〇、〇八

行政區	農家戸數	飼育戸數	鷄羽數	農家一戸當ノ鷄羽數	飼育戸數一戸當ノ鷄羽數
釧路	二、九九〇	二、一九九	三二、三二一	一〇、八一	一四、七〇
根室	一、四七九	一、〇七一	九、〇一八	六、一〇	八、四三
網走	九、一七七	四、六一六	五二、三四一	五、七〇	一一、三四
宗谷	五、五〇〇	七六三	一〇、八四四	一、九七	一四、二一
增毛	七、二八八	二、六七二	三五、〇四五	四、八一	一三、二一
札幌區	三五三	四三	五、四七七	一五、五二	一三、一六
小樽區	九六二	一五四	四、〇六三	四、二三	二六、三八
函館區	二七九	三、四二	六、五四三	二三、四五	一九、三
合計	一六〇、三四四	七一、七三八	八四三、〇六五	五、二六	一一、七五

羽數別飼養戸數累年比較表（百分比例）

年次	十羽未滿	五十羽未滿	百羽未滿	百羽以上	計
明治三十九年	八四、一六	一五、二五	〇、四九	〇、一〇	一〇〇、〇〇
同四十年	八三、五二	一五、一三	一、一六	〇、一〇	一〇〇、〇〇
同四十一年	八一、四一	一七、一〇	一、一三	〇、一六	一〇〇、〇〇
同四十二年	八二、一五	一六、六四	一、〇五	〇、一五	一〇〇、〇〇
同四十三年	八一、九三	一六、九一	一、〇五	〇、一二	一〇〇、〇〇
同四十四年	八一、九〇	一六、九六	〇、九八	〇、一六	一〇〇、〇〇
大正元年	八二、三七	一六、八二	〇、七二	〇、〇九	一〇〇、〇〇

明治四十四年區支廳別羽數別飼養者戸數比較表

支廳別	十羽未滿 戸數	十羽未滿 其割合	五十羽未滿 戸數	五十羽未滿 其割合	百羽未滿 戸數	百羽未滿 其割合	百羽以上 戸數	百羽以上 其割合	合計 戸數	合計 其割合
札幌	四、七八一	八一、〇〇%	一、一〇〇	一八、〇〇%	〇四四	〇、七四%	〇一〇	〇、二%	五、九二五	一〇〇、〇〇%
空知	九、七三	七、〇〇	二、七〇一	二一、〇〇	一六四	一、三〇	〇一六	〇、三	一三、五九四	一〇〇、〇〇
上川	八、七五七	九〇、三〇	八八五	九、一〇	三六〇	〇、三七	〇一一	〇、一一	九、六八九	一〇〇、〇〇
後志	五、一七三	七、〇〇	一、四三六	二一、〇〇	〇九四	一、四〇	〇一一	〇、一六	六、八一三	一〇〇、〇〇
檜山	三、二二六	九三、〇〇	二三一	六、七〇	〇〇七	〇、一〇	〇〇五	〇、一四	三、四六九	一〇〇、〇〇
函館	三、九八〇	七九、七〇	九三一	一八、六〇	〇六九	一、三八	〇一五	〇、三〇	四、九九五	一〇〇、〇〇
室蘭	四、一二七	七五、五〇	一、二六八	二三、四〇	〇六三	一、一五	〇〇八	〇、一四	五、四六六	一〇〇、〇〇
浦河	二、三六七	八二、三〇	四八三	一六、八〇	〇一四	〇、八三	〇一〇	〇、〇七	二、八七六	一〇〇、〇〇
河西	五、一九二	八九、七九	六八〇	一一、五二	〇一七	〇、四六	〇〇三	〇、〇五	五、九〇二	一〇〇、〇〇
釧路	一、九〇七	八七、一〇	二六九	二、三〇	〇一四	〇、六四	—	—	二、一九〇	一〇〇、〇〇
根室	九六八	八五、三六	一五六	一、三七	〇〇九	〇、七九	〇〇一	〇、〇九	一、一三四	一〇〇、〇〇
網走	三、八二四	八三、七〇	六八一	一四、九一	〇六二	一、三六	〇〇二	〇、〇四	四、五六九	一〇〇、〇〇
宗谷	× 五五九	七三、一〇	一九九	二六、〇〇	〇〇七	〇、九〇	—	—	七六五	一〇〇、〇〇
增毛	二、二六九	八〇、六〇	五三一	一八、九〇	〇一四	〇、五〇	—	—	二、八一五	一〇〇、〇〇
札幌區	二八五	六七、四〇	二一六	二七、四〇	〇一四	三、三〇	〇〇八	二、六〇	四三	一〇〇、〇〇
小樽區	〇六〇	三三、一〇	一六九	六一、四〇	〇三二	一一、四〇	〇一一	四、六〇	一七二	一〇〇、〇〇
平均	八二、四九	一六、四〇	〇、九六	〇、一五					一〇〇、〇〇	

	十羽未滿 戸數	十羽未滿 其割合	五十羽未滿 戸數	五十羽未滿 其割合	百羽未滿 戸數	百羽未滿 其割合	百羽以上 戸數	百羽以上 其割合	合計 戸數	合計 其割合
函館區	二五〇	七一、八〇%	一一、九一五	〇七八	六九二	〇一三	一六	二、〇一%	三四八	一〇〇、〇〇%
總計	五七、五三七	八一、九〇	一六、九六〇	二三、四〇	一、九八	三、七〇	二六	〇〇七	七〇、二五四	一〇〇、〇〇

鶏及鶏卵價額累年比較表

之レヲ既往ノ統計ニ計上サル、處ニヨルハ左ノ如シ

年次	成鶏及雛ノ價	單價	鶏卵價額	其單價	合計
明治四十年	二九〇、九七二円	〇、五〇三〇円	五六二、二二〇円	〇、〇二一七六円	八五三、一九二円
同四十一年	三七六、五一七	〇、五七八七	五六一、三八	〇、〇二一七二〇	九三七、六五五
同四十二年	三〇五、〇〇八	〇、四一三五	四五四、五六三	〇、〇二三六七	七五九、五七一
同四十三年	二七二、八一六	〇、三四三二	五一七、三〇三	〇、〇二一〇	七九〇、一一九
同四十四年	二八五、二五八	〇、三三七五	五四五、四五七	〇、〇二〇三七	八三〇、七一五
大正元年	二九三、一八二	〇、三四七八	五八一、七一五	〇、〇二一〇五	八七四、八九七

明治四十四年區支廳別鶏及鶏卵ノ價額比較表

行政區	成鶏雛合計羽數	一羽ノ平均價格	産卵數	産卵一個ノ平均價額	鶏及鶏卵價格
札幌	七一、三〇二	円 三、六三八	一、八一四、七四七	銭 二、〇五	六〇、八〇五円
空知	一五六、三〇九	一、二八四九〇	三、九八五、三九二	一、八七	一一九、一五三
上川	一〇七、三五一	一、三一九五三	一、八八〇、一二三	二、一〇	七六、六六二
後志	七、四七二	一、三一三九五	二、一八一、三六九	二、〇六	六九、三三二

檜山	一、二九三五九	一、〇三一、一七〇	一、九二	二八、三七九
函館	八四、五〇九	二、七二一	二、六八四、四九一	一、九五	三三、六七八
室蘭	六九、三三九	三、五〇九、六一〇	一、九二	九二、三八六
浦河	三六、四八二	一、二八九二四	一、〇九二、六二〇	一、九〇	三一、三三四
河西	五六、〇一五	一、三一〇五四	二、三五九、九三五	一、八二	六〇、九三三
釧路	二八、四二三	二、八三九三	九七五、六五〇	二、五四	三五、六六四
根室	一〇、七八五	一、六五二三九	四六、八九〇	三、三九	二二、九五一
網走	四七、〇四四	一、二四八七	二、〇七五、一一〇	一、七五	五四、五二一
増毛	一〇、五四〇	一、七三五九	四一五、〇七〇	三、四五	二二、〇六七
宗谷	三六、〇四六	一、二六六四九	八二〇、三〇〇	二、〇〇	二六、〇一三
札幌區	六、七三〇	一、四二八七八	三一五、一二〇	二、五〇	一〇、八三二
小樽區	七、九〇四	一、五八三四	三七三、一〇九	三、三〇	二六、五六八
函館區	八、七九四	一、五五二五	七九九、七四〇	一、八二	一九、四三九
總計	八四五、一八八	一、三七五一	二六、七八四、〇四六	二、〇四	七八〇、七〇五

成鶏ト雛トノ割合成鶏一羽ニ對スル産卵數及其平均價格累年比較表

年次	成鶏	雛	前兩者ノ割合	成鶏一羽ニ對スル産卵數	成鶏雛平均價格	産卵數	成鶏一羽ニ對スル産卵數	鶏卵一個平均價格
明治三十九年	二二一、三五二	三四五、七七三	一、五六	六二、一八	円 五三、七	一三、七六四、一六〇	二、二〇五	円 二、二〇五
同四十年	二三二、四七二	三二五、〇六八	一、二八	五〇三〇	、五八七	一七、七〇三、五三四	六九、八四	三、一七六
同四十一年	二六六、九〇〇	三六三、七一〇	一、二七	五七、九一一	二〇、六三一、八九五	七一、九二	二、七三〇

年次	成鷄	雛	前兩者ノ割合	成鷄雛平均價格	産卵數	成鷄一羽ニ對スル産卵數	鷄卵一個平均價格
同四十二年	三三、九七五	四二五、四三九	一、三六	円 四、三五	一九、二〇五、四二〇	六一、一七	二、三六七
同四十三年	三四五、四四二	四四九、四五五	一、三〇	、三四三	二四、五二一、二二九	七〇、九六	二、一一〇
同四十四年	三七六、〇六八	四六九、二一〇	一、二五	、三三七五	二六、七八四、〇四六	七一、二三	二、〇三七
大正元年	三七七、六七六	四六五、三八九	一、二三	、三四九八	二七、六〇七、七七一	七三、一八	二、一〇五
平均	三一〇、七〇一	四〇六、二七一	一、三二	、四七三	二一、四六二、五七八	六八、六四	二、三八九

大正元年區支廳別産卵歩合比較表

行政區	成鷄羽數	産卵總數	一羽平均産卵數
札幌	三三、五六八	一、五七四、六六六	四八、三五
空知	五九、八四四	三、九六二、七六六	六六、二三
上川	四七、一〇四	二、二七、七四七	四八、七八
後志	二八、五五一	二、五四九、二四六	八九、二九
檜山	一五、八八七	一、一二一、九七九	七〇、〇〇
函館	三七、九八五	四、一五一、三七一	一〇九、二九
室蘭	三五、九九七	三、三四三、四六二	九二、八八
浦河	一五、五四四	一、〇一三、〇四〇	六五、一二
河西	三二、六一一	二、一六八、三〇一	六六、四九
釧路	二二、〇八二	一、〇七九、〇五六	八九、三二
根室	五、四七四	三〇一、九〇九	五五、一五
網走	二二、六六七	一、四〇六、六八〇	六二、〇六
宗谷	六、一四七	四五四、九〇〇	七二、五四
增毛	一六、六〇九	一、二六七、九三三	七六、三四
札幌區	二、五七〇	一八五、九七七	七二、三七
小樽區	二、一四一	二四六、八二八	一一五、二九
函館區	三、八九五	五三一、八六〇	一三六、七〇
合計	三七七、六七六	二七、六三七、七七一	七三、一八

二、飼養法及飼養費

鷄ヲ飼フ方法ノ千差万別ナルハ世人ノ熟知スル處ニシテ農園ノ副産物厨房ノ殘滓ヲ以テ副業ニ數羽ヲ飼フモノト數千羽ヲ飼ヲ專業者ノ内容ト等シカラサルハ勿論ナルノミナラス僅ニ十數羽ヲ飼フニ過ギサルモノト雖モ其經營法ニ專門家ノ行フ方法ヲ加味スルニ趣味ト餘力トヲ有スルモノ又存スルナリ

之レヲ大別シテ粗飼飼ト練飼飼ノ二種トス前者ハ全然穀粒ノミヲ以テ飼養スルモノニシテ後者ハ朝晝ノ二回練餌ヲ與ヘ餌ハ穀粒ヲ與フルモノ多シ穀粒ニハ燕麥、小麥、麩、玉蜀黍、粟、稗、其他農園ノ殘滓等ヲ使用スルモノ多ク練餌トシテハ主トシテ米糠、麥糠、蕎麥芽粕、麩等ニ青物ヲ混シ魚類其他動物質ノ煮汁ヲ以テ攪拌シテ之レヲ與フルモノ多シト雖モ八雲村八尾養鷄場ノ如キハ常ニ八百羽以上ヲ飼育シ著名ノ養鷄家ナルカ燕麥、玉蜀黍ノ挽割ニ稗ヲ混シ之レヲ練餌トシテ與フル等練餌ト云フモ一樣ナラス要ハ各自ノ最モ經濟的ナル飼料ヲ使用スルニ外ナラサルナリ而シテ粒餌ト練餌ト比較スルニ練餌ハ粒餌ヨリ概チ經濟的ニ所要ノ營養分ヲ供給スルニ便ナリトス飼料ハ鷄ノ種類ニヨリ多食スルモノト否ラサルモノトアリテ一樣ナラスト雖一羽一日三厘五毛乃至五厘以内ヲ目的トシテ經營スルヲ常トス前記八尾ハ一日五厘ヲ目標トナセトモ札幌ニテ最モ多數ヲ飼フ山鼻町的場養鷄場ハ三厘八毛ニシテ同町近藤養鷄場ハ一羽五厘弱ニ當リ札幌北七條ノ遠藤養

鷄場ハ練餌ヲ以テ一日一羽五厘ノ豫定ニシテ札幌組合ノ幹事西嶋養鷄園ニ於テハ粒餌ニテ一日一羽五厘ノ費用ト見積リ得ヘクヲ信ス況ンヤ本道養鷄ノ根本タルヘキ農家自家生産物ノ殘滓ヲ以テ小數ヲ飼養スルモノニ於テハ一層廉價ニ飼養シ得ル筈ナリ今左ニ其飼養法ノ二三ヲ紹介シテ參考ニ供セントス

其一、遠藤養鷄場（札幌）

一日ノ給與量

蕎麥芽粕	六舛（十貫九十錢ノ割）	此代	拾貳錢
麥糠	六舛（十貫六十錢ノ割）	同	六錢壹厘二毛
米糠	三舛（十貫九十錢ノ割）	同	五錢四厘
皺	三舛（十貫壹圓六十錢ノ割）	同	八錢六厘四毛
計	一斗八舛（一羽一合、四四）	同計	三十二錢壹厘六毛

飼養鷄數百二十五羽ナルガ故ニ前記三十二錢壹厘六毛ハ壹羽ニツキ金二厘五毛余

外ニ　魚代（一日五錢宛ニテ魚屑ノ特約アリ）壹羽ニツキ四毛

穀粒　燕麥壹石三圓三十錢2/3　屑小麥壹石四圓十五錢1/3　壹羽約五勺

青物總計一日一羽金五厘

其二、的場養鷄場（山鼻町）

一日ノ給與量

蕎麥芽粕	三舛	此代	六錢
麥糠	五舛	同	五錢壹厘
米糠	五舛	同	九錢
計	一斗三舛ヲ一回分	合計	二十錢壹厘

右飼料二回分二斗六舛（一羽一合、四四）合計四十錢貳厘

外ニ　燕麥　一斗　（一羽五勺余）合計三十三錢

合計　七十三錢二厘

飼養鷄數百八十羽ナルガ故ニ一羽一日四厘七毛ニ當ルモ魚屑、青物ハ別ニ現金ノ支出ナシ

之レ七ケ月間クロバーノ青苗ヲ農園ノ周圍ヨリ刈リ取リ之レヲ前記練餌ニ混ズル時ハ二斗六舛ノ前記給與物ハ約一斗ヲ減シ得ルガ故ニ此期間一日一羽三厘二毛ニテ足ル即チ一ケ年平均一日一羽三厘八毛ニ當ルナリ

其三、千葉縣堀田家農事試驗場

農商務省ハ千葉縣堀田家農事試驗場ニ委托シ大正二年十月十三日ヨリ五日間豫備飼養ヲ行ヒ同十八日ヨリ十一月二十六日迄四十日間本試驗ヲ實施シ供試ノ鷄ハ單冠白色レグホーン種外五種ヲ各一雄四雌ヲ一組トシ總計二十九組トシ鷄舍ハ間口奥行トモ一間トシ別ニ三尺ノ小廊下ヲ附シ運動場ハ幅一間長サ三間ノ廣サトシ左記ノ割合ニテ混和シタル練餌及粒餌ヲ給セリ

魚粉	四十六匁	此代	二錢〇二
米糠	百三十五匁		二、三六
大麥挽割粉	百〇三匁		一、八四
皺	百八十六匁		三、四八
水	五百三十匁		—
計	一、〇〇〇匁		九、七〇

給與量ハ平均一群一日青菜四九、匁七四（一〇四錢ノ割）練餌（一〇九錢七厘ノ割）百〇九匁三粒餌八九匁二（一〇二十九錢四厘ノ割）合計二四八匁一強ニシテ此價格合計三錢八厘八毛弱即チ一羽七厘七毛強トス鷄糞ハ平均生糞一群百三十六匁四

弱千羽量ハ五十九匁三ニシテ其價格一貫九錢一羽平均一厘強トス

飼料費ノ外飼養ニ要スル主ナル費用ヲ人夫賃ト建築費トス副業的小規模ニ飼フモノニ於テハ固ヨリ之等ノ費用ハ計算外ニ措クヘキハ勿論ナルノミナラス縱令專業者ト雖モ千羽乃至二千羽ニシテ建築費ニ坪三圓ヲ以テ辨シ得ルアリ二十圓ヲ要セリトスルアリ人夫賃ノ如キモ八尾ノ如ク家族ハ夫妻二人ニシテ夫ハ田圃ノ耕作ニ從事シ主トシテ其妻一人ヲ以テ百羽以上ヲ飼フアリ

山鼻ノ的場ハ主人一人獨身ニシテ百八十羽ヲ飼ヒ遠藤ハ夫妻兩人ニテ百二十五羽ヲ飼フカ如シ養鷄ノ業タル其飼養管理ノ巧拙ニヨリ成績ニ及ホス影響頗ル大ナルモノアリ殊ニ專業的ニ經營スル場合ニ於テ然リトス普通一人ニテ百五十羽以上ヲ飼育スルハ難事トセサルヘカラサルナリ

三、養鷄業ノ經濟調査

本道ニ於ケル二三養鷄業者ノ經濟ヲ實地ニ付調査セシ結果左ノ如シ

其一　札幌　遠藤養鷄園收支調

（大正三年度分）

總收入

金七百二十五圓八十六錢

內譯

金四百六十七圓五十六錢	鷄卵賣却代	一ヶ平均	金二〇八六
金三十七圓七十五錢	鷄糞收入	一俵平均	金二四、五〇
金二百十六圓十三錢	淘汰鷄賣却代	一羽平均	金七三、七〇
金四圓四十二錢	雜收入		

總支出

金三百二十二圓十五錢五厘

內譯

金二百一圓五十錢五厘	飼料一切	
金二十二圓	地代	
金三十圓三十七錢	石炭、石油、木炭代	
金十四圓九十六錢	雜器具品	
金四十圓十錢	諸稅	
金八十一錢	種卵買入代	
金一圓五十九錢	種鷄買入費	
金十圓八十二錢		

差引殘

金四百三圓七十錢五厘　（一ヶ年ノ利益）（雌一羽平均四圓〇〇九厘）　（遠藤）

月次	一日平均雌羽數	一ヶ月平均採卵數	延羽數	一羽平均一ヶ月產卵數	備考
一月	一三三	一、五五三	四、〇九二	二、七七	三日二羽十日四羽十三日四羽二十日一羽計十一羽賣却ス
二月	一三二	一、五一三	三、五〇六	二、〇八	
三月	一三一	二、二八	三、九九八	一八、三四	五日二羽十四日三羽二十三日一羽二十四日六羽計十二羽賣却ス
四月	一〇九	二、一六六	三、二七〇	一九、八七	三日三羽賣却ス
五月	一〇六	二、一三六	三、一六八	二三、八六	十三日一羽賣却ス
六月	一〇五	一、八四八	三、一五〇	一七、六〇	

月次	一日平均雌羽數	一ヶ月平均採卵數	延羽數	一羽平均一ヶ月產卵數	備考
七月	一〇五	一、七二一	三、一八八	十一日三羽二十二日三羽計六羽賣却ス	
八月	九九	一、四四七	二、九二四	九日三羽十六日三羽二十六日六羽三十日四羽計十六羽賣却ス	一、五、八八
九月	八三	五六七	二、四四〇	三日一羽七日一羽計二羽死亡ス	六、九九
十月	八一	三九七	二、四三九	十三日四羽三十一日九羽計十三羽賣却ス	五、〇五
十一月	六八	二四〇	二、〇二一	一日一羽賣却ス	三、五八
十二月	六七	五六六	一、八九六	五日六羽二十六日五羽計十一羽賣却ス	九、二五
周年	一、〇〇七	一六、三二	三五、七八二		一六六、五〇

其二　山鼻　近藤養鶏園收支調

（大正三年分）

總收入

金一百〇五圓七十九錢

內譯

金七十二圓七十八錢　鶏卵賣却代　一ヶ平均　金　二圓二二三

金三十三圓〇一錢　淘汰鶏賣却代　一羽平均　金三五、〇〇

總支出

金六十圓六十一錢五厘

內譯

金四十六圓六十七錢五厘　飼料代　一羽平均　金四厘九毛

金十三圓九十四錢　其他雜費

差引殘

金四十五圓十七錢五厘　（一ヶ年利益）（雌一羽平均一圓七十六錢四六）

月次	一日平均雌羽數	一ヶ月平均採卵數	延羽數	一羽平均一ヶ月產卵數	備考
一月	三三八	八四	一、〇四九	二、四九	
二月	二九四	一七三	八二四	五、八八	
三月	二五〇	三二一	七七五	一三、二四	
四月	二三三	四一三	六六六	一八、六〇	
五月	二二一	四三〇	六八四	一九、四六	
六月	二二〇	三九六	六九〇	一七、二二	
七月	二一七	三二八	六七三	一五、二二	
八月	一八〇	二二五	五五八	一二、五〇	
九月	一八〇	一五九	五四〇	八、八三	
十月	二八〇	三二	八六八	一、二四	
十一月	三三〇	四	九九〇	〇、二二	
十二月	三三〇	六五	一、〇二三	一、九七	
周年	二九六	二、六四〇	九、三四〇	一〇三、一三	

其三　北海道廳農事試驗場

同場附屬模範農場經營事業成績ニヨレハブラマウスロック、レグホーン等ノ雜種雄一羽雌五羽計六羽ヲ飼ヒ動物資本トシテ總計五圓二十五錢ヲ計上シ鶏舍トシテハ一坪ヲ三圓ニ見積リ十ヶ年使用トシテ一ヶ年三十錢トナシ飼料トシテハ左表ノ

外農場生産雑穀ノ粃等ヲ混用シ一羽一ヶ月ノ飼養費五錢ニ當レリ

玉蜀黍	〇、四四一	單價一石ニ付 四円七〇〇錢	計 二円〇七三
燕麥	〇、五二四	二、七〇〇	一、四一五
屑麥	〇、〇四〇	二、八〇〇	〇、一一二
計			三、六〇〇

收入トシテハ鷄卵一ヶ年平均八圓九十錢五厘雛五十六錢七厘計九圓四十七錢二厘差引利益五圓五十七錢二厘トセリ

其四　八雲村　八尾養鷄場收支調

八雲村八尾養鷄場ハ山越郡八雲村字鷲ノ巣ニアリ八尾吉之助之レヲ經營ス其作付地合計三町歩ニシテ耕作物及其反當收穫高ハ左ノ如シ

畑作三町歩	馬鈴薯	一町三反歩	反 二十五俵
	玉蜀黍	二反歩	同 二石五斗
	稗	一町一反歩	同 五石三斗
	裸麥	一反歩	同 三石二斗
	燕麥	二反歩	同 二石六斗
	甘藍其他	一反歩	同

毎年一月ヨリ孵化ヲ始メ畑作ノ始マル頃迄ハ主人主トシテ孵化育雛及一般ノ養鷄作業ニ當リ其後主人ハ畑ニ妻ハ養鷄ニ從事ス

飼養ノ鷄種ハ最初名古屋コーチン雑種ナリシモ卵量ノ少サキト函館方面ニテハ白色殻ノ卵ヲ希望スルモノ多キカ故ニ當時ハ全部白色レグホーン種ヲ飼育ス現在飼養數左ノ如シ　（大正二年六月）

成鷄	雄	五	豫定 雄 一〇羽
	雌	九九	雌 二〇〇羽
	計	一〇四羽	

雛　一四〇羽　孵化　四〇〇羽

本養鷄場ハ常ニ適當ノ雌二百羽ヲ維持シ得ル如ク努メ雛四百羽内ヨリ之レカ新陳代謝ヲ行ヒ淘汰スヘキ老雌（三才ニ達シタルモノ）及不用雄ハ順次函館ヘ賣却ス其相場格左ノ如シ

老雌	百匁	円一八〇—、二〇〇—、二二〇
若雄	百匁	老雌ヨリ各二錢高

但シ若雄ニシテ百匁マテノモノハ一羽二十錢ノ割トス

備考　雄種鷄ハ時々血液更新ヲ圖リ力メテ產卵ノ大ナランコトヲ期ス

孵化ノ方法ハ米國サイファー式孵化器ニヨル二百四十個入一臺百二十個入一臺ヲ使用ス（他ニ重板式孵化器アルモ成績不良ニシテ使用セス）

本年一月自園ノ孵化成績左表ノ如シ

入卵月日	入卵數	無精卵	發育中止	孵出	不適雛	入卵數ニ對スル割合
一月二十日	一四〇	二七	二七	八六	二	六一
二月十日	一四〇	一六	一四	一一〇	六	七八
三月三日	一四六	九	一九	一一八	〇	八〇
三月二十四日	一四五	六	二一	一一八	〇	八〇
四月十四日	一四〇	二五	四四	七一	二	五一
五月五日	一三八	二二	三五	八一	⊙	五八

外ニ委托孵化ヲモ行ヒ各委托者ヨリ卵ヲ持參シテ孵化ヲ依頼スルアリ又豫メ希望ノ雛數ヲ申込ムモアリ斯ル場合ハ本場產ノ鷄卵ヲ孵化シ雛トシテ賣却シ一羽金十五錢ノ割ヲ以テ徵金ス又委托孵化手數料ハ一羽ニ付十錢（卵持參ノ分）ヲ徵集ス

委托孵化ノ雛受渡ハ孵出ノ翌日之レヲ行フヲ常トス

大正元年度産卵數ヲ示セハ左ノ如シ

月次	一ヶ月産卵數	賣却價額	一個平均價額
一月	一、五七六	三七円五六〇	〇二四
二月	二、〇九四	五一、八八五	〇二四
三月	二、一七八	三八、九二〇	〇一八
四月	二、三一五	四二、九一〇	〇一八
五月	二、二八〇	四七、四〇〇	〇二一
六月	二、二六八	四二、五二〇	〇一八
七月	二、二四五	六五、五五〇	〇二九
八月	二、一四三	四四、九九〇	〇二五
九月	一、四〇一	五六、三九九	〇四〇
十月	一、七〇六	三六、五六四	〇二一
十一月	四二五	一四、九五〇	〇三五
十二月	九二一	五三、八七〇	〇五八
計	二、五五二	五四、五一八	〇二六

一羽一ヶ年平均産卵數　一〇七・七六ナリ

例年春期仙臺地方ヨリ函館ヘ入卵スルカ故ニ一時相場下落ノ場合アルモ仙臺産卵ハ品質不良ナレハ八雲産ノ新鮮卵ト自ラ得意先ヲ異ニシ敢テ甚タシキ困難ヲ來サス若シ函館ニ於テ相場下落ノ節ハ札幌地方ヘ廻送ス概シテ此時期札幌地方ハ相場高キヲ常トスルカ如シ函館相場ハ二百四十個入一函金七圓八十錢ニシテ一個三錢三厘弱ニ相當ス（但シ小賣ハ一個大玉ニテ五錢ナリ）

夏期ハ一時成鶏ノ産卵ヲ減スルモ春期孵出セル雛漸ク産卵シ始ムルカ故ニ（春一月生ノ雛五ヶ月目位ヨリ産卵ス）多大ノ影響ヲ蒙ラス唯雛ノ卵形小ニシテ（十匁乃至十二匁ニ過キス）二個ヲ以テ一個ニ計算シ賣却スルモ尚且ツ問屋ニテハ嫌ハサルカ如シ

函館ニテノ定問屋ハ鎌田正一ニシテ各日曜日毎ニ出荷シ一函二百四十個入ニシテ函代及籾殼繩代合計二十錢ヲ要シ運賃ハ問屋持込ミニテ一函ニ付十五錢ヲ要ス

大中小ノ撰卵ハ別ニ之レヲナサス雛卵ノミ區別ス一個ノ卵量大約十六匁以上二十匁迄ノモノ多シ現時日々六十個乃至七十個産卵ス斯クノ如ク出荷スルヲ以テ貯卵ノ必要ナキノミナラス卵價安値ノ時ハ之レヲ貯卵シ高騰セル時ニ賣却スルカ如キ事ハ問屋ニ對シ德義上絶体ニ之レヲ爲サス

飼養方法ハ普通ノ如シ蕎麥玉蜀黍ノ引割及ヒ稗ヲ練餌トシ雛ニハ之レヲ煮テ與フ周年成鶏ハ練餌ニシテ自家農圃生産ノモノ及買入品ノ分ヲ供シ一羽平均一日五厘以内ナリトス燃料代ヲモ含ム薪ハ一敷五六ノ二尺一圓四十錢位ナリ）

今前年度飼料費ノ支出高ヲ記セハ左ノ如シ

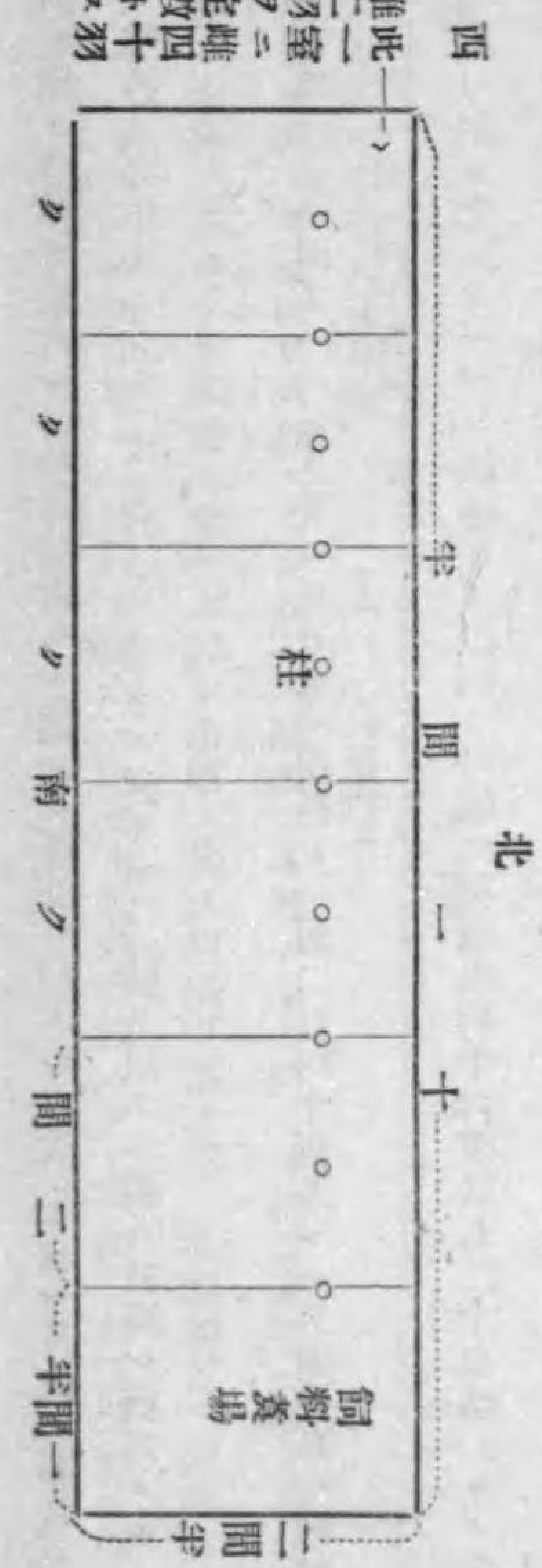
月次	金高	月次	金高
一月	一四五、七三〇円	二月	一六、四五〇円
三月	五一、五五〇	四月	二五、八〇〇
五月	五、五五〇	六月	—
七月	—	八月	七、一〇〇
九月	一六四、二〇〇	十月	六九、五六〇
十一月	一四、七八〇	十二月	五六、〇〇〇
合計	五五六、七三〇		

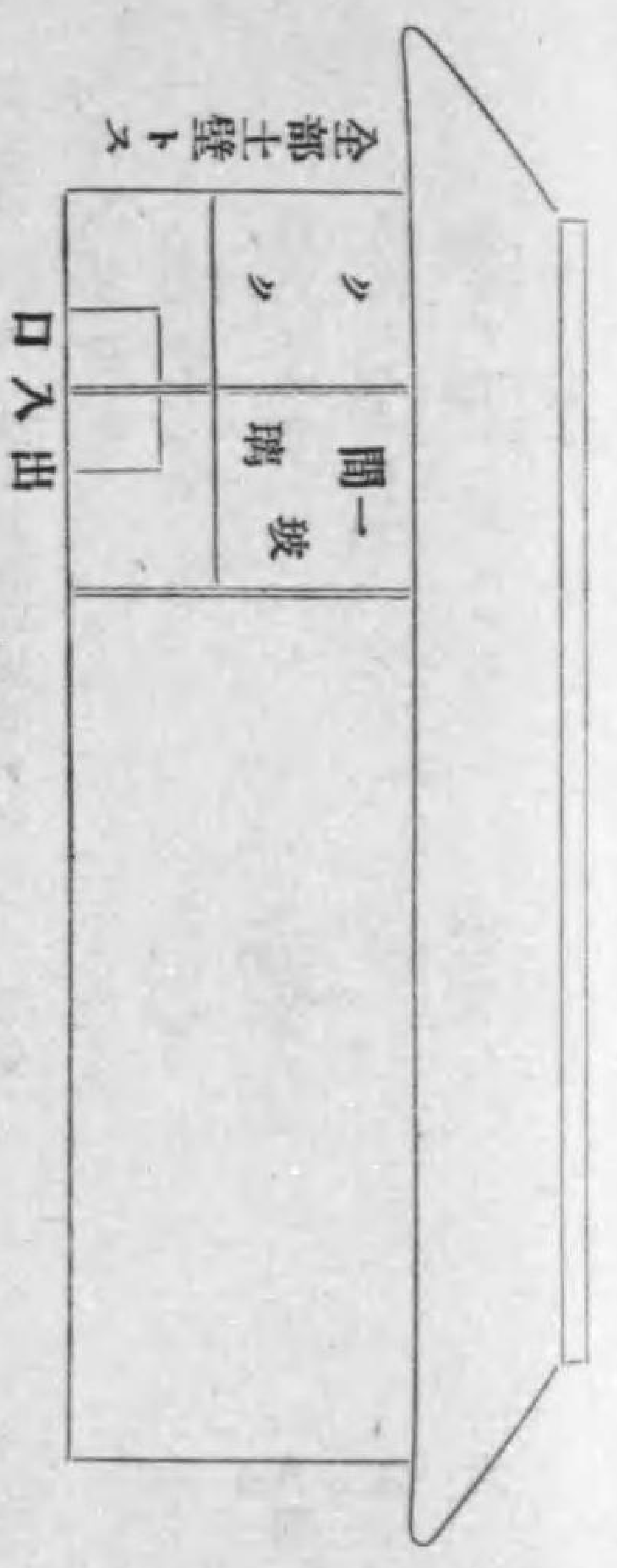
成鶏ヲ賣却スルモノモ亦函館ヲ主トス前年ノ分左ノ如シ但シ此内ニ雛一羽十五錢ニテ賣却シタルモノヲ包含スルモ區別明ナラス

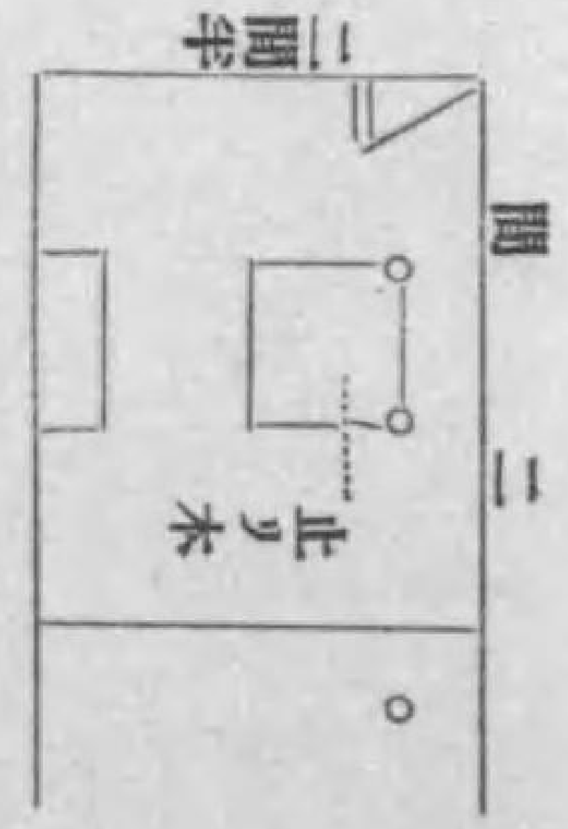
月次	數量	金高	月次	數量	金高
一月	三九羽	三八、六九三円	二月	三一羽	二、〇〇〇円
三月	九六	二九、三九〇	四月	四八七	八四、二三〇
五月	四〇一	六九、八二〇	六月	六七	三、九〇〇
七月	三	二、五〇〇	八月	五	四、二四〇
九月	—	—	十月	—	—
十一月	—	—	十二月	八	五、六二〇
合計	一、一三七	二六二、七七三			

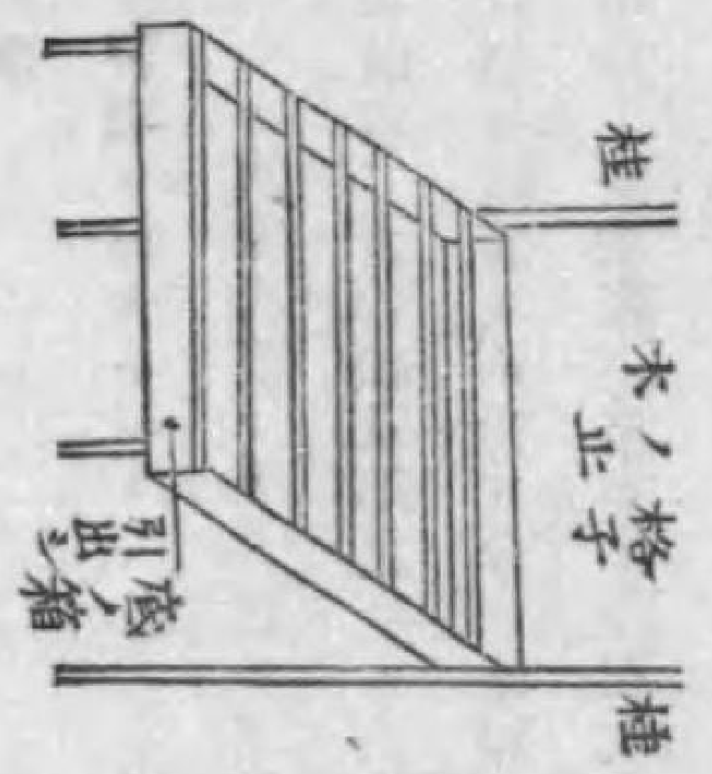
鶏糞ハ新鮮ノモノ十貫匁四十錢位ニテ賣却出來得然レトモ當場ニテハ馬糞ト共ニ肥料ニ使用ス（作物ノ稈ハ全部鶏舍ニ敷キ入レ肥料トス）其量一ケ年凡ソ一頭曳馬車ニテ二百五十臺位ナリ

鶏舍ノ略圖左ノ如シ

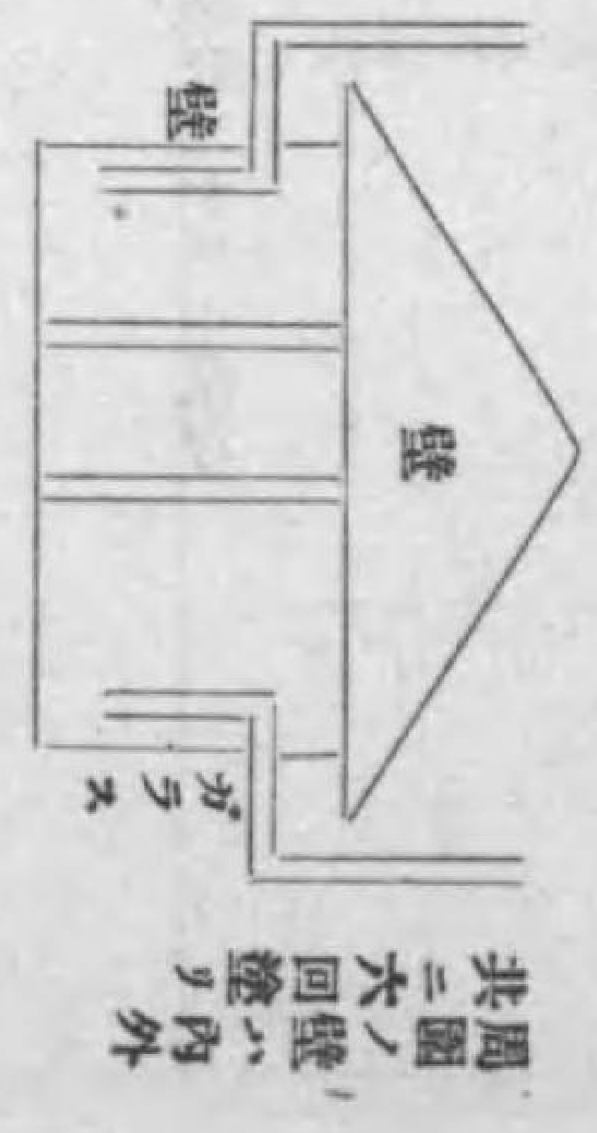








（雛四百羽収容ノ目的　一坪十八圓二十錢　十八坪七合五勺）



防寒ノ設備トシテ南面ハ全部二重ノ硝子戸トシ西ト其他ノ空所ハ厚壁トシ又天井モ育雛室ハ全部壁塗トナシ適當ノ換氣法ヲ備ヘ朝一回丈ケ「ストーブ」ヲ燃ス成鶏ニハ別ニ「ストーブ」ヲ燃サヾルモ朝一回飼料釜ニ火ヲ用ユルヲ以テ幾分ノ溫氣

アリ

四十四年分收支計算

總收入　八三九円九四一　卵、鷄

總支出　三五六、七六五　飼料其他

外ニ　二九、八七〇　建物償却金鷄舍及物置二十ヶ年保存

差引　四五三、三〇六利益

八雲村ニ養鷄ノ盛ンナリシ原因ハ左ノ如シ

一、各地主盛ンニ小作人ヲシテ養鷄ヲ奬勵シタル事

二、尾州地方ノ小作人多カリシ故郷里ニテ養鷄ノ習慣ヲ有セシコト

三、函館ニ近キヲ以テ生産物ノ賣口良ク小口ノモノハ專業卵商アリテ之レヲ買ヒ集ム

八雲村字印酒井勝三郎最モ大キク簑浦直吉、古川清吉、古谷瀬三郎之レニ次ク從テ價格モ相當ニシテ日々若干ノ現金ヲ得ルカ故ニ婦女及子供ニ至ルマテ何レモ五羽乃至六羽ハ飼育スル爲メ今ヤ同村ノ鷄卵產額ハ一ヶ年二万圓ヲ超ユ將來ハ同村主產物タル澱粉以上ノ產額ニ達スルニ至ルヘシ小口ノ副業家ハ各戸ニ孵化ヲ行ハス八尾等ヨリ雛ヲ買求メ飼育ス

其五　高日　静光園養鷄場收支調

種類及羽數

種禽ノ部		
白色レグホーン	雄五羽	雌一八羽
黑色ミノルカ	三	九
横班プリモースロック	二	六

採卵用ノ部

雄鷄　二五羽

雌鷄　六三七

內譯

白色レグホーン　三二五

黑色ミノルカ　二〇〇

横班プリモースロック　一二二

建物數及坪數

鷄舍ノ名稱	棟數	坪數	建方	區割
種禽鷄舍（孵化育雛場及事務所）	一	二〇	間口二間 奥行一〇間	一〇
群鷄舍	一	三〇	同	一
連續鷄舍	一〇	二〇	同	一〇
雛鷄養成舍	一	五九	同	三
倉庫	一	二五	同	一
計	一五	一四六		六

養鷄場坪數及木柵並ニ金網間數

區割運動場	一、四五〇坪
耕地	二六〇〇
建物坪數	一四六

道路敷地	二四〇坪
放牧地	二、〇〇〇
木柵	四〇〇間
金網	七六〇

鷄舍運動場及管理法

採卵鷄舍及運動場ハ二式アリテ其構造ハ次ノ如シ

其一　分鷄舍一棟三坪(間口二間奥行一間半)ニ對シ運動場八十坪(十間ニ八間)ヲ備ヘ周圍ニハ金網ヲ張リ一隅ニ鷄舍ヲ

(左圖配置シ飼育鷄數ハ三十羽トナセリ

鷄舍ハ南面ニ六枚美濃判硝子窓ト三尺ノ入口ヲ有シ舍内ハ二分シ一方ニハ柵ヲ設ケ他方ニハ止リ木ヲ備フ

其二　連續鷄舍一棟三十九坪(間口十九間半奥行二間)ヲ十三區劃シ一區劃ヲ三坪(一間半ニ二間)トシ之レニ七坪半(五間ニ一間半)ノ運動場ヲ具ヘテ三十羽ノ成鷄ヲ飼養セリ鷄舍ノ内容及窓硝子入口等ノ配置ハ略ホ前者ト同樣ナリ

管理　採卵雌鷄ハ鷄舍運動場其他ノ關係上常ニ六百三十七羽ヲ標準トシ之レカ補充ニハ雛雌ヲ以テスル計劃ナリ其期節ハ九月頃ヨリ初マリ十二月マデナリ

孵化ハ全部人工ニヨル其歩合ハ八〇%前後ニシテ毎年二月ヨリ七月マテノ期間ニ限ル

孵化後雛百日位ニシテ三百匁位トナレハ一羽金三十錢餘ニ販賣シ之レヨリ長ク飼養スル時ハ實驗上却テ損失ヲ招クト云フ

卵及鷄ハ主トシテ函館區蓬萊町土橋肉店及同區辨天町原肉店ヘ賣却ス鷄卵一個ノ代金ハ二錢乃至三錢五厘ナリ

産卵月別表

月次	産卵數	平均一羽ノ産卵數
一月	五、二九七	八、三二
二月	八、三七〇	一三、一四
三月	一一、二四八	一七、六六
四月	一二、五五四	一九、八六
五月	一三、〇五四	二〇、四九
六月	九、〇一九	一四、一六
七月	六、三〇九	九、九〇
八月	五、一一二	八、〇三
九月	五、六一五	八、八一
十月	一、四四二	二、二六
十一月	一、三五四	二、一三
十二月	一、九九九	三、一四
計	八一、三七三	一二七、七四

備考　產卵成雌ハ平均六百三十七羽ナリ

大正三年度收支調

總收入

一金二千一百七十二圓四十錢也

內譯

一金一千八百三十五圓四十錢　鷄卵賣却代（一個二錢三厘）

一金一百十二圓　雛鷄賣却代（一羽三十六錢）

一金二百二十五圓　成鷄賣却代（一羽八十錢餘）

總支出

一金一千四百八十九圓三十錢也

內譯

一金一千一百七十四圓三十錢　飼料費（育雛ニ要スルモノヲ區別セスシテ成鷄一羽一日ノ飼料費四厘八毛六）

一金三百十五圓　諸雜費

差引金六百八十三圓十錢　利益（雌一羽平均五一圓〇七錢二厘四毛）

飼料及雜費明細表

品名	數量	價格	品名	價格
燕麥	一三〇ヶ	三五一、〇〇円	薪炭	五五、〇〇円
玉蜀黍	七〇	三三六、〇〇	石油	四〇、〇〇
稗	五〇	一三五、〇〇	雇人給料	一五〇、〇〇
糠	七〇貫	一〇五、〇〇円	人夫賃	五〇、〇〇円
麩	七〇	一四〇、〇〇	消耗費	二〇、〇〇
魚粕	三七〇貫	一〇七、三〇		
計		一、一七四、三〇	計	三一五、〇〇

山鼻　吉川養鷄場收支調

支出

一金二十七圓也　土地借入費

但シ一百五十坪借入　一ヶ月一坪ニ付金一錢五厘　一ヶ年金十八錢ノ割

一金十五圓也　鷄舍建物費（二間九間）

但シ鷄舍十八坪建築費九十圓（一坪三圓ノ割）保存年限ヲ五ヶ年トシ一ヶ年ノ償却金六圓ヲ負擔シ一ヶ年修繕費金九圓ヲ要スルモノトス

一金五圓也　運動場金網柵費（約五十間）

但シ十九濟亞鉛線二寸四分目二巾トシ下ニ板ヲ宛テ一間ニ付約九十錢合計金四十五圓保存期限ヲ十五ヶ年トシ一ヶ年金三圓修繕費金二圓トス

一金五圓也　飼養器具費及雜費

一金四十圓也　利子

但シ成鷄雌百二十羽（一羽平均金一圓）雄三羽（一羽平均金一圓五十錢）總計金百二十四圓五十錢鷄舍建築費金九十圓運動場網柵費金四十五圓器具費金十圓孵化器金九十圓假母器金二十圓合計金三百七十九圓五十錢流通資本共ニテ合計金四百圓（一ヶ年一割ノ利子金四十圓）

一金一百七十九圓五十八錢　飼養費

但シ成鷄百二十三羽（一日一羽ニ付金四厘）一年ニ付一羽金一圓四十六錢ノ割

總計金二百七十一圓五十八錢也

收入

一金四百五十圓也　卵賣却代

但シ成鷄一羽ニ付一ヶ年産卵數百五十個（一個二錢五厘）

一ヶ年一羽産額金三圓七十錢

差引金一百七十八圓四十二錢　利益

備考　百二十羽ニ對シ一羽平均一圓四十八錢六厘餘

外ニ鷄舎ノ收入ハ此羽數ヲ以テセハ鷄舎内及運動場ヲ併セ二日毎ニ一俵（十三貫目）ヲ得ヘク市價一俵金二十五錢内外ナルヲ以テ一日一羽約一厘ニ當ル即チ一ヶ年總計金四十四圓八十九錢五厘ヲ得ヘシ普通之レヲ臨時費ニ充ルモ經營安定ニ至ルトキハ（一日金四十五錢）人夫賃ノ仕拂ヲ得タル外總資金ニ對シ約一ヶ年二割以上ニ相當スル配當ヲ見得ルニ當ランカ

飼料表（一日一羽ノ分）

蕊麥	八匁	此代	一圓四毛六	但シ一〆	十八錢ノ割
二番小麥	同	同	一、二〇	同	十五錢ノ割
麥糠	五匁	同	、三〇	同	六錢ノ割
蕎麥芽粕	六匁	同	、四五	同	九錢ノ割
米糠	同	同	、五四	同	

屑魚、青物、芋、等若干

合計　一羽ニ付金四厘〇四

孵化育雛費

大概飼養ノ成鷄ハ二才乃至三才ニシテ淘汰賣却シ年々新ニ孵化育雛シタルモノヲ以テ新陳代謝スルヲ常トス此孵化育雛ニ要スル費用ハ淘汰鷄ヲ賣却シタルモノヲ以テ相償ヒ若干ノ餘裕アルナリ

本豫算ニ於テハ淘汰二乃至三才ノ雌鷄六十羽一羽平均四百五十匁、百匁金二十錢ノ割ニテ一羽代九十錢六十羽合計五十四圓ニ乃至三才雄一羽五百五十目、百匁ニ付八錢ノ割ニテ一羽代四十四錢三羽代金一圓三十二錢合計金五十五圓三十二錢三十日雛平均一羽金八錢八十七羽計金六圓九十六錢總計金六十二圓二十八錢トナリ孵化費ハ別表ノ通リ百五十羽ノ雛ヲ得ル爲メ金二十八圓四十一錢五厘育雛費金三十三圓五十七錢總計金六十一圓九十八錢五厘ニ當リ多雛ノ欠損ヲ見込ミ得ルノ餘裕ヲ有スルナリ

孵化器ヲ用ヒス兼用種ヲ置キ孵化育雛セシムルトキハ産卵ニ於テ一ヶ年一羽五十個ノ差ヲ生スヘク一個金二錢五厘ト見積ル時ハ一羽一圓二十五錢ノ差ヲ來シ二百個ノ卵ヲ孵化スル爲メ二十羽ノ母鷄ヲ置クトキハ二十五圓ニ達スヘシ之レニ孵化室費三圓三十三錢三厘種卵五圓ヲ加フル時ハ三十三圓三十三錢ニテ却テ損失ナルヘシ又兼用種ナルカ故淘汰鷄ヲ賣却スル際肉量ニ差ヲ有スヘシトシテ假ニ甲乙相償フトスルモ天然ニ任スルノ止ムヲ得サル爲メ孵化ノ機會ヲ逸スルノ虞レアルモノトス

孵化費

孵化室費　金三圓三十三錢三厘

四坪　一坪金五圓　計金二十圓保存期限十五ヶ年償却金一ヶ年一圓三十三錢三厘修繕費二圓合計金三圓三十三錢三厘

種卵　五圓也　但シ二百個代　一個ニ付金二錢五厘宛

孵化器　九圓也　但シ二百個孵化器一臺九十圓十ヶ年保存一ヶ年ノ償却金

假母器　二圓也　但シ一臺金五圓四臺金二十圓十ヶ年保存一ヶ年ノ償却金

石　油　九圓〇八錢五厘　但シ孵化器一臺一日ニ付五合宛二十五日分計一斗二升五合假母器二臺六十日（一臺三十日宛）一臺一日一合五勺計二斗七升合計三斗九升五合

石油一斗金二圓三十錢

小計金二十八圓四十一錢八厘

育雛費

候補雌雛六十羽　同雄雛三羽　計六十三羽

百五十日ッ、一日三厘平均（一羽金四十五錢）

小計金二十八圓三十五錢

淘汰雛八十七羽　三十日ッ、二厘平均（一羽金六錢）　計五圓二十二錢

小計金三十三圓五十七錢

（百五十羽ニ付一羽平均約十九錢ニ相當ス）

總計金六十一圓九十八錢五厘也

四、取引ノ方法

鷄卵取引ニ重量ニ依ルト個數ニヨルトノ別アリ東京、千葉、名古屋等ノ問屋間ノ大取引ニテハ重量ヲ以テシ是等ノ地方ト雖モ問屋カ農家ヨリ買ヒ入ル、ニハ個數ニヨルモノ多ク所謂卵買ト稱シテ農家ニウキ鷄卵ヲ買ヒ取リ問屋ニ供給スル仲買人或ハ小買人ハ常ニ個數賣買ニ依レリ宮城縣湯谷地方ノ如キ十三匁以上ヲ大卵トシ十七八匁アルモノモ區別ナク一ヲ買ヒ入レ問屋ハ之レヲ重量ニテ賣却スルカ故利益多シト云フ而シテ其重量ヲ以テスルモノモ個數ニ依ルモノモ鷄卵ノ大小卵黄ノ濃淡卵殼ノ黄白新鮮ノ程度等ニヨリ價一樣ナラス是等ハ消費者ノ趣味或ハ目的ニ依リ差アリト雖モ卵殼及卵黄ノ濃色ナルヲ好ムヲ普通トシ重量ヲ以テ取引スル場合ニハ必スシモ大卵ナルニ順シテ價格尊カラス東京ニ於テハ一個十三四匁ヲ最モ需用アリトシテ是レヲ標準トナス其以上ノモノハ卵價低廉ナル場合ニノミ歡迎サルヽモ卵價高キトキハ反ッテ小形ノモノ需用多シ

支那卵ハ其價格低廉ナルト小粒ナルニヨリ本邦ニ其需用多シ小粒ナルカ故ニ重量取引ニ於テハ大粒ノモノヨリモ同一重量ニテ多數ヲ買ヒ得ル特殊ノ目的ニ使用スルニ便ナリ今日マテ輸入セシモノハ一般ニ形小サク惡臭アリシト雖今ヤ大イニ改良シテ米國ニモ輸出スルニ至レリ

本邦養鷄業者ノ同卵ノ爲メ蒙ル影響少ナカラス冬期ハ一般ニ產卵少ナク卵價騰貴スヘキ筈ナルニ支那卵ノ輸入アル爲メニ反ッテ反對ノ現象ヲ見ル千葉縣當業者ノ如キ大イニ之レカ影響ヲ被ルコトアリ

凡ソ鷄卵ノ取引標準ハ問屋間ハ十貫ノ重量ニ對シ何程ト云ヒ遠隔ノ地ニ取引スルモノハ正味三貫九百匁入リノ木箱ニ收メ（支那卵ハ別ナリ）籾殼ヲ以テ埋メ函外ニ之レヲ明記スルヲ常トス、

凡ソ鷄卵ハ春時生產多キ時ト盛夏或ハ酷寒ノ生產少ナキ時ニヨリ相場ノ高低著シキモノナルカ故之レカ調節ノ方法ヲ講ゼ需給ノ平衡ヲ得ルニ力メナハ生產者消費者共ニ便ナル事明ラカナルヲ以テ一ヶ年一千四百万圓ノ鷄卵輸出ヲ爲ス丁抹國ノ如キハ夙ニ鷄卵輸出組合各支部ニ貯卵所ヲ設ケテ市場ノ安定ヲ計レリ近年本邦ニ於テモ冷藏庫ノ利用巧トナリ鷄卵ヲ豫托スルモノ增加スルカ如シ

食用鷄ハ其幼ナルモノ、外生体重ニ依ル賣買ヲ常トシ名古屋、仙臺地方ヨリ冬期札幌ニ輸送スルモノハ之レヲ屠リ羽毛ヲ剝キ素嚢ノ内容物ヲノミ去リ六貫五百乃至七貫五百匁入リノ箱詰トシ移入ス是等ノ減耗量ハ生体量ノ約一割ニ當ルヲ常トシ一羽平均五百匁内外ニシテ二乃至三才ノ雌鷄ヲ多シトス

五、本道將來ノ養鷄業

本道ノ養鷄業ハ年々其飼育羽數ト生產額ヲ增加スト雖更ニ積極的ニ之レヲ奬勵シ技術上ノ智識ヲ與フルト共ニ生產物販賣上ニ於ケル不利不便ノ点ヲ除カサルニ於テハ本道養鷄業ノ將來ハ實ニ發展ノ餘地豐ナルモノト云フヘカラス

而シテ將來之レカ發達ヲ期スルニ副業的養鷄業ヲ奬勵スルヲ主トスヘク專業的養鷄業ハ本道既ニ幾多失敗ノ歷史ヲ有シ今後本道ノ生產額增加スルニ從ッテ卵價又本日ノ如ク府縣ニ比シテ多大ノ差ヲ維持スル事困難ニシテ反ッテ府縣ニ販路ヲ求メサルヘカラサルノ位置到達スルヲ豫期セサルヘカラサルカ故ニ專業的養鷄業ヲ特種ノ便利ト事情トヲ有スルモノニ止メ

シメ本道養鶏業ノ根本ハ多少ニ拘ハラス鶏ヲ飼フ農家ノ増加ニ待タサルヘカラス

本道ハ農家戸數ノ内鶏ヲ飼育スルモノ僅カニ四五%ニ過キス東北六縣ノ平均ハ六二、九%ニ達シ千葉ノ八四、六%等ニ比スレハ本道農家ノ鶏ヲ飼フモノ如何ニ僅少ナルカヲ知ル事ヲ得ルナリ

丁抹ニ於ケル農場經營數二十四万九千九百八十三ニシテ鶏數五百四十四万八千六百十五羽ニ達シ一農場ノ平均面積十四町三反歩ニ對シ飼フ處ノ鶏數二十三羽一分ニ當リ賣却卵數平均一農場二百二十五斤二分即チ鶏卵八個ヲ一斤トスルトキハ千八百〇一個六分ニシテ一羽當リ卵數平均七十八個四分ニ當レリ而シテ其農場中五三、五%ヲ占ムル五町歩以下ノ細農ノ平均面積ハ一町三反歩餘ニ不過スシテ其合計僅カニ農場全面積ノ四、九%ニ當ルモ丁抹全國ノ鶏數ノ三二、九%ヲ占メ賣却卵ハ全國總數ノ三四、一九%ヲ占ム十五町歩以下ノ小農ハ全農場數ノ七二、一%ヲ占メ其平均耕作面積三町三反五畝歩餘ニ不過ルモ同國全鶏數ノ五三、一%ヲ占メ賣却鶏卵ハ總數ノ五四、九%ニ達シ鶏卵ノ生産ハ本階級ノ特色トシテ注意サルヘキナリ

本道農家五町歩ノ耕地ヲ有スルモノ五、六羽ノ鶏ヲ飼フニ當リ飼料ノ大部分ハ其副産物ヲ以テ足ル事ハ幾多實驗ノ證スル處ナリ開墾時代ニアルモノ或ハ農業ヲ兼業者ニシテ五町歩ヲ作付セサルモノト雖モ其程度ニ應シ多少ノ勞ヲ厭ハス鶏ヲ飼ヒ零碎ノ餘力モ尚ホ徒費セサルニ至ラハ斯業ノ發達ヤ期スヘキモノアラシ

養鶏ノ事業ハ固ヨリ鶏卵ノ市價ト飼料費ノ多少ニヨリ決定セラルヘキモノナリト雖農家ハ其副産物ノ利用ヲ主トスルカ故ニ收支計算極メテ有利ナリト云ハサルヘカラス之レ府縣農家ノ一戸平均作付反別本道ニ比シ狹少ニシテ卵價又低廉ナルモヨク鶏ヲ飼フモノ多キ所以ナリ左表(其一)ニヨリテ之レヲ見ルニ本道飼育者一戸ニ對スル成鶏ノ割合ハ五、四羽ニシテ東北六縣一戸當リ平均四、一羽ハ勿論養鶏地トシテ最モ有名ナル千葉縣ノ五、三羽ヨリモ大ナリト雖農家一戸ニ對スル成鶏數ハ本道ニ於テハ二、三羽ニシテ東北六縣ハ平均數二、六及千葉ノ四、六羽ヨリ小ナリ是レ府縣ノ斯業ハ普遍的ナルニ反シ本道ニ於テハ然ラサル證ナリ

本道ノ農家中未タ開墾時代ニシテ飼料ト勞力ニ餘裕ナキモノ存スル事ハ本道農家ノ鶏ヲ飼フ割合少ナキ一因タルヤ疑フ事レサル處ナリト雖本道ハ府縣ニ比シ農家個々ノ間隔遠ク地域廣大ナルカ故ニ集卵上ノ不便多クシテ鶏卵ヲ隨時金ニ換フル能ハス空シク無意味ニ消費シ或ハ所謂卵買人ノ來ルヲ待チテ其云フカマヽニ市價ヲ定メサルヘカラサル不快アルトニヨリ養鶏業ニ關シ趣味ヲ感得セサルニヨルコト一大原因トセサルヘカラス

然レトモ如斯ハ飼養者ノ數增加シ共同經營ノ精神進歩セハ當然改良サレ得ヘキモノニシテ丁抹鶏卵組合ノ鶏卵蒐集法ノ如キ頗ル參考トスヘキモノナルヘシ

又本道ノ氣候寒冷ナリト雖四十三年ノ產卵歩合ハ七〇、九個農商務省統計ニ依リ府縣ニ比較スルニ左表(其二)ノ如ク決シテ劣等ノ位置ニアラス農家戸數ニ對シ飼養者ノ割合八〇%以上ニ位スル鹿兒島、宮崎、栃木、千葉ノ四縣ニ比スルモ本道ハ千葉縣ニ及ハサルノミニシテ東北六縣中ニハ本道ニ及フモノナシ之等統計上ニ於ケル成鶏一羽ノ產卵數ハ事實ニ於テ調査上正確ノ材料ヲ蒐集シ難キカ故或ハ此數字ヲ以テ直チニ斷案ヲ下スハ反ツテ正鵠ヲ失スルヤモ不計ラレスト雖本道ノ實際ハ養鶏專業家ノ經驗ニヨレハ雌一羽一ケ年百五十個ノ產卵ヲ豫定スルコト困難ナラス副業飼育者ト雖モ既往ノ統計ニヨル平均率成鶏一羽六十八個餘或ハ明治四十三年ノ七〇個九六ハ何等過大ノ見積リニアラスシテ世界ニ著名ナル鶏卵輸出國タル丁抹ノ七八個四分ノ賣却卵數ニ大差ナキモノト謂フヘシ

其一　成禽數ト飼育者戸數及農戸數トノ割合

(明治四十三年)

	成鶏羽數	飼養者戸數	農戸數	農戸數ト飼養者割合	農戸數一戸宛成禽羽數	飼養者一戸宛成禽數
鹿兒島	七八一、四七三	一七五、四二四	一九一、七四九	九一、五%	四、一強	四、五
千葉	七三五、一九三	一三七、一七四	一六二、〇三二	八四、六	四、五強	五、三
宮崎	二六七、七五二	六〇、四四二	七一、七五〇	八四、二	三、七弱	四、四
栃木	三一七、八三九	七四、六〇六	九二、〇八二	八一、〇	三、五強	四、三

（以上ハ各府縣中農家戸數ニ對シ飼育者戸數八〇％以上ノモノトス）

宮城	二七九、四五八	五一、九四七	八四、六一三	六一、四％	三、三 弱	五、四
福島	四〇四、〇三七	九五、三八	一三、八七一	七六、九	三、三 強	四、二
岩手	二〇三、四五七	五四、〇七五	九二、二八二	五八、六	二、二 弱	三、八
青森	一六八、〇六六	五一、九〇八	七〇、三一三	七二、八	二、四 強	三、二
山形	二四、三三三	二六、八五二	八六、三三七	三一、一	一、三 弱	四、三
秋田	二六二、二六〇	六六、七七一	七八、九一六	七五、七	三、三 弱	三、九
東北六縣平均	—	—	—	—	—	—
北海道	三七六、〇六八	七〇、二五四	一五一、二七八	四六、四	二、八二	四、一	五、四

其二　産卵數ノ割合

（明治四十三年）

（イ）農家戸數ニ對スル飼養者ノ割合八〇％以上ニ達スル諸府縣ノ産卵數

鹿兒嶋	三一、二〇一、一八八	七八一、四七三	四一、一 同
千葉	八四、四二四、五四三	七五、一九三	一六、四 同
宮崎	一五、四八六、七九二	二六七、七五一	五七、八 同
栃木	二五、二二〇、〇八六	三一七、八三九	四、六 強

（ロ）飼養者一戸當リ成禽ノ最モ多キ府縣ノ産卵數

福井	六、六 羽	五、五六四、九〇五	六二、三八七	八、九 強
愛知	六、五	五〇、〇二六	一八二	六七、五五八	七、七 弱
茨城	五、八	四四、三五〇、八六一	七六三、二四五	五、二 強

（ハ）東北六縣ノ産卵數

宮城	一九、〇四八、三二四	二七九、四五八	六八、一 弱
福嶋	二七、八四七、七四六	四〇四、〇三七	六八、九 同
岩手	一三、四九二、二二二	二〇三、四五七	六六、三 同
青森	一〇、三〇一、一六〇	一六八、〇六六	六一、三 強
山形	七、二八三、八五二	一二四、三三三	六三、七 弱
秋田	一四、三七三、九四七	二六二、二六〇	五四、八 同
平均	—	—	—
北海道	—	—	六三、八五
	—	—	七〇、九六

六、東京鶏卵相場

卵價ハ本道各地其差著シク少シク避遠ノ地方ニ於テハ極メテ低廉ナルヲ常トスルモ概シテ本道都會ノ價ハ府縣ニ比シテ遙カニ高ク名古屋仙臺新潟等ヨリ本道ニ入ルヲ以テモ之レヲ知リ得ヘク農商務省ノ統計ニヨレハ明治四十三年ノ市價トシテ全國中ノ最高ヲ示シ函館小樽ノ一個平均卵價三錢九八ト青森ノ一個三錢ノ外皆二錢八厘以下ニ屬シ本邦平均ノ如キハ二錢

四厘六ナリ以テ非常ノ差アルヲ知ルヘキナリ

參考ノ爲メ札幌及東京ノ卵價相場ヲ左ニ掲載ス

東京鷄卵相場（但シ十貫目ニツキ）

（東京曉聲社早乙女氏調査）

四十四年度			四十五年度（大正元年度）			大正二年度			大正三年度		
年月	上旬	下旬	年月	上旬	下旬	年月	上旬	下旬	年月	上旬	下旬
一月	一七、〇〇〇円	一六、五〇〇円	一月	一八、三〇〇円	一九、九〇〇円	一月	二〇、一〇〇円	一八、五〇〇円	一月	一八、七〇〇円	一七、五〇〇円
二月	一六、〇〇〇	一五、五〇〇	二月	一三、九〇〇	一八、五〇〇	二月	一八、〇〇〇	一四、九〇〇	二月	一六、八〇〇	一五、七〇〇
三月	一五、五〇〇	一五、〇〇〇	三月	一三、九〇〇	一四、六〇〇	三月	一四、七〇〇	一五、八〇〇	三月	一六、〇〇〇	一五、八〇〇
四月	一四、五〇〇	一四、八〇〇	四月	一四、五〇〇	一四、七〇〇	四月	一五、三〇〇	一五、七〇〇	四月	一六、〇〇〇	一五、五〇〇
五月	一四、七〇〇	一五、七〇〇	五月	一四、五〇〇	一五、五〇〇	五月	一六、〇〇〇	一六、一〇〇	五月	一四、九〇〇	一五、三〇〇
六月	一四、一〇〇	一四、六〇〇	六月	一五、八〇〇	一七、八〇〇	六月	一六、四〇〇	一八、一〇〇	六月	一五、五〇〇	一八、五〇〇
七月	一五、三〇〇	一二、三五〇	七月	一八、四〇〇	一九、二〇〇	七月	一八、八〇〇	一九、九〇〇	七月	二〇、八〇〇	二三、五〇〇
八月	二〇、七〇〇	二二、四〇〇	八月	一七、八〇〇	二三、八〇〇	八月	二〇、〇〇〇	二四、九〇〇			
九月	二一、四〇〇	二三、九〇〇	九月	二四、五〇〇	二一、五〇〇	九月	二四、九〇〇	二三、三〇〇			
十月	二一、一〇〇	二三、七〇〇	十月	二三、五〇〇	二四、七〇〇	十月	二三、七〇〇	二六、〇〇〇			
十一月	二三、〇〇〇	二七、六〇〇	十一月	二四、〇〇〇	一九、四〇〇	十一月	二五、四〇〇	二〇、六〇〇			
十二月	二六、四〇〇	二九、一〇〇	十二月	二〇、一〇〇	二〇、一〇〇	十二月	二〇、八〇〇	一八、三〇〇			

備考　大正二年ノ最高ハ十月中二十七圓十錢ニ達シタリ

七、札幌鷄卵相場

（札幌遠藤養鷄園主調査）

大正二年			小賣單價（一圓ニツキ）	御賣（一圓ニツキ）
一月	五、〇	時節	二三	十
二月	四、〇	中旬	三〇	二
三月	四、〇	同	三二	三
四月	三、三	同	三九	四
五月	三、〇	同	四五	五
六月	四、〇	同	三〇	六
七月	四、〇	同	二八	七
八月	四、五	同	二八	八
九月	四、五	同	二五	九
十月	五、〇	同	二四	十
十一月	五、〇	同	二五	十一
十二月	五、〇	同	二六	十二

大正三年			小賣單價	御賣（一圓ニツキ）
一月	四、〇	時節	二八	十
二月	三、五		三〇—三五	二
三月	三、五		三五—三九	三
四月	三、〇		四〇—四二	四
五月	三、〇		四二—四四	五
六月	三、五		三六—三〇	六
七月	四、三—四、五		三〇—二五	七
八月	四、五—五、〇		二五—二六	八
九月	五、〇		二六—二五	九
十月	五、〇		二六—二五	十
十一月	五、三		二七	十一
十二月	五、三—四、五		二七—二六	十二

八、將來ニ於ケル鷄ノ飼養數

既往ノ統計ニヨリ明治四十年以降大正元年ニ至ル六ケ年ニ於ケル本道農家戸數ニ對スル成鷄飼育數ノ平均增加割合ハ前年ニ比シ〇羽〇八三ナルヲ以テ若シ此率ヲ以テ進ムトスレハ大正二十年ニ於テハ一戸平均三羽九三二ヲ飼ヒ本道ノ全成鷄ハ一百十七万九千六百羽ニ達スヘク而シテ成鷄一ニ對シ雛一、三二ノ割合ナルヲ以テ外ニ雛トシテ百五十五万七千〇七十二羽ヲ有シ結局鷄ハ合計二百七十三万六千六百七十二羽トナルヘシ

既往ノ統計ハ成鷄ト雛トノ價格ニ區別ナキヲ以テ今其平均價格一羽金四十三錢七厘三毛トスルトキハ鷄ノ總價額ハ一百十

九万六千七百四十六圓六十六錢五厘六毛ナルヘシ

而シテ將來養鶏上ノ智識進ミ飼育者三才以上ノ雌鶏ノ淘汰ヲ斷行スルニ至ラハ是等ノ淘汰鶏及不用鶏ヲ以テ概約一百万羽（農商務省統計ニヨルニ成鶏ノ八割ハ雌ナリ此率ニヨレハ成鶏百十七万九千六百羽ノ内九十四万三千六百八十羽ハ雌ニシテ假ニ三才以上ノモノヲ其三分ノ一トスルモ優ニ三十万羽アルヘク雛ノ百五十五万七千羽ノ内不用雄鶏等ハ少ナクモ半數アリ故ニ淘汰鶏及不用鶏合計百万羽ハ決シテ過大ニアラス）ヲ屠肉ニ供シ得ヘク一羽平均四十三錢七厘三毛トスレハ其價ハ四十三万七千三百圓ナリ而シテ既往ノ産卵數ノ平均ハ成鶏一羽ニ付六八個六四ニ當ルヲ以テ假ニ改良ノ餘地ヲ計算外ニ置キ此割合ヲ以テスルニ大正二十年ニハ卵數八〇、九六七、七四四個ニ達シ此價一百九十三万四千三百十九圓四錢四厘一毛六ト假定スルヲ得ヘク假ニ孵化用ノ鶏卵ヲ雛數ノ倍數トシテ三、一一四、一四四個ヲ控除スルモ殘七七、八五三、六〇〇個ヲ有シ此價一百六十八万六千九百二十九圓三十二錢八厘ニ達シ此鶏卵ト屠用鶏四十三万七千三百圓トヲ合計シ一ケ年二百三十万四千二百二十九圓三十二錢八厘ノ生産額ヲ有スル成鶏ヲ飼育スルモノト云ヒ得ヘキナリ

而シテ青森縣ノ鶏卵生産額ハ人口一人ニツキ一三個五四宮城縣ハ二一個五六ナルモ尚ホ縣外ニ鶏卵ヲ販賣シ得ル大ナル餘地ヲ有スルコトハ世人ノ能ク知ル處ナリ大正二十年ニ於ケル本道ノ推定鶏卵産額八千〇九十六万七千九百四十四個ハ推定人口三百万ニ對シ一人ニツキ二十六個九九ニ當ル本道既往ノ消費額（孵化用ヲ含ム）ハ平均一人ニツキ二十個六分（左表ヲ見ヨ）ナリ假リニ此率ヲ以テ將來ヲ推ス時ハ大正二十年ニ於ケル人口三百万ノ所要數ハ六千一百八十万個ニシテ差引一千六百〇五万三千六百個此價三十八万三千五百二十圓五十錢四厘ハ府縣ニ輸出シ得ヘキモノト概論スルヲ妨ケサルヘシ若シ奬勵ニ意ヲ用ヒ既往ノ率以上ニ飼育數及産卵歩合増加スルトキハ其生産額ヤ更ニ一層増加スルニ至ルヘシ

（イ）秋田、青森、宮城三縣ノ産卵數ト人口トノ比較表

	産卵數	人口	人口一人當リ鶏卵數
明治四十一年	一一、一七一、六〇二	八七八、三四一	一二、九三
四十二年	一六、六二一、七二〇	八九〇、〇三九	一八、七一
四十三年	一六、八五一、八九九	八九八、七一七	一八、七五
四十四年	一〇、八九九、八六七	一〇、三〇一、一六〇	九、五五八、七三
大正元年	七、六、九五七	七四一、八八二	七五、二四六
平均	一二、七九	一四、八四	一三、八七
秋田	一九、七五六、九九三	一八、九八八、〇四一	一九、六五六、四〇九
青森	七、六、九五七	七四一、八八二	七五、二四六
宮城	一二、七九	一四、八四	一三、八七
平均	一九、七五六、九九三	一八、九八八、〇四一	一九、六五六、四〇九
秋田	八九〇、九二五	九〇四、七八四	九〇四、七二四
青森	八九一、一五〇	九〇四、七八四	九〇四、七二四
宮城	二一、一五	二一、三四	二一、四八
平均	二一、一八	二一、三四	二一、四八

（ロ）本道鶏卵消費額三ケ年比較表

年次	移入數	移出數	其殘リ	道内生産數	合計	本道人口	一人當リ消費量
四十二年	三、八四六、五八〇個	一六四、三二〇個	三、六八二、二六〇個	二四、五二一、二九一	三八、一九三、四七九	一、五三八、七三八人	二四、八個
四十三年	三、六〇六、七六〇	一八三、二二〇	三、四二、三五四〇	二六、七四一、〇四六	三〇、二〇七、五八六	一、六一〇、五四五	一八、八
四十四年	三、一五八、六八〇	二五九、九五〇	二、八九八、七三〇	二七、八三七、七七一	三〇、五三六、五〇二	一、六六七、五九三	一八、三
平均							二〇、六

九、養鶏ニ對スル施設

養鶏ニ對スル現在ノ施設ヲ見ルニ農商務省月寒種畜牧場遠谷分場及北海道種畜場ハ種禽種卵ノ拂下ヲナシ道内二三ノ農會ニモ亦又レヲ購入シ以テ部内養鶏業ノ改良ヲ計ルアリ物産共進會畜産品評會及家禽品評會等ノ開催時ニ於テ道廳ハ審査官

ヲ派シテ審査授賞シ又常ニ講習會講話等ノ機會ニ於テ養鷄業ノ指導ニ力ムル處アリ家禽組合ハ現ニ札幌及小樽ニ於テ家禽ノ改良ト養鷄業ノ發展ヲ目的トシテ設立サレタルモノアリト雖組合員未タ組合事業ニ慣レサルヲ以テ成績顯著ナラス殆ト有名無實ノ觀アリ將來ニ於テ本道養鷄業ノ發展ニ資スルニ必要ナルモノヽ内左ノ各項ノ如キハ其重要ナルモノナリ

(一) 品種ノ統一

流行ハ飼養品種ニ大ナル影響ヲ與ヘ今日迄幾多ノ變遷アリシト雖本道ニハ實驗上主トシテレグホーン及ブリモーハロックノ二品種ヲ奬勵スルヲ以テ適當トナス尤モ寒冷ナラサル一部ノ地方ニハ「ミノルカ」種モ亦飼育スルヲ妨ケス

(二) 品種ノ改良

家禽ノ產卵力及早熟肥膘性並ニ肉質等ハ同一品種ニ於テモ個体及系統ニヨリ大ナル差異アルモノナリ之等ノ能力ハ或程度迄ハ人爲的ニ發達セシメ得ルモノナリ現ニ本道雌鷄ノ產卵力ハ明治卅九年ニ於テハ成鷄一羽ニ對シ六十二個一八ナリシカ大正元年ニ於テハ七十三個一八トナレリ是レ畢竟飼養管理等種々ノ原因ニ依ルモノタルハ疑フヘカラスト雖モ品種改良モ亦與リテ力アリト云ハサルヘカラス況ンヤ本道養鷄家ノ實驗ニヨルトキハ一雌鷄ノ產卵力ヲ平均百五十個ニ高ムルコトハ決シテ難事ニアラスト云フ故ニ北海道應種畜場ハ宜シク品種ノ改良ニ力メ能力優秀ナル產卵鷄及卵肉兩用鷄ヲ作出スヘシ

(三) 副業的養鷄戶數ヲ增加スル事

將來本道ノ農家戶數增加スルト共ニ鷄數ノ增加スルコトハ固ヨリ疑フヘカラスト雖農家戶數ト飼養者戶數ノ割合依然トシテ現今ノ如ク低キ時ハ本道ノ養鷄業ニ多大ノ發展ヲ望ムコトヲ得ス明治四十三年ニ於ケル本道ノ上記割合ハ四十六%四ノ甚タ僅少ナルヲ以テ宜シク東北六縣ノ平均數六二%九ヲ凌駕セシメテ千葉縣ノ八四%六若シクハ鹿兒嶋縣ノ九一%五ノ如ク向上セシメサルヘカラス

(四) 種禽及種卵ノ配布

優良ナル種禽ヲ普遍的ニ配布シテ庸劣種ヲ排外スルニアラサレハ徒ラニ養鷄戶數ト鷄數ヲ增加スルモ斯業ノ振興ニ何等ノ効ナシ此目的ヲ達スルニハ種畜場ニ於ケル種禽及種卵配布ノ現制度ヲ一層擴張シテ改良セル優秀品種ノ種禽及種卵ヲ低廉ニ配布スル必要アリ同時ニ其手續ハ可成簡便ニナスヘシ

(五) 其進會及品評會ヲ開設シテ授賞法ニヨリ優良ナル家禽ノ顯出ヲ奬勵スルコトハ現在ト等シク將來ニ於テモ亦必要ナリ

(六) 鷄卵販賣ニ共同組織ヲ應用シ鷄卵蒐集ヨリ市場ノ開發貯藏輸送ニ至ルマテ各地ニ最モ適切ナル方法ヲ講シ之レヲ有力ナル商品トナスコトヲ力メサルヘカラス

(七) 卵仲買人ニ利益ヲ壟斷サレ或ハ賣却スルニ不便ナル爲メ無意味ニ消費シ去ルトキハ皆養鷄ノ趣味ヲ感セサルニ至ルヘシ丁抹鷄卵輸出組合ノ活動法ノ如キ幾多ノ範タルヘシ

講習講話ニヨリ養鷄ニ關スル智識普及ノ必要アリ獨リ之レヲ農家ニ限ルニ非スト雖鷄ヲ飼フモノハ頗ル簡單ナル事業トシテ何等研究ノ念ナク其智識ニ乏シキモノ少ナカラス例之產卵雌鷄用ハ三才以上ニ達スレハ必ス之レヲ淘汰スルヲ原則トセサルヘカラサルカ如キヲ不知カ爲メ產卵ノ成績良好ナラサルモノ多シ鷄舍保溫設備ノ如キ或ハ綠飼料ノ如キ幾多飼養者ノ利益ヲ增進スルニ必要ナルモノアリ

大正四年三月十五日印刷
大正四年三月十八日發行

北海道廳

印刷者　札幌區北一條西三丁目二番地　山中國松

發行所　札幌區大通西三丁目八番地　博光社

産業調査報告書

（牛、馬）

第四卷（其二）

北海道廳

本調査ハ主トシテ左記ノ主査及委員之レヲ擔當調査セリ

牛

主査　農學博士　橋本左五郎

委員　仁木信雄

馬

主査　農學博士　橋本左五郎

委員　石澤達夫

産業調査報告書　第四卷（其二）

目次

牛

馬

産業調査報告書

第四卷（其二）

牛

一、本道畜牛ノ沿革

本道畜牛ニ關スル記事ハ貞享元年四月白牛東部白神海岸ニ漂着ストアルヲ以テ最初トナスコトヲ得レドモ牛ヲ飼育シタル濫觴ハ之レヲ知ルコト能ハス天明寛政ノ頃ニハ鍵龜澤等ニ於テ之レヲ飼育セルカ其飼育法ハ馬ト同シク四季放牧シ唯冬季少シク手當ヲナスノミナリキ

寛政十一年幕府本蝦夷地ヲ直轄スルヤ運搬ノ用ニ供センカ爲メ馬六十頭牛四頭ヲ陸奥國南部ヨリ購入シ之レヲ各場所ニ配布ス馬ノ奥地ニ入リシ時「アイヌ」ハ初メテ之レヲ見シ事故驚怖シテ敢テ近ツカサリシ云々トアルヲ見レハ多分畜牛モ然リシナランカ

其後牛ハ峠下村、大野村、石崎村等ニテ飼育シタリシカ當時外國船ノ函館ニ入港スルモノ肉牛ヲ需要シ其供給足ラサリシヲ以テ箱館奉行ハ安政五年軍川今ノ龜田郡七飯村ノ内ニ牧場ヲ開キ牛ヲ南部ヨリ購入シテ蕃殖ヲ計リタリ然レトモ管理飼養宜シキヲ得ス殊ニ冬期斃死スルモノ多カリシカハ遂ニ之レヲ廢スルニ至レリ

又寛政年間蝦夷地ニ牛ヲ移入セシカ其後軍拂場所千歳邊ニテ飼育シ終ニ蕃殖シテ數十頭ニ達シ又岩内場所ニ於テモ安政年間牛ヲ以テ道路ヲ踏檢セシメルコトアリ

明治五年馬ト共ニ牛牝牡八頭（ダラム種四頭デボン種四頭）ヲ米國ヨリ購入シ青山試驗場ニ飼育シ但馬產牝牛九十四頭ヲ求メ之レニ配シ良犢數十頭ヲ得

六年青山試驗場ヨリ「ダラム」及「ハイグレード」牝牡計二十二頭ヲ七重開墾場ニ移スヲ以テ洋種ノ本道ニ入リタル初メトナス

同年更ニ牝牡四十七頭（ダラム種二十二頭ハイグレード種二十五頭）ヲ米國ニ求ム同年流行病ニ罹リ和種雜種殆ト全數斃死シタルモ洋種ノ殖レ

タルモノハ僅カニ二頭ノミ其後雜種十餘頭ヲ得テ體格乳量等ヲ檢シ其適カニ本邦種ニ勝リタルヲ知リ七年米國ヨリ種牛デボン種牝二頭ヲ購入シ東京農事試驗場ニ置キ繁殖用ニ供シ九月札幌官園ニ牧場ヲ假設シ牛馬羊豚ヲ飼育ス、同年以後數次洋種雜種ヲ七重、札幌ニ移シ九年及ヒ十年米國ヨリ種牛ヲ輸入シ十一年浦鹽斯德ヨリ牝牛五頭ヲ輸入セリ而シテ三縣一局時代ニハ遂ニ種牛ノ輸入ヲ見サリキ

明治九年眞駒內牧牛場及根室牧場等ヲ設ケ蕃殖ヲ計ル眞駒內牧牛場創設ノ時土產牛牝二十六、牡一、ハイグレード牝十八牡四、雜種牝一、牡二、ダヨム種牝七、牡五ヲ札幌官園ヨリ移ス

十年ハイグレード種牝三頭ヲ米國ヨリ購入セリ

十一年牛馬羊豚貸付假規則ヲ設ケ三縣時代ニ牛馬撰種鑑定假手續種牛馬貸與規則ヲ設ケ家畜治療手續等ヲ發布ス

二十七年種畜場飼養ノ種類ヲ短角及エーアシヤアノ二種ト定メ三十八年八月北海道各區支廳勸業主任會議ニ於テ道廳當局者ハ本道ニ奬勵スヘキ畜牛ノ種類ヲ「エーアシヤア」「ホルスタイン」短角「ヘレフオード」ノ四種ト發表シ同年道廳ハ輸入牝牛補助規定ヲ公ニシテ南部地方ヨリ和牛及雜種ヲ輸入シ海外ヨリ上記四種ノ牝牛ヲ輸入スルモノニ補助金ヲ與ヘ大ニ畜牛ノ蕃殖ヲ計レリ

現今本道ニ飼養サルル重要品種ノ起源ハ左ノ如シ

一、短角種ハ明治五年米國ヨリ青山試驗場ニ輸入シタル「ダラム」種ヲ六年七重ニ移シタルヲ以テ始メトナス

二、「ホルスタイン」種ハ明治廿二年米國ヨリ札幌農學校ニ牝三頭、牡二頭ヲ又函館園田牧場ニ牝牡各一頭ヲ輸入セルヲ起源トナス

三、「エアシヤア」種ハ十一年札幌農學校ニ牡二頭、牝五頭ヲ輸入セルニ始マリ十九年札幌農園ヨリ眞駒內種畜場ニ同種牡牛有珠號及同種牝牛三頭ヲ入レ二十二年米國ヨリ短角種牛ト共ニ「エアシヤア」種牡牛「ホワバル」號ヲ輸入シタルヲ其由來トス

四、ヘレフオード種ハ明治卅八年農商務省ヨリ本道ニ其牡四頭ヲ無償附與シタルヲ起源トスヘキモ血統不明ニ屬シ四十一年加奈陀ヨリ同種ノ牝二頭、牡一頭ヲ本道十勝國和津牧場外一名ノ輸入シタルハ同種有籍登錄牛ノ始メニシテ四十四年英國ヨリ北海道廳種畜場外二名ノ購入セル牡四頭牝五頭ヲ以テ原產地ヨリ本邦ニ輸入セル此種ノ嚆矢トス

五、「デボン」種ハ明治五年米國ヨリ「ダラム」種ト共ニ輸入シ青山試驗場ニ飼育シ六年札幌官園ニ移セルヲ始トシ其後數度ノ輸入アリ

六、「ジヤージー」種ハ明治卅一年米國產「ジヤージー」種牝牡各一頭ヲ東京ヨリ札幌宇都宮牧場ニ移シタルヲ以テ本道本種ノ起源トナスヘク而シテ該牝ハ繁殖セサリシカ卅九年岩崎男爵ヨリ英國產同種牡牛ヲ同牧場ニ贈與サレ四十年牝五頭ヲ米國ヨリ同牧場ニ輸入セリ

七、「ガーンジー」種ハ明治廿二年札幌農學校ニテ牝十八頭、牡二頭ヲ輸入セシヲ本邦並ニ本道ニ於ケル同種輸入ノ嚆矢トナス

八、「シンメンタール」種ハ明治卅九年牡五頭、牝二十頭ヲ瑞西國ヨリ農商務省月寒種牛牧場ニ輸入シタルヲ始メトス

九、「ブラウンスイス」種ハ明治四十年牝十頭、牡三頭ヲ瑞西國ヨリ農商務省月寒種牛牧場ニ輸入シタルヲ本道同種ノ起源トス同牧場報告ニヨルニ本種及「シンメンタール」種ハ需用多カラサルヲ以テ四十二年度以來其輸入ヲ中止スト

十、「レットボールド」種ハ嘗テ根室國山縣牧場初メテ之レヲ輸入シタレトモ其數少ナク現今純粹蕃殖スルモノナシ十一、和牛ハ寬政十一年南部ヨリ移入シタル記錄ヲ有スル以來其數枚擧ニ遑アラス最近ニ於テハ農商務省月寒種畜牧場ニ明治卅九年牝牛四頭又北海道廳種畜場ニテ明治四十五年兵庫縣ヨリ牝牛九頭ヲ移入ス

二、數字上ヨリ見タル本道ノ畜牛

一、種類別累年畜牛頭數表

年次＼種類	內國種			雜種			外國種			合計		
	牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計

明治十九年	二二二頭	二二三頭	四四五頭	二六〇頭	一一二頭	三七二頭	七七頭	二七頭	一〇四頭	五五九頭	三六二頭	九二一頭
同二十年	二二〇	一七〇	三九〇	三八〇	一六七	五四七	一三二	四九	一八一	七三二	三八六	一,一一八
同二十一年	二九六	一〇八	四〇四	四七四	二五八	七三二	一六一	五八	二一九	九三一	四二四	一,三五五
同二十二年	四九三	一七二	六六五	九五七	五四四	一,五〇一	三二二	一三九	四六一	一,七七二	八五五	二,六二七
同二十三年	—	—	八七四	—	—	一,八七二	—	—	五五二	二,一八四	一,一一四	三,二九八
同二十四年	六四九	二六九	九一八	一,一七七	七九九	一,九七六	五一〇	二二二	七三二	二,三三六	一,二九〇	三,六二六
同二十五年	七二六	三一一	一,〇三七	一,五〇一	九一一	二,四一二	四六八	二四七	七一五	二,六九五	一,四六九	四,一六四
同二十六年	一,〇〇〇	五一三	一,五一三	一,七三六	八三一	二,五六七	五三五	二七八	八一三	三,二七一	一,六二二	四,八九三
同二十七年	八六二	三五一	一,二一三	二,〇八一	一,〇八九	三,一七〇	五四七	二六七	八一四	三,四九〇	一,七〇七	五,一九七
同二十八年	九二九	三五三	一,二八二	二,四二六	一,二七七	三,七〇三	六五四	三一二	九六六	四,〇〇九	一,九四二	五,九五一
同二十九年	九五三	四二六	一,三七九	二,六八四	一,四三四	四,一一八	七九七	三六七	一,一六四	四,四三四	二,二二七	六,六六一
同三十年	八〇二	二七五	一,〇七七	二,八四一	一,四三三	四,二七四	七二三	三〇三	一,〇二六	四,三六六	二,〇一一	六,三七七
同三十一年	七三一	二七八	一,〇〇九	三,二一七	一,五三四	四,七五一	六六七	三二三	九九〇	四,六一五	二,一三五	六,七五〇
同三十二年	七九〇	四〇四	一,一九四	三,四二二	一,七〇一	五,一二三	七八二	三三〇	一,一一二	四,九九三	二,四三五	七,四二八
同三十三年	八一三	四三〇	一,二四三	二,九七八	一,二二八	四,二〇六	八三八	三三五	一,一七三	四,六二九	一,九九三	六,六二二
同三十四年	八五一	五七五	一,四二六	三,六六二	一,三〇〇	四,九六二	七一八	二五八	九七六	五,二三一	二,一二三	七,三五四
同三十五年	七七八	四一一	一,一八九	三,七二二	一,一二九	四,八五〇	七四三	二八一	一,〇二四	五,二四二	一,八二二	七,〇六四
同三十六年	三五三	一二九	四八二	四,一八一	一,一五六	五,三三七	八六三	二七八	一,一四一	五,三九七	一,五六三	六,九六〇
同三十七年	三三〇	一一七	四四七	四,六五八	一,三八二	六,〇四〇	一,〇四六	二七七	一,三二三	六,〇三四	一,七七六	七,八一〇
同三十八年	五六九	三三四	九〇三	五,九九七	一,八〇三	七,八〇〇	一,三六四	三九一	一,七五五	七,九三〇	二,五二八	一〇,四五八
同三十九年	六九二	二〇六	八九八	八,四五四	三,〇四七	一一,五〇一	八六七	二四六	一,一一三	一〇,〇一三	三,四九九	一三,五一二
同四十年	三六六	八九	四五五	一一,二三一	三,〇一八	一四,二四九	九八四	二八一	一,二六五	一二,五八一	三,三八八	一五,九六九
同四十一年	四七六	一五一	六二七	一二,七七三	三,五八九	一六,三六二	八八六	二九一	一,一七七	一四,一三五	四,〇三二	一八,一六七
同四十二年	二六二	一一五	三七七	一四,二九二	四,八八二	一九,一七四	一,三四七	四二三	一,七七〇	一五,九〇〇	五,四二〇	二一,三二〇
同四十三年	七三	三一	一〇四	一五,一六九	五,〇九六	二〇,二六五	一,三六七	四二〇	一,七八七	一六,六〇九	五,五四七	二二,一五六
同四十四年	四六	一三	五九	一四,五九〇	四,六五三	一九,二四三	一,四二三	五二七	一,九五〇	一六,〇五九	五,一九三	二一,二五二
大正元年	二〇	五	二五	一二,四一四	三,八六七	一六,二八一	一,四八六	五五六	二,〇四二	一三,九二〇	四,四二八	一八,三四八

二、最近五ヶ年種類別牝牡別支廳別畜牛頭數表

行政區	年次	內國種			雜種			外國種			合計		
		牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計	牝	牡	計
札幌	明治四十一年	二一頭	一二頭	三三頭	七九二頭	二四五頭	一,〇三七頭	一三〇頭	四〇頭	一七〇頭	九四三頭	二九七頭	一,二四〇頭
	大正元年	—	—	—	九二一	三一九	一,二四〇	三一九	一三四	四六三	一,二四〇	四六三	一,七〇三
	自四十一年至元年五ヶ年平均	八	四	一二	九〇八	三〇六	一,二一四	二七七	八〇	三五七	一,一九三	三九〇	一,五八三
空知	同	三三	七	四〇	五八四	一五六	七四〇	八〇	三〇	一一〇	六九七	一九三	八九〇
	同	五	一	六	七九四	二四六	一,〇四〇	七五	二五	一〇〇	八七四	二七二	一,一四六
	同	一五	五	二〇	七七〇	二四七	一,〇一七	一〇二	三七	一三九	八八七	二八九	一,一七六
上川	同	二四	一四	三八	七七七	一三三	九一〇	一四五	四九	一九四	九五六	一九六	一,一五二
	同	—	—	—	六五二	二二一	八七三	八三	三一	一一四	七三五	二五二	九八七
	同	一〇	七	一七	七五五	二一三	九六八	九二	三二	一二四	八五七	二五二	一,一〇九
後志	同	五	五	一〇	一三八	三八	一七六	八	二	一〇	一五一	四五	一九六
	同	二	一	三	五九七	一八五	七八二	五一	一八	六九	六五〇	二〇四	八五四
	同	四	二	六	三七三	一二一	四九四	三四	一〇	四四	四一一	一三三	五四四
檜山	同	四	二	六	四四三	一三六	五六九	一八	二一	三九	四六五	一三九	六〇四
	同	—	—	—	二八八	七一	三五九	一五	三	一八	三〇三	七四	三七七
	同	七	六	一三	四一七	一〇六	五二三	二八	九	三七	四五二	一二一	五七三
函館	同	一〇	四	一四	一,六六五	二四二	一,九〇七	一〇八	二七	一三五	一,七八三	二七三	二,〇五六
	同	二	—	二	二,〇五七	四〇〇	二,四五七	二六五	九七	三六二	二,三三四	四九七	二,八三一
	同	六	三	九	一,七五三	三三七	二,〇九〇	二八	五九	八七	一,九七七	三九九	二,三七六
室蘭	同	三三	八	四一	二六〇	六三	三二三	八	二	一〇	三〇一	七三	三七四
	同	六	一	七	三三五	五五	三九〇	一二五	三六	一六一	四六六	九二	五五八
	同	一八	三	二一	三五四	七二	四二六	六七	二〇	八七	四一九	九五	五一四
浦河	同	一八	三	二一	五四〇	一七〇	七一〇	五	三	八	五六三	一七六	七三九
	同	一	—	一	四九九	一四二	六四一	六	七	一三	五〇六	一四九	六五五
	同	七	二	九	六一七	一八五	八〇二	一四	九	二三	六三八	一九六	八三四
河西	同	五二	二五	七七	一,五四二	五二一	二,〇六三	八	一三	二一	一,六〇二	五五九	二,一六一
	同	—	—	—	一,三〇六	四六六	一,七七二	七	一四	二一	一,三二三	四八〇	一,八〇三
	同	三〇	一四	四四	一,五三四	五八四	二,一一八	二六	一八	四四	一,五九〇	六一六	二,二〇六
釧路	同	—	—	—	一,三七七	五七二	一,九四九	五四	九	六三	一,四三一	五八一	二,〇一二
	同	四	一	五	一,四〇五	六〇九	二,〇一四	三二	一三	四五	一,四四一	六二三	二,〇六四
	同	二	一	三	一,七一三	七〇六	二,四一九	四四	一七	六一	一,七五九	七二四	二,四八三

三、品種別、支廳別畜牛頭數表

支廳別	品種別	エーアシャー	ホルスタイン	短角	ヘレフオード	ゲルンジー	デブオン	シンメンタール	ジャージー	ブラウンスキス	計	備考
函館		二、四一一頭	八〇八頭	一四三頭	一頭	二頭	一頭	一頭	一九頭	一頭	三、三八三頭	函館區ヲ含ム
根室	明治四十一年	一〇二頭	一三頭	一二五頭	一、六〇一頭	四七三頭	二、〇八四頭	一〇四頭	三二頭	一八一七頭	五、八六頭	二、三四九頭
	大正元年											
	自四十一年至元年五ヶ年平均	一〇二	五	二五	一、八七〇	六〇一	二、〇一〇	一、五一一	七五	二五八	一、七一〇	一、九五五
	同	九五		一〇五	一、八三	三七四	一、六五七	一三	二二	一八四	一、五一〇	七七〇
網走	同											
	同	二〇	二	二二	九八一	五三二	一、六三	五四	八三	三	一〇五	四六三
	同					二四五	一、一五七	一六	一一	二	一、〇七四	二、〇七六
宗谷	同				四八〇	三一四	一、〇一二	六三	二六	二三	八七五	二、五四二
	同				七九一	三二六	一、〇八	一、一五七	一四	一	五四三	一、〇五四
	同				八六八	二八七	一四二	一、一五九	六	七	八七四	一、〇五五
增毛	同	二三	八	三	一五二	三七六	二八	一三五七	五	八三	一、〇五五	一、〇五三
	同	五六	一七	七三	一〇五	二七四	二三	一五七	六	一	一二	八四
	同			一	九一	一、〇八	六六	一、〇八	四	七	五四	三三
札幌	同	二	一	三	二一六	三九五	一八	四三	一二四	一九八	一、一五七	一、〇五三
	同	一			三〇四	四〇	四三	三四四	一三三	二二	一、〇七四	一、〇五一
	同				七三	四	一〇	七七	一	一	一五	七四
小樽	同				一四九	一〇	一五九	一三九	六	二	一五五	一五五
	同				一二八	一一	一二	三七二	七	二	一三	一三
	同				三三七	三五	三八	三八八	七	二	三四	三四
函館	同				三四四	七四	三五	三七二	九	二	三四	三五
	同				三、五九九	一、六三六二	一、一三	一六三八	一四八六	一、一四二	一、〇五四	一、〇五四
	同	四七六	一一五	六七	一、七七三	三、五八九	七二	四〇八	一、四八六	二五八	一、〇五四	一、〇五四
合計	同	一〇	五	二五	一、二四一四	三、八六七	三、四三三	一七、八四一	一、三二一	一、一六三	一、一七三	一、四七九

支廳別	品種別	エーアシャー	ホルスタイン	短角	ヘレフオード	ゲルンジー	デブオン	シンメンタール	ジャージー	ブラウンスキス	計	備考
檜山		一六七	四三	九二							二〇一	
後志		八一六	一三三	五六		一	一	一			一〇一七	小樽區ヲ含ム
札幌		一、六〇三	六八五	九四	五七	五		四	三〇	三	二、四八一	札幌區ヲ含ム
增毛		六七	一九	五							一〇一	
宗谷		一八五	二三二	一五一			三	一五			六九六	
網走		三三八	一七〇	一一九	一四	一〇					六四一	
根室		一、九一四	一一三	三九一	一六						二、四四二	
釧路		七四六	二八	九六五	九二						一、八三二	
浦河		三四〇	二一〇	一六七							六七七	
室蘭		五八二	九二	三							六七七	
空知		六九一	二八二	八							九八四	
上川		四五七	二四八	七							七二一	旭川區ヲ含ム
河西		七九七	三九八	一五一	一二	九					一、四七九	
合計		一一、二四	三三、七九	二四五二	三〇〇	三〇	四	二一	四九	三	一七三八一	

備考　右表ハ大正二年畜牛結核病檢査ノ成績ニヨル

四、最近六ヶ年牝牡別、種類別、頭數歩合表

年次	牝牡及種類別	總牛數	牝	牡	內國種	雜種	外國種
明治四十年		一五、九六九頭	七八、八%	二一、二%	二九、%	八九、二%	七、九%
同四十一年		一八、一六六	七七、八	二二、二	三、四	九〇、一	六、五
同四十二年		二二、三三〇	七二、九	二七、一	二、五	八九、九	七、五
同四十三年		二三、一五六	七四、一	二五、九	三、〇	九、一八	七、九
同四十四年		二二、五二一	七五、五	二四、五	二、〇	八九、七	一、〇
大正元年		一八、三四八	七五、九	二四、一	二、〇	八八、七	一、一

五、生產、斃死、輸出入畜牛頭數比較表

六、生產ニ對スル斃死率

	A 移入生產		小計	B 斃死屠殺移出		小計	A−B 差	統計表ニ現ハレタル年末總數
明治廿八年	一〇四一頭	一、二三八頭	二、二七九頭	一七九頭	一、五〇九頭	一、七三〇頭	五四九頭	五、九五一頭
同二十九年	—	一、三二五	一、三二五	一六六	一、九三一	二、〇九七	七八二	六、六六二
同三十年	一、三三七	一、三八八	二、七二五	二〇八	二、〇二一	二、二四二五	三〇〇	六、三七七
同三十一年	一、一七〇	一、二六五	二、四三五	二二二	二、九三三	三、一四五	七一〇	六、七四〇
同三十二年	一四	一、五一三	一、五二七	一四四	二、七九九	二、九七三	二五四	七、四一八
同三十三年	八〇	一、六三八	一、七一八	二四	二、三二六	二、三五八	一、四四八	六、六二四
同三十四年	八二	一、五四四	一、六二六	二二二	二、一一六	二、三三七	二、一一二	七、三六四
同三十五年	二二	一、五七六	一、七七八	三三九	一、三七八	一、七一七	三〇	七、〇六三
同三十六年	七九	一、六七八	一、七五七	一四八	二、四六二	二、六一〇	一、一一五	六、九六〇
同三十七年	二〇二	一、七四二	一、九四三	一五一	二、八七六	二、〇三〇	七一〇	七、八一〇
同三十八年	二二三	一、一九三	二、四一六	二二三	二、九七三	二、一九六	六九三	七、〇四五
同三十九年	二四二	二、八九〇	二、一三二	二八〇	三、一一九	三、四九九	五六四	七、九六九
同四十年	三三五	三、六四一	三、九七六	三五九	二、五六八	三、〇三九	九三七	一、八一六
同四十一年	二五九	四、〇〇〇	四、二五九	六一九	三、七五〇	三、五〇〇	七五九	二、二一五
同四十二年	一五九	六、一一四	六、二七三	七五一	七、五四〇	四、五一四	一、七五九	二、二一五
同四十三年	三〇	六、六四四	六、八〇七	一五三四	九、一六七	七、三三	二、六〇四	二、二一五
大正元年	—	六、五三三	六、五六三	一六一五	七、四八六	九、二四四	—	一、八三四八

七、本道面積ト畜牛頭數トノ割合表

	生產數	斃死數	生產ニ對スル斃死率		生產數	斃死數	生產ニ對スル斃死率
明治四十年	三、六四一頭	三五九頭	九九‰	明治四十三年	六、六四四頭	一、五三四頭	二三、二‰
同四十一年	四、〇〇〇	六一九	一五五	同四十四年	六、五三三	一、六一五	二四、七
同四十二年	六、一一四	七五一	一二三	平均			一七、一

八、本道耕地面積ト畜牛頭數トノ割合表

	總面積	總牛數	百町歩ニ對スル頭數		總面積	總牛數	百町歩ニ對スル頭數
明治二十年	八、九二五、四六三町八二二	一、一一八頭	〇・〇一三頭	同四十一年	八、九二五、四六三町八二二	一八、一六六頭	〇・二〇三
同二十五年	八、九二五、四六三、八二二	四、一六四	〇・〇四七	同四十四年	八、九二五、四六三、八二二	二二、二二〇	〇・三九
同三十年	八、九二五、四六三、八二二	六、三七七	〇・〇七一	同四十五年	八、九二五、四六三、八二二	二二、一五六	〇・二四八
同三十五年	八、九二五、四六三、八二二	七、〇六三	〇・〇七九	同四十六年	八、九二五、四六三、八二二	二二、一五二	〇・三八
同四十年	八、九二五、四六三、八二二	一五、九六三	〇・一七九				

九、本道人口ト畜牛頭數トノ割合表

	耕地面積	總牛數	百町歩ニ對スル頭數		耕地面積	總牛數	百町歩ニ對スル頭數
明治十九年	三〇、〇二八町九	九二一頭	三〇六頭	同三十三年	二四、一三〇九町六	六六二頭	一、七四
同二十年	三一、三五一・四	一、一一八	三、五六	同三十四年	二六五、七八五〇	七三六四	二、七七
同二十一年	三四、六八八・一	一、三五五	三、九〇	同三十五年	二八八、九一五・六	七〇六三	二、四四
同二十二年	四一、四五二・二	一、六〇七	六、三三	同三十六年	三一八、四五一・六	六、九六〇	二、一九
同二十三年	四五、一三四・九	三、二九八	七、三〇	同三十七年	三四〇、一〇五・〇	七、八一〇	二、二九
同二十四年	五二、一〇四・三三	三、六二六	六、九六	同三十八年	三六三、〇五九・二	一〇、四九八	二、八八
同二十五年	五七、三二八・一	四、一六四	七、二六	同三十九年	三八九、一七六・七	一三、五一一	三、四七
同二十六年	六五、六七七・六	五、八九三	八、九七	同四十年	四一、七九四・九	一五、九六九	三、七三
同二十七年	八、一一一・一	五、一七七	六、三〇	同四十一年	四六、一五四・三	一八、一六六	三、九四
同二十八年	九七、八〇六・九	五、九五一	六、〇八	同四十二年	五一、七九九・〇	二一、三一〇	四、二二
同二十九年	一一五、五三八・三	六、六六一	五、七七	同四十三年	五三、八〇三・八	二一、一五六	四、一二
同三十年	一四一、七〇六・八	六、三七七	四、四七	同四十四年	五八〇、四八・八	二二、〇五二	三、六六
同三十一年	一一〇、二九三・七	六、七五〇	三、九六	大正元年	六一七、六一〇・一	一八、三四八	二、九八
同三十二年	二二五、九五八	七、四一八	三、四四				